

2015 年度

明治末期から大正末期における中国語教育研究

－笑話・童話を中心として－

指導教授：瀬戸口律子教授

外国語学研究科
中国言語文化学専攻
博士課程
学籍番号 13231101
石川 薫

目次

序論 …6

1. 問題意識 …6
2. 先行研究 …7
3. 研究の特徴・方法 …9
4. 研究の位置づけ …9
5. 本研究の構成 …10

第1部 支那笑話・支那童話による支那語テキスト誕生の背景 …12

第1章 現代社会と笑話や童話等の中国語学習テキスト …12

1. 現代社会と異文化理解と語学学習 …12
2. 現在手に入る昔話などを用いた中国語学習テキスト …16
3. 支那語時代の笑話・童話を用いた中国語学習テキスト …18

第2章 大正期における支那笑話・支那童話による支那語テキスト誕生と受容の背景
…19

1. 大正時代の日本社会 …19
2. ツーリズムと「支那趣味」 …20
 - (1) ツーリズムの発達 …20
 - (2) 「支那趣味」 …22
 - (3) 洋画家の支那趣味 …23
 - (4) 文学者の支那趣味 …24
3. 日本社会における童話の発展 …25
4. 大正末期の日本人による支那童話理解 …27
 - (1) 久保芳太郎「現代支那童話の研究」について …27
 - (2) 清水董三「支那の児童文學に就て」 …28
 - (3) 日本人の支那童話把握状況 …30
5. おわりに …30

第3章 中華民国における童話発展の背景 …31

1. 中華民国の状況 …31
 - (1) 辛亥革命 …31

(2)袁世凱の独裁と第二革命	…31
(3)第一次世界大戦と二十一カ条の要求	…32
(4)民族産業の発展	…33
(5)新文化運動	…33
(6)パリ講和会議と五・四運動	…35
2. 民国における童話の発展	…36
(1) 中華民国の児童文学雑誌	…37
(2) 『児童世界』について	…39
(3) 『小朋友』について	…41
第4章 中国語教育史から見る支那笑話・支那童話テキスト誕生について	…42
1. 北京官話教育	…42
2. 支那語教育機関	…42
3. 支那語学習の代表的テキスト	…44
4. 神谷衡平と教科書革新運動	…47
(1) 神谷衡平について	…47
(2) 教科書革新運動	…47
第2部 支那笑話・支那童話による支那語テキストの作成	
…51	
第5章 笑話テキストについて	…52
1. 笑話を用いた支那語テキスト	…52
2. 矢野藤助『支那笑話新編』の前史的立場に立つ岡本正文と、その『支那笑話集』	…53
(1) 岡本正文について	…53
(2) 岡本正文『支那笑話集』について	…55
(3) 『支那笑話集』の底本について	…56
(4) 岡本正文の使用した資料	…61
(5) 矢野藤助『支那笑話新編』刊行前における教材としての支那笑話に対する低評価	…61
(6) 『支那笑話集』における岡本正文の支那語教育観	…63
3. 矢野藤助『支那笑話新編』により大成された支那笑話による支那語テキスト	…64
(1) 矢野藤助について	…64
(2) 矢野藤助『支那笑話新編』について	…64
1) 出典について	…65

(3) 先駆者たる岡本正文により提示された禁忌と、それを守る矢野藤助	…68
(4) 『支那笑話新編』に見る矢野藤助の支那語教育観	…69
4. テキスト作成の材料とその方法	…71
第6章 童話テキストについて	…71
1. 矢野藤助『支那笑話新編』附録童話	…72
2. 矢野藤助編『日支對譯支那童話集』	…80
3. 米田祐太郎著『原文對譯支那童話歌謡研究』	…84
(1) 米田祐太郎について	…84
(2) 『原文對譯支那童話歌謡研究』収録「支那童話」	…85
(3) 調査範囲および調査結果	…85
(4) 事例	…87
1) 『児童世界』が出典であるもの	…87
2) 『繪圖童話大觀』が出典元らしきもの	…91
(5) 米田祐太郎のテキスト作成方法	…96
4. 矢野藤助撰『華語童話読本』	…96
(1) 事例	…97
(2) 『華語童話読本』に見る矢野藤助のテキスト作成方法	…100
5. 矢野藤助、米田祐太郎の童話テキストに見る支那語教育観	…101
第3部 笑話テキスト・童話テキストに見る北京語の特徴	…102
第7章 笑話テキスト・童話テキストと北京語	…102
1. 「北京語」、「北京官話」について	…103
2. 支那笑話・支那童話に見られる北京語の語法特点	…104
(1) 岡本正文『支那笑話集』	…105
(2) 矢野藤助『支那笑話新編』	…111
(3) 矢野藤助篇『日支對譯支那童話集』	…118
(4) 米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謡研究』	…125
(5) 矢野藤助『華語童話読本』	…136
3. 北京官話の特徴を持つ支那笑話・支那童話テキスト	…152
結論	…152

資料篇 …158

引用（参考）文献 …255

序論

1. 問題意識

日本と中国の関係は切っても切ることができない関係である。それは次のような古来からの歴史的関係の深さからも知ることができる。歴史的事実とは確認できないものの、日本各地には秦の始皇帝が派遣したといわれる徐福が日本に来朝したという伝説が伝承されている。日本人がまだ文字を持っていなかった時の邪馬台国の卑弥呼や倭の五王に関する事柄は中国の歴史書に記録されているからこそ我々は知る事ができる。日本が律令国家として形を整えていくために中国の律令制を模倣し、仏教もまた中国から伝わったものである。文字を持たなかった日本人は最初は漢字を借用し、そして漢字から平仮名と片仮名を作り出したのである。このように、古の日本人は中国と関係を持ち、そして、中国から当時の先進文化・技術を学んだことは歴史教科書を紐解けば一目瞭然である。

このように関係の深い日本と中国ではあるが、かつて日本は中国大陸に進出し、中国の大地を舞台に侵略戦争を起した。これは欧米諸国も世界中に植民地を広げていた当時の世界情勢からすれば仕方のないことかも知れないが、一方では当時の日本国民に存在した中国に対する差別観や無理解も戦争を後押ししたことも事実である。

このように他者に対する無理解は争いを発生させる原因にもなる。2015年という現在では、インターネット環境が整い、フェイスブックを代表とするソーシャル・ネットワークワーキング・サービスの利用者が世界中に存在するようになり、情報を世界に向けて同時に発信し同時に受信できるようになった。国境がネット上では存在せず、時差も無いのである。容易に世界中の人々と知り合うことができ、語り合うことができる。しかし、このような環境は諸刃の剣とも言える。他者への排他的言説を世界中に発信し、攻撃することも可能だからである。日本のインターネット掲示板には中国・韓国への否定的言説が数多く存在し、また、中国・韓国のインターネット掲示板にも感情的な反日コメントが確認できる。これらはまさにステレオタイプの他者の否定的言説であり、感情的かつ扇動的なコメントである。他者への無理解や異文化への無理解が引き起こしている事象だと言わざるを得ない。

再び日本と中国の両国間に日中戦争を勃発させないためにも、我々は中国文化という異文化の理解に努める必要がある。そのためにも中国語学習は必要である。明治政府と清朝政府との外交上の必要性から開始された日本の中国語教育は、すでに100年以上の歴史を有している。だが、すでに述べたようにかつての日本は中国大陸へ侵略の矛先をむけたのであり、戦前の支那語は「実用語学」、「戦争語学」と呼ばれ、支那語は日本の中国大陸侵略のための道具とされた。ここには英語やドイツ語などのような文化語学としての姿は見ることができなかつたということが六角恒廣と安藤彦太郎

により指摘されている。

この支那語教育時代は会話主義による実用一辺倒の会話テキストがその中心的教材であったが、大正末期になると、それまでの支那語教育では存在しなかった支那童話を用いた支那語学習テキストが続けて3冊も編纂された。また、同時期に中国の人々の息吹を伝える支那笑話を用いたテキストも新たに出版されたのである。中国の人々が伝え、そして、次世代の人に伝えようとした無形の文化である支那笑話や支那童話を中国語学習教材とした、まさに異文化理解につながる中国語テキストが明治末期と大正末期に刊行されたのである。このように、これらのテキストが大正末期にまとまって刊行されたのは何らかの理由が存在するはずであり、そこから日本社会と中国社会の変化や、支那語教育界の発展的变化があったことが容易に想像される。

これまで中国語教育史研究では各種学校などの教育機関がその研究の中心となっていた。以前あまり注目されなかった資料から明治・大正末期の支那語教育の姿を明らかにすることによって、中国語教育史のあらたな一面を切り開きたいと考えている。そのために支那笑話・童話を用いた支那語学習テキストを適切に中国語教育史に位置付け、それによってデモクラシー運動が盛んであった大正期における支那語教育の実態を浮き彫りにしたい。本論文は、これまで明治期を中心として研究が発展してきた日本の中国語教育史研究であるが、決して明治期の範囲だけでは完結しないことを指摘し、中国語教育史研究の確立とその発展を目指すものである。

2. 先行研究

中国語教育史の研究は昭和30年（1955年）ごろから始まった研究分野であり、その中心的人物は六角恒廣と安藤彦太郎である。

昭和30年（1955年）、安藤彦太郎「中国語教育の歴史的性格」（早稲田大学政治経済学部『教養諸学研究』第2号）と六角恒廣「明治における日本の中国語教育」（早稲田大学商学部商学同攻会『早稲田商学』115号）という2つの論文が発表された。これが中国語教育史研究の始めである。

安藤彦太郎は「中国語教育の歴史的性格」の後に、「中国語教育師承記」（早稲田大学政治経済学部『教養諸学研究』第9号、1959年）、「続中国語教育師承記」（早稲田大学政治経済学部『教養諸学研究』第11号、1960年）、「中国語教育史の問題点」（『早稲田大学語学教育研究室紀要』第1号、1962年）、「中国語教育の歴史と課題」（中国研究所『中国研究月報』第248号、1968年）、「戦後の中国語教育」（早稲田大学政治経済学部『教養諸学研究』第34号、1970年）を続々と発表する。そして、これら6編の論文を主な材料とし、『日本人の中国観』（1971年、勁草書房）第二部「中国認識と中国語教育」を記した。その後も『中国語と近代日本』（1988年、岩波書店）を刊行する。

安藤の先行研究では、戦前の中国語教育が実用一点張りの会話中心の実用中国語教育であり、また、その中国語文の読解は漢文訓読の様に、漢字を目で追うだけで理解できるとするものであったことが指摘されている。この他、これらの論文では外国語教育としての観点が無かった点や、中国語教師のタイプが支那語派や漢文派等に分類することができる上に彼らが中国語の専門家ではないこと、「戦争語学」と呼ばれ、戦争の度ごとにブームが起こったことを述べている。

六角恒廣による先行研究は、『近代日本の中国語教育』（初版 1961 年、淡路書房）、（再版 1984 年、不二出版）、『中国語教育史の研究』（1988 年、東方書店）、『中国語教育史論考』（1989 年、不二出版）、『中国語書誌』（1994 年、不二出版）、『漢語師家伝－中国語教育の先人たち』（1999 年、東方書店）、『中国語関係書書目（増補版）』（2001 年、不二出版）、『中国語教育史稿拾遺』（2002 年、不二出版）が存在する。

『近代日本の中国語教育』では、1945 年までの中国語教育をとりあげている。しかし、実際の記述は明治に集中している。それは、日本の中国語教育の様々な問題が明治期に初発的にあらわれていることと、1945 年までは中国語教育に関する問題が変化が無かったことによるためである。上記の『中国語教育史の研究』は六角による中国語教育史研究の主要な柱の一つである。8 年の歳月を費やし、『近代日本の中国語教育』よりも詳細、かつ克明に支那語教学の歴史を記した著書である。『中国語教育史論考』（1989 年、不二出版）、『中国語書誌』は、明治の初めから昭和 20 年（1945 年）までの支那語時代に編まれた教科書や辞書など 156 点を取りあげ、その解題を行ったものである。『漢語師家伝－中国語教育の先人たち』は、明治 4 年（1871 年）から始まった日本の中国語教育について、7 人の中国語教師の略伝を記すことによりその歴史的背景をつづったものである。『中国語関係書書目（増補版）』は、1867 年から 2000 年に刊行された支那語および中国語学習教科書等を網羅的に調査、記述した書目であり、中国語教育史研究の資料の一つとして編まれたものである。『中国語教育史稿拾遺』は、日本の商業学校での中国語教育、陸軍参謀組織による軍事密偵と中国語の関係について、明治初期の中国人教師、漢文を中国語で読むべきであるという直説論に関することを述べている。

六角恒廣の研究を総じて言えば、明治期に焦点が当てられており、大正期と昭和初期に関する研究の少ないことが指摘できる。それは、現在につながる中国語教育が明治 4 年の漢語学所開設から始まっており、日本の中国語教育の基礎が確立したのが明治 30 年（1897 年）前後であるという事実を鑑みれば理解できることである。

藤井省三は『東京外語支那語部－交流と侵略のはざままで』（1992 年、朝日新聞社）において、東京外国語学校グループの一員である神谷衡平が従来会話中心の教科書への不満から、教科書革新運動を起し、「読本式」というべき教科書を作成した。そして、文法、中国語固有の美しさ、知的好奇心という三方面を満たそうと試みたことを

指摘している。

鱒澤彰夫は「一九三〇年代の中国語教育への視点―新しき路にみえしもの」(『中国文学研究』第 18 号、1992 年、早稲田大学中国文学研究会)において、神谷衡平・清水元助共編『標準中華国語教科書・初級篇』(1923 年、文求堂)の刊行を新しい中国語教育の時代の宣言と述べて評価している。

3. 研究の特徴・方法

本論文は今迄誰も注目しなかった支那笑話と支那童話を用いて作成された語学学習テキストを資料とし、そこから大正末期の支那語教育の新たな姿を見出すものである。

明治末期から大正末年までに刊行された中国笑話・中国童話を用いた中国語テキストを、当時の日本社会と中国社会の動き、また「笑話」の受容と日中「童話」観念の発展変化といった視点から考察し、これらテキストを中国語教育史に位置づける。そのために、中国笑話・中国童話を用いた中国語テキストの出典調査を行い、大正期の支那語学者がテキスト作成時に如何なる材料からどのような態度でテキストを作成したのかという点を明らかにする。それと同時に、日本の社会・風俗史、日中児童文学交流史や文化人類学的視点から当時の中国語教育やテキスト作成がいかに関係し「日本社会」と「中国社会」の動きと関連を持ち、「社会・世相」を反映していたかという点についても明らかにする。このように学際的見地から中国語教育史をとらえ、従来の中国語教育史研究で述べられてきた「支那語教育の停滞」という言説の見直しを意図するものである。

4. 研究の位置付け

中国語教育史の研究は、昭和 30 年(1955 年)に安藤彦太郎と六角恒廣が中国語教育史に関する論文をそれぞれ発表したことに始まるということができる。

両者の先行研究を総じていうなれば、時代的には明治期に集中しており、その研究対象も各種教育機関と会話テキストに焦点が当てられていたといえよう。

しかし、中国語教育史の研究対象は、教育内容と教育方法も研究対象であり、教科書の形式・内容や日本の社会や文化、政治経済などとの関係から中国語について論じた中国語論もその対象である。

大正末期になると支那語学習のために支那笑話と支那童話を用いて作成されたテキストがまとまって刊行される。そして、これ以降中国語学習において、笑話や童話・昔話等を用いて作成された中国語学習テキストは一般的なテキストとなり、2015 年現在においても容易に入手することができる。

中国語教育史研究においては、このように今日では一般的な学習テキストとなっている中国の笑話や童話等を教材として作り変えたテキストに対する調査研究が存在し

なかった。本論文では、これらのテキストが大正末期に刊行されたという事実を支那語時代の発展・変化の証ととらえ、このテキスト群の存在を中国語教育史において適切に位置付け、中国語教育史研究の空白部分を埋めるものである。そのために、出典調査を行い、そこから、当時の支那語学者のテキスト作成方法や「最新」中国文化受容についての考察を加える。また、当時の日本と中国の「社会」「文化」等に注目し、この点からも分析を行う。そして、支那語学習笑話テキストと童話テキストについての分析から、中国語教育史に実用語学・商業語学としてのみ求められていた支那語教育とは異なる姿を明らかにし、支那語教育が決して「停滞」していなかったことを検証するものである。

5. 本研究の構成

本論文は、本論を大きく3部に分け、第1部では支那笑話や支那童話を教材として作成された語学テキストが生まれた理由について論じ、第2部ではこれらの支那笑話や支那童話をういたテキストがどのような材料を用いて、どのように作られたのかという問題について考察を加えた。第3部では、これらのテキストが北京語的特徴を有するかを確かめた。

第1部では、支那笑話や支那童話をういた支那語学習テキストが誕生しえた理由について論じている。第1章では、現代社会における「異文化理解」をキーワードとして、語学学習に笑話や童話（昔話等を含む）と言った、その国や地域の人の思考、習慣、風俗、伝統や文化といったものが反映されているものを学習教材とすることは、相手の文化や伝統を知る事につながり、異文化理解といった点から非常に有効な方法であることを指摘した。そして、現在一般書店で中国語学習者が入手できる笑話や童話、昔話などをういた学習教材の存在を確認した上、支那語時代に編集発行された支那笑話・支那童話による支那語学習テキストの存在を調査した。

第2章では、支那笑話と支那童話をういた支那語学習テキストが大正末期の一時期に集中して刊行された理由を日本社会に求め、それを日本社会の発展、ツーリズム、支那趣味、日本における童話の発展から述べた。

第3章では、辛亥革命後の中華民国の社会状況について述べる。それは中華民国で起こった新文化運動における文学革命と、そこからの国語教育の発展、および童話への認識の変化から、民国において急激に童話が発達したことを叙述するものである。このような状況の下で、支那語学習教材として用いることができる童話が民国で記されたことを確認した。

第4章では、支那語学習支那笑話テキストと支那童話テキストが誕生した背景を中国語教育史から論じた。明治から大正末期までの中国語教育がどのようなものであったかを理解するために、支那語教育・学習のメッカであった善隣書院と東京外国語学

校という2つの教育機関に注目し、さらに、神谷衡平と彼の教科書革新運動について叙述したものである。

第2部では、支那語学習笑話テキストと童話テキストがどのような材料を用いて、どのように作られたかについて論じた。

第5章では、支那語教育において岡本正文が最初に支那笑話を語学学習教材として「発見」した先駆者として位置付け、矢野藤助による『支那笑話新編』が刊行されるための基礎を作った人物として確認した。矢野藤助の『支那笑話新編』が出現することにより、支那語教材として支那笑話が認められたといえよう。

これらのテキストにはその出典がまったく記載されておらず、当時の支那語学者によるテキスト作成方法が不明であった。このテキスト作成方法の一端を明らかにするために、出典調査を行った。その結果、岡本と矢野両者はそれぞれの時期の「最新」資料に基づきテキスト作成を行ったことを探り出した。また、岡本正文により示されたテキスト作成には用いることのできない支那笑話のタブーを、矢野藤助も受け継ぐように順守していることも確かめた。

第6章では、支那語学習童話テキストが大正末期にまとまって刊行されたことを重視し、この支那語学習童話テキストの出版という動きを中国語教育史の中に適切に位置付けるために、矢野藤助と米田祐太郎両者のテキスト作成方法の一端を明らかにした。彼らは、笑話テキストと同じように中華民国の「最新」資料、つまり中華民国人によって書かれた童話を用いてテキストを編集していたのであった。また、その童話は中華民国の小学生などが白話文を学習するための存在でもあったのである。

第3部では、支那笑話・童話を用いた支那語学習テキストが北京語の特徴を有するかを、太田辰夫による北京語の7特徴論に従い分析を行った。

第7章では、戦前日本の支那語教育は、大正期には南京官話教育から北京官話教育へと変化している。そこで、支那語学習笑話テキストおよび支那語学習童話テキストが北京語学習テキストとしてふさわしいものであるかの確認を行った。日本の中国語教育は南京官話教育に始まり、その後、北京官話教育へと変化する。そこで、岡本正文の支那笑話学習テキスト、矢野藤助による各支那笑話と支那童話の支那語学習テキスト、および米田祐太郎によるテキストが北京語学習に適したものであるか否かを、太田辰夫による北京語の7特徴論を用い考察を行った。

第1部 支那笑話・支那童話による支那語テキスト誕生の背景

第1部では、先ず中国語学習において中国笑話や中国童話といったものを教材とすることの価値について述べ、そして、これらのテキストの存在を確認する。

次に、このようなテキストは大正末期に突然、しかも集中的に姿を現すという事実が存在する。大正末期に支那笑話や支那童話を語学学習教材とした支那語教科書が生まれた理由について、当時の時代背景から考察を加えるとともに、中国語教育史からも考察を行う。

第1章 現代社会と笑話や童話等の中国語学習テキスト

1. 現代社会と異文化理解と語学学習

今日ではグローバル社会、ボーダレス社会をむかえ、あらゆる面で国際化が進んでいる。人や物は激しく地球上を行き交い、情報はインターネット技術の発達により瞬時に世界中に発信ができ、また受け取ることができるようになった。日常生活においても様々な場面で、色々な国の人々と接する機会がある。池袋近辺では多くの中国人を見かける。彼らは中国食品、雑貨、書籍などを扱う店を開き、また独自のコミュニティを発展させており、池袋駅北口界隈は「池袋チャイナタウン」と呼ばれるようになった。また、筆者がフィールドワークの一環として千葉県市川市行徳駅付近にいた時、ある公園で中国語を話す6人前後の中学生のグループを見かけた。彼らは皆が同じ制服を着ており、近くの中学校に通っている生徒であるの是一目でわかった。さらに、行徳界隈には多くのインド人も暮らしている。彼らが20人前後集まり、公園でクリケットをしている姿を見かけたこともある。毎日、某大手スーパーへ水を求めに行くのを見ることができる。西葛西には日本最大級のインド人コミュニティがあることから、同じ東京メトロ東西線沿線の行徳にも小さいながらもインド人コミュニティが存在するのであろう。さらに行徳には、日本では珍しいのだが住宅街にモスクがあり、イスラムコミュニティも確認できる。行徳はこのように世界各地の人々が暮らしているのだが、別に彼らは特別な存在ではない。彼らは行徳に暮らす人々の中に溶け込んでおり、彼らを含んでの「行徳人」なのである。

このように、現代社会を生きる我々は身近に世界各地の人々と接する機会がある。だからこそ、「異文化理解」という言葉を日常的に耳にするようになった。筆者は中国語教育史を研究し、さらに中国語教育に身を置く者であるため、本論では「異文化」という言葉を「中国文化」と置き換えることにする。それでは、具体的に中国語教員としてどのようにすれば学習者に「中国文化」理解をはかることができるかを考える

必要がある。その1つの答えとなるものが、「昔話」「笑話」「民話」「童話」というような、遠い過去から人々が伝承し、またこれからも伝えていく話を語学学習に活用し、中国文化を理解する方法であろう。昔話等にはそれを伝えてきた人々の思想や歴史、文化が溶け込んでいるという。

任東権は『韓国の民話』（1995年、雄山閣出版社）の中で、

民話はその民族の知恵と生活経験の結晶といえる。暮らしの経験や哲学が、民話の中に盛られて、伝承して民族文芸として伝わる。住む場所の自然環境と歴史や社会性が、郷土文化として形づくられるが、民話もその中の一つといえる。したがって、民話は学問的にも貴重な意味をもっている。（任 1995：1頁）

と述べ、また、「民話は純粹で素朴な民衆の理想であり、生活ともいえる。彼らの考えと希望とを話し、また、彼らの生活を興味深く話した。したがって民族の心理や民族の文化を研究するのに民話はよい資料である。」（任 1995：3頁）とも言い、民話の中に「郷土文化」や「民族の文化」が溶け込んでいることを指摘している。また、小澤俊夫は日本の昔話を取り上げ、

ぼくは気がついたのです。昔話というのは、個人が忘れてしまったことを日本人の全体の記憶として覚えていてくれるのだと。だから、昔話は大事なのだと。個人が忘れてしまったことを日本人全体の記憶として覚えていてくれる。われわれは、どうしたって忘れてしまうでしょう。個人は、何年、何十年もたてば、忘れます。だけど昔話は覚えていてくれる。昔話は、日本人みんなが知っています。日本人の共有財産です。その共有財産が覚えていてくれる。外付けのハードディスクのようなものですね。外付けの記憶装置のように覚えていてくれる。だから、昔話は大事なんだとぼくは思うのです。（小澤 2009：79頁）

創作の物語やテレビのドラマでは知ることのできない、昔の人たちの思っていたこと、感じていたこと、信じていたことが、昔話には染み込んでいるのです。だから昔話は大切なのだと思うのです。（小澤 2009：119頁）

小澤は、昔話は「民族の心の反映」や「民族の心の鏡」だと言われていることを指摘し、現代人がそのような昔話を知ることの意義について言及している。

わたしたちが、ある異民族について知っていると思っている知識というの

は、非常に方よっていて、その民族の一面でしかない、ということがままあるのではないかと思います。そこで、その民族のなかで育ってきた昔話を知るということは、よそからの価値判断に邪魔されることなしに、その民族の心の世界をのぞくことができるのではないのでしょうか。アメリカ人によってつくられた西部劇のなかでの悪役というイメージに邪魔されることなしに、インディアンの人びとを理解できるのではないのでしょうか。この意味においてわたしは、昔話というのは、それぞれの民族が、異民族の心の中をのぞくことのできる、具体的な材料だと思うのです。(小澤 1997 : 28 頁)

昔話は異民族と理解し合う大事な手だてになると思っています。いろいろな国々が、貿易やスポーツなどで交流していて、もちろんそういったものもとても大事だと思うのですが、もっとつっこんで、心の中の世界をお互いに知り合えば、もっと深い相互理解ができるのではないかと思います。(小澤 1997 : 30 頁)

とも、述べており、小澤は昔話は相互理解のための重要なアイテムととらえている。

白須康子は「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」において、その中心的論点は中学生への英語教育に対する絵本・児童文学の有用性の確認ではあるが、学習者の年齢に関係なく児童文学作品を積極的に教材として採り入れる動きがあり、特にアメリカなどでの第2言語としての英語の授業で児童文学の使用が定着してきていることを挙げている。また、「絵本や児童文学はそれらがターゲットとしている実際の読者層よりも年齢的に高い成人の学習者にとっても有益で、興味を起ささせる教材になりうる」(白須 2014 : 90 頁) と言い、絵本や児童文学を語学学習教材とすることの有益性を指摘している。そして、いかに絵本や児童文学が異文化理解の機会を提供するかということを中心に述べて、その重要性を指摘している。

まず、昔話や伝承童謡など世代を超えて語り継がれてきた物語や歌はいわゆる基層(下層)文化に属し、それは上層文化、中間層文化と異なり時代の変化に左右されることなく、ある文化圏で育った人々が自然に身につけ無自覚のまま共有している文化である(絵本・児童文学研究センター編、2002)。それは正に文化のルーツとも言えるもので、その文化圏の人々の世界観や言語生活と深いつながりがある。その意味で昔話などの基層文化を学ぶことは、その文化の中で生活する人々の根っこの部分に直接触れることになる。伝承歌謡は文章の中で引用されたり、歌の歌詞に登場したり、あるいはパロディーの材料として頻繁に使われてきたし、現代でもそうである。また、昔話の

中にはよく似た類型の話が異なる文化圏にまたがって伝播しているものがあり、そのことに気付くことによって人間が人種や民族の違いにかかわらず共通して持っている普遍的な人間性について考えることもできる。自分の文化と他の文化を比較し、自他の違いを認識することも重要であるが、共通項を見出すことも同様に重要である。(白須 2014 : 95 頁)

白須がこのように指摘するように、語学学習に昔話などを活用することは有効であると考えられ、それは中国語学習・教育にも有効であると言えることができる。このように中国の昔話等を中国語教育に役立てることは、まさに中国文理解につながり、「異文化理解」の観点からも重要で、それは中国語学習・教育にも有効な手段と考えられるのである。

最後に、「昔話」、「民話」、「童話」の定義だが、本論では小澤俊夫『小澤俊夫の昔話講座① こんにちは、昔話です』(2009 : 小澤昔ばなし研究所)における説明をもってその定義とする。なお、「笑話」は昔話内に含まれるものとし、「児童文学」は「童話」と同様の意味で使用する。

昔話…うそこの話

昔話はたいてい、「昔むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがありました」と始まります。つまり、伝説とは反対に、時代も場所も人物も不特定に語り始めます。ということは、「これから始まる話は、架空の話だよ。信じないでくれよ」という宣言なのです(小澤 2009 : 121 頁)。

民話…広い範囲を指す言葉

この言葉は、戦後、木下順二さんが「夕鶴」を民話劇として発表して以来、広く使われるようになりました。神話という言葉があったので、その民衆版ということで、理解されやすかったのでしょう。その後、この言葉の使われ方を見ていると、一般に昔話も伝説も噂話も小話も全部ひっくるめて使っているようです。現代の民話という使い方もあります。昔話のように、きちんと形の整った、語り口のはっきりした話でなくとも、創作文学でない話は全部含まれるようです(小澤 2009 : 122 頁)。

童話…子ども向けの物語

幼い子どものための物語を指します。創作された童話もあれば、口伝えの童話もあります。創作童話としては、アンデルセン童話などが有名です。口伝えの童話とはすなわち、昔話のなかの子ども向きの話ということです。昔

話のなかでは、動物が主人公の話に、子ども向きのものが多くあります（小澤 2009：123 頁）。

2. 現在手に入る昔話などを用いた中国語学習テキスト

中国の昔話などを用いた中国語学習テキストで、現在我々が入手し得るものにどのようなものがあるのでしょうか。2015 年 5 月中旬、筆者が東京都池袋と千葉県松戸にあるジュンク堂書店を訪ね、確認入手することができたテキストについて報告する。

池袋のジュンク堂書店では、計 3 冊を確認入手することができた。①陳淑梅著『中国語で読む日本と中国のむかし話』（2011 年、アルク）、②鄧恩明・張恵先編著『CDブック中国笑話・謎語 50 選 - 笑って学ぶ中国語 - 』（2006 年、中華書店）、③劉少英・李成達著『ジョークで学ぶ「大人の中国語」』（2013 年、リフレ出版）である。

①陳淑梅著『中国語で読む日本と中国のむかし話』は、日本の昔話 8 話と中国の昔話 12 話を収録している。日本の昔話は「耳朵上の被子（耳に布団）」、「猫追老鼠的故事（ネコがネズミを追いかける物語）」、「金太郎（金太郎）」、「一寸法師（一寸法師）」、「瘟神（疫病神）」、「扔老人的山沟（うば捨て山）」、「仙鶴报恩的故事（ツルの恩返し）」、「桃太郎（桃太郎）」である。中国の昔話は「女娲补天（女娲、天を修復する）」、「后羿射日（后羿、太陽を射る）」、「嫦娥奔月（嫦娥、月に登る）」、「牛郎织女（牽牛星と織女星）」、「孟姜女（孟姜女）」、「东郭先生（東郭先生）」、「滥竽充数（滥竽充数）」、「狐假虎威（トラの威を借るキツね）」、「东施效颦（ひそみに倣う）」、「一只木碗（木のお碗）」、「愚公移山（愚公、山を移す）」、「梁山伯与祝英台（梁山伯と祝英台）」が収録されている。

②鄧恩明・張恵先編著『CDブック中国笑話・謎語 50 選 - 笑って学ぶ中国語 - 』（2006 年、中華書店）には、40 篇の笑話と 10 篇の謎々が収められている。笑話は、1) 汗那里去了、2) 两个人一双鞋、3) 馋鬼、4) 不相信明天就死、5) 熏蚊子、6) 卖报、7) 不听话的孩子、8) 不往酒店里迈腿、9) 老鼠药、10) 别客气、11) 暴君和算命先生、12) 只有我能回答、13) 桌子是我的、14) 鸡、15) 叔叔的手比我的大、16) 只给一半、17) 下辈子是人、18) 拾豆子、19) 买火柴、20) 父亲去哪儿了、21) 小偷儿说别人懒、22) 不能给衬衫、23) 作文一样、24) 城里人的拳头、25) 冻儿子、26) 困的时候再来、27) 空摇篮、28) 箭靶子的帮助、29) 哭错了、30) 邻居搬家、31) 吝啬鬼、32) 慢性子的人、33) 能让你们见面、34) 有贼、35) 富人的钱包、36) 太阳进长安远、37) 不会说话、38) 一个鸡蛋、39) 县官管学生、40) 国王和讲笑话的人、である。謎々は、1) 怎样过河、2) 割牛舌、3) 聪明的姑娘、4) 谁是强盗、5) 先生的条件、6) 抓走私犯、7) 真假牡丹图、8) 阿珠选朋友、9) 聪明的县官、10) 芙蓉姑娘、である。

③劉少英・李成達著『ジョークで学ぶ「大人の中国語」』（2013 年、リフレ出版）には、15 話のジョークが収載されている。それらは、1) 餐厅用餐、2) 看牙医、3) 就

是不想活了、4) 你也看到了吗?、5) 想要一个男孩、6) 视察养猪场、7) 成不了大事、8) 看心理医生、9) 里面全是崭新的、10) 度蜜月、11) 供应也是有限度的、12) 标语牌、13) 裸奔、14) 竭诚服务、15) 不孕症治疗、である。

松戸のジュンク堂書店では池袋と同じもの以外に、①『CDブック続中国笑話・謎語50選 - 笑って学ぶ中国語 - 』(2006年、中華書店)を確認入手できた。これは、『CDブック中国笑話・謎語50選 - 笑って学ぶ中国語 - 』(2006年、中華書店)の続篇であり、その内容は笑話が1) 不学骂人、2) 梦喝酒、3) 心疼、4) 丈夫的电话号码、5) 借板子、6) 钱柜锁着呢、7) 贺礼、8) 爱忘事、9)、脱帽子 10) 怕老婆、11) 山东萝卜 苏州桥、12) 庸医、13) 咸死、14) 树倒不知飞、15) 我去哪儿了、16) 死后不赎、17) 盼孙子给出气、18) 守寡、19) 父亲和儿子、20) 跟小偷赛跑、21) 不宜动土、22) 出来怕狗咬、23) 兄弟争执、24) 纪晓岚跳河、25) 苏轼的留言、26) 警察与小偷、27) 神童、28) 吃烧饼、29) 三剑客、30) 买桔子、31) 白居易的名字、32) 空城计、33) 造字的故事、34) 怎么办、35) 我睡着也比你清楚、36) 学羊叫、37) 成功的试验、38) 一根金条、39) 吝啬鬼和裁缝、40) 会说话的鸟、という40話が収録されている。謎々が、1) 据铁条、2) 国王的画像、3) 怎样离开大院、4) 生死卷儿、5) 三座神像、6) 信为什么没有寄来、7) 求婚者的问题、8) 怎样断案、9) 长草棍、10) 包公的传说、ほど収められている。

これらのテキストが池袋と松戸にジュンク堂書店の中国語学習コーナーで販売されていた。この他に、ジュンク堂書店HPの書籍検索において「中国語 童話」を検索キーワードとしたところ、池田大作・潘金生・山田留里子著『二人の王子さま - 童話で学ぶ中国語 - 』2006年、駿河台出版社が確認できたが筆者は未見である。また、インターネット検索では、大川完三郎著『楽しく学ぶ中国笑話選』1995年8月、NHK出版社(カセット版)と、そのCD版である大川完三郎著『CDブック楽しく学ぶ中国笑話選』2003年2月、NHK出版社、を目にすることができた。このテキストは「笑話選」とはいうが、成語故事や神話・伝説も含まれている。筆者の手元にはカセット版があり、参考のために目次を記載する。1) 先见之明、2) 别告诉他、3) 头上面是什么?、4) 望孙子出气、5) 京城的拳头、6) 搬家、7) 买火柴、8) 等当了爸爸再打、9) 称呼、10) 不认输、11) 乘鸡而归、12) 疑人偷斧、13) 骑驴找驴、14) 叶公好龙、15) 不要命、16) 谁是吝啬鬼?、17) 狐狸的分配、18) 回娘家、19) 改姓、20) 要钱不要脸、21) 青菜一碟、22) 送礼、23) 请君入瓮、24) 属牛、25) 讳疾忌医①、26) 讳疾忌医②、27) 偷牛、28) 鹬蚌相争、29) 负荆请罪①、30) 负荆请罪②、31) 自相矛盾、32) 天衣无缝、33) 刻舟求剑、34) 狐假虎威①、35) 狐假虎威②、36) 囫圇吞枣、37) 千里马①、38) 千里马②、39) 解铃还须系铃人、40) 望洋兴叹、41) 戴高帽儿①、42) 戴高帽儿②、43) 四个急性子人、44) 机灵的狐狸、45) 此地无银三百两①、46) 此地无银三百两②、47) 刘大请客、48) 包不脱毛、49) 国王上山①、50) 国王上山②、51)

扛驴①、52) 扛驴②、53) 画蛇添足、54) 皇梁美梦、55) 女娲造人①、56) 女娲造人②、57) 羿射九日、58) 牛郎织女①、59) 牛郎织女②、60) 牛郎织女③、61) 牛郎织女④、以上がその目次である。

3. 支那語時代の笑話・童話を用いた中国語学習テキスト

中国語学習に「笑話」「童話」というものを使用したのは、決して最近から始まったことではない。それは中国語が「支那語」と呼ばれていた時からすでに中国語学習テキストに「笑話」や「童話」を用いていたのである。以下に、六角恒廣『中国語関係書書目（増補版）』（2001年、不二出版）による書誌情報を記載する。

	出版年	書名	編著者等
1	明治 44 年（1911）	『支那笑話集』	岡本正文編譯、文求堂
2	大正 12 年（1923）	『支那笑話新編』	矢野藤助編、文求堂
3	大正 13 年（1924）	『日支對譯支那童話集』	矢野藤助編、文求堂
4	大正 14 年（1925）	『原文對譯支那童話歌謡研究』	米田祐太郎著、大阪屋號書店
5	大正 14 年（1925）	『支那笑話新編』 ¹	矢野藤助編譯、文求堂
6	大正 14 年（1925）	『華語童話読本』	矢野藤助編、小林三林堂
7	昭和 9 年（1934）	『支那童話読本』	矢野藤助編著、尚文堂
8	昭和 12 年（1937）	『中日對譯現代笑話』	影山巍編著、蔣君輝譯註、文求堂
9	昭和 13 年（1938）	『支那童話読本』	渡辺哲夫著、三友社
10	昭和 17 年（1942）	『註音譯註支那幽默集』	内藤堯佳編著、外語學院出版部
11	昭和 19 年（1944）	『古代英雄的石像』	葉紹鈞著、倉石武四郎編、生活社

これら以外の学習テキストが存在する可能性も否定はできないが、支那語時代には 11 冊の学習テキストが刊行されていることが確認できた。2015 年につながる「笑話」「童話」を中国語学習テキストとしたその始まりは明治末期から大正末期であった。これは当時の支那語学者が「笑話」や「童話」を支那語学習に活用できるととらえていたのであり、大正期を中心とする支那語教育論に関連する問題である。中国語教育史にこの「笑話」「童話」を用いた学習テキスト、およびその支那語教育論を適切に位置づけるためにも、明治末期から大正末期という時期の支那語学者がどのような態度や方法によりこれらのテキストを作成していたかを明らかにする必要がある。よって、原点ともいべき明治末期から大正末期に作成された「笑話」「童話」を用いた学習テキストが生み出された背景や出典元を次章以降に探る。

¹ 上記 2 を改版、修正増補したもの

第2章 大正期における支那笑話・支那童話による支那語テキスト誕生と受容の背景

大正時代の末期になると、支那童話を中心に扱った、支那語教育のための学習テキストがまとまって刊行された。このような動きはそれまでの支那語教育には見られなかった動きである。それでは、どうしてこの時期の支那語教育にこのような動きが現れたのかを当時の日本社会の状況から考察する。

1. 大正時代の日本社会

明治末期から慢性的な不況と財政危機に悩まされていた日本経済は、大正3年(1914年)の第一次世界大戦をきっかけとして好景気となる。それは、日本は連合国側に組んだのだが、アメリカとともに直接的な被害はほとんど受けず、欧州の交戦国が輸出できなくなったアジア・中国市場を日本がほぼ独占したことや、軍需生産が拡大したことによる。アメリカ向けの生糸輸出が増加するなどしたことから、工業は大きく発展し、工業生産額は農業生産額を追い越して全産業生産総額の半分以上を占めた。このような工業の発展にともない、10人以上の労働者を雇用している民間工場の労働者数も大正3年(1914年)には85万人であったものが、大正8年(1919年)には147万人となった。貿易額も飛躍的に増え、それまでの輸入超過が輸出超過に転じると、大正3年(1914年)末に約11億円の債務があったのだが、大正9年(1920年)には約27億円の債権国となった。国民の生活水準も飛躍的に高まり、日本は近代的な資本主義国家へと変容したのである。

このような発展を背景として、都市化と大衆化が顕著となる。都市へ人びとが集まり、文化住宅が盛んに建てられた。ガスや水道設備がかなり普及し、都市間を結び鉄道路線も整備された。乗合自動車(バス)が市民の足となるのもこの頃からである。会社員などの事務系の職場で働くサラリーマンも大量に出現した。進学のために地方から上京した人々が卒業後、東京でサラリーマンとなり東京で暮らし続けるようになったのである。また女性の社会進出も目覚しく、エレベーターガール、タイピスト、電話交換手などの職業婦人が増えた時代でもあった。こうして、都市に暮らす彼らが大衆文化の担い手であった。

都市化が進むにつれ、大衆化した文化、いわゆる大衆文化が発達しはじめた。大正の中ごろには映画が大衆の娯楽中心になるなどし、大衆娯楽も盛んになった。印刷技術も大いに発達し、『中央公論』『文藝春秋』などの各種総合雑誌や、毎月100万部を越す大衆雑誌『キング』や週刊誌などの発行も急増した。1冊1円の円本や文庫本が盛んに刊行され、低価格の出版物が大量に供給されるようになった。大正14年(1925

年)にはラジオ放送が始まり、翌年には日本放送協会が設立された。

このような大衆文化の発達を支えた大きな理由は中等教育の普及と知識階級の増大である。大正7年(1918年)に大学令が制定され、また、高等学校令も改正された。中学校や高等女学校も増え、高等・中等教育機関が大幅に拡張された。大正14年(1925年)には専門学校以上の学生・生徒数は13万人以上に急増した。彼ら知識層が都市中間層として大正期の文化の中心的な担い手になったのである。また、義務教育も大正9年(1920年)には就学率が99%を超え、大正末期にはほとんどの人が読み書きができるようになっており、文化の大衆化を促したのである。この他、活字文化の広まりとマス=メディアの始まりなども大衆の文化参加・文化創造を促進した。

2. ツーリズムと「支那趣味」

(1) ツーリズムの発達

明治期においても中国大陸の土を踏んだ日本人は相当な数に上るが、兵士やジャーナリストなどに限られていた。ところが、大正期になると個人で日程を組み、中国の観光地を巡ることができるようになった。そのため、多くの画家や文学者たちも中国へ渡ったのである。

日本は日露戦争後、「戦利品」としてロシアから権益を受け継いだ鉄道の経営に当るために、南満州鉄道株式会社を設立した。明治43年(1910年)4月、日本の鉄道院線とロシア東清鉄道線との間に、大連から満鉄経由、およびウラジオストック経由の2経路による、日本最初の国際連絡運輸が開始された。明治44年(1911年)、鴨緑江に橋がかけられ、朝鮮鉄道と満鉄が直接つながると、朝鮮・満州ルートでの日本と欧州間における国際連絡運輸がはじめて実現したのである。武田知弘は「朝鮮の釜山から北京やハルビンまで直通し、シベリア鉄道に乗り換えれば二週間でヨーロッパ、パリまで行ける「満州ルート」は、外国人客も多く、重要な国際線だったのである」(武田2013:149頁)と述べる。

明治45年(1912年)には、国際親善と経済振興の立場から外国人客の誘致を斡旋する機関として鉄道院、日本郵船、満鉄などの共同出資でジャパン・ツーリスト・ビューロ(JTB)が設立された。JTBはその後、大正13年(1924年)に発足した日本旅行文化協会を昭和9年(1934年)に合併する。その日本旅行文化協会の旅行専門雑誌『旅』は協会の設立とともに創刊される。その目次には「鮮満支を歴遊して」や「満州旅行に就いて」といったものが見え、日本のツーリズムの成立過程で「鮮満支」を重要な観光地と見ていたことが容易に理解できる。

鉄道網が整備されていく以外に、重要な交通手段として船の存在がある。日本郵船の上海航路は明治期から横浜・上海間、神戸・上海間の定期航路が存在していた。さらに、大正12年(1923年)には3番目の航路として長崎・上海間の定期船が就航し

た。この航路は最大速力 21 ノットという快速客船である上海丸と長崎丸により、わずか 26 時間で結ばれたのである。

日本側の環境が整うだけでなく、中国側の旅行者受け入れ態勢も徐々に整っていく。1906 年には中国南北の大動脈である北京と漢口（武漢）を結ぶ京漢鉄道、1908 年に上海と南京を結ぶ滬寧鉄道、1911 年に北京と奉天を結ぶ京奉鉄道、および天津と南京を結ぶ津浦鉄道が開通する。宿泊施設も欧米系、中国式、日本式の各種が中国各地に数多く造られた。上海を例に挙げるとアスターハウスホテル（浦江飯店）、パレスホテル（匯中飯店）はこのころに改築されたものである。旅行会社では、20 世紀初頭に上海租界ではトーマス・クック、エクスペレス、JTB が支店を出して営業を行っていた。さらに JTB について言えば、大連や青島などの都市にも支店や営業所を設置していた。

上記のように、様々な面で大陸観光の条件が整備されていくと、中高生の修学旅行として満州方面へも出かけるようになった。この動きは昭和初年にピークを迎えるが、この時期になると一般社会人も「鮮満支」への旅行に行くようになる。大正 13 年（1924 年）には満州を訪れた観光客は 1 万人を超えていたという²。学生の修学旅行の事例としてだが、大東文化大学の前身である大東文化学院の生徒も修学旅行として昭和 4 年（1929 年）に「第 1 回大陸旅行」を行っている。また、昭和 5 年の夏にも「第 2 回大陸旅行」を修学旅行として行っている。その日程について吉田篤志³は、

第一回旅行の日程は、第一回旅行記の「旅行略図」「旅行日程表」「旅行日誌」に拠ると、7 月 22 日（月）より 9 月 8 日（日）までの 49 日間で、鉄道で東京より三ノ宮へ、船（郵船長崎丸）で神戸港より長崎を經由して上海に上陸、鉄道で上海→杭州→上海→蘇州→南京へ、南京より船（日清汽船岳陽丸）で長江を上り、南京→漢口（武漢）（日清汽船沅江丸に乗換え）→〔岳州（岳陽）より洞庭湖を経て湘江を上り〕→長沙→岳州（岳陽）→武昌・漢陽・漢口（武漢三鎮）（日清汽船大福丸に乗換え）→九江→南京へ、南京より長江を渡って甬口へ、鉄道で甬口→曲阜→泰安→濟南→天津→北平（北京）→青龍橋（八達嶺）→南口（明十三陵）→北平（北京）→天津へ、天津より船（大連汽船天潮丸）で渤海を渡って大連に上陸、鉄道で大連→旅順→大連→奉天（瀋陽）→撫順→奉天（瀋陽）→安東（丹東）→〔鴨緑江を渡り朝鮮半島へ〕→京城（ソウル）→釜山へ、釜山より関釜連絡線で馬関（下関）に上陸、解散する。

² 武田 2013 : 147 頁

³ 吉田篤志、「大東文化学院時代の中国旅行記（一）」『大東文化歴史資料館だより第 14 号』（2013 年 5 月 31 日）、および「大東文化学院時代の中国旅行記（二）」『大東文化歴史資料館だより第 15 号』（2013 年 11 月 30 日）

～（省略）～

第二回旅行の日程は、第二回旅行記の「燕呉紀遊略図」「支那旅行日程」「旅行日記」に拠ると、7月25日（金）より9月5日（金）までの43日間で、鉄道で東京より三ノ宮へ、船（郵船長崎丸）で神戸港より長崎を経由して上海に上陸、鉄道で上海→杭州→上海→蘇州→南京→上海へ、上海より船（大連汽船奉天丸）で青島を経由し、山東半島を迂回して渤海海峡を渡って大連へ上陸、鉄道で大連→旅順→大連へ、大連より船（済通丸）で天津に上陸、鉄道で天津→北平（北京）→南口（明十三陵）→〔驢馬にて八達嶺に登る〕→青龍橋（八達嶺の麓）→北平（北京）→天津へ、天津より船（淡路丸）で渤海を渡って営口に上陸、鉄道で営口→奉天（瀋陽）→撫順→奉天（瀋陽）→安東（丹東）→〔鴨緑江を渡り朝鮮半島へ〕→平壤（ピョンヤン）→京城（ソウル）→釜山へ、釜山より関釜連絡線で下関に上陸、解散する。

と記している。中学高校の生徒ではないが、大東文化学院の学生も昭和初期に中国への修学旅行を実施している。そのことにより、学生の修学旅行地として中国に行っていたことが事実として確認できる。そして、武田知弘は「当時の日本人にとって、朝鮮、満州は気軽に行ける外国だった。学生やサラリーマンが、貯めた金で満州に旅行するのは、普通のことだった」（武田 2013：147-148 頁）と述べて、満州方面への観光が大衆化していたことを指摘している。

このような近代ツーリズムの発達を背景に中国旅行が容易になるとともに日本では「支那趣味」が流行るようになったといえよう。

(2) 「支那趣味」

本節は西原大輔による研究⁴を中心にして「支那趣味」という語彙について述べるものである。

「支那趣味」とは、西原の言葉を借りれば「大正時代ころから流行した、中国に対する異国趣味」（西原 2003：28 頁）ということになる。この「支那趣味」という語が初めてメディアに登場したのは大正 11 年（1922）年の雑誌『中央公論』1月号である。この中に「支那趣味の研究」として、小杉未醒「唐土雜観」、佐藤功一「私の支那趣味観」、伊藤忠太「住宅から見た支那」、後藤朝太郎「支那文人と文房具」、谷崎潤一郎「支那趣味と云ふこと」が収録された。「支那趣味」という語が誕生したのは日本において西洋化が進んだ大正末であった。西原は「この一九二二年という年を中国近代史から見れば、一九一九年の五四運動を過ぎ、中国共産党が成立した一九二一年よりものち

⁴ 西原大輔，2003『谷崎潤一郎とオリエンタリズム-大正日本の中国幻想』中央公論社

にあたる。大正モダニズムの産物としての「支那趣味」は、昭和を目前にしてようやく出現した、新しい用語なのであると」（西原 2003 : 24-25 頁）と評する。さらに西原は、この大正末に生まれた「支那趣味」という語を広めるきっかけを作り出した者は、「支那趣味」という言葉をさかんに吹聴した張本人は、五人の執筆者ではなく、『中央公論』の編集者だったのではないかと思われる。とくに、編集長の滝田樗陰あたりが、「支那趣味」をしかけた可能性が高い、私は推測している」（西原 2003 : 27 頁）と述べており、メディアが仕掛けた動きであるとしている。

このように西原は「支那趣味」という語の誕生について述べ、まとめとして「支那趣味」について次のように述べている。

家具や料理や旅行で、チャイナ風の異国趣味を味わうモダンな新しい生活、これこそが「支那趣味」であった。中国家具のコレクションにかこまれ、中華料理に舌つづみを打ち、海外旅行で中国を漫遊する。従来 of 漢学者とはまったく異なった、新しい中国文化への接し方が、大正時代末期に生まれつつあったのである。（西原 2003 : 32 頁）

また、中華料理に関して、和歌森太郎は「大正期には和洋の食事のほかに、中華料理を出す専門店が、大都会にはできていた。とくに横浜の南京街にこれを食べに訪れるものが、東京からも出かけるようになった」（和歌森 1986 : 130 頁）と述べており、これも「支那趣味」に関連する大正期の変化の一つであろう。

(3) 洋画家の支那趣味

大正期になると、油彩画の世界に中国服の女性が登場するようになる。この分野で最初に中国服の女性を描いたのは藤島武二である。彼は、大正 4 年（1915 年）に《匂い》というタイトルで、室内に佇んでいる中国服の女性を描いた。藤島武二はその後、大正 13 年（1924 年）に《東洋振り》という横顔の中国服女性を描くと、続けて横顔の中国服女性を描いた。大正 15 年（1926 年）に《芳蕙》、その後、《女の横顔》などを発表するなどし、洋画壇に大きな影響を与えた。

東京美術学校で藤島の同僚であった小林萬吾は大正 14 年（1925 年）に《銀屏の前》を発表すると、翌年に《刺繍》、またその翌年に《花細》と続けて、中国服の女性画を発表する。

児島虎次郎は大正 7 年（1918 年）、大正 10 年（1921 年）、大正 13 年（1924 年）、大正 15 年（1926 年）と 4 回中国を訪ねており、満谷四国郎も大正 12 年（1923 年）から昭和 4 年（1929 年）までに 4 回中国に渡り、それぞれ中国服の男性画や女性画を発表している。

この他に、藤田嗣治や岸田劉生ら多数の画家が中国を題材として、多くの作品を残している。中でも安井曾太郎の《金蓉》は高く評価されており、貝塚健は「1930年代のみならず日本近代を代表する油彩作品として、1934（昭和9）年9月の発表当時から高い評価を受けてきた。薄いピンクの背景に、目の覚めるような藍色のチャイナドレスが映える。絵具を自在に操るのびやかな筆致と、考え抜かれた構図は、長く賞賛され続けてきた」（貝塚2014：9頁）と述べて極めて高く評価をしている。

交通網が整備されツーリズムが発達すると、多くの日本人洋画家たちは中国に渡り、中国や中国服を着た女性を題材として数多くの作品を発表したのである。

(4) 文学者の支那趣味

すでに述べたように、大正期にはツーリズムの発達とともに、多数の洋画家が中国に渡った。しかし、同じ時期に洋画家たちだけではなく、文学者も海を渡って中国の大地を踏みしめていたのである。

谷崎潤一郎は中国をテーマにした文学作品を多数残している。それらは、明治43年（1910年）「麒麟」、大正6年（1917年）「人魚の歎き」、大正7年（1919年）「西湖の月」、大正8年（1920年）「鮫人」等である。そして、谷崎は2回の中国旅行に出かけている。第1回中国旅行は大正7年（1918年）10月から12月にかけて朝鮮・中国を漫遊したのであった。それは、釜山→京城（ソウル）→奉天→北京→漢口→南京→蘇州→上海→杭州→上海→神戸という日程のものであった。西原大輔はこの第1回目の中国旅行について「谷崎潤一郎の「支那趣味」文学に豊富な原材料を提供し、作家の創作意欲を刺激した」（西原2003：144頁）と述べて、この第1回目の中国旅行の意義を強調している。谷崎はその後、大正15年（1926年）1月から2月にかけて再度中国旅行に行っている。日程は長崎→上海→神戸というものであり、前回とは異なり「上海旅行」と言ってよいものである。西原は、「私はこの第二回中国旅行が、谷崎のオリエンタリズムにもとづいた中国観に大きな変更を迫り、「支那趣味」の文学を放棄するにいたらしめた」（西原2003：213頁）と記し、第一回中国旅行との意義の違いを指摘している。

この他に、佐藤春夫は大正7年（1918年）に『中央公論』7月号に「李太白」を発表し、文壇に現れた初期から「支那趣味」に取り組んでいた。芥川龍之介も谷崎に刺激を受けて多くの作品を執筆している。芥川は大正10年（1921年）に『大阪毎日新聞』の特派員として中国に赴き、その経験を「上海游記」「江南游記」「長江游記」などの紀行文としてまとめ、大正14年（1925年）に改造社から『支那游記』として刊行している。また、児童文学として『赤い鳥』に「杜子春」を、大正9年（1920年）に発表するなどしている。木下杢太郎は大正5年（1916年）に、南満医学堂教授兼奉天病院皮膚科部長として赴任し、そこでの体験を詩にする一方、大正10年（1921年）

に『支那伝説集』を出版するなどしている。これらの作家の活動に対し、西原は「このように、一九一〇年代から二〇年代にかけての日本では、作家たちが次々と中国に赴き、「支那趣味」作品を世に送り出していた。しかも、彼ら「支那趣味」の文学者たちは、互いに刺激しあい、ネットワークをつくりながら、文芸創作に打ち込んでいる」（西原 2003：45 頁）と述べ、ある種のグループが存在していたことを述べている。

3. 日本社会における童話の発展

本項では、支那語学習童話テキストを受容する下地となった日本社会における童話について注目し、その発展変化について述べる。

「童話」「児童文学」という子どものための物語は当然のことながら、読者としての「子ども」の存在がなければならぬ。現在では「子ども」という存在は自明のものであるが、「子ども」という存在は決して自明のものではない。近代の西欧により、子どもは大人と異なる属性を持った大人と異なる存在として確立され、「発見」されたものである。

日本では、明治 19 年（1886 年）に出された小学校令により、表面的に「児童」という概念が成立する。しかし、当時の人々に近代的な「児童」観はすぐに生まれなかった。当時の「児童」は、富国強兵を目指し、近代国家としての日本を担うために制度的に生み出された義務教育の対象としての「児童」であった。近代産業を発展させ、日本が近代国家へと生まれ変わるために役立つ学問・教育を子どもに行っていたのである。このような状況の中、教育界からの要請や新興の出版社との結びつきから日本の児童文学は生まれた。

このような明治日本において、外国の物語の翻訳や翻案ではなく、創作された最初の児童文学は、明治 24 年（1891 年）の巖谷小波による「こがね丸」である。これは犬の黄金丸を主人公としており、親を殺された黄金丸による仇討ち物語であった。また、文体も文語体であり、内容も文体も古風なものであったが人びとの人気を得た。これは、子ども向け読み物が少なかったことで人気を博したと考えられる。この巖谷小波により記された子どものための文学は「お伽噺」と呼ばれていた。神宮輝夫は「小波の作品が「童話」とよばれなかったのは、本人が「お伽」を使ったということもあるだろうが、日本の伝承文学の形式内容を濃厚に受け継いでいたから「お伽」という言葉がやはりふさわしく感じられたのだろう。そして、これが明治期では、児童文学の一般名称だったらしい」（神宮 1989：87 頁）と述べている。小波に代表される明治期の児童文学を評して関口安義は「明治期の子ども向けの読み物は、文明開化の近代日本における児童文学の必要という国民的要求に一面で応えていた。が、実質的には発展途上の明治天皇制国家の下での児童文化を担うというイデオロギー的側面が強かった。それゆえ登場人物は、金満家・門閥家の子どもが多く、忠臣孝子の美談や立身

出世が好んで描かれた」(関口 2000 : 32 頁) と言う。

また、巖谷小波の『こがね丸』を日本の近代児童文学史の起点とする意見は多いが、鳥越信は福沢諭吉の『訓蒙窮理図解』を起点とすべきであると提案している⁵。

日本の社会と経済は、大正 3 年 (1914 年) に始まった第一次世界大戦により大きく変化する。日本は連合国側につくと、軍需生産、輸出が拡大し、日本に好景気をもたらした。関口安義はその状況について、「日本は経済的にふくれあがり、近代的な産業が急速に発展した。大戦の始まった年と五年目の終わった年とでは、貿易額は四倍に伸び、それまでの輸入超過が一転して輸出超過となった。国内の生産高は飛躍的に増大し、国民の生活水準も高まった」(関口 2000 : 35 頁) と日本の変化を述べる。豊かになった日本は、諸外国との交流を益々増やし、その結果、民主思想が広まったのである。いわゆる、このデモクラシーの思想は、日本の社会、文化、教育に大きな影響を与えた。関口安義は「特にデモクラシーの思想は、決定的な影響を日本国民に与えることになる。大正期の日本の教育と文化は、このいわゆる大正デモクラシーの時代思潮と大きく関わって進展する」(関口 2000 : 35 頁) と言う。このデモクラシー思想や文化は中産階級とインテリ層の支持を受けた。

大正期は「サラリーマン」という比較的高学歴の事務系の勤め人が時代を代表する社会層となった時期である。彼らは「中産階級」、「新中間層」、「都市中間層」などとも呼ばれ、自己も教養を持ち、子どもにも中等以上の教育を受けさせようとする、経済的余力を持った人びとである。この彼らがデモクラシー思想や文化を支持し、そして、子どもの文化発展を支え、子どもや児童文化の見直しにつなげ、子どもへの認識を進化させたのである。それは、子どもへの認識が明治までの「子どもは富国強兵のための人材」というものから、「子どもには大人と異なる子ども独自の精神生活の領域がある」「純粋で無垢なもの」というように進化し、「子どもの発見」を促した。この「子どもは純粋無垢」という考えは「童心主義」と呼ばれ、子どもを理想化する考えである。これは大正期を支えた子ども観であり、そして、文学理念でもあった。

また、大正期は欧米で起こった児童中心主義的な教育思想が日本に伝わり、子どもの興味や自発性を尊重する「児童中心主義」に立った教育の改革が行われた。それは明治時代から続く画一的教育の排除を主張し、実践するものであり、成城小学校や自由学園、文化学院などの私立学校が創設された。

このような日本社会の動きの中から、大正 7 年 (1918 年) の鈴木三重吉により『赤い鳥』が創刊された。三重吉は創刊号に、「世俗的な下卑た子供の読みものを排除して、子供の純性を保全開発するため」の「一大区画的運動の先駆」というようなモットーを掲げ、多くの文壇作家に賛同を呼びかけた。そうして、新しい童話・童謡の創作を

⁵ 『はじめて学ぶ日本児童文学史』(2001 年、ミネルヴァ書房) 9 頁

目指し、一つの文学運動として展開したのである。鈴木三重吉が目指したものは、従来の学校教育での綴方や唱歌の授業と、今までの児童向け雑誌の通俗性を打ち破ろうとしたものであった。この『赤い鳥』の出現により、『金の船』（1919年）、『おとぎの世界』（1919年）、『こども雑誌』（1919年）、『童話』（1920年）、『櫛の実』（1921年）、『コドモノクニ』（1922年）、『金の鳥』（1922年）、『オヒサマ』（1922年）などの類似雑誌が次々に誕生し、芥川龍之介、有島武郎、千葉省三などの作家が多くの名作を発表した。また、北原白秋や野口雨情などの童謡も発表され、芸術的童話・童謡が一斉に花開いたのである。芥川龍之介を例に挙げると、彼は『赤い鳥』創刊号に「蜘蛛の糸」を発表すると、同誌にその後、「犬と笛」「魔術」「杜子春」「アグニの神」を発表する。ほかの雑誌に「仙人」「白」を掲載した。

このように、大正期の日本は社会が変化し、大正デモクラシーとも関わりながら、子どもが「発見」される。そうして、子どものための文学である童話、児童文学が芥川龍之介などの作家により作られ始めるのであった。このように日本で童話が発展することにより、支那語学習のための「支那童話」による学習テキストも受容されたのであろうと思われる。

4. 大正末期の日本人による支那童話理解

(1) 久保芳太郎「現代支那童話の研究」について

河野孝之は、日本語で書かれた初の近代中国児童文学についての論文は大正 15 年（1926 年）5 月に発行された『支那研究』第 10 号に収められた清水董三による「支那の児童文学に就いて」であると指摘している（河野 2008：72 頁）。

また、河野は清水による論文以前に日本童話研究会の機関誌である『童話研究』に久保芳太郎による「現代支那童話の研究」が収録されていることも述べて、以下の様に評価を下している。「この文章の第 1 回で中国にはいまだ創作童話はないと断定して、もっぱら中国の古典から口演童話としてふさわしいと思えるものはなにがあるかを追究していくと宣言し、もっぱら連載はそのことに言及するだけだったので、近代中国児童文学を論じたものとはいえない。」（河野 2008：72 頁）。このように河野は述べているが、ここには明らかな誤認がある。筆者が久保芳太郎「現代支那童話の研究」第 1 回を確認したところ、久保は「中国にはいまだ創作童話はないと断定」してはいない。たしかに久保は「現代人の創作では未だ殆ど見る可きものがない」（久保 1924a：23）、さらに「要するに真の子供の為の童話といふものが無いのだ」（久保 1924a：24）とは述べているものの、中国にはいまだ創作童話はないと断定してはいない。さらにどこにも「もっぱら中国の古典から口演童話としてふさわしいと思えるものはなにがあるかを追究していくと宣言」という記述は存在しない。久保は「支那は文字の國であるだけに文字に現はれた童話は他の出版物に比して遜色はないが、言葉を通しての

童話といふものは、學校に於ても家庭に於ても未だ殆どない。大道講釋師の大人向き落語講談等を子供も共に聞く位が關の山である。」(久保 1924a : 24) と述べているにすぎないのである。また、「もっぱら連載はそのことに言及するだけだった」と河野は述べるが、久保は「世界何れの國の童話でも、その要素の一として靈魂と云ふものを知る必要がある。殊に支那では文學劇詩にまでもこの靈魂が盛に見受けられる。」(久保 1924a : 24) と述べて、中国童話における「靈魂」を重視し、その上で「鬼」や「神仙」などについて言及しているのであり、河野による久保への評価は改める必要があろう。さらに、久保は当時の中国童話を、①支那固有の昔噺、②現代人の創作、③外國の童話の翻譯と分類し、その出版状況についても「商務印書館からだけでも、童話第一集、第二集、京話童話、伊索寓言、伊索寓言演義等數百冊出版してゐる。次に雑誌には少年雑誌、兒童世界、兒童畫報、小朋友等あり、兒童等の少年新聞もある。その上大人向の雑誌中にも新聞にも童話記事は少なくない。」(久保 1924a : 23 - 24) と記述し、中国での童話の出版状況を簡略ながらも正確に日本の読者に伝えている。久保は、最後の「結び」においても、

初めにも述べた通り揺籃時代にある現代の支那童話は、最初私がペンをとつてから一ヶ年半の間に素晴らしい勢ひで發展して行く。

童話童謡についての出版物も多いが、上海の唐小圃氏の如く童話實演者で、世人の注目をひきかけた者もある。又日刊新聞京報の如きは、我が高木敏雄氏の童話論を馥琴といふ人が譯して連載してゐるし、コリント?の童話研究(原本英語)も翻譯掲載してゐる。とにかく大いに醒めてゐる事は充分察せられる。

一方我が國の人達も支那童話に着眼して、近頃數種の出版物を見るに至つたのは實によるこぼしい事である。(久保 1925 : 37 - 38)

と記しており、このように見えてくると、必ずしも河野が述べるように「近代中国児童文学を論じたものとはいえない」と言えないであろう。また、久保は『童話研究』という日本童話研究会の機関誌に文章を載せているのであり、後述の清水董三「支那の児童文学に就て」が上海・東亜同文書院の論集『支那研究』に掲載された論考であった事と比べると、久保が日本国内に支那童話の現状を伝えた点などは再評価すべきである。

(2) 清水董三「支那の児童文学に就て」

すでに述べたように、河野孝之は大正 15 年(1926 年) 5 月発行の『支那研究』第 10 号に収められた清水董三による「支那の児童文学に就いて」を日本語で書かれた初の近代中国児童文学についての論文であると指摘し、大変高く評価している。ここで

「日本語で」と述べている理由は、河野自身が論考中で述べているが、『支那研究』の発行が上海の東亜同文書院であるということである。河野によると、清水董三は 1893 年に生まれ、1970 年に他界した。東亜同文書院を卒業後、母校の教員となり、『支那研究』の発行人でもあった。後、外務省で働くようになり、『新支那の断片』（禹域学会、1929 年）、『赤い中国-その歴史と政策』（明德出版社、1955 年）といった著作があるという。清水が児童文学について書くことになった理由は不明であるとしつつも、「中国社会の情勢分析の一環としてレポートしようとしたのかもしれない。」（河野 2008 : 73）と述べている。

河野は清水が商務印書館と中華書局についてレポートしている点から、

両者の叢書リストやそれぞれが刊行していた雑誌の「児童世界」（商務印書館）、「小朋友」（中華書局）の名前を挙げていて当時の中国児童出版界の状況を正確に受け取っていたことがわかるし、一外国人である眼から見ても児童書の世界では商務印書館と中華書局の存在は目立ったものであったことを証言する貴重なものともいえる。また当時発行されていた単行本や教科書からジャンル紹介もかねて一部引用、対訳しているのも参考になる。（河野 2008 : 73-74 頁）

と述べて大変評価しており、より久保との評価の差が際立っている。

次に、清水による「支那児童文学に就て」における童話に関する個所を中心として報告を行う。

清水は、中華民国では民国 7、8 年頃から白話文学が盛んに叫ばれるようになり、それが民国 10 年前後には平民文学、民衆文学と変わり、また、児童文学の研究も流行してしている状況を報告している。その事例として、商務印書館の「児童文学概論」が単行本として刊行された事などを挙げている。そうして、「少くも今日の文壇或は教育界に於て児童文学なるものは相当重要な地位を占めてゐると云ひ得る」（清水 1926 : 99 頁）と民国の情勢を分析し、民国で童話が流行している理由について「殊に日本あたりで近年頻りに童謡童話が流行つたことなども陰に陽に大なる刺戟を與へてゐるだらう」（清水 1926 : 99）としている。

商務印書館と中華書局を最も勢力を持つ 2 大出版社であり、互いに児童文学叢書を発行しているとし、商務印書館は嚴既澄氏が中華書局は黎錦暉氏などが編纂に携わっていると報告する。この他に、商務印書館の児童文学読本と雑誌『児童世界』、中華書局の雑誌『小朋友』が有名であるとする。

また、商務印書館、上海群益書社、中華書局などから「童話」として出版されたものの多くが世界各国の童話を翻訳したものであることを歎き、純粹の「支那童話」を待ち望んでいる姿が見て取れる。上海崇文書局『中國童話集』、中華書局『中華童話』

といった具体的な叢書名を挙げながら、これらが伝説や歴史故事といった類のものであることを伝える。

清水は上海の東亜同文書院の教員であったからか、上海で発行された童話集などに触れる機会が多かったのであろう、具体的な書名がいくつも述べられている。上海ではあるが、日本人により日本語でこのように的確に中華民国の童話情勢は把握され報告されていた。

(3) 日本人の支那童話把握状況

久保芳太郎は清水董三に先立つこと2年余り、中華民国には中華民国の特徴を持つ童話が存在するが、時勢からか外国童話の翻訳が多いと指摘し、商務印書館の名前を挙げるなどしつつ、「児童世界」「小朋友」などの児童雑誌の書名を記述して、日本に紹介している。清水は新文化運動の影響から1919年ごろには白話文学、童話というのが中華民国文壇や教育界で盛んになってきている状況を適切に分析している。また、商務印書館などの具体的な出版社名や中華書局「中華童話」シリーズなどの叢書名などを挙げて、同時代の日本人が中華民国の童話をめぐる動きや教育状況を高いレベルで認識し、把握していたことも認められる。このように、中華民国で起こっていた童話への関心の高まりと動向は同時代の日本人に注目されており、商務印書館や中華書局を中心として、その研究書や『児童世界』『小朋友』などの児童文学雑誌の出版状況を日本人は理解していたのである。

5. おわりに

このように、大正期の日本は第一次世界大戦の影響で好景気となり、それまでの債務国から債権国へと転じた。それとともに国民の生活水準も飛躍的に高まり、様々な大衆文化の発展を促したのであった。このような状況の下でツーリズムが発達し、日本から多くの人が中国大陸に渡ったのである。多数の洋画家は中国を題材として多くの作品を発表し、谷崎潤一郎や芥川龍之介などの文学者は中国をテーマにした文学作品を多数残している。このような動きは「支那趣味」と呼ばれた、大正時代の流行の1つである。

また、デモクラシー思想の影響から子どもへの認識が改められ、子どものための文学である童話が芥川龍之介などの作家により執筆されるようになった。子ども観が変化し、日本で童話が発展したのである。

このような大正期の社会的状況が、支那笑話・支那童話による支那語学習テキストを受容した大きな理由の1つであろうと思われる。

第3章 中華民国における童話発展の背景

第2章において、大正期の日本で支那笑話・支那童話による支那語学習テキストが発行され、かつ、受容された理由を、当時の社会状況から検討を加えた。

本章では大正期の日本で支那笑話・支那童話による支那語学習テキストが発行された理由を、当時の中華民国の社会的状況と、童話が注目されて『児童世界』や『小朋友』などの童話専門誌が刊行されるほどに中華民国の童話が発展した事実から探る。

1. 中華民国の状況

本節では、辛亥革命後の中華民国の動きに注目、叙述を行う。とりわけ、新文化運動における文学革命に注目し、中華民国において童話が発展する下地となったものと位置づける

(1) 辛亥革命

1911年10月10日、武昌蜂起が起こる。これは張之洞が創設した湖北新軍の5000人をその背景としたものである。新軍の工兵隊がまず決起し、つづいて歩兵大隊などが続けて決起する。すると、一夜のうちに武昌を占領した蜂起軍は、12日には武昌、漢口、漢陽の武漢三鎮を制圧し、湖北軍新政府を樹立した。新軍の旅団長である黎元洪が都督に任命されたのだが、彼は本来革命思想の持ち主ではなく、無理に押し上げられ都督になったのであった。

武昌蜂起後、湖南・山西・広東など多くの省が清朝からの離脱を宣言し、清朝の統治は瓦解する。革命軍は12月に南京を占領すると、各省から集まった代表は孫文を臨時大総統に、また黎元洪を副総統に選出し、1912年1月1日に中華民国臨時政府を樹立した。

この間、清朝は袁世凱を欽差大臣に任命し、陸海軍の全指揮権を与え、さらに総理大臣に任命した。袁世凱はイギリスなどの支持を受けると、革命派に対して武力鎮圧を進めるとともに、清政府には和議を受け入れさせようとした。その結果、孫文は清帝の退位と共和制の実現、南京を首都とすることなどを条件に袁世凱を臨時大総統にすることに同意する。袁世凱は清朝帝室の優待条件を提起し、宣統帝に退位を迫ると、1912年2月12日宣統帝はこれを受け入れて退位した。辛亥革命が成功し、中華民国元年となる。3月に袁世凱は北京で中華民国臨時大総統に就任し、孫文は正式にその職務を解かれ、臨時政府は北京に移った。

(2) 袁世凱の独裁と第二革命

1912年8月、国民党が革命派を中心として成立し、理事長は孫文であったが、実際の指導者は宋教仁であった。国民党は国会選挙を経て、内閣を組織し、独裁を強める

袁世凱の権力を制限しようとした。そして選挙の結果、国民党は第一党となる。袁世凱は手段を選ばず、最大のライバルであった宋教仁を 1913 年 3 月に暗殺した。ついで、袁世凱は議会を無視し、五カ国借款団から 2500 万ポンドの善後大借款を結び、自己の財政的基盤を整える。さらに袁世凱は攻勢を強め、国民党系の江西、広東、安徽を罷免する。追いつめられた国民党側はやむなく武力抗争に立ち上がり、南方の数省が反袁の兵を起す。これが第二革命であるが、辛亥革命のような革命勢力の結集はみられずに次々に破れ、孫文や黄興らの指導者は海外に亡命した。袁世凱の勢力はさらに強いものになった。

他方、清朝の崩壊により工商業発展の条件が生まれた。中村義は次のようにその状況を述べている。

上海・天津・漢口等の大都市が中心であるが、紡績・製粉・生糸業等が次々と設立され、また諸鉱業の開発も進んだ。貿易面でも、一九一一年から第一次世界大戦を通じ、輸出額は伸長した。こうした商工業の成長を背景に、各地に商工業資本家の組織として、さまざまな実業協会が誕生し、社会的勢力となった。袁世凱政権も一面ではこうした資本主義的発展に依拠しつつ成立していった。(中村 1996 : 53-54 頁)

辛亥革命後の政治的混乱はまったく収まる気配はないのだが、中村義が述べるように、経済的側面に注目すると、中華民国経済は徐々に発展していったのであった。

(3) 第一次世界大戦と二十一カ条の要求

袁世凱はその後、1913 年 10 月に正式大総統に就任し、翌 1914 年 5 月には臨時約法にかえて、あらゆる権力を大総統に集中させる新憲法を制定する。

1914 年 7 月、第一次世界大戦が勃発した。西欧列強が欧州戦線に力を傾けている間に、日本はドイツの山東省の租借地を奪うため、7 月 23 日にドイツに対し宣戦布告をした。そして、11 月には青島を陥落させるなどし、山東省の各地を占領する。こうして日本は中国に対して軍事的圧力を高めた。1915 年 1 月 18 日、日本は中国に対し「二十一カ条の要求」を行った。なかでも、7 カ条からなる第五項目が中国人のもっとも激しい憤りを招いた部分である。日本はその後、第五項目を撤回し、最後通牒をつきつけた。5 月 9 日、袁世凱の中国政府は日本の要求を受け入れた。

袁世凱はその後、8 月ごろから自己が皇帝となるための帝制運動を本格化させた。ちなみに、この帝制運動が進められていた 9 月に上海で陳獨秀の『青年雑誌』が創刊された。袁世凱は 1915 年末に中華民国を「中華帝国」とし、1916 年元旦に皇帝となることを準備し、「洪憲」を年号ときめたのであった。

1915 年末、袁世凱の帝制復活に反対し、雲南は独立を宣言すると、護国軍を組織した。こうして共和制樹立のための第三革命が始まった。1916 年 1 月末には貴州、3 月には広西が独立を宣言すると、各省は次々と独立を宣言した。5 月までに 10 省がこれに呼応したのである。袁世凱は 3 月 22 日に帝制を取り消しを宣言し、そして 6 月 6 日に病死した。

(4) 民族産業の発展

すでに述べたように、第一次世界大戦が勃発したために、西欧列強は欧州戦線に注力しなければならなかった。そのために、列強からの中国に対する輸出が減少したのである。それまでの中国は、半植民地的条件のために列強の資本が力を揮い、中国独自の資本による近代産業発展の余地は少なかった。しかし、第一次世界大戦が起ると、欧米列強は戦争遂行に力を注ぐ必要から、中国での植民地経営は後回しにならざるを得なかった。この間隙をぬって中国の民族資本は大いに成長したのである。『中国近現代史』では、「紡績、製粉、マッチ、タバコ、石鹼などの軽工業を中心に、民族産業が急速に発展した。民族資本の投資総額は一九一四年から一九年の六年間で二倍近くに増え、工場の新設が相次いだ」（丸山 1986 : 84 - 85 頁）という。このように民族資本が発展する状況のもと、労働者階級と知識人層という新しい社会階層が誕生し、彼らを基盤として「新文化運動」が起こり、そして、五・四運動へとつながっていく。

(5) 新文化運動

五・四運動は突然中国史に現れるわけではない。そのための前史的なものに「新文化運動」と呼ばれるものがある。この運動は、思想革命と文学革命の 2 つの柱があり、陳獨秀が編集主任を務め、1915 年 9 月 5 日に上海で創刊された『青年雑誌』（第 2 巻より『新青年』に改称）を中心として広まった。この雑誌は多くの知識人に衝撃を与え、新しい思想を中国社会に吹き込む役割を果たした。その合言葉は「デモクラシーとサイエンス」（＝民主と科学）であり、この雑誌には後の中国思想界をリードした李大釗、胡適、魯迅等が集まっていた。横山宏章は思想革命について『中華民国 - 賢人支配の善政主義』（1997 年、中央公論社）において、

新文化運動の構造を三段論法で簡単に説明すれば、次の通りである。

- (1) 伝統的な中国社会を新しい近代社会に変えるには、政治変革だけでは不十分で、政治変革を支える国民の意識を根本から変革しなければならない【思想革命】。
- (2) ところが中国の国民意識は皇帝専制の都合のよい伝統的孔教（儒教）思想に毒され、近代社会創出に必要な独立した個人の主体性が確立されていな

い【孔教の打倒】。

(3) そこで国民意識を儒教的束縛から解放するために「デモクラシーとサイエンス」に基づく西欧啓蒙思想を導入し、その個人主義的民主思想によって中国の封建的思想を打破しなければならない【啓蒙思想の導入】。

言い換えれば、儒教的秩序・価値観によって喪失されている一人一人の人間性を、個人と人権尊重の西欧思想によって取り戻そうとするヒューマニズム革命でもあった。別の言葉でいえば「人間が人間を食べる儒教」からの人間の救済であった。だから、この時の主役は啓蒙思想家としてのモンテスキューであり、ロックであり、ルソーであった。その西欧思想を武器に儒教支配へ思想攻撃を仕掛けたのである。(横山 1997 : 94 頁)

と述べ、思想革命をわかりやすく説明している。

また、新文化運動のもう 1 つの柱である文学革命は胡適により狼煙をあげられた。これは、文語文を廃止し、口語文で文章を書こうという主張である。胡適は「文学改良芻議」において、形式化した古くさい文語で文学を書くのをやめ、豊かな思想を口語文で自己を表現しようと、主張した。この胡適の考えは横山により以下のようにまとめられている。

思想革命が目指す個人の革命を実現するためには、何よりも生きた人間の出現が必要である。ところが、中国では死んだ言葉である文語文が文学の主流である。この死んだ文語文を打破するために、庶民の生活を生き活きと伝えられる白話(俗話＝口語文)による文学を確立しなければならないと主張した。これが文学革命の内容であった。(横山 1997 : 97 頁)

そして、この文学革命についてさらに横山は、次のように述べる。

文学革命は言葉の革命だけでなく、文化総体の革命であり、文化を支える社会総体の革命を目指す社会運動でもあった。～(中略)～当時の大衆の多くは文字が読めなかった。国民意識の改革にとって大切なことは、多くの国民が文字を読むことができるようになる国民教育が必要であったが、同時に少しだけ読めても、文語文を読みこなすこと至難の業であった。だから陳獨秀らの思想革命にとっても、この文学革命は欠かすことのできないものであった。当時の情報は文字で書かれていたため、大衆が文字を読めないということは、大衆が情報から疎外されていたということである。知識人が権威を確立していたのは、文語文に固執することで、そうした情報を独占していたからである。(横山 1997 : 97-98 頁)

この文学革命運動の中から中国の近代文学は魯迅により生まれた。魯迅は「狂人日記」「孔乙己」などの口語小説を発表し、中国旧社会の暗黒と悲惨を描き出した。本庄比佐子は「狂人日記」を評し、「儒教批判と口語による新しい文学の創作という新文化運動の理念が、一つの作品に結実したのであった」と述べる（本庄 1981：68 頁）。

このような運動は、蔡元培による北京大学の改革により広められた。1917 年 1 月、北京大学の学長に就任した蔡元培はそれまでの、官僚として出世する資格を取りさえすればよく、学生も教授も学問研究にほとんど関心を示さなかった北京大学の学風、を改めるべく北京大学の改革に乗り出し、優秀な人材を招いたのである。陳獨秀は文科学長に抜擢され、胡適は哲学科の教授となるなど、『新青年』の主要メンバーはほとんど北京大学に集まり、北京大学が新文化運動の中心となった。そして、この一連の運動が 1919 年の五・四運動へと進んでいったのである。

(6) パリ講和会議と五・四運動

1919 年 1 月 18 日、パリ講和会議が始まった。イギリス、アメリカ、フランス、イタリア、日本などの戦勝国の首脳が集まり、中国も戦勝国として代表団を送った。中国代表は山東の主権回復、ドイツ権益の返還、「二十一カ条」条約の取り消しを求めたが、結局中国代表の要求は拒絶された。中国の主張が認められなかったというニュースが 1919 年 5 月 1 日に北京へ伝わると、北京大学などの学生 3000 人以上が集まってデモを行った。彼らは「二十一カ条を取り消せ」「青島を返せ」「売国奴を懲罰せよ」と書いた小旗を振りながら北京市内を行進した。デモ隊はその後、親日政策の中心的推進者であった曹汝霖宅へ押しかけ、火を放ち、さらにその場に居た駐日公使の章宗祥を殴打した。この事件で警察に学生 32 人が逮捕される結果となり、これを「五・四運動」という。

翌日以降、学生たちは一斉ストライキを行い、また逮捕された学生の釈放を要求し、日本商品のボイコットなどを訴えた。反日運動鎮圧令を出してきた中国政府はついに 6 月 3 日、多くの学生を逮捕した。この「六・三事件」以後の学生大量逮捕は全国の人々に大きな衝撃を与えた。上海では労働者のストライキ（罷工）が決行され、商店も閉店スト（罷市）を行い、すでにスト（罷課）に入っていた学生も合わせて「三罷闘争」が始まった。この「三罷闘争」に対して、内田知行は「異なる三つの社会階層による同時スト（三罷闘争）の発生は、近代中国の大衆運動史においては画期的な形態であった」（内田 2002：146 頁）と評価している。この三罷闘争は上海だけではなく、南京、天津、漢口などの全国各都市に飛び火した。6 月 10 日、政府は民衆の要求に屈服し、曹汝霖、章宗祥、陸宗輿 3 人の親日派高官を罷免した。さらに、民衆の要求に従い中国代表団は 6 月 28 日のベルサイユ条約の調印を拒否したのである。五・四運動

を発端とする民衆運動は政府を動かし、ほぼ完全な勝利を収めたと言える。

この五・四運動の意義として、丸山松幸は『中国近現代史』（1986年、岩波書店）において3つの点を挙げている。それは第1に「大規模な民衆運動として進められたこと」、第2に「労働者階級がはじめて政治の舞台に登場したこと」、第3に「反帝国主義・反封建主義」という中国革命の課題が明確になったこと」である（丸山 1986：91-93頁）。中でも、第2点は大きな意味を持つと考えられる。孫文は文字も読めない労働者は中国を変革する知力と組織力はないと見なし、変革対象外として見ていた。だが、労働者は第一次世界大戦の影響による中国資本主義の発展とともにその数を増やし、外部からの影響を受けて変質し、その政治的力量を増大させたのである。横山宏章は、

量的拡大が質的拡大へ転化するには外からの契機が必要である。その契機は三点あった。一つは、第一次世界大戦が火をつけたナショナリズムの高揚である。民族的自覚であり、反帝国主義の民族運動である。二つは、新文化運動が進めた思想革命の影響である。それは文字の読めない労働者に文字を与え、人間としての自覚を植えつけていった。三つ目は、ロシア革命による労働者解放を唱えるマルクス主義の伝播である。新文化運動で思想的な自覚の素地が生まれた中国に、強烈な救済思想としてのマルクス主義が現れることで、労働者は急速に団結を始めたのである。（横山 1997：104頁）

と3つの点を挙げて、労働者が質的拡大を遂げた理由を説明している。ここで横山が述べるように、五・四運動はマルクス主義の伝播を促進し、1921年の中国共産党結成へとつながったのである。

このように、一連の中国社会の変化は、とくに第一次世界大戦と「新文化運動」により中国社会に大きな変化をもたらされたといえよう。この新文化運動の中に中国での童話の発達が見られることは自ずから明らかである。岡本正文から始まり、矢野藤助、米田祐太郎と続く昔話や童話を中国語教育に役立てようとした支那語学者の動きは、最新の中国事情を知るとともに、その変化を感じ取り、教材として活用しながらすこしでも早く日本に伝え、紹介していたのである。当時の支那語学者は最新の中国事情を伝える、「伝播者」の役目を果たしていたのであると指摘できよう。

2. 民国における童話の発展

本節では大正期の日本で支那笑話・支那童話による支那語学習テキストが発行された理由を、当時の中華民国の国語教育と、また、中華民国で『児童世界』や『小朋友』などの童話専門誌が刊行されうるほどに童話が発展したという事実からさぐる。

(1) 中華民国の児童文学雑誌

中国の児童文学の始まりはいつなのか、という問題に関し、中由美子は本来は大人向けであるが「子どもたちのもの」になっている『西遊記』なども児童文学だと主張し、「中国には昔から児童文学があった」として『西遊記』などを「古代童話」と呼ぶ者がいることを指摘しているが、自著の中で以下のように述べている。

私は、中国に児童文学と呼べるものが現われたのは、一九一七年に始まった「文学革命」によって、口語で文章を書くことが提唱され、封建主義的な子ども観がこわれてからだと考える。この「文学革命」が「新文化運動」と呼ばれる思想革新運動へと発展し、一九年のいわゆる「五四運動」へとつながっていく。(中 2006 : 12 頁)

成實朋子も「中国における本格的な近代児童文学の開始の時期を定めようとするならば、やはりそれは五四時期（一九一九年～）とするのが妥当である」（成實 2014 : 47 頁）と述べているが、成實は同論文において上記のように記した直後に、さらに続けて

しかしその前提となる公教育の普及や近代的児童観の確立という点から言えば、その萌芽は、既に清末から見る事ができる。その上で改めて中国の近代児童文学の開始をいつに定めるかといえば、本稿においては、ひとまずは一九〇四年一月十三日に公布された癸卯学制を一つの目途としたい。なぜならば、これは中国で最初に発布された学制であり、これを境に中国において初等教育の普及が目指されることとなったからである。これは即ちこの時点で中国において、児童文学の対象読者たる「児童」が見出されたということを意味する。学制に応じた教科書の出版が行われるようになるにつれて、教育目的のものが主流ではあったが、子ども向けの出版物もまた数多く出版されるようになり、それが児童文学の創作へと繋がって行ったのである。(成實 2014 : 47 頁)

と記している。同論文中においては、中国の近代児童文学の初めを挑戦的にあえて「癸卯学制」に求める。中国の近代児童文学の始まりを成實はこのように述べながらも、「中国の児童文学が現実の子どもを対象として出発するのは、一九二二年の新学制公布以降のことなのである。(成實 1998 : 121 頁)」とも述べており、成實は中国の近代児童文学の始まりを「癸卯学制」に求め、そして、現実的な始まりを 1922 年の「壬戌学制」とするのである。中国の児童文学は教育との関わりが深く、とくに国語教育の発展と関係が深い。

近代的学校制度が整えられると、子どもは小学生として小学校に通うことになる。つまり、社会が子どもの存在を認識することになる。当然のことながら、童話、児童文学というものは、子どもを対象としたものである。つまり、当該社会において「子ども」という存在が認識されなければ童話、児童文学というものは存在できない。だからこそ、近代的学校制度が整えられ、子どもの存在が社会に認められるようになることは非常に重要なことである。

1912年に公布された壬子学制と呼ばれる学制は、学校大系や制度、内容を日本のものを参考としたものであった。だが、この学制は1922年に改定され、壬戌学制となる。壬戌学制はアメリカに習ったものであり、初級小学4年、高級小学2年、初級・高級中学各3年、大学4～6年を修業年限として定めた。これに先立ち国語統一準備会は1920年に北京音普及のために、小学校の国文科を国語科に変更し、白話文を教科書に採用するように提議している。これにより国語科の名称が「国文科」から白話を意味する「国語科」となった。この変更に関して藤井省三は、「国文科から国語科への科名変更は単に記述文体の交替を意味するものにとどまらない。文言文の国文科が儒教イデオロギーを担うもにであったのに対し、口語文の国語科は民国＝共和国のイデオロギーを担うものとして新たに登場してきたのである」（藤井1992：51-52頁）と述べて、中華民国が旧中国との決別を意識して国語科と名称変更したことの意義を指摘している。

このように、「国語科」への変更に見る中国の国語教育の発展と、中国における児童文学の発展は無関係ではなく、白話運動が進む中で子どもを対象とする読み物が絶対的に不足していることが理解され、その必要性が人々に認識されたのである。このような状況について成實は、

当時中国では、児童に関する認識は改められつつあったとともに、未熟で、簡単な内容の文学が子どもの文学なのではなく、子どもに対してはその発達に応じた相応の作品が必要なのであるという考えが、ようやく文学者や教育者の間に受け入れられつつあったのである。

「児童世界」は、そうした文学界や教育界の期待を受けて生まれた雑誌であった。（成實1998：124頁）

と叙述し、「児童世界」を評価して、以下のように大西と成實は述べる。

児童読み物の問題は、国語教育、特に白話（口語）運動と深く絡み合いながら、その必要性がようやく知識人に認識されはじめ、児童のための専門雑誌が次々に発刊されるに至ったのである。「児童世界」誌はそのさきがけとなった雑誌であり、

特に中国に創作児童文学という分野を導き入れた功績は大変に大きいと言える。

(大西・成實 1998 : 1 頁)

以下では、『児童世界』の概要と、『児童世界』とライバル関係にあった『小朋友』の概要を記述し、童話雑誌刊行に見る中華民国の童話発展の姿を明らかにする。

(2) 『児童世界』について

本節では成實朋子 1998、浅野法子 2007、三宅美穂 2009 諸氏による各論文を中心に論述を進める。

『児童世界』は 1922 年 1 月、上海・商務印書館より創刊された週刊児童雑誌であり、創刊から 1 年間は鄭振鐸が主編を努めた。

鄭振鐸は 1917 年に北京鐵路管理学校に入学し、1921 年に卒業する。1921 年 1 月に成立した文学研究会の中心メンバーとして会の運営に携わり、作家、詩人であり、また当時を代表する文学史家、編集者でもあった。茅盾の紹介で上海・商務印書館に就職すると、『時事新報・学灯』の主編をつとめ、また孫毓修の「童話」シリーズの編集にも携わっている。1923 年に『児童世界』の主編から、『小説月報』の主編へとなるが、編集者の 1 人として『児童世界』に関わり、童話等を数編寄稿している。

『児童世界』創刊前に『時事新報・学灯』において「児童世界宣言」を発表している。この宣言において鄭振鐸は以前の詰め込み式の教育に強い問題意識を持ち、また小学校教育が依然として子どもの興味を引き出せていない現状に不満を持っていることがわかる。浅野は、

『児童世界』創刊前に発表されたこの宣言には、それまでの教育観や児童観に対する強い問題意識が記されている。「詰め込み式」の教育一児童の自主性を引き出せていないこれまでの現状を憂い、新たに児童雑誌を創刊するという鄭振鐸のこの姿勢は、当時わが国において、それまでの「功利とセンセーショナルな刺戟と変な哀傷とに満ちた下品」な子どもの読み物を否定し、『赤い鳥』創刊に至った鈴木三重吉の姿と重なる。(浅野 2007 : 222 頁)

と述べて、鄭振鐸と鈴木三重吉とに言及している。

『児童世界』の執筆者には文学研究会のメンバーであり、『小説月報』の執筆者でもある、茅盾、葉紹鈞、許地山、などがおり、多くの作家が『児童世界』と『小説月報』両誌に関わっている。このことに関し、成實は「文学研究会の同人も多く、この雑誌が同会のバックアップを大きく受けていたことがわかる」(成實 1998 : 125 頁)と述べている。

『児童世界』に対しての、成實朋子 1998、浅野法子 2007、三宅美穂 2009 諸氏の評価を以下に記すことにより、『児童世界』がどのような雑誌であり、いかなる価値を有していたかの説明とする。

成實朋子は、

「児童世界」は、文学的内容と、視覚、聴覚、との三点がうまく融合した、立体性をもった雑誌であった。むろん文学性、教育性、娯楽性、実用性といったいくぶん過多な役割を一誌に求めたがゆえの雑多性があったことは否めない。しかし近代中国児童文学の黎明期にあり、児童の読む物の絶対数が限られていた現状の中で、「児童世界」が果たした役割はやはり大きいと言わざるを得ず、ここで作られた児童雑誌のスタイルが一つの雛形となり、現在の中国の児童雑誌にまで連綿と受けつがれていく伝統的なものとなったのである。(成實 1998 : 134 - 135 頁)

と述べる。

浅野法子は、

中国国内外の作品を独自の編集方針によって同誌に掲載した鄭振鐸のアンテナの鋭さと、多種多様な題材を児童雑誌というひとつの土台にもりこむ編集者としての力量がみられた。また、今回、子ども読者の投稿作品にはふれなかったが、鄭振鐸は児童の原稿、自由画の投稿条件としておとなの手が入っていない、子どもの自主性を育む方針を打ちだしたことは特筆すべきであろう。『児童世界』は、上海という世界の窓口であり、租界地のひしめきあう地で創刊された時代の産物であったともいえる。茅盾が「ごった煮」と評した同誌は世界に目をむけると同時に、自国の子どもたちにふさわしい独自の子どもの読みものを目指して刊行された。(浅野 2007 : 239 頁)

と述べる。

三宅美穂は

『児童世界』創刊期は鄭振鐸の考えにより海外の児童文学作品を積極的に取り入れただけでなく、中国の独自性も同時に追究していった。そのため、多種多様な題材が雑誌に盛り込まれたものの、その質には良し悪しがあった。ただ、このような積極的な態度は子どもたちのことを真摯に考え、子どもたちが必要とするものを提供したいという鄭振鐸の思いが色濃く現れた結果であると考えられる。(三宅 2009 : 427 頁)

と述べる。

(3) 『小朋友』について

本項は三宅美穂 2009 による論文を中心に記述を進める。

『小朋友』は上海・中華書局により 1922 年 4 月から刊行され、『児童世界』と同サイズであった。価格は 1 冊 6 分で、日本への郵送料は中国国内と同料金であり、『児童世界』と価格設定は同じである。

創刊当初の編者は黎錦暉であった。彼は中国の現代劇作家、音楽家であり、その兄は言語学者で文学者の黎錦熙である。長沙師範学校卒業後、音楽教員などを経て後、1920 年中華書局で国語教科書の編集にたずさわる。後、1927 年まで『小朋友』の編集をつとめた。彼は中国の児童歌舞の創始者であり、自身も『小朋友』に多くの作品を投稿している。黎錦暉は歌や脚本のほかにも中国の民間伝説の再話にも力を注いだ。三宅によると、

その内容は海外の児童文学作品を積極的に取り入れていった『児童世界』と比べて、創刊当初より創作面の重視してきた傾向がある。中でも故事や兒歌に見られる中国特有の作品を数多く取り入れていたことは、より中国独自の作品を子どもたちへ提供したいという編集者側の考えがうかがえる。また、創刊後半年経ってから海外の作品を翻訳翻案したものも見受けられるようになり、決して海外の作品を軽視していたわけではないことがわかる。ただ、その作品も西洋のものが中心であり、当時の中国ではやはり西洋に関する関心が高かったと思われる。実際の翻訳翻案作業に関しては、『小朋友』では原作にほぼ忠実であるが、多少の付け加えが見受けられる。単に翻訳するだけでなく、子どもの視点に立って翻訳作業を行おうという姿勢を持っていたのではないだろうか。多様な文化が渦巻く上海の地で、その風潮に流されず、中国の独自性を追及していったその姿勢は評価に値する。しかし、通俗的で多少味気ないものになってしまった点は否めない。

(三宅 2009 : 440 - 441 頁)

という評価である。

『児童世界』と『小朋友』は互いに 1922 年に創刊され、よきライバル関係として中国童話の発展に多大な貢献をしたことは間違いない事実である。このような童話雑誌が創刊され中華民国の童話が発展したことにより、日本の支那語学者がそれを語学学習教材として「発見」したのであった。

第4章 中国語教育史から見る支那笑話・支那童話テキスト誕生について

本章では、明治から大正末期までの中国語教育史を紐解き、その歴史的流れから大正末期に支那笑話・支那童話による支那語学習テキストが作り出された理由について考察を加える。

1. 北京官話教育

明治政府は明治3年(1870年)に、清国との日清修好条規締結のための予備交渉を行った。そして、明治4年(1871年)に明治政府と清国政府は日清修好条規を締結し、明治6年(1873年)に批准書交換がなされ、日清修好条規は発効した。

この日清修好条規は日本および中国にとって、近代で初めて締結された外国との対等な条約であり、この日清修好条規の締結により両国は正式に国交を開いた。外務省はこのような清国政府との外交交渉上必要なことから、明治4年(1871年)「漢語学所」を開設し、中国語教育を行ったのである。

漢語学所では江戸時代の長崎唐通事出身者が教師の多くを勤め、また、生徒もその大部分が唐通事の子弟であった。ここでは南京語教育が施され、教科書も教育方法も唐通事時代と同じであった。

漢語学所はその後文部省の所管となり、明治6年(1873年)に洋語学所や開成学校、独逸学教場等と合併して、「東京外国語学校」となる。つまり、漢語学所は東京外国語学校漢語科となるのである。なお、この東京外国語学校は「旧外語」と呼ばれ、現在の東京外国語大学の前身である東京外国語学校とは区別される。

明治7年(1874年)、第二代清国駐在公使柳原前光が清国の都、北京へ赴任する。また、この明治7年(1874年)に明治政府は近代日本最初の対外出兵であった台湾への出兵をし、この問題を解決するために清国政府との交渉を行った。このような清国との外交交渉において、北京官話の通訳者が必要となったのだが、すでに述べたようにそれまでの日本では南京語教育がなされており、東京外国語学校に北京官話を学んだ学生はいなかった。そのために北京在住の日本人を北京官話の通訳者として採用した。上記のような外交上の必要から北京官話の教育が必要とされ、明治9年(1876年)、東京外国語学校漢語科はそれまでの南京語教育から北京語教育への転換を図った。これ以降、日本で「中国語」と呼ぶものは北京語を指すようになるのである。

2. 支那語教育機関

本節では、中国語が支那語と呼ばれた時代の中心的語学教育機関であった善隣書院と東京外国語学校について述べる。それは、善隣書院は支那語時代の民間における代

表的中国語学習・教育機関であり、東京外国語学校は官立学校として中国語学習・教育の中心地だったからである。

善隣書院は明治 28 年（1895 年）、宮島大八により東京麹町平河町の私宅で開かれた漢学と中国語を教授する私塾、詠帰舎からはじまった。詠帰舎は入塾者も増えた上に、宮島大八が詠帰舎を漢学と中国語の本格的教育を行う塾とすることを決意したことから、善隣書院と名を改め、明治 31 年（1898 年）6 月に麹町平河町 4 丁目に移転した。宮島大八は儒教思想を善隣書院の教育の根底に据え、漢学と中国語を教育した。これは帝国大学の漢学とは異なり、在野的なものであった。宮島大八は帝国大学の講師となったほかに、東京外国語学校の講師としても活躍した。この当時、中国語を学べる場所は主に善隣書院と東京外国語学校であるが、六角は「東京外国語学校よりは、むしろ善隣書院のほうが中核的存在であった」（六角 1975：70 頁）と述べている。東京外国語大学の第一期生であり、初の日本人教授となった岡本正文が宮島大八の教え子の 1 人であったことから理解できよう。六角はさらにどうして善隣書院が中国語教育の中心となったかについて、「善隣書院は、1945 年（昭和 20 年）までの時期に、日本の中国語教育の中心となる立場にたった。それは宮島大八のような権威ある学識をそなえた中国語教師が他に少なかったこともあるが、この善隣書院から中国語の教科書『官話急就篇』が刊行されたことにもよる」（六角 1975：70 頁）と記し、『官話急就篇』の存在が善隣書院を中国語教育の中心地としたと分析している。

明治 6 年（1873 年）に設立され、明治 18 年（1885 年）に廃校となった東京外国語学校（旧外語）の後には外国語を専門に教育する官立学校は長い期間存在しなかった。だが、日清戦争後の日本が外交面でも商工業面でも海外へ進出するようになり、社会的に外国語に通じた人材を養成する必要性が生まれたことから東京外国語学校（新外語）が設立されることになった。明治 28 年（1895 年）12 月から開かれた第 9 回帝国議会で近衛文麿らが外国語学校設立の建議を貴族院と衆議院に提出し、この建議が採択されたのである。この所謂新外語が現在の東京外国語大学の前身である。最初は高等商業学校附属外国語学校として明治 30 年（1897 年）4 月に開校したのだが、明治 32 年（1899 年）4 月に高等商業学校の附属を離れ東京外国語学校となった。正科と別科が存在し、正科が 3 年、特別科が 2 年の修業年限であった。当初は英語・仏語・独語・露語・西語・清語・韓語という 7 語学科が設立されたのだが、高等商業学校から独立した際に伊語を加えて合計 8 語学科になった。正科が本科、特別科が別科と改称され、さらに清語科は支那語科へと改称された。六角は、

この官立の外国語学校に中国語がとりあげられたことは、その後の日本の中国語教育にとって大きな基礎をえたことになる。その後の中国語教師は、多くこの東京外国語学校の卒業生によって占められ、民間の善隣書院となら

んで日本の中国語教育に大きな影響をあたえた。創立から昭和二〇年（一九四五）までの四八年間に、中国語教師および中国語教科書の執筆をしたもの本科卒業生で約四〇ないし五〇名、別科・専修科卒業生で約二〇名余にのぼるものと推定される。これらの人びとがその後の日本の中国語教育で、さらに多くの教師をつくり、中国語教育の全国的基礎をつくった。（六角 1988：242 頁）

と述べて、東京外国語学校設立がもたらした過去から現在に至る日本の中国語教育への影響の大きさを伝えている。藤井省三も、大正 10 年（1921 年）に第 2 官立外国語学校として大阪外国語学校ができるまでは日本唯一の中国語教育課程を持つ国立学校である上に、大正 14 年（1925 年）にようやく初の私立語学専門学校である天理外国語学校が開校されることや、中国語教員の養成や中国語テキストの編集中心地としても重要なことから、「国家的制度としての中国語教育を考えると、新外語の創設はいっそう重要な意味を持っている」（藤井 1992：30 頁）と東京外国語学校語開校の重要性を述べている。

3. 支那語学習の代表的テキスト

本節では支那語時代の代表的テキスト 6 冊を撰び、これらを時系列順に紹介することを通して、学習テキストから見た支那語時代の中国語教育について言及する。その 6 冊とは、『語言自邇集』、『亜細亜言語集支那官話部』、『官話指南』、『北京官話談論新編』、『官話急就篇』、『急就篇』である。六角恒廣著『中国語書誌』（以下『書誌』）には『標準中華国語教科書・初級篇』を除く教科書の書誌情報が記されており、以下では『書誌』に基づいた書誌情報をまとめて記載する。

明治 9 年 9 月から日本の中国語教育は南京官話から北京官話へと変化し、近代日本の中国語教育が始まった。しかし、その頃には北京官話の教科書が無く、ただ 1 冊しかなかったイギリスの北京駐在公使トーマス・ウェードによる『語言自邇集』を旧東京外国語学校の教員および生徒が自身で書き写して使用したという。『書誌』によると、初版は 1867 年、再版は 1886 年、三版は 1903 年に出され、再版は初版の原形を比較的保持しているが、三版は省約本であるという。これは問答体のテキストで、イギリス公使館の見習生教習用に著し、イギリスの中国語学習者の必読書とされていた。第 1 巻（全 351 頁）は、「学習者へのガイダンスとしての注意」「第 1 章 発音」、「第 2 章 漢字の部首（部首と部首別の漢字の表）」、「第 3 章 散語（全 40 章）」、「第 4 章 問答（全 10 章）」、「第 5 章 談論篇（全 100 章）」、「第 6 章 践約伝（長い間の婚約を履行した物語）」、「第 7 章 練習燕山平仄編（声調の練習）」、「第 8 章 言語例略（ことばの学習についての話、全 12 段）」という内容で、その中心は散語と問答と談論である。

安藤は、「発音の解説、音節の説明、会話の注意などがあり、文法の説明こそないけれども、当時としては周到の内容をそなえていた。中心の部分の章は、北京の官界での対話、宴会や訪問のさいの談話、外国人の主人と中国人召使いとの会話など、さまざまな場面を設定した問答となっていて、実用的であるとともに、当時の雰囲気を生きたと伝えてくれる、ウェードの中国についての知識のたしかさもよくわかり、それだけに日本でも大いに珍重されたのであった」（安藤 1988 : 37 頁）と述べて評価している。

『亜細亜言語集支那官話部』は、ウェードの『語言自邇集』を底本として廣部精が編集したもので、第 1 巻が明治 12 年（1879 年）6 月に、第 7 巻が明治 13 年（1880 年）8 月に刊行された。廣部は当時すでに東京外国語学校で北京官話教育が行われていることから北京官話教育の必要性を感じ取り、このテキストを作成したのである。このテキストは初級から上級までの学習者を対象としたもので、明治期に多く使用された。廣部のこの書は『語言自邇集』を底本としたが、そのほかに「德国翻訳官阿氏」の『通俗欧州述古新編』を「欧州奇話」として収録し、さらに自己が集めた六字話と常言・続常言を収めている。

『官話指南』は、長崎唐通事の流れを汲む呉啓太・鄭永邦の共著である。線装本 4 巻で、序文・凡例・目録・本文を合わせて 105 丁（210 頁）である。刊行年は明治 15 年（1882 年）とされているが、氷野は「『官話指南』のバージョンのうちどれが初版本であるかということについては断定できない」（氷野 2010 : 237 頁）と述べて注意を促している。『書誌』によると、第 1 巻「応対須知」は姓名・年令、仕事などを聞く対話、病氣見舞、旅行のみやげ物など 3 行程度の簡単な対話、第 2 巻「官商吐属」は年始の挨拶、行商人の物売り、市場に穀物を売りに出す話、旦那が馬で猟に出た話、友人のアヘンをやめさせる話など、第 3 巻「使令通話」は使用人や他人に仕事や用事をいいつける話、第 4 巻「官話問答」は大臣が訪問先で酒席のもてなしを受ける話、各地に方言があるが官話がどこでも通じる話、外国の領事が中国の役所に来て商船の衝突事故を協議する話などがその内容である。

『北京官話談論新編』は金国璞・平岩道知共著、明治 31 年（1898 年）12 月発行、張廷彦と服部宇之吉の序文がそれぞれ 2 頁、本文は 100 章 133 頁である。本文の内容は『書誌』によると、二人の会話形式で話が進行し、話題は外国語の学習、天津から海路で神戸に来る話、漢字新聞、北京の商人の話、役所・役人・訴訟の話などである。

『官話急就篇』、および『急就篇』は宮島大八により作成されたテキストであり、善隣書院発行である。今日、通常『急就篇』と言えば、昭和 8 年 10 月に出た改訂版を指すが、初版は『官話急就篇』といい、明治 37 年 8 月に刊行された。『書誌』によると、『官話急就篇』の内容は、名辞・問答之上・問答之中・問答之下・散語、附として家庭常語・応酬須知であり、昭和 8 年に改訂されるまで 126 版を数えたという。『官話急

就篇』から『急就篇』への主な改訂点は『書誌』によると、名辞が「単語」と改称され、清朝期の事柄や時代遅れで常用されない単語を削除した。問答之上では問答数が102から100へとなり、問答之中では152から163、問答之下では74から33へと変わっている。問答の語句を変更したものや、語句を新旧交換したものもあるという。また、散語部では旧版第1を削除し、旧版第2を改訂版第1として繰り上げるなどしており、旧版182頁が新版では153頁となった。

六角は『官話急就篇』が人気を博した理由について『中国語教育史の研究』（1988年：東方書店）で以下のように分析している。

『官話急就篇』が刊行された時期には、呉啓太・鄭永邦の『官話指南』や金国璞・平岩道知の『北京官話談論新編』などがすでにあって、これらはいずれも広く教科書として使用されていた。だが、これらは入門書ではなく談論をあつかった中級程度のものであった。入門書として、当時では廣部精の『亜細亜言語集』がある程度で、その他には入門書として適当なものなかった。そうしたこともあって、初級入門から中級の初めの段階をあつかった『官話急就篇』が刊行されたことは初学者や教師にとって好都合であった。しかも、当時の中国語教育の中核である善隣書院から出されたことは、それが教科書として信用できるものであり、権威あるものとして受けとられた。それは宮島大八の七年に及ぶ留学によって収めた蘊蓄と造詣とを反映した名著であったからである。（六角1988：221頁）

また、板垣は『官話急就篇』がベストセラーになった理由について、「後世にも高い評価を得ている『官話急就篇』（増訂版）と『急就篇』であるが、宮島は『官話急就篇』初版を使用しての反省から、1906年の増訂では、①さらに内容を絞り込み、中国事情に関する固有名詞を増やし、②問答の語句に正確さをプラスし、③やや難度の高い問答や長文を追加してレベルを上げたことにより、宮島は1933年の『急就篇』に至るまでの長期間に渡るベストセラーを編み出したのである」（板垣2013：146頁）、と分析している。

これらの5冊が支那語時代を代表するテキストであることは間違いがないことであろう。そして、とくに『官話指南』、『談論新篇』、『急就篇』は支那語時代の「バイブル」的存在であった。鱒澤はこれらの3冊を、「日本の中国語教育が確立した1900年前後から1945年まで、テキスト面では、『急就篇』→『官話指南』→『談論新篇』という、初級から高級へ進むシステムが作られていた。この三書は各級の基本テキストとして、満鐵や關東廳の支那語學檢定試験としても利用されていた。この時点でこの三書は戦前期の代表的テキストであった。」（鱒澤1997：46頁）と述べて、支那語時代の

学習システムについて指摘しており、当時における『官話指南』、『談論新篇』、『急就篇』の影響の大きさが窺える。以上のように、『語言自邇集』、『亜細亜言語集支那官話部』、『官話指南』、『北京官話談論新編』、『官話急就篇』、『急就篇』が支那語時代を代表するテキストである。

4. 神谷衡平と教科書革新運動

(1) 神谷衡平について

1912年に中華民国が成立すると、東京外国語学校「清語学科」は1913年9月から東京外国語学校「支那語学科」となる。当時の教授陣に神谷衡平がいた。

神谷は、明治16年(1833年)に東京で生まれ、明治38年(1905年)に東京外国語学校清語科を卒業する。そして、明治43年(1910年)には独逸語専修科、翌年には東洋語速成科蒙古語学科を修了する。大正元年(1912年)から清語科講師を務め、大正9年(1920年)教授、蒙古語部主任を兼ねた。

後述するが、神谷は五四運動後の新文学作品を採り入れた教科書を編纂して高い評価を得たうえに、近世白話文学研究でも戯曲、小説にわたり数多く業績を残している。また、留学生の日本語学習にも力を尽くした。大正12年(1923年)に文求堂から『標準中華國語教科書初級篇』を清水元助とともに著し、さらに翌大正13年(1924年)に『標準中華國語教科書中級篇』を再び文求堂から清水元助と刊行している。昭和19年(1944年)5月に東京外国語学校を退官した後、昭和33年(1958年)慶応大学講師在職中に他界する。

(2) 教科書革新運動

中国は1911年に辛亥革命が起こり、清朝から中華民国へと変化し、激動の時代をむかえていた。しかし、日本の中国語教科書はそのような中国の事情を全く省みず、明治期に出来たものをそのまま使用していたのである。東京外国語学校の学生は、それまでと変わらない会話中心の授業で、変化のない語学教授方法に強い不満を抱いていた。大正10年(1921年)に東京外国語学校に入学した高野鎮二は、「私の在学中に教鞭を執っておられた教官は、岡本正文、宮越健太郎、清水元助、神谷衡平の四先生でした。授業は会話中心で、岡本先生が明治の頃にお出しになった教科書を使ったことを覚えています。同級生の松平定世君などは、もっと内容のあるものを作って欲しいと不満を漏らしていたものです」(藤井1992:35頁)と述べている。さらに、この事に関し、『東京外国語大学史』は「岡本の教科書とは多分『言文対照北京紀聞』のことであろうが、その内容は明治三十年代半ば頃のもの。辛亥革命後すでに一〇年、今まさに激動の最中にある現実の中国とのギャップは大きく、時代に敏感な若い学生達にとっては全くカビ臭いものであったろう。」(東京外国語大学史編纂委員会1999:924

頁)と記し、当時の東京外国語学校の様子について批判的に述べている。

神谷衡平はこのような中国語教育の現状を変えようとし、劇的な変貌をとげていた中国の姿を伝えるべく、北京留学から帰国してすぐの大正12年(1923年)4月に清水元助と共編で『標準中華國語教科書・初級篇』(文求堂)を刊行した。さらに、翌年に再び清水元助と共編で『標準中華國語教科書・中級篇』(文求堂)を世に出した。神谷と清水は会話中心の実用語学からの脱皮を図り、教科書革新運動を開始したのである。以下に、両書の序文を記し、そこから神谷の編纂意図を探る。

『標準中華國語教科書 初級篇』

序

現今我國に行はれてゐる支那語の教科書は、其數甚少くないが、此等を分類すれば、大略「會話式」と「語法式」との二種に歸することが出来る。兩者各其長が有つて、今遽に棄てる事は出来ぬけれ共、前者は餘りに實際的を主として、語句構成上の基礎を等閑に附してをるので、初學者をして終に望洋の歎を發せしむるに至るの憾がある、後者は不徹底なる文法に因はれ過ぎてゐる結果、初心者をして知らず知らず平板無氣力なる語式に慣れしむるの弊がある。換言すれば、前者の餘りに放膽にして、後者の餘りに小心なる事は各其缺點であると思ふ。本書は上記の病弊を救はんが為に、一種の「讀本式」とも稱すべき體裁を採つて、一方因はれざる範圍に於て、文法上にも相當の意を用ひると同時に、一方又支那語の生命とも謂ふべき語調の上には、一層重きをおき、更に趣味の點にも、充分の考慮を加へて作つたつもりである。

本書は大體に於て、逐次簡より繁に入るの通則に従つて編述したのは勿論であるけれども、時に或は特に難易の順序を顛倒して、進路の單調に流るるの弊を避けんとした。

本書は内容僅かに六十課の小冊子であるにも拘らず、其始の部分と終の部分とを比較する時は、難易の程度に非常な懸隔が有る如くであるが、反覆音讀、暗誦、書取、應用作文、其他適當の方法を施し、學生をして逐課確實に習熟牢記せしむれば、學習上決して困難でないと思ふ。

本書は各一課を一回の授業分量として作つてあるのであるが、課の稍長きもの、若くは六ヶ敷きものは、二回以上に亘つて教授且練習させるも良いと思ふ。又本書には數課毎に作文(和文支那譯)の問題を加へてゐるが、此れは僅かに其一例を示したのみで、且其内には、初學者に對して、比較的難解のものも少くないから、適宜に取舍増減して課する時は、一層授業の効果を擧げ得る事と考へる。

終に臨み、本書を著はすに際し、上海商務印書館發行新法國語教科書及山西省國民學校用通俗國文教科書より少からざるヒントを得た事、並に東京外國語學校

教師包象寅氏の校閲を経た事を附記しておく。

ここからは、大正 12 年（1923）頃の支那語学習テキストが「會話式」と「語法式」という大きな 2 つの枠組みがあることがわかる。「會話式」テキストは實際的を主として、語句構成上の基礎をおろそかにしており、学習者に「望洋」の歎きを抱かせる。そして、あまりにも「放膽」であることが欠点であると指摘している。「語法式」は文法が不徹底であり、結局は学習者に「平板無気力なる語式」に慣れてしまう。そして、「小心」な点が欠点であると神谷は述べている。だからこそ、このような欠点を無くすために「讀本式」という形をとり、「文法」、「語調」、「趣味」の三点に考慮を加えてこのテキストを作成したとしている。この点に関し、藤井は「文法、中国語固有の美しさ、そして知的好奇心の三方面を満たそうと試みているのである」（藤井 1992：38 頁）と述べている。

『標準中華國語教科書 中級篇』

序

中國改了國體，已經足有十二年；原先做他們國家中心點的滿洲人的勢力，早已從根底上推翻了。那麼，中國現今的社會上種種的事物，能和那二十年前三十年前相同嗎？不用說別處，你一到北京去看一看，就曉得滿城的氣象，此原先迥乎不同了。向來守舊泥古的北京，既然如此；其餘比較的開通些的通商各埠，更可想而知了。

社會上既有這樣很大的改變，言語上那能沒有一點改變呢？從前要緊的話，現在有許多用不着的；原先沒有的話，現在有好些個新造出來的。不但這樣，從前北京話是『唯我獨尊』的；如今文化上南方的勢力，漸漸的壓迫北方，其結果北方人也很愛講幾句南方話了。總而言之，他們的言語也有與昔日大不相同的了。

我們日本人學中國話，是一件當務之急。但是向來最風行，人家以為『寶貝』似的那些教科書，大概都是在前清時代，連科舉還沒取消的時候編出來的老『話條子』。所以那內容，簡直的與現在的新社會超然不關的事情多。舊的還不要緊；我們不是是舊的都要排斥他的；倘或他們在言語上以外，能有些個文學上的，或是什麼別的學術思想上的價值，還可以行。然而他們除了舊社會上應用的會話之外，一點沒有別的價值。那麼，我們還念那些老話條子做什麼？

除去以上所說的老話條子以外，後來雖出了幾種新一點的教科書，但是十中八九，不是模仿那些老話條子的，便是把那老話條子裏的話，稍微改竄的。我們想何必費這樣無益的空手續呢。與其看這些半新不舊，換湯不換藥的東西，不如捧那些『真正地道』的老話條子，倒還有點精神吧。

還有一層我們不贊成那些舊教科書的理由。向來的教科書。形式都是會話體：內

容又是像那『你好呵』『你上那兒去』一類的淺近的話。這種平常淺近的會話。固然也要學一點；但是要學他，只念一部急就篇。或是那支那語教科書。就很夠的了；何必要費那麼大的時間，看那麼多的老話條子呢？我們學外國語的目的，並不在乎只講這樣眼面前的會話；我們還要往高一點遠一點的地步上走，才能有話的意味。我敢斷言：要打算往高遠的目的上邁步，非得多看一點各種的文——文言的與白話的，才能培養語學的根底；老守着那會話的課本，還要盼望提高學話的程度，那簡直的比『緣木求魚』還難呵！

舊的現在已經用不得了，可以叫他快下台了；以後我們所要的是新的教科書。去年以來我們弄了一個標準中華國語教科書：這書的初級篇，去年四月裏已經出版了。這回又編了這個中級篇；接着還要做上級篇。這中級篇裏所取的材料，是中國現代名人的白話文為主；裏面還攙了幾篇有些意思的舊材料。我們做這部教科書：一則是要往我們的『支那語』學界裏，注射一道新生氣；二則還要提高『支那語』學的程度。但是我們實不敢說：我們做的書是完全的。我們却是手不從新；材料的選擇，怕是不得其法，我們不過是野人獻曝；只希望從此就能給我國的『支那語』學界。打開一番新生面，引出別樣又好又新的課本來。那樣便是我們的萬幸了。

この序文からは次のような神谷の想いが読み取れる。中国は辛亥革命から12年が過ぎており、社会の様々なものが変化した。それならば、当然言語も変化がある。しかし、日本人は未だに清代に編まれたテキストを使用しているが、それらは旧社会での応用会話以外に何も役には立たない。我々が外国語を学習することは、より高くより遠い地点に行ってこそようやく外国語を学ぶ意味がある。それには、文語文や白話文という各種の文章を多く読んでこそ、語学の根本を養えるのである。このテキストには中国の著名人の白話文を主に収め、さらには旧材料も入れてある。このテキストを作成した目的は①「支那語」学界に新しい息吹を吹き込むため、②「支那語」学の水準をを高めるためである。藤井は序文における「老守着那會話的課本，還要盼望提高學話的程度，那簡直的比『緣木求魚』還難呵！舊的現在已經用不得了，可以叫他快下台了；以後我們所要的是新的教科書。」という神谷の発言を「中国語教科書革新運動の宣言にふさわしい」（藤井1992：39頁）と評価している。さらに、この『中級篇』の内容から藤井は、「神谷が「輸入」しようとした中国の学術思想とは、『中級篇』に採られた教材から考えるに清末民初期における知識人の共和国建設の言説であったと思われる」（藤井1992：43頁）と述べて、神谷衡平が日本に「知識人の共和国建設の言説」を輸入しようとしていたと指摘している。

神谷はこの後、昭和4年（1929年）に『現代中華国語文読本 前篇・後篇』（文求堂）を刊行する。同年暮れには東京外国語学校の主任教授宮越健太郎による『支那現代短篇小説選』（文求堂）が発行される。藤井は「この二冊の教科書が刊行された昭和

四年以降、五・四新文学は日本における中国語教育の主要な教材となり、中国語もようやく実用会話一辺倒を脱して、「英仏独露各国語の教科課程」に伍し得るにいたったのである」（藤井 1992：50 頁）と言い、神谷が起こした教科書革新運動が時代の流れに乗ったことを評価している。鱒澤彰夫も、1920 年代初頭から本格化した中国の国語運動から生まれた白話文教科書（初級小学校用）は日本の中国語テキストにも採り入れられ、日本の中国語教育にも影響を及ぼしたことを述べ、その流れを作った神谷のテキストに対して、「一九二三年四月、神谷衡平・清水元助『標準中華國語教科書・初級篇』の（文求堂）刊行は、新しい中国語教育の時代の宣言であった。」（鱒澤 1992：72-73 頁）と高い評価を下している。

第 2 部 支那笑話・支那童話による支那語テキストの作成

大正末期に矢野藤助により支那笑話を用いた『支那笑話新編』が作られる。そして、彼のテキストは改版されて世に再び出されるなど、大正末期の日本社会に受容されたのである。しかし、彼よりも以前に支那笑話を教材とした人物がいる。それは岡本正文であり、明治末期に岡本は『支那笑話集』を刊行した。岡本は支那笑話が教材になることを「発見」した人物であり、パイオニアとして矢野藤助の『支那笑話新編』の前史的立場に立つ人物である。

矢野藤助は岡本正文の後を受けて、支那笑話を用いて『支那笑話新編』を刊行したのだが、その中に「支那童話」も収録されている。これが「支那童話」という明確な形で語学学習教材とされた先駆けである。矢野は『支那笑話新編』に支那童話を収録した理由を改版『支那笑話新編』序文において「巻末に附録を収む、是は學者の笑話より童話への階梯たらしめんとせる編者の微意に外ならず」と述べており、学習の道筋を支那笑話→支那童話へと示している。その後、矢野藤助は『日支對譯支那童話集』『華語童話読本』を続けて刊行する。まさに、矢野藤助は支那童話の価値を認め、支那語学習教材として「発見」した人物であるといえよう。

矢野藤助が支那童話による語学学習テキストを出版した同時期に、米田祐太郎も支那童話に注目し、『原文對譯支那童話歌謡研究』を世に出すのである。

このように、明治末期に岡本正文により支那笑話によるテキストが作成され、その後を受けて、矢野藤助が大正末期に再び支那笑話によるテキストをだす。矢野藤助は支那笑話を教材として支那語を学習した後は支那童話によって支那語を学ぶように学習の道筋を示した人物であり、まさに支那笑話と支那童話の橋渡し役というべき人物である。また、同時期に米田祐太郎も『原文對譯支那童話歌謡研究』を著しており、大正末期に支那童話が支那語学習のための教材としての地位を確立したと言えよう。

第2部では、岡本正文、矢野藤助、米田祐太郎により作られた各テキストが、どのような材料を用いて、どのように作られたのかを解明する。

第5章 笑話テキストについて

大正末期になると、支那笑話や支那童話という民話的資料を用いて作成された支那語教科書が集中して現れる。それは、矢野藤助の『支那笑話新編』『日支對譯支那童話集』『支那笑話新編（改版）』『華語童話讀本』、米田祐太郎の『原文對譯支那童話歌謡研究』である。

支那童話を用いたテキストは大正末期に初めて出現するのだが、支那笑話を用いたテキストは明治期から出版されていた。日本国内で初めて刊行されたものは東京外国語学校教授であった岡本正文によって明治44年（1911年）に文求堂書店から出された『支那笑話集』である。

岡本正文による『支那笑話集』は、その序文やいくつかのテキストを確認したところ、再版や改版といったことは行われなかった。しかし、矢野藤助による『支那笑話新編』は大正12年（1923年）に出版後、文求堂書店の要望により、改版が出版されている。それは、大正14年（1923年）に改版されて刊行された『支那笑話新編』の序文に「書肆の切なる希望もあり」とあることから確認できる。このように見ると、岡本正文により支那語学習教材として明治末期に「発見」された支那笑話は、大正末期になってから矢野藤助の下で初めて支那語学習教材の地位を獲得したと言えよう。

本章では、笑話を用いた支那語学習テキストを整理したのち、矢野藤助の『支那笑話新編』の前史的立場に立つ岡本正文の『支那笑話集』がどのような資料を用いてテキストを作成したのかという問題を解き明かす。その後、矢野藤助による『支那笑話新編』の出典調査を行い、さらに両書の関係について考察を加えることによって、当時におけるテキスト作成方法の一端を明らかにする。

1. 笑話を用いた支那語テキスト

支那語学習分野における笑話を用いた学習テキストを以下に整理する。

六角恒廣氏による『中国語関係書書目（増補版）』（2001年：不二出版）、および、国立国会図書館の蔵書検索システムを使用し、戦前・中期において編まれた笑話を用いた中国語学習テキストを調査した。その結果、以下の諸テキストの存在が判明した。

	出版年	書名	編著者等
--	-----	----	------

1	明治42年(1909)	『北京笑話會話』 ⁶	馮世傑編著、金国璞・御幡雅文閱、 上海・日本堂書店
2	明治44年(1911)	『支那笑話集』	岡本正文編譯、文求堂
3	大正12年(1923)	『支那笑話新編』	矢野藤助編、文求堂
4	大正14年(1925)	『支那笑話新編』 ⁷	矢野藤助編譯、文求堂
5	昭和12年(1937)	『中日對譯現代笑話』	影山巍編著、蔣君輝譯註、文求堂
6	昭和17年(1942)	『註音譯註支那幽默集』	内藤堯佳編著、外語學院出版部

上記の他、さらに、波多野太郎氏の『中國文學語學資料集成』第四篇第三巻には、①・李芝亭著『笑話集』、②・述建勳著『報腹絶倒新笑話彙』が取り上げられている。この二書はともに何時に作成されたテキストなのかは不明であると波多野氏は述べている。

上記表からすると、『北京笑話會話』（馮世傑編著、金国璞・御幡雅文閱）が最初に世に出ているが、これは上海で発行されたものであり、その上、対訳集ではないので本論文においては対象外とする。

2. 矢野藤助『支那笑話新編』の前史的立場に立つ岡本正文と、その『支那笑話集』

(1) 岡本正文について⁸

明治30年9月に高等商業学校附属外国語学校清語科正科に13名の学生が入学する。その13名のうち9名が、明治33年の7月に清語正科第1回卒業生として卒業するのだが、岡本は卒業生の1人である。卒業後に母校東京外国語学校助教授に任じられた。

岡本の『支那声音字彙』（文求堂、1902年）は日本で最初のウェード式ローマ字綴りによる発音字典である。その後長き間にわたり中国語学習者に愛用された。

『官報』第6021號（明治36年7月28日）には、「清語研究ノ為満七箇月清國へ留學ヲ命す 東京外國語學校助教授 岡本正文」と記されている。また、『官報』第6222號（明治37年7月1日）には、「留學生歸朝 文部省外國留學生東京外國語學校助教授岡本正文ハ去月二十五日歸朝セリ（文部省）」と記されている。この留学の成果として『言文対照北京紀聞』（文求堂、1904年）が出版されている。同書序言には、数種の新聞から北京等の風俗習慣及び官衙商賈の状態等を見抜くことができるような記事を選び、それを北京官話に訳出したものである、ということが記されている。

⁶ 波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊』燕語社会風俗官話翻訳古典小説・精選課本篇第3巻、1985年、不二出版

⁷ 上記3を改版、修正増補したもの

⁸ 『東京外国語大学史-独立百周年（建学百二十六年）記念-』、および、『東京外国語学校史-外国語を学んだ人たち』参照

岡本正文は明治 37 年に教授昇任、以後大正 13 年までその任にあった。
 岡本正文による編著作等の情報については、六角恒廣編『中国関係書書目（増補版）』、
 および、国立国会図書館蔵書検索システムを参照、利用し作成したものである⁹。以下
 にその一覧表を載せる¹⁰。

出版年	書名	その他情報
明治 33 年（1900）	『支那小説訳』 『談論新編訳』	岡本正文訳、支那語学研究会 金国璞、平岩道知著、岡本正文訳、支那語学研究会
明治 35 年（1902）	『支那声音字彙』 『支那語教科書発音編』	岡本正文編、文求堂 岡本正文編、文求堂
明治 37 年（1904）	『北京紀聞：言文対照』	岡本正文編、文求堂
明治 40 年（1907）	『北京紀聞訳』	岡本正文著、神谷衡平訳、支那語学研究会
明治 41 年（1908）	『支那語発音講義』	岡本正文述、支那語学研究会
明治 42 年（1909）	『清国最新書翰文』	宮錦舒、岡本正文編、文求堂
明治 43 年（1910）	『談論新編訳本』	岡本正文訳、文求堂
明治 44 年（1911）	『支那笑話集』 『支那語学 第 1 号-第 5 号』	岡本正文編訳、文求堂 岡本正文編、支那語学研究会
明治 45 年 大正 1 年（1912）	『支那語文典：最新言文 一致』	宮錦舒著、岡本正文校、文求堂書店
大正 2 年（1913）	『支那語教科書』	岡本正文著、文求堂
大正 5 年（1916）	『商業学校専用支那時文 教科書』	岡本正文編、文求堂書店
大正 6 年（1917）	雑誌 『満蒙研究彙報』（21） 『満蒙研究彙報』（22）	満蒙研究会 満蒙研究会
大正 8 年（1919）	『支那語会話辞典』	岡本正文編、文求堂
大正 9 年（1920）	『支那声音字彙 改訂版』	岡本正文編、文求堂書店
大正 11 年（1922）	『支那語教科書総訳』	岡本正文原著、木全徳太郎訳、文求堂書店
大正 13 年（1924）	『支那書翰文初歩』	岡本正文、橋川浚著、大阪屋号書店

⁹ 訳出本、校閲本等も含む

¹⁰ 岡本教授にはこれ以上の校閲本があると思われるが詳細は不明である。岡本教授の著作には『支那声音字彙』等のように版が重ねられたものがあるが、本論では初版の年月のみを対象とする。

	『北京風俗問答』	岡本正文関, 加藤謙三郎著、大阪屋号書店
昭和 8 年 (1933)	『談論新編総訳』	岡本正文訳, 水野絮輔補訂、文求堂書店

(2) 岡本正文『支那笑話集』について

岡本正文は『支那笑話集』を明治 44 年 (1911)、文求堂書店から出版した。その緒言は

この笑話集に収めたる笑話の多くは、編者が嘗て支那語教授の際、学生に課する暗誦の材料に供したるものなり。

支那に於て発行されたる笑話の冊子ありて、其中には頗る奇抜なるものなきにあらざるも、或は同音の言葉をもぢり、初学者の一聴く意味難解のものあり、或は卑猥にして、公衆の面前にて談話するを憚るものあり、共に説話練習の資料となす能はされば、其種のものば総て之れを捨て、この集に収めず。時に明治四十四年正月四日、伊豆土肥の客舎に於て、この稿を成す。

編者

とある。この『支那笑話集』に対して、渡會貞輔は『支那語叢談』¹¹中で、「往年東京外國語大學の岡本教授が支那笑話集と題し這種笑話中より其の萃なるものを選び教授獨特の流暢なる北京官話に附するに其の譯文を以てした教科用式美本が発行されて居るから這麼いふことに趣味を持たるる諸氏は就いて研究されたらよからうと考へる」と述べて評価している。

さて、『支那笑話集』に収められた話数は全 50 話である。以下に、そのタイトルを表にして記す。

¹¹ 渡會貞輔『支那語叢談』大阪屋号書店、大正 7 年 (1918)

1	打個半死（半殺し）	2 6	太太属牛（奥は丑の年）
2	睡法（睡眠の方法）	2 7	不能及第（及第が出来ぬ）
3	失言（失言）	2 8	靚物傷情（見ると悲しい）
4	十萬之富（十萬の富）	2 9	外科大夫（外科医）
5	粧唾吧（唾の眞似）	3 0	写真（肖像画）
6	打嚏噴（嚏）	3 1	活動話（言ひ抜けの出来る言葉）
7	粗月（粗末な月）	3 2	性急性慢（急勝と気長）
8	近視眼（近眼）	3 3	看上你了（おまへに目を付けた）
9	死錯了人（人の死違ひ）	3 4	吃夢中醋（夢のやきもち）
1 0	不下剪（鋏をいれぬ）	3 5	夥娶媳婦（組合の細君）
1 1	願脚踢（足で蹴られる方がいい）	3 6	拳頭好（拳固がいい）
1 2	謊鼓皮（太鼓のうその皮）	3 7	没有座位（座る席がない）
1 3	請客洗澡（お客を湯に入れる）	3 8	靴価（靴の直段）
1 4	夥穿靴子（組合の靴）	3 9	扛欠戸（借手を担いで行く）
1 5	恍惚（ぼんやり）	4 0	瞞歳数兒（歳を隠す）
1 6	願淹死（死んでも本望）	4 1	千金子（千両の金）
1 7	餅価（餅の直段）	4 2	公道良心（怨みつこがない）
1 8	腹内無文（腹の中はからだ）	4 3	求人搬家（転宅の要求）
1 9	盜牛（牛盗人）	4 4	把他燒了（焼いてしまった）
2 0	諱聾唾（聾と唾の隠立）	4 5	両羨慕（共々感服）
2 1	方蛇（四角な蛇）	4 6	請帖（案内状）
2 2	嚴密（秘密）	4 7	没眼的好（盲が仕合）
2 3	大澡盆（大きな風呂桶）	4 8	読書の狗（本を読む犬）
2 4	我何在（乃公は何処に居る）	4 9	没有良心（良心がない）
2 5	較歳数兒（歳の勘定）	5 0	欠戸会説（借手の言ひ抜け）

(3) 『支那笑話集』の底本について

松枝茂夫・武藤禎夫『東洋文庫 24 中国笑話選』（1964年、平凡社）に、「岡本正文支那笑話集（B6 九八ページ・明 44・文求堂）学生用のテキストに使ったもので『笑府』¹²『笑林広記』¹³から五〇話。原話（原文のままでない）のあと、口語訳がつく。」

¹² 『笑府』、十三卷。明、墨憨齋主人撰と題す。墨憨齋は明末俗文学界の大御所、馮夢竜の公開的筆名である。

¹³ 『笑林広記』、「遊戯主人纂輯、粲然居士参訂」とあり、清の乾隆56年（1791）三徳堂刊本がある。遊戯主人については未詳。さらに、同書名の清程世爵撰による清光緒25年（1899）

(松枝・武藤 1964 : 358 頁) とある。

しかしながら、『支那笑話集』は原文ではないためか、その出典がまったく示されていない。そのため、内容を最も重要視し、次にタイトルを手がかりとし、岡本教授がテキスト作成時に用いたと思われる中国の笑話集を検討することにしたい。

まずは、松枝茂夫・武藤禎夫が述べているように『笑府』『笑林広記』からの引用なのかについての調査を行う。なお、『笑林広記』は二種類現存¹⁴するため、その両者を調査対象とした。『笑府』については、『明清笑话集六种』(张亚新、程小铭校注、2012年10月、中州古籍出版社)を用い、『笑林広記』については、『笑林广记』(游戏主人、程世爵编撰、2008年2月、重庆出版社)を用いた。

	話名	『笑府』	『笑林広記』 (遊戯主人)	『笑林広記』 (程世爵)
1	打個半死：半殺し	¹⁵	貧吝部「打半死」	
2	睡法：睡眠の方法			
3	失言：失言			問猴
4	十萬之富：十萬の富	不奉富	貧窶部「穷十万」	
5	粧唾吧：唾の眞似：			
6	打嚏噴：嚏		腐流部「想船家」	
7	粗月：粗末な月			
8	近視眼：近眼		形体部「問路」	
9	死錯了人：人の死違ひ	作祭文	腐流部「抄祭文」	
10	不下剪：鉄をいれぬ		术业部「不下剪」	
11	願脚踢：足で蹴られる方がいい	愿脚踢	术业部「愿脚踢」	
12	謊鼓皮：太鼓のうその皮	说大话	谬误部「慌鼓」	
13	請客洗澡：お客を湯に入れる	借茶叶	貧窶部「留茶」	
14	夥穿靴子：組合の靴	着靴	殊稟部「合着靴」	
15	恍惚：ぼんやり			恍惚
16	願淹死：死んでも本望	溺水		
17	餅餠：餅の直段	吃扯面	殊稟部「访麦价」	
18	腹内無文：腹の中はからだ	产喻	腐流部「腹内全无」	
19	盜牛：牛盜人		殊稟部「盜牛」	
20	諱聾唾：聾と唾の隠立	讳聾哑	形体部「讳聾哑」	

のものがある。

¹⁴注 16 参照。 清初の遊戯主人によるものと、清末の程世爵によるもの

¹⁵ 空欄部は該当する話が確認できなかったものである

2 1	方蛇：四角な蛇	说谎		
2 2	蔽密：秘密	藏锄	殊稟部「藏锄」	
2 3	大澡盆：大きな風呂桶		谬误部「大浴盆」	
2 4	我何在：乃公は何処に居る	解侖卒		我何在
2 5	較歳数兒：歳の勘定	较岁	殊稟部「较岁」	
2 6	太太属牛：奥は丑の年	官府生日	古艳部「属牛」	
2 7	不能及第：及第が出来ぬ	头巾	古艳部「及第」	
2 8	観物傷情：見ると悲しい		贫吝部「吞杯」	
2 9	外科大夫：外科医	箭	术业部「锯箭竿」	
3 0	写真：肖像画		术业部「写真」	
3 1	活動話：言ひ抜けの出来る言葉		殊稟部「活脱话」	
3 2	性急性慢：急勝と気長		殊稟部「作揖」	
3 3	看上你了：おまへに目を付けた	赔	术业部「赔」	
3 4	吃夢中醋：夢のやきもち		殊稟部「吃梦中醋」	
3 5	夥娶媳婦：組合の細君	撒半价	谬误部「苏空头」	
3 6	拳頭好：拳固がいい			
3 7	没有座位：座る席がない	坐椅	贫寡部「坐椅子」	
3 8	靴価：靴の直段			问靴价
3 9	扛欠戸：借手を担いで行く	扛	贫寡部「扛欠戸」	
4 0	瞒歳数兒：歳を隠す		闰风部「藏年」	
4 1	千金子：千両の金	不奉富	贫寡部「不奉富」	
4 2	公道良心：怨みつこがない	合种田	贫吝部「兄弟种田」	
4 3	求人搬家：転宅の要求	好静	殊稟部「浼匠迁居」	
4 4	把他烧了：焼いてしまった	问令尊	殊稟部「烧令尊」	
4 5	両羨慕：共々感服		谬误部「两企慕」	
4 6	請帖：案内状	训子	古艳部「训子」	
4 7	没眼的好：盲が仕合	瞽	形体部「被打」	
4 8	読書の狗：本を読む犬		腐流部「狗坐馆」	
4 9	没有良心：良心がない			
5 0	欠戸会説：借手の言ひ抜け			

以上のように、『支那笑話集』全 50 話中では、『笑府』27 話 (54%)、『笑林広記 (遊戯主人)』38 話 (76%)、『笑林広記 (程世爵)』4 話 (8%) が引用されている結果となった。二種の『笑林広記』の関係を見ると、これは互いに補い合う関係であるといえるであろう。しかし、これら二種の『笑林広記』を合わせても 42 話 (84%) にしか

らない。そして、『笑府』からの27話中、2種の『笑林広記』からの笑話と重ならないものは2話のみであった。その結果として『笑府』『笑林広記』二種を合わせても『支那笑話集』50話中44話であった。つまり、岡本正文教授が『支那笑話集』を作成する際に用いた中国の笑話集は『笑府』『笑林広記』のみではないことが明らかとなったが、松枝氏らが『中国笑話選』で述べていた『『笑府』『笑林広記』から五〇話』、という数はほぼ妥当な数であったことが認められる。

それでは、岡本は『笑府』『笑林広記』以外、どのような中国笑話集を用いた可能性があるのだろうか。『笑府』『笑林広記』には記載されていなかった、2・「睡法・睡眠の方法」、5・「粧唾吧・唾の眞似」、7・「粗月・粗末な月」、36・「拳頭好・拳固がいい」、49・「没有良心・良心がない」、50・「欠戸会説・借手の言ひ抜け」は如何なる中国笑話集に収められているかが重要になってくる。

中国笑話集と一口に言ってもその数は歴大である。むやみやたらに資料に当たるとも結果がともなわないであろうことは想像にかたくない。そこで、①岡本正文教授は支那語の専門家であり、漢文の専門家ではない。②北京語学習のために作成されたテキストである、等の点を考慮すると、岡本教授と同時代的な中国笑話集、もしくは比較的近い時代に編まれた清代の笑話集を利用したと推測するのが適当であろう。しかし、「清代に編まれた笑話集」と限定しても、やはりその数は一つや二つではない。王利器氏の『歴代笑話集』には14もの清代に編まれた笑話集が挙げられているが、それでも清代に編まれた笑話集の全てではない。そこで、松枝氏らの『中国笑話選』等の記述を参考にし、清代の代表的な笑話集であるという『笑倒¹⁶』『笑得好¹⁷』を中心に王利器氏の『歴代笑話集』を調査整理を行った。その結果、『笑得好』に2・「睡法・睡眠の方法」、5・「粧唾吧・唾の眞似」、7・「粗月・粗末な月」、36・「拳頭好・拳固がいい」が収められていることが判明した。しかし、50話中の2話は見つからないままである。

『歴代笑話集』は選集であるため、全ての笑話が収められているわけではない。そのため、『歴代笑話集』に収められなかった『笑倒』『笑得好』の笑話を調べる必要がある。『明清笑话集六种』（张亚新、程小铭校注）には『笑倒』『笑得好』ともに収録されていることがわかり、さらに、残されていた2つの笑話も発見することができた。

つまり、『笑府』『笑林広記（遊戯主人・程世爵）』『笑倒』『笑得好』を参考とすれば、岡本教授の『支那笑話集』50話については確認できる。しかも、『笑府』からの27話は『笑林広記』『笑倒』『笑得好』に収められていることが分かった。それが明代の『笑

¹⁶ 『笑倒』、「咄咄夫原本、嗤嗤子増訂」と題書する『増訂一夕話新集』第三巻中の一種であり、咄咄夫は陳舉謨の別名である。王利器は康熙57年（1718）のものとする。

¹⁷ 『笑得好』、清の揚州の人、石成金、字は石基撰集。原本は乾隆4年（1739）刊『伝家宝』の一つで、初集・二集がある。

府』を参考にしなかったとは言い切れないものの、岡本教授の時代と近い時代である清代に編まれた中国笑話集のみを参考とし、『支那笑話集』を作成した可能性が浮上してくる。

	『笑倒』	『笑得好』	『笑府』、『笑林広記』 ¹⁸
1	舍命贫财	打个半死	広
2		磕睡法	
3			程
4			府、広
5		哑子说话	
6			広
7		月	
8			広
9	死	死错了人	府、広
10		不肯下剪	広
11		切莫动手	府、広
12			府、広
13	茶		府、広
14		兄弟合买靴	府、広
15			程
16	溺水	溺水	府
17			府、広
18	产喻		府、広
19			広
20			府、広
21		方蛇	府
22	失鋤		府、広
23	大浴盆	大澡盆	広
24	我何在		府、程
25			府、広
26		夫人属牛	府、広
27			府、広
28			広

¹⁸ 『笑府』は「府」、『笑林広記（2種）』は「広」、「程」と略して記す

29		剪箭管	府、広
30			広
31		答令尊	広
32			広
33		看上了你	府、広
34			広
35	说两听一		府、広
36		头好得很	
37			府、広
38			程
39			府、広
40			広
41			府、広
42		兄弟合种田	府、広
43			府、広
44	问令尊		府、広
45			広
46			府、広
47			府、広
48			広
49	凶人		
50		回债	

(4) 岡本正文の使用した資料

支那語教育分野における対訳笑話学習書の草分けであり、矢野藤助『支那笑話新編』の前史的立場に立つ岡本正文教授の『支那笑話集』は、その出典元が松枝茂夫・武藤禎夫が述べているように「『笑府』『笑林広記』から五〇話」ということがほぼ当てはまることが確認された。

また、明代の『笑府』を参考とせずとも、『笑林広記』『程版笑林広記』『笑得好』『笑倒』という清代に編まれた笑話集を参考とすれば『支那笑話集』の本文はカバーできることが判明したが、松枝・武藤氏が主張するように岡本正文が『笑林広記』を中心的な底本として『支那笑話集』を作成したのであろう、という事も確かめられた。

(5) 矢野藤助『支那笑話新編』刊行前における教材としての支那笑話に対する低

評価

岡本正文は支那笑話に対し、学習教材としての価値を見出した。そして、『支那語学』巻末に収録し、さらに『支那笑話集』を編纂したのだが、当時の支那語学者による支那笑話への評価は決して高いものではなかったようである。

岡本正文『支那笑話集』から矢野藤助『支那笑話新編』までの間にあたる、大正7年（1918年）8月に渡會貞輔が『支那語叢談』を大阪屋號書店から刊行した。渡會は『支那語叢談』の編纂目的を「支那語を知らぬ人へ其の概念を與へ」、「支那語を知てる人へ其の資料を供し」、「以上知る知らぬ人へその話材を給す」と述べる。このような目的の下に編纂された『支那語叢談』中には「支那の笑話」という項目があるのだが、そこには以下の様に記されている。

日本の一口噺ともいふべき笑話が支那にもある、けれども流石は淫卑な國柄だけに書いて事が頗る深刻で其の餘りに露骨なためいかに支那語研究の為だからといって平気で手に取ることが出来ぬ代物ばかりである、一見哈々笑、笑林廣記、繪圖新笑話奇譚など種類は澤山あるが何れも似たり寄つたりでさう大した差異はない、發行所は多く上海で文章は勿論文話だが北京官話に見るやうな婉曲さは逆も望まれぬが併し支那下流の風俗や國民性や俗は南方俗語を研究する上に於て又多少の利益がないこともない、往年東京外國語大學の岡本教授が支那笑話集と題し這種笑話中より其の萃なるものを選び教授獨特の流暢なる北京官話に附するに其の譯文を以てした教科用式美本が發行されて居るから這麼いふことに趣味を持たるる諸氏は就いて研究されたらよからうと考へる、今左に支那原本中から短くつてそして別段差障の無いものを數篇拔萃し難語に解釋を附し且つ句讀を施して諸氏のお笑草に供することにする姑く、内容を云々せず専ら語學研究といふ側より一讀されんと希望する。

以上のように渡會は、「支那は淫卑な國柄のため、書いてある事が露骨すぎるから、支那語研究の為だからといって平気で手に取るとはできない」、「發行所の多くは上海であり、文章は文話だが北京官話のような婉曲さは望むことが出来ない」とマイナス評価ばかりを挙げ、「支那下流の風俗や國民性、南方俗語を研究するには多少の利益がないこともない」ので「諸氏のお笑草に供する」という程の評価なのである。しかしながら、さすがに東京外國語學校教授である岡本正文については「往年東京外國語大學の岡本教授が支那笑話集と題し這種笑話中より其の萃なるものを選び教授獨特の流暢なる北京官話に附するに其の譯文を以てした教科用式美本が發行されて居る」と述べつつも、「趣味を持たるる諸氏は就いて研究されたらよからうと考へる」と、どこか突き放した感じを覚える物言いであり、渡會の支那笑話に対する考え方を物語っ

ているようである。このように渡會が支那笑話に対しての評価を述べるように、当時の支那笑話への評価はけっして良いものではなかったようである。先駆的立場にある岡本正文の『支那笑話集』は、後述する矢野藤助による『支那笑話新編』とは異なる立場におかれていたと思われる。

(6) 『支那笑話集』における岡本正文の支那語教育観

岡本正文はどのように支那笑話を用いて支那語教育に役立てていたのかが、『支那笑話集』の緒言に記されている。以下に岡本正文による『支那笑話集』緒言を記載する。

緒言

この笑話集に収めたる笑話の多くは、編者が嘗て支那語教授の際、学生に課する暗誦の材料に供したるものなり。

支那に於て発行されたる笑話の冊子ありて、其中には頗る奇抜なるものなきにあらざるも、或は同音の言葉をもぢり、初学者の一聴く意味難解のものあり、或は卑猥にして、公衆の面前にて談話するを憚るものあり、共に説話練習の資料となす能はされば、其種のものば総て之れを捨て、この集に収めず。

時に明治四十四年正月四日、伊豆土肥の客舎に於て、この稿を成す。

とある。この緒言には、支那笑話を「学生に暗誦させていた」ことと、これが「説話練習の資料」つまり会話練習の材料であったことが述べられている。さらにこの緒言には、教材にはできない支那笑話が示されている。「頗る奇抜なるものなきにあらざるも、或は同音の言葉をもぢり、初学者の一聴く意味難解のものあり、或は卑猥にして、公衆の面前にて談話するを憚るものあり」というものである。つまり、①「奇抜なもの」、②「同音の言葉をもぢ」ったもの（＝諧音のもの）、③「卑猥」なもの、という内容を持つ支那笑話は支那語教材に適さないということである。これは支那語教材としてはならない支那笑話を岡本正文が提示しているのであり、岡本による規範化とすることができるであろう。この規範は後世においても遵守されており、矢野藤助による『支那笑話新編』中に①「奇抜なもの」、②「同音の言葉をもぢ」ったもの（＝諧音のもの）、③「卑猥」なもの、といった支那笑話は確認できない。

岡本正文は如何なる狙いをもって『支那笑話集』を作成したかは、岡本正文の清国留学の成果である『言文對照北京紀聞』（明治37年、文求堂）と組み合わせて考えることにより、1つの答えを導き出すことができる。

『言文對照北京紀聞』序文に、「北清に於て發刊せる漢字新聞數種を閲し其中に就き該地の風俗習慣及び官衙商賣の状態等を洞察するに足るべき記事を摘録し」とあることから、できるだけ「最新」の清国事情を伝えながら、それを支那語教育・学習に役

立てようとする岡本正文の考えを読み取ることができる。この『言文対照北京紀聞』と『支那笑話集』を組み合わせるならば、『言文対照北京紀聞』では、新聞記事から読み取れる清国の風俗習慣や行政や経済事情という、清国のマスメディアが発信する情報を通じて清国の外面的理解が進み、『支那笑話集』からは、笑話笑話の暗誦を通じて、支那笑話に溶け込んでいる清国人の思想や文化を体感することをもって清国人の内的理解が促進するという学習効果が得られることがわかる。

岡本正文は支那語学習には語学学習だけではなく、支那文化の理解が必要であり、また、支那文化理解が進むとともに支那語学習も発展すると考えていたようである。それは、岡本正文が記した『支那語學』発刊の辞からも読み取れる。『支那語學』は支那語學研究会により、明治40年（1907年）6月に第1号が発行された支那語独習用の講義録であるが、その第1号に岡本正文による発刊の辞が記されている。その一節に、「さて其支那の研究が如何にして完全に遂げらるるかと云ふに、それは云ふ迄もなく支那の言語文字に精通した上でなければ、支那人の性質習慣を知り、支那の政治風俗を透察することが出来ないから、従つて眞個の支那研究は六ヶ敷い事である、其故支那研究者は先づ第一に支那語研究者でなければならぬと斷言していいと思ふ」とある。これは「支那語研究者は支那人の性質習慣を知り、支那の政治風俗を透察することができるから眞の支那研究者である」とも言うことができる。ここから、『言文対照北京紀聞』『支那笑話集』の学習を通じて支那語学者＝支那研究者たらしめんとする岡本正文の狙いが理解できよう。

このように、支那語学習・教育には「最新」の清国事情を知ることが必要であり、そのためにできるかぎり同時代的な資料を用いて支那語教材を作成しようとする岡本正文の支那語教育観が現れている

3. 矢野藤助『支那笑話新編』により大成された支那笑話による支那語テキスト

(1) 矢野藤助について

矢野藤助は明治41年（1908）に東京外国語学校に入学し、明治44年（1911）に卒業した第12回卒業生の1人である。卒業後は名古屋第三師団将校外国語研究会講師となる。その後の経歴は、大正14年（1925）に出版された『華語童話読本』中には「東京府立第二商業学校教諭」とあり、昭和7年（1932）の『標準支那語講座』にも同様に「東京府立第二商業学校教諭」となっている。昭和16年に編まれた『実用支那語書簡文』には「龍谷大学教授矢野藤助」と記されている。

(2) 矢野藤助『支那笑話新編』について

矢野の『支那笑話新編』は2種類の版本が残っている。一つは、大正12年（1923）に文求堂より刊行されたものである。もう一つは、大正14年（1925）に同じく文求堂

より刊行されている。以下、便宜上それぞれを旧版と新版と区別するが、本論では主に新版を調査対象として扱い、用いる。

新版では巻頭に序文が記されており、『支那笑話新編』出版の様子が多少なりとも読み取ることができる。

序

編者は支那の笑話に深き趣味を有し、公務の傍隨時編纂翻訳せしもの積りて五十余種となり、昨春既に刊行せしものなるが、偶大震大火の厄に遇ひて原版灰燼に帰せり。而も書肆の切なる希望もあり、今回改版に際し、更にその尤なるもの二十余章を採択し、修正増補して面目を一新し、再び同好諸彦の資に供せんとす。巻末に附録を収む是は学者の笑話より童話への階梯たらしめんとせる編者の微意に外ならず。

それは、矢野が支那の笑話に深い興味を持っており、公務の傍ら編纂翻訳したものを50余集めて刊行したが、関東大震災により原版が燃えてしまった。しかし、文求堂の要望により、改版時に更に20余りの笑話を採用し、修正増補して面目を一新し、再び刊行するものである、といったことである。話数は旧版全51話、新版全74話より構成されている。旧版の笑話と新版の笑話を比較したところ、旧版の笑話は全てそのままの形で新版に採用されていた。そのため、今後は新版を中心に扱うことにする。

1) 出典について

旧版、新版ともに岡本正文の『支那笑話集』と同様に出典についての言及は一切ない。しかし、各笑話を見るに、「中華民國」「化學的教員」「自來水筆」「電燈」等の語が記されており、辛亥革命以前に刊行された岡本の『支那笑話集』には見られなかった言葉が確認できる。矢野は序文において「支那の笑話に深き趣味を有し、公務の傍隨時編纂翻訳せし」と述べていることから、所謂「中国」で出版された笑話を用いて、『支那笑話新編』を作成したことは確かなことであろう。また、『支那笑話新編』中にはっきりと「中華民國」という言葉があることから、矢野は中華民國になってからの笑話集を用いたことは確かである。しかしながら、矢野の『支那笑話新編』中には、清代の笑話と思しきものも存在する。そこで、まずは岡本『支那笑話集』の出典調査を参考に、『笑府』『笑林広記』等を確認したところ、新版74話中17話が『笑府』『笑林広記』等の中に見える。

矢野が「民国初期の笑話集」を使用し、テキストを作成したことは確かであろうと思われるが、それを確実なものにするためには、中華民國初期の笑話集中に

矢野の『支那笑話新編』中の笑話を確認しなければならない。そこで、“相声”の大家侯宝林により収蔵された民国時代の笑話選集『侯宝林旧藏珍本民国笑话选』（侯鑫編、2008、中華書局）中には矢野の『支那笑話新編』が9話収められている。このことから、矢野が民国において刊行された笑話集を参考にしてそのテキストを編んだことは間違いのなさそうである。

現在のところ、矢野『支那笑話新編』中の出典については27話が確認できたのみであり、今後更に調査の続行が必要である。しかし、矢野が清代の笑話集や民国初の笑話集を基本とし、『支那笑話新編』という語学教材を作成した可能性が高いことは指摘できるであろう。

以下に、その調査結果を記述する。

	タイトル	出典		タイトル	出典
1	問他自己 (一寸訊いて見る)		38	近視眼 (近視眼)	
2	開水澆火 (湯を火に注ぐ)		39	遷居旅館 (宿がへ)	
3	鼻息如雷 (鼾声雷の如し)		40	信票 (郵便切手)	
4	戴帽子用 (帽子を被ぶる役目)		41	雨点満鼻 (雨滴が鼻の中に入る)	
5	黒色空気 (空気は黒色)		42	請獣医生 (獣医を呼んで来る)	
6	無牙動物 (歯の無い動物)		43	電灯難吹 (電灯は吹き消し難い)	『侯』: 201 頁 「电灯难吹」
7	多穿幾件 (モット着る)		44	祝寿送鐘 (お祝に時計の贈物)	
8	長鼻 (長い鼻)		45	雪深二尺 (雪の深さ二尺)	『侯』: 524 頁 「请假书」
9	眼睛結冰 (眼の玉が凍る)		46	追究失鴨 (紛失の驚詮議)	
10	替父誇張 (親爺の自慢)		47	怎樣吃 (どうして食ふか)	

11	禿子 (禿頭)		48	有福 (開運)	
12	四万万人 (四億人)	『侯』: 367 頁 「死去一人」	49	魚腮塗粉 (魚にお化粧)	『侯』: 343 頁 「魚腮塗粉」
13	出殯好看 (お葬式は綺麗だ)		50	懶婦食餅 (不精の妻と餅)	『笑広』 「懶婦」
14	臭得好快 (直ぐに臭くなる)	『笑広』 「吃螺螄」	51	千金子 (金持)	『笑府』 「不奉富」
15	糊塗虫 (阿呆)		52	開竅秘法 (憂晴しの秘訣)	
16	猫姑娘 (牝の子猫)		53	驗糞趣話 (検便珍談)	『侯』: 466 頁 「驗糞趣談」
17	名人読書 (名人の読書)	『笑府』『笑倒』 『程笑広』 「名読書」	54	射雉妙法 (夜鷹に肱鉄砲)	『侯』: 337 頁 「射雉妙法」
18	正好湊数 (一緒になれば丁度よい)		55	装過袋 (過失袋)	
19	我是不去 (私は行きません)	『程笑広』 「我不去」	56	怎樣死的 (死様)	
20	自己是牛 (自分が牛になる)	『笑府』『笑広』 「借牛」	57	只要利錢 (利息だけ取る)	『笑府』 「開典」
21	祇知天文 (唯天文を知るのみ)	『侯』: 518 頁 「天文地理」	58	預繳罰費 (罰金の前納)	
22	啞子会講話 (啞者が物を言ふ)		59	頃刻即忘 (健忘症)	『笑府』 「解僧率」
23	不識字 (無筆)		60	窮人遇賊 (貧乏人賊に遇ふ)	『程笑広』 「窮人遇賊」
24	魂作潤 (靈魂の虚栄)	『笑広』「妻掇 茶」	61	也司太多 (イエスの連発)	『侯』: 274 頁 「YES 太多」
25	就有一命 (掛替のない命)		62	喜歡睡覺 (寝好き)	『程笑広』 「好睡」
26	壳母猪肉 (牝豚の肉を売る)	『笑府』「猪母 肉」	63	買我一家 (家中を買ふ)	

		『笑広』「母猪肉」			
27	把鍋打碎 (釜を打割る)		64	糟餅兩個 (酒糟二つ)	『笑府』「糟餅」 『笑広』「吃糟餅」
28	穽死泥塗 (一層泥の中で死ぬ)		65	養白翎 (白翎の飼養)	『程笑広』 「養白翎」
29	釘穿手掌 (釘を掌中に突通す)		66	雪是甚麼 (雪の正体)	
30	人面獸心 (人面獸心)		67	滑頭轎夫 (狡猾な駕籠舁)	
31	盜猪狡点 (豚泥棒)		68	魔術 (魔術師の子)	
32	騙術巧妙 (巧妙なる騙し方)		69	閻王患病 (閻魔様の病氣)	『笑府』『笑広』 「冥王訪名医」
33	自來水筆 (万年筆)		70	偷酒 (酒を盗む)	『程笑広』 「偷酒」
34	作饌半熟 (半煮えの御飯)		71	半魯 (半魯)	『程笑広』 「半魯」
35	何処最像 (何処が一番似て居るか)	『笑広』 「鬚鬚像」	72	奉贈棺木 (棺桶進上)	
36	鬼挑担 (天秤担ぎの鬼)	『笑広』 「担鬼人」	73	喜奉承 (崇められ度い)	『程笑広』 「喜奉承」
37	經手難活 (手にかかるると死ぬ)	『笑府』『笑広』 「願脚踢」	74	呆子述言 (阿呆の言草)	

(3) 先駆者たる岡本正文により提示された禁忌と、それを守る矢野藤助

岡本『支那笑話集』緒言において、岡本正文の考える「支那語教材とすべきではない笑話」の基準が示されている。それは、①「奇抜なるもの」、②「同音の言葉をもぢ」ったもの、③「卑猥」なもの、の3つである。

①「奇抜なるもの」は、編者による主観が多く作用するために具体的ではない。『支那笑話集』では当時の岡本の考える「奇抜ではない」笑話が採録されたにすぎないの

である。社会や時代の変化すれば岡本自身が考える「奇抜」という語の意味内容も変化する可能性があり、「奇抜なるもの」は問題を抱える基準であろう。

これに対し、②「同音の言葉をもぢ」ったもの、および、③「卑猥」なもの、という基準はわかりやすい基準である。つまり、諧音による笑話と「シモ」がかった笑話は語学学習教材としては採用しないということである。

以上のように岡本により示された基準は矢野藤助による『支那笑話新編』においても影響を与えたと思われる。当然のことながら、矢野も『支那笑話新編』作成時には多数の支那笑話集を手に取り、熟慮の末に採録笑話を選んだはずである。『笑府』や『笑林広記』という笑話集を確認すると確かに、諧音による笑話と「シモ」がかった笑話が見られるのだが、矢野は『支那笑話新編』には収録していないのである。この事実こそまさに矢野が岡本の「3つの基準」を遵守しながら、そして、岡本の『支那笑話集』を意識しながら『支那笑話新編』を作成した証拠であろう。さらに、矢野が東京外国語学校卒業生であり、岡本正文は当時の東京外国語学校教授であったことを考慮すれば、矢野が岡本の『支那笑話集』を意識していたことは明白なのではなからうか。ちなみに、岡本『支那笑話集』と矢野『支那笑話新編』はともに文求堂書店から刊行されている。

また、岡本の「3つの基準」は当時の支那笑話の翻訳にも影響を与えている可能性が存在する。それは、大正14年（1925年）12月、偕行社より発行された佐々木凡禪による『曙光の支那 附録支那笑話集』である。その序文には、

支那の笑林廣記を翻譯して見たが、猥褻なものが多くて原本を讀むには差支へはないが、是をここに筆にすることは出来ない、また流石に支那は文字の國だけあつて、詩や文字や對句を弄したものが誠に多い。讀んで居ると興味津々たるものがある。けれども是を日本文に翻譯して見ると却つて索然たるもので、其の寸鐵殺人的の妙句が生きて來ない、で遺憾乍ら此の種のもののお大半も省畧しなければならなかつた。だから此の書の内容は笑林廣記のうち的一部分に過ぎないものであつて、成るべく卑近なそしてわかり易いもののみを採つて置いたのである。

とあり、「成るべく卑近なそしてわかり易いもの」、「詩や文字や對句を弄したもの」、「猥褻なもの」は、それぞれが岡本の①「奇抜なるもの」、②「同音の言葉をもぢ」ったもの、③「卑猥」なもの、の3つに該当する。岡本により提示された基準は後世にも影響を与えていることが確認される。

（4）『支那笑話新編』に見る矢野藤助の支那語教育観

矢野藤助の『支那笑話新編』は2つの版本が存在する。ともに文求堂から出版されたものであり、大正12年(1923年)のものと、大正14年(1925年)のものである。本論では便宜的に大正12年のものを旧版とよび、大正14年のものを新版とよぶ。

矢野が如何なる考えからこの書を編纂したかについて探るには、新版のみにある序文がその手がかりとなる。それは以下のものである。

序

編者は支那の笑話に深き趣味を有し、公務の傍随時編纂翻訳せしもの積りて五十余种となり、昨春既に刊行せしものなるが、偶大震大火の厄に遇ひて原版灰燼に帰せり。

而も書肆の切なる希望もあり、今回改版に際し、更にその尤なるもの二十余章を採択し、修正増補して面目を一新し、再び同好諸彦の資に供せんとす。

卷末に附録を収む是は学者の笑話より童話への階梯たらしめんとせる編者の微意に外ならず。

この序文からは矢野が「支那の笑話に深き趣味」を持っていたことがわかる。だからこそ、「公務の傍随時編纂翻訳」したのであり、それほどまでに、彼は支那笑話を好んでいたのである。また、旧版だけでなく、「修正増補」した新版も刊行することができたということは、この『支那笑話新編』が人びとから一定の評価を受け、購買者もそれなりにいたことを表している。

出典調査の結果、矢野藤助が清代に編まれた笑話集を使用している可能性は高いものの、それだけではなく、中華民国になってから中華民国で出版された最新の支那笑話集を種本として、この『支那笑話新編』を編纂していることも明らかとなった。これは、「日本の支那語学習者に「最新の笑話」を学習教材として提供したい」という矢野の支那語教育観のひとつの現われであろう。また、収録された笑話には、第5「黒色空気」などの様に学校を舞台に生徒と教師が登場するものが多数ある。ここから中華民国の学校の様子を窺い知ることができる。この他、第12「四萬萬人」を学習すれば、中華民国の人口が4億人であると知ることができるなど、中華民国の状況を理解することができる笑話が多く存在する。この『支那笑話新編』を通して、支那語を学習することができる上に、当時の中華民国事情も学ぶことができるのである。

このような教育観のほかに、岡本正文の教育観を受け継いでいることも指摘できる。それは、岡本正文が支那語学習教材としての支那笑話を「発見」し、そして、語学教材としては適さない支那笑話を定めたが、その考えを矢野藤助も受け継いでいるのである。つまり、『支那笑話新編』に収録された笑話は全て、岡本が示した語学教材としてはならない笑話、つまり①「奇抜なるもの」、②「同音の言葉をもぢ」ったもの、③

「卑猥」なもの、という3つの禁忌を順守しているのであって、これらの禁忌を破るような笑話は収録されていないのである。ここからも矢野の教育観の一端を読み取ることができよう。

以上のように、矢野藤助は「最新の支那笑話」を用い、語学だけではなく、中華民国事情を学ぶことができるテキストである『支那笑話新編』を作成した。そこには、岡本正文が示した3つの禁忌を順守する矢野の姿を見ることができた。このような教育観を読み取ることができるのだが、序文末の「巻末に附録を収む是は学者の笑話より童話への階梯たらしめんとせる編者の微意に外ならず」という記述は見逃すことはできない。矢野藤助は「支那笑話を学んだ先には支那童話がある」ということを支那語学習者に提示したのであり、支那笑話から支那童話へと導こうとしていたのである。

つまり、矢野藤助は支那語学習教材として支那笑話よりも支那童話を高く評価しているのである。ここから、矢野の「支那笑話の学習のみにとどまって欲しくはない」という学習者への思いが感じられ、支那語学習者がさらなる高みに到るように望んでいる支那語学者の姿を見ることができる。

4. テキスト作成の材料とその方法

矢野藤助により刊行された『支那笑話新編』は大正末期の日本社会に受け入れられたためであろう、大正12年（1923年）に初版を出した2年後の大正14年（1925年）に文求堂書店に求められ改版した『支那笑話新編』を世に出した。しかしながら、中国語教育史の上で支那笑話を語学学習教材として「発見」し、テキストとして出版したのは矢野藤助が最初ではない。それは、矢野藤助が東京外国語学校在学時の教授であった岡本正文である。

岡本正文の『支那笑話集』は、同時代的資料である『笑林広記』などの清朝時代の笑話集を中心的に用いて作成されていた。矢野藤助の『支那笑話新編』も岡本正文と同じように、同時代的資料である中華民国において刊行された笑話集を元に自己の『支那笑話新編』を作り上げていた。また、矢野藤助は岡本正文により示された教材としてはいけない支那笑話を使用することはなく、禁忌を順守していた。

矢野藤助の『支那笑話新編』は岡本正文の『支那笑話集』の影響をまったく受けていないとは言えない。ともに、同じような方法によりテキストが作成されていたのであり、まさに岡本正文『支那笑話集』は矢野藤助『支那笑話新編』の前史に存在するものであって、パイオニアといえるものであった。

第6章 童話テキストについて

六角恒廣は『中国語書誌』において、「これまでの中国語教科書には、ほとんど見られなかった中国の童話をあつかったものが出るようになった。それは三点も集中的にこの大正の後半期に出ている。中国の児童文学の作品は、従来ほとんどなく、やはりこの時期ごろから出てきたからであろう。この童話を教科書にとり入れたのは、伝統的な問答や談論などの形式とは異なったものを採用して新風を入れようとしたのかもしれない（六角 1994 : 163 頁）、と述べるように、大正末期になると、支那語を学習するために支那童話を用いたテキストが刊行される。それらは、大正 12 年（1923 年）に矢野藤助により文求堂から出された『支那笑話新編』附録童話から始まり、以下、大正 13 年（1924 年）に矢野藤助『日支對譯支那童話集』が文求堂から刊行される。大正 14 年（1925 年）には改版された矢野藤助の『支那笑話新編』の巻末に再び附録童話が収められている。同年中、米田祐太郎の『原文對譯支那童話歌謡研究』が大坂屋號書店から出版され、矢野藤助の『華語童話読本』も小林三林堂から世に出されている。

本章では、以上のように大正末期にまとまって刊行された支那語学習童話テキストが、どのような資料を使用し作成されたかについて考察を加え、その出典をあきらかにしていく。これにより、当時の支那語学者がテキストを作成する時に如何なる方法で作成したかが解明でき、さらに、中華民國文化と支那語学者によるその受容に関する関係を明らかにすることができるからである。

1. 矢野藤助『支那笑話新編』附録童話

矢野藤助は大正 12 年（1923 年）に『支那笑話新編』を文求堂から刊行した。その巻末には、附録支那童話として以下の童話が収録されている。1) 分鉛筆、2) 鷓蚌相争、3) 狐假虎威、4) 石獅、5) 小英雄、6) 郷鼠和城鼠、7) 草船借箭、である。

矢野は大正 14 年（1925 年）に、改版した『支那笑話新編』を文求堂から刊行している。旧版では序文も跋文も無く、まったく出版に関する事情が不明であったが、新版には序文があるために、その出版事情が多少なりとも判明する。この序文中の笑話に関する事については、すでに第三章で述べてあるため割愛する。ここでは附録童話に関することのみを取り上げて述べる。矢野はその序文で「巻末に附録を収む是は学者の笑話より童話への階梯たらしめんとせる編者の微意に外ならず。」と述べている。このことから、矢野の支那笑話と支那童話に対する捉え方が理解できよう。このように序文で述べながらも、出典元に関する言及は全く無く、矢野がどのような資料から『支那笑話新編』附録童話部を作成したかは全く不明である。よって、まったくの手探り状態であるが、支那童話の内容やタイトルを手がかりに、矢野が使用したであろう支那童話の出典調査を行っていく。

1) 分鉛筆

3人の学生が17本の鉛筆を購入した。しかし、分けるときになると、話がまとまらない。そこへ友人がやってきて、知恵を発揮する。そして見事にそれぞれが希望する本数に分割し、問題が解決する。

2) 鵜蚌相争

ある日、ハマグリが太陽にあたっていると、鵜がそれを見て食べようとする。ハマグリは殻を閉じて、鵜のクチバシをはさんでしまう。「雨が降らなければ死ぬぞ」、「クチバシが抜けなければお前も死ぬぞ」とやりあっているうちに漁師とともに捕まえられる。いわゆる、「漁夫の利」の話であり、『戦国策』の「燕策」からの故事である。

3) 狐假虎威

虎が狐を捕まえて食べようとする。狐は「私は天命を受けて百獣の王となった、もしも私を食うと罰を受けるぞ。信じないなら私の後についてこい、私を恐れないものはいない」と言うので、虎は狐の後をついて行く。すると、獣は虎を見ると逃げてしまった。そこから虎は狐を百獣の王と信じてしまった。

いわゆる、「虎の威を借る狐」の話であり、『戦国策』の「楚策」からの故事である。

4) 石獅

ある所に兄弟と母親が暮らしていた。長男は性格が悪く、弟と母親をいじめていた。弟はとても良い人間で、母親を守っていた。ある日、母親と弟は山に逃げ出し、ボロ寺で暮らすことにした。そこには一対の石の獅子があり、突然多くの金を吐き出したので、その金を使い母親と弟は幸福に暮らした。長男も山にやって来て、金を求めたところ、獅子に手を咬まれてしまい、数ヶ月も手が抜けなかった。全ての財産を無くし、苦しい生活を過ごすことになった。

5) 小英雄

長白山周辺に暮らす少年はとても勇敢であった。妖怪に父母を食べられてしまい、敵討ちの旅にでる。途中、白兔を救う。また、二人の賊を退治した後に仲間とする。妖怪が井戸の中にいることを知り、少年は井戸の中で妖怪を退治する。そこで娘を助け出す。さらにまた、多くの財宝を発見する。二人の賊は財宝を見て、少年を裏切るが、白兔がやって来て、少年を救出する。賊は同士討ちをして、死んでいた。少年は娘を村に送り届けると、彼女と結婚し、さらに村長となって幸福に暮らした。

6) 郷鼠和城鼠

親戚同士のネズミがいた。一匹は町のネズミで、一匹は田舎のネズミである。ある日、町のネズミが田舎のネズミの家を訪ねる。出てきた食べ物はまずいものばかりであった。町のネズミは田舎のネズミを招くことにした。町の食べ物はとても美味しい

ものばかりであったが、猫の声が聞こえて大慌てで逃げる。田舎のネズミは、危険の無い落ち着いた田舎が良いと言って田舎に帰ることにした。

イソップ寓話「町のネズミと田舎のネズミ」の話である。

7) 草船借箭

諸葛孔明に嫉妬した呉の周瑜が孔明を殺そうと企む。周瑜は孔明に10万本の矢を調達するように頼む。調達できなければ死罪になってしまうというのに、孔明は簡単に引き受ける。3日目に孔明は船に藁人形を立たせ、魯肅とともに曹操の陣へ近づく。曹操は孔明たちが乗った船に大量の矢を射る。孔明は頃合いを見定めて引き上げ、そして、船に刺さった矢を回収し周瑜に渡し、殺されることはなかった。

これは『三国志演義』中の赤壁の戦における故事である。

以上のような内容の支那童話であるが、原典が『戦国策』であったり、『三国志演義』であったり、イソップ寓話であったりとバラバラであって、バラエティーに富んでいる。矢野が原典から訳出した可能性もあるが、矢野は漢文学者ではない。矢野は支那語学者である以上、やはり、矢野と同時代的な支那語資料を用いてこの附録部を作成したと見るのが妥当であろう。よって、矢野と同時代的な支那語資料を調査し、その出典を検討する。

①同時代の中華民国で刊行された児童文学専門雑誌には『児童世界』(商務印書館)、『小朋友』(中華書局)が存在する。②同時代の中華民国で刊行された児童文学シリーズなどには商務印書館『童話』『京語童話』、中華書局『中華童話』『世界童話』『中華故事』『小小説』がある。これらが刊行されていたことは『児童世界』などの巻末広告などから確認できるのだが、中華民国期に出版された各種児童文学雑誌や書籍は、その多くが中国にも現存していない状況である。それは、当時の紙の質が悪いことや、児童向けの雑誌という価値、また、日中戦争や内戦などのためであろうと思われる。日本では、当然のことながら中国と比較すれば、その保存状況は極めて悪く、国会図書館を初めとする各地の公立図書館や各大学の図書館でも中々目にすることはできない状況である。

以下に、筆者が発見した『繪圖童話大觀』(中華民国10年(1921年)、上海世界書局)は語彙や文章が非常に似ており出典の可能性が高いと推測できるため、比較のために同一文章・同一語部分に下線を引いたテキスト本文と、『繪圖童話大觀』をともに記載する。

第一 分鉛筆

三個學生一塊兒買十七管鉛筆、姓陳的學生要二分之一、姓林的要三分之一、姓胡的要九分之一、三個人分了好多時候、總找不出法子來、恰好有一個姓張的學生來了、看見他們分不出、就走到自己家裏拿一管鉛筆來、共總有十八管、姓陳的要二分之一、就給

他九管、姓林的要三分之一、就給他六管、姓胡的要九分之一、就給他兩管、三個人得十七管、其餘的一管、姓張的仍舊自己帶回去了。

(三個學生共買鉛筆十七枝；姓陳的學生要二分之一，姓林的要三分之一，姓胡的要九分之一・三個人分了好多時候，總找不出法子來・恰好一個姓張的學生跑來，看他分不出，就走到自己家裡拿一枝鉛筆來，共有十八枝・姓陳的要二分之一，就給他九枝；姓林的要三分之一，就給他六枝；姓胡的要九分之一，就給他二枝；共得十七枝，其餘一枝，姓張的仍舊自己帶回去・) (『童話大觀』)

(相違点)

①三個學生共買鉛筆十七枝(『大觀』)→三個學生一塊兒買十七管鉛筆、②共→一塊兒、三個人、③枝→管

第二 鵲蚌相爭

鵲蚌相爭這四個字、是兩方相待不下的詞句、我們書裡時常看見的、但是究竟甚麼典故、恐怕小朋友們、未必個個知道、所以我把這件事、告訴你們說罷、有一天蚌因為裡頭的肉濕了、特地開放他的壳、在太陽下曬着、鵲見了、以為這個肉可吃、就拿嘴來啄這蚌肉、蚌立刻關閉他的壳、把鵲的嘴箝在裡面、鵲就開口說、今天不下雨、明天又不下雨、怕是你不死麼、蚌說、今天我不放你出、明天又不放你出、看你有不死在這裡麼、有一個漁翁走過、說道、這鵲和蚌、簡直是自己尋死、便拿鵲和蚌帶回家去了、你們也看見漁翁得利的成語麼、這句話就是從這件故事出來的、可見兩個相爭總沒好處的。

(鵲蚌相爭這四個字，是兩方相持不下的詞句，我們書裡時常看見的；但是究竟什麼出典？恐怕小朋友們，未必個個知道，所以我把這件事，描寫在下面・有一天蚌因為裡頭的肉濕了，特地開放他的壳，在太陽下曬著・那鵲見了，以為這肉可吃，便拿嘴來啄這蚌肉，蚌立刻關閉他的壳，把鵲的嘴箝在裡面・鵲就開口說：「今天不下雨，明天又不下雨，怕你不死麼」？蚌說：「今天我不放你出，明天又不放你出，看你有不死在這裡麼」？話還沒有說完，剛有一個漁翁走過・說道：「這鵲和蚌，簡直是自己尋死」・便拿鵲和蚌帶歸家裡去・小朋友！你也看見「漁翁得利」的成語麼？這句話就是從這件故事出來的，可見兩個相爭總沒好處的)・(『童話大觀』)

(相違点)

①什麼(『大觀』)→甚麼、②描寫在下面→告訴你們說罷、③便→就、④帶歸家裡去→帶回家去了、⑤小朋友！→省略されている

第三 狐假虎威

老虎捉到一隻狐狸、張着嘴要吃他、狐狸就說、我是受了天命、來做獸王的、你若吃我、天就要罰你、這個時候兒老虎總不信他的話、狐狸又說、你不信麼、那麼你跟我去、各獸見了我、沒有不怕的、這是眼前便可做到的試驗、老虎想這隻狐狸、總是我吃的、就是跟了他也沒有甚麼妨害、不過早晚些罷了、這麼着便跟了他走、狐狸走在面前、老虎跟在後面、別的獸見了老虎、都爭先的逃走了、老虎見了這場光景、確實相信狐狸是獸的王、誰知他們是怕老虎、不怕狐狸呢、古語兒說的「狐假虎威」這句話就是這個出典、一個人靠着別人的勢力、恐嚇別人、都是和這隻狐狸一樣的。

（老虎捉到一隻狐狸，張開口要來吃他，狐說道：「我是受了天命，來做獸王的・你吃我，天就要罰你了」・

這時老虎總不相信，狐狸又說道：「你不相信麼？那麼你跟我走！各獸見了我，沒有不怕的，這是眼前便可做到的試驗」・

老虎想這隻狐狸，總是我吃的，就是跟了他也沒有什麼妨害，不過遲早些罷了・於是便跟了他走・

狐狸走在前面，老虎跟在後面；別的獸見了老虎，都爭先的逃走了・老虎見了這種光景，確實相信狐狸是獸的王・那知他們是怕老虎，不怕狐狸呢」？

古語說的「狐假虎威」，這句話就是這個出典・一個人靠着他人的勢力，來恐嚇別人，都和這隻狐狸一樣的・）（『童話大觀』）

（相違点）

①張開口（『大觀』）→張着嘴、②狐→狐狸、③說道→說、④這時→這個時候兒、⑤走→去、⑥什麼妨害，不過遲早→甚麼妨害、不過早晚、⑦這種→這場、⑧古語→古語兒

「第四 石獅」であるが、商務印書館『京語童話』シリーズ第二編に「石獅子」とあるが、筆者は未見である。

「第五 小英雄」も商務印書館『京語童話』シリーズ第七編に「小英雄」とあるが、筆者は未見である。

第六 鄉鼠和城鼠

從前有兩隻老鼠、原來是親戚、一個住在鄉下的、便叫做鄉鼠、一個住在城裏的、便叫

做城鼠、有一天城鼠到鄉下去拜訪鄉鼠、鄉鼠便留下款待他、但是拿來吃的東西、不過大麥、番芋、毛豆罷了、城鼠看了這樣粗惡的東西、實在不能下口、城鼠說、啊、你真苦了、吃沒有好滋味、住沒有好房子、和我比較起來、真是天和地的分別了、何不跟我到城裏去、看看我的生活哩、隔了幾天、鄉鼠也去拜訪城鼠了、城鼠便領他到廚房裡去吃糖、鄉鼠吃了一會兒、味道果然很好、比那大麥、番芋、好得多了、忽然砰的一聲、那城鼠附着鄉鼠的耳邊說、走、快走、鄉鼠看見勢色不對、只好跟着城鼠逃了、嚇得鄉鼠戰戰兢兢、連話也說不出來、城鼠說、不妨、這是主人拿東西去的、主人拿好了東西、仍舊把廚房的門關好了、城鼠說、來、跟我來、廚房裡還有雞蛋糕、比那糖的味道還要好得多哩、鄉鼠聽了這話、幾乎垂涎滴下、又跟着去吃了、可惜廚房裏的雞蛋糕、只有一塊、鄉鼠吃了一下、已經沒有因為這個味道很好、好像連盛雞蛋糕的盒子、也要吞下去、正在吃得有味的時候兒、又聽見乒乒一聲、城鼠說、走、快走、嚇得鄉鼠心驚膽裂、回轉身來、便跟城鼠逃了、逃到洞裏、鄉鼠說、好危險呀、城鼠說、你真是鄉下人的面目、這麼樣的小事、何必大驚小怪呢、那是主人的兒子、他拿個皮老虎就要走的、裏面還有芙蓉糕、你若嘗到這個味道、你必定說是天上的仙糕了、去、去、請你嘗嘗這個滋味罷、兩隻老鼠又到廚房裡去吃了、正要把糕拿來吃、忽然聽見哮的一聲、城鼠仔細一察、原來是隻貓兒、便很輕的對鄉鼠說、走、快走、可憐那鄉鼠沒練習過這般工夫、幾乎被貓抓住、那鄉鼠逃得汗流如雨、上氣接不着下氣的說、這裡……有這樣……危……險……麼、城鼠說、是的、鄉鼠辭說、這是我沒有福氣、與其受了危險去吃些好東西、不如安靜的去吃那糟糠了、便別了城鼠回到鄉下去了。

（從前有兩隻老鼠，原來是親戚·一個住在鄉下的，便叫做鄉鼠；一個住在城裏的，便叫做城鼠·有一天城鼠到鄉下去拜訪鄉鼠，鄉鼠便留下款待他；但是拿來吃的東西，不過大麥，番芋，毛豆罷了·城鼠看了這樣粗惡的東西，實在不能下口·城鼠說：「啊！你真苦了·吃沒有好滋味，住沒有好房子；和我比較起來，真是天和地的分別了·何不跟我到城裏去，看看我的生活哩」·隔了幾天，鄉鼠也去拜訪城鼠了·城鼠便領他到櫥裏去吃糖·鄉鼠吃了一會，味道果然很好，比那大麥，番芋，好得多了·忽然砰的一聲，那城鼠附着鄉鼠的耳邊道：「走！快走！」鄉鼠看見勢色不對，只好跟着城鼠逃了·嚇得鄉鼠戰戰兢兢，連話也說不出來·城鼠道：「不妨，這是主人，他拿些東西就去的」·主人拿好了東西，仍舊把櫥門關好·城鼠道：「來！跟我來！櫥裡還有雞蛋糕，比那糖的味道還要好得多哩」·鄉鼠聽了這話，幾乎垂涎滴下，又跟著去吃了·可惜櫥裏的雞蛋糕，只有一塊；鄉鼠吃了一下，已經沒有·為了這個味道很好，好像連盛雞蛋的盒子，也要吞下去·剛在吃得有味的時候，又聽見乒乒一聲；城鼠道：「走！快走！」嚇得鄉鼠心驚膽裂，回轉身來，便跟城鼠逃了·逃到洞裏，鄉鼠道：「好危險呀！城鼠道：「你真是鄉下人的面目，這些小事，何必大驚小怪呢？這個是主人的兒子，他拿個皮老虎就要走的·裏面還有芙蓉糕，你若嘗到這個味道，你必定說是天上的仙糕了·去！去！請你嘗嘗這

個滋味罷」·兩隻老鼠又到櫥裡去吃了·正要把糕拿來吃，忽然聽見哮的一聲，城鼠仔細一察，原來是隻貓兒·便很輕的對鄉鼠道：「走！快走」！可憐那鄉鼠沒練習過這般工夫，幾乎被貓抓住·那鄉鼠逃得汗流如雨，上氣接不着下氣的說道：「這裡···有這樣···危···險···麼」？城鼠道：「是的」·鄉鼠辭道：「這是我沒有福氣，與其受了危險去吃些好東西，不若安靜的去吃那糟糠了」·便別了城鼠回到鄉下去·(『童話大觀』)

(相違点)

①道(『大觀』)→說、②櫥裏→廚房裡、③一會→一會兒、④他拿些東西就去的→這是主人拿東西去的、⑤把櫥門關好→把廚房的門關好了、⑥櫥裡→廚房裡、⑦為了→因為、⑧雞蛋→雞蛋糕、⑨剛在→正在、⑩時候→時候兒、⑪這些→這麼樣的、⑫這個是→那是、⑬不若→不如

第七 草船借箭

諸葛亮字孔明、心想聯絡東吳、共拒曹操、所以同魯肅來見周瑜、不料周瑜妒嫉孔明、屢次要想法子殺死他、有一次周瑜聚集衆將、請孔明議事、孔明很喜歡到來、坐定、瑜問孔明說、這幾天裡頭、要同曹軍交戰、水路上最要緊的兵器是甚麼、孔明說、大江上面、弓箭是最要緊的、周瑜說、先生的話正合我意、但是軍中箭不敷用、我要想請先生監造十萬枝箭、您別推却、孔明說、都督見委、自當效勞、可不知道那一天要用呢、周瑜說、十天為期、孔明說、曹軍不多幾天就要到了、等候十天、必定誤大事、亮只消三天、便可拜納十萬枝箭、周瑜說、軍中不能兒戲、孔明說、三天不納、甘當重罰、告辭出去、周瑜對魯肅說、他自己要死、不是我逼他、我只要吩咐軍匠人們、故意耽悞、應用的東西、都不齊備、他必定誤了期限、那時定罪、有甚麼說話、你可以去探他虛實魯肅奉命來見孔明、孔明說、子敬(魯肅的號)救我、請你借給我二十隻船、每船要三十個軍士、船上都用青布做幔、各備束草一千多個、分布兩邊、我別有妙用、可別叫公瑾(周瑜的號)知道、魯肅答應、回去告訴周瑜說、孔明並沒有動靜、周瑜很疑惑說、三天之後看他怎麼覆我、魯肅出來私自撥輕快船二十隻、等着孔明調用、第一天第二天孔明不動手、到了第三天四更的時候兒、孔明偷々兒的請魯肅到船裡、肅問說、你為甚麼召我、孔明說、請你一塊兒去取箭、就叫兵丁把二十隻船、用長索連着、徑望北岸進發、這天夜裡大霧漫、對面不能看見、孔明催船前進、到了五更的時候、船近曹軍的水寨、孔明叫把船隻頭西尾東、一帶擺開、一齊擂鼓吶喊、孔明和魯肅在船裡喝酒做樂、曹寨中聽得擂鼓吶喊、曹操傳命、撥水軍弓弩手齊放亂箭、又去旱寨裡喚幾千弓弩手來助射、大約有一萬多個人、都向江中放箭、如同雨發、孔明又叫船回轉、頭東尾西、逼近水寨受箭、等到日高霧散、孔明令收船速回、兩邊草束上已排滿箭枝、回到南岸、收集箭枝、交給周瑜、周瑜大驚為神人、不敢加害了。

(諸葛亮字孔明，心想聯絡東吳，共拒曹操，所以同魯肅來見周瑜。不料周瑜妒嫉孔明，屢次要想法子殺死他。有一次周瑜聚集眾將，請孔明議事。孔明很喜歡到來，坐定。瑜問孔明道：「這數天裡頭，要同曹軍交戰，水路上最要緊兵器是什麼東西？」孔明道：「大江上面，弓箭最要緊。」周瑜道：「先生的話正合我意，但軍中箭不彀用，要想請先生監造十萬枝箭，幸勿推。」孔明道：「都督見委，自當效勞，但不曉得那一天要用？」周瑜道：「十天為期。」孔明道：「曹軍不多幾天就要到了，等候十天，必誤大事，亮只消三天，便可拜納十萬枝箭。」周瑜道：「軍中不能兒戲。」孔明道：「三日不納，甘當重罰」；辭別出去。周瑜封魯肅道：「他自送死，不是我逼他；我只要吩咐軍匠人等，故意遲延，應用物件，都不齊備，他必定誤了日期，那時定罪，有什麼說話；你可去探他虛實。」肅領命來見孔明。孔明說道：「子敬—魯肅的號—救我！請你借我二十隻船，每船要軍士三十人，船上都用青布做幔，各備束草千餘個，分布兩邊，我別有妙用，只不可叫公瑾—周瑜的號—知道。」魯肅應諾，回報周瑜，說孔明並沒有動靜。周瑜大疑道：「三日後看他怎麼覆我。」魯肅出來私自撥輕快船二十隻，聽候孔明調用。第一天第二天孔明都不動手，到了第三天四更時分，孔明密請魯肅到船裡。肅問道：「公為什麼召我？」孔明道：「請你同去取箭。」就叫兵丁把二十隻船，用長索連著，徑望北岸進發。這夜大霧漫天，對面不能相見，孔明催船前進，到五更時分，船近曹軍水寨。孔明叫把船隻頭西尾東，一帶擺開，一齊擂鼓吶喊，孔明和魯肅在船裏飲酒取樂。曹寨中聽得擂鼓吶喊，曹操傳命，撥水軍弓弩手齊放亂箭；又去旱寨裡喚幾千弓弩手來助射，約有一萬餘人，都向江中放箭，箭如雨發。孔明又叫船回轉，頭東尾西，逼近水寨受箭。等到日高霧散，孔明令收船速回，兩邊草束上已排滿箭枝。回到南岸，收集箭枝，交給周瑜。周瑜驚為神人，不敢加害了。）

(『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第二冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①道(『大觀』)→說、②數天→幾天、③什麼→甚麼、④弓箭最要緊→弓箭是最要緊的、⑤但→但是、⑥幸勿推却→您別推却、⑦但不曉得→可不知道、⑧なし→呢、⑨必→必定、⑩三日→三天、⑪辭別→告辭、⑫他自送死→他自己要死、⑬軍匠人等→軍匠人們、⑭遲延→耽悞、⑮なし→的、⑯日期→期限、⑰可→可以、⑱領→奉、⑲你借我→你借給我、⑳軍士三十人→三十個軍士、21)千餘個→一千多個、22)只不可叫公瑾→可別叫公瑾、23)應諾→答應、24)回報→回去告訴、25)大疑道、三日後→很疑惑說、三天之後、26)聽候→等着、27)都→なし、28)時分→時候兒、29)孔明密請→孔明偷偷兒的、30)公→你、31)請你同去取箭→請你一塊兒去取箭、32)這夜→這天夜裡、33)相見→看見、34)到五更時分→到了五更的時候、35)在船裏飲酒取樂→在船裡喝酒做樂、36)約有一萬餘人→大約有一萬多個人、37)箭如雨發→如同雨發、38)驚為神人→大驚為神人

以上のように、相違点としては、量詞（枝：管）、「話す」という意味の「道」を「説」としている、什麼→甚麼、などが目立つ。このほかに、「昵の使用、兒化、介詞「給」など北京語意識したような変換が存在する。しかしながら、全体的には大きく文章を変えたというような箇所は無く、矢野は『繪圖童話大觀』を使用し、この附録部を作成した可能性は極めて高いとすることができる。だが、筆者未見の資料の存在は否定できない。よって、矢野は『繪圖童話大觀』、もしくは『繪圖童話大觀』と非常に近い関係にある資料を用いたと推測できる。

2. 矢野藤助編『日支對譯支那童話集』

矢野藤助は大正 13（1924 年）に文求堂から『日支對譯支那童話集』を刊行する。全 23 課であり、長い話は複数の課に分けられており、総話数は 19 話である。それらは、1) 掩耳盜鈴、2) 就是你、3) 枇杷案、4) 橘子的故事、5) 九曲珠、6) 月下的傻孩子、7) 馬頭娘、8) 狐假虎威、9) 田螺精、10) 笨賊、11) 狐仙帽、12) 鮫人之涙、13) 矮姑娘、14) 審石頭、15) 打冰山①、16) 打冰山②、17) 人生牛角①、18) 人生牛角②、19) 人生牛角③、20) 人生牛角④、21) 瓦盆告狀、22) 孺子可教、23) 不要賴罷である。

本テキストは中国の故事成語の物語や、民間伝承、笑話、包公逸話などを収め、幅広い内容となっている。筆者は『児童世界』や各種童話集を中心に調査したのだが、収録話が多彩なため全体としてその出典が判明しなかったものが多い。「馬頭娘」や「田螺精」は中国の「民間故事」であり、童話誌よりも中国民俗関係誌が出典元の可能性が指摘できよう。

『童話大觀』に収められた童話との比較は数話であるが、そこから矢野藤助のテキスト編纂方針が推測できる。それは、「原文（＝出典）に追加情報として情景描写や登場人物の心理描写を加え、より学習者が物語を理解しやすくなるように配慮している」ということである。この点は後述の米田祐太郎とは大きく異なるテキストの編集態度である。

なお、『童話大觀』との相違点は「著」→「着」、兒化、「道」→「説」、詳細な描写などが代表的な違いである。

以下に比較のために出典と思われる話が見つかったものは、比較のために同一文章・同一語部分に下線を引いたテキスト本文と、出典元の文章を記載し事例として数点挙げる。なお、事例として挙げたもの以外のものは、資料編に収める。

（1）事例

第八 狐假虎威

（本文）

南山的上邊，住着一隻老虎。有一天，他在山上，到各處尋找吃食，忽見樹林子裏，臥着一隻狐狸。老虎一看，連忙躡進到那兒，對着狐狸，張開大嘴就要吃。狐狸看見老虎要吃他，心裏想道「我若是逃跑，怕是跑不了，若是和他打仗，又怕不是他的對手，這可怎麼辦好呢。」他一著急，就想出一個好法子來，故意不慌不忙，作出不害怕的樣子來，和老虎說「你好大的胆子，你莫非是要吃我麼。我是受了天命，來做百獸之王。你若吃我，天就要罰你了。」老虎一聽，總不相信，心裏想道「我們老虎，是百獸之王，自古以來，人人都知道，小小的狐狸，身體很微弱，怎麼能做獸王的。他大概是撒謊。」便對狐狸說道「你說的話我斷不信。」狐狸又說道「你不相信麼，那麼你就跟我來看一看，所有山上的走獸，遠遠的看見我，沒有不怕不躲避的。這是眼前便可做到的試驗。」老虎想「這隻狐狸，總是我吃的，就是跟了他也沒有甚麼妨害，不過遲早些罷了。」於是便跟了他走。狐狸走在前面，老虎跟在後面，緊緊的跟隨。在路上遇見了許多的走獸，果然一見老虎都爭先的逃走了。老虎見了這個景象，確實相信狐狸是獸的王，不但不敢吃他，反倒向狐狸陪罪，回洞去了。那知他們是怕老虎，不怕狐狸呢。老虎不明白這個道理，便上了狐狸的檔了。

古語說的「狐假虎威，」這句話就是這個出典。一個人靠着別人的勢力，來恐嚇別人。都和這隻狐狸一樣的。

(參照)

老虎捉到一隻狐狸，張開口要來吃他， 狐說道：「我是受了天命，來做獸王的・你吃我，天就要罰你了」・

這時老虎總不相信，狐狸又說道：「你不相信麼？那麼你跟我走！各獸見了我，沒有不怕的，這是眼前便可做到的試驗」・

老虎想這隻狐狸，總是我吃的，就是跟了他也沒有什麼妨害，不過遲早些罷了・於是便跟了他走・

狐狸走在前面，老虎跟在後面；別的獸見了老虎，都爭先的逃走了・老虎見了這種光景，確實相信狐狸是獸的王・那知他們是怕老虎，不怕狐狸呢」？

古語說的「狐假虎威」，這句話就是這個出典・一個人靠着他人的勢力，來恐嚇別人，都和這隻狐狸一樣的・

(『繪圖童話大觀第一種 兒童物語』第一冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

① (『童話大觀』) には確認できない部分が多数ある、「南山的上邊，住着一隻老虎。有一天，他在山上，到各處尋找吃食，忽見樹林子裏，臥着一隻狐狸。老虎一看，連忙躡進到那兒」、「狐狸看見老虎要吃他，心裏想道「我若是逃跑，怕是跑不了，若是和他打仗，又怕不是他的對手，這可怎麼辦好呢。」他一著急，就想出一個好法子來，故意不慌

不忙，作出不害怕的樣子來，和老虎說「你好大的胆子，你莫非是要吃我麼。」、「老虎一聽，總不相信，心裡想道「我們老虎，是百獸之王，自古以來，人人都知道，小小的狐狸，身體很微弱，怎麼能做獸王的。他大概是撒謊。」便對狐狸說道「你說的話我斷不信。」」、など。これらは心理描写が中心であり、この描写があることにより学習者は情報を理解しやすくなっていると思われる。②什麼（『童話大觀』）→甚麼、③這種→這個、④他人→別人

矢野藤助による『支那笑話新編』附録童話にも「狐假虎威」は収録されているが、その文章は大きくことなる。しかしながら、『童話大觀』「狐假虎威」の文章もほぼ全文が、そのまま使用されていることも確認できる。また、末尾の「古語說的「狐假虎威」這句話就是這個出典。一個人靠着別人的勢力，來恐嚇別人。都和這隻狐狸一樣的」も『童話大觀』とまったく同じである。矢野が『童話大觀』ではない資料を出典元にした可能性は否定できないが、矢野は「支那笑話新編」附録童話部「狐假虎威」執筆後、さらに教材としての質を高めるべく『童話大觀』「狐假虎威」に対し、学習者がより文章を理解しやすくなるように必要な情報を書き加えて、この「狐假虎威」を作り上げたと推測できる。

第十四 審石頭

（本文）

在熱鬧的街市裏，忽然有一個小孩子，嗚々の哭泣，手裏提着一個空藍，滿汗着油漬，許多的人圍着他，有的笑着，有的呆着，這哭泣的孩子，格外覺得悲傷。

「喝，喝，轎子來，讓開……」

許多看客，被這一片聲音激動了，立刻變換目光，向那邊看，一個人說「縣大老爺包龍圖經過這裏了，快讓開罷。」但是這小孩子，仍舊嗚々の哭着。

包龍圖坐着轎子經過這裏的時候，聽得哭聲，很是奇怪，就喚停轎，走出轎來，向這小孩子問說「你爲甚麼哭得這樣悲傷呢。」小孩子一面哭，一面斷斷續續的回答說「我是賣油條的，今天賣完了，賺得二百個銅錢，放在藍裏，要去買米的，因爲脚裏沒有力，把藍放在石頭上，略坐片刻，想不到正要起身，藍裏的錢，忽然不見了。」說完，又大哭起來了。

包龍圖安慰他說「你不要哭罷，你的藍既然放在石頭上，自然是石頭偷你的錢，我現在帶這石頭回衙門，重重審問，你的銅錢，一定可以仍舊收回。」說着，喚差役把石頭抬回衙門裏去，叫小孩子跟着走，自己也上轎去了。許多看客，聽得包龍圖說要審石頭，十分奇怪，引得街市裏的人，都說「包龍圖今天要審石頭了，快去看，快去看。」各人接二連三的走進衙門，立在堂上，等候審問不多時，包公上堂，對石頭說「你要偷人家的錢，須得重打四十板。」差役齊聲說「是，是。」一二三四五……連續的打了幾下，板

就斷了，看審的人哄堂大笑。

包龍圖聽着聲音，拍案大怒說「你們都沒有規矩。」一面叫差役把大門關起來，一面說「罰衆人坐牢監三天。」衆人都嚇呆了，稍停片刻，大家都跪下來求饒，龍圖說「饒也使得，但是每人必須罰錢三十文，方可出去」衆人說「願意，願意。」包公就叫差役抬一缸水來，放在堂上等到抬來，就向衆人說「大家把錢投入缸中」衆人不敢怠慢，挨次投錢入水。輪到末一個人，水面上忽然有油光浮起，包龍圖喝說「停，你這賊兒，快快招來」這數人還要抵賴，包龍圖早已叫差役把他身邊的錢搜出來，一看都帶着油漬，同那小孩子所失的合算，共計二百個，一點兒不錯差役喚小孩子來，如數還他，小孩子謝着包縣官，很得意的去了。

(參照)

包龍圖鐵面無私，碰著不論什麼稀奇古怪的案子，他終能審得清楚，照律嚴辦，因此當時百姓都叫他活閻羅。

包龍圖做縣官的時候，坐在轎子裏，經過市頭，看見一個小孩坐在路旁，嗚嗚的哭泣，手中提著一隻空籃，龍圖就停轎問道：「小孩子，你爲什麼在這裡哭泣？」

那小孩跪著道：「小人是賣油炸燴的，今天賣完了，賺得二百銅錢，放在籃裡要去買米的，因爲脚裏沒有力，把籃放在石頭上，略坐片刻，正要起身，那籃裡的錢忽然不見了」，說著又哭起來。包龍圖道：「你的籃既然放在石上，自然是石頭偷的」。

忙喝差役，把這石頭擡到衙門裡，等候審問。那時滿街百姓都說包青天要審石頭了，快來看。

龍圖上堂，叫左右把石重打四十板，那知打了幾下，板就斷了，來觀看的百姓大笑起來。龍圖拍案大怒道：「你們好沒有規矩」，

叫公人們把門關住，罰衆人坐牢監三天，衆人都跪下求饒，龍圖道：「饒也使得，每人須罰錢二十文，方可出去」。

就叫公人擡一缸水來，各人把錢投入缸中，只見第三人投錢入水時，水面忽有油光浮起，便喝住道：「狗賊，快快招來」，

那人還要抵賴，龍圖叫左右把他身邊的錢搜出來，同他所投的合算，共計二百，如數還了小孩，把那賊重打百板，同衆百姓一齊釋放。你道這案子審得奇怪不奇怪。

(『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第一冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①手中(『童話大觀』)→手裏、②說著又哭起來→說完又大哭起來了、③道→說、④快來看→快去看、快去看、④大笑起來→哄堂大笑、⑤左右→差役、⑥二十文→三十文

米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謡研究』にも、この「審石頭」は収録されている。

すでに指摘したように、米田は『童話大観』の文章をほぼそのままの形で自己の『原文對譯支那童話歌謡研究』に使用している。しかし、矢野はこのように『童話大観』の文章をそのままの形で用いてはいない。「狐假虎威」と同じように『童話大観』の文章を用いつつも、心理描写や情景描写などの必要な情報を追加記入し、学習者がより理解しやすいように工夫していると言えよう。また、矢野が『童話大観』以外の童話集を参考にした可能性も否定はできないが、やはり「狐假虎威」と同様に『童話大観』本文がそのまま収められていることから、『童話大観』もしくは『童話大観』に近い関係にある童話集を用いた可能性が高いと指摘できる。

3. 米田祐太郎著『原文對譯支那童話歌謡研究』

米田祐太郎による『原文對譯支那童話歌謡研究』は大正14年(1925年)に大阪屋號書店から刊行される。このテキストに関し、中国人児童文学研究者の季穎による『日中児童文学交流史の研究—日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国—』において、「現在の調査で、『(原文対訳)支那童話歌謡研究』は日本で出版された、中国創作児童文学を翻訳をした最も早い書籍だと見ることができる。なお、収載している作品が中国現代児童文学確立期のものであることも注目すべきである。この二つの意味から、『(原文対訳)支那童話歌謡研究』は非常に価値ある文献だと思われる。」(季2010:6頁)と述べ、非常に高く評価されている。また、季は上記著書で、『原文對譯支那童話歌謡研究』中の「支那歌謡」部の出典調査を行った。そして、商務印書館より刊行されていた『児童世界』がその出典元であるとした。

しかしながら、季の出典調査は「支那歌謡」部が中心であり、『原文對譯支那童話歌謡研究』第一部「支那童話」部についての出典調査に関する報告は2話のみが記述されているにすぎない。よって、本論では『原文對譯支那童話歌謡研究』第一部「支那童話」部についての出典調査を行う。そして、季による言及が無かった童話部についての空白部分を埋めることにしたい。米田祐太郎は商務印書館の『児童世界』や『京語童話』シリーズ、世界書局の『繪圖童話大観』か、もしくは『繪圖童話大観』に非常に近い関係にある童話集、中華書局『小小説』シリーズ等を手にとって『原文對譯支那童話歌謡研究』を作成した可能性が極めて高い。そして、米田はそれらの資料をほぼオリジナルのままの形で収載し、テキストを作成したと思われるのである。

(1) 米田祐太郎について

明治24年(1891年)9月11日東京生まれ、明治45年(1912年)3月東京外国語学校第13回卒業生である。満鉄、関東庁嘱託などを経て後、著述業に従事し、中国関係書のみを数十冊も世に出した。『和文支那訳研究』、『支那語文法研究』をともに大阪屋號書店から大正11年(1922)に発行し、『支那の商人生活』、『支那商店と商慣習』等

を教材社から昭和 15 年（1940）に出版している。

(2) 『原文對譯支那童話歌謡研究』収録「支那童話」

米田祐太郎による『原文對譯支那童話歌謡研究』支那童話部に収録された支那童話は以下のものである

中国語タイトル	日本語訳タイトル
①商神和樵夫	商神と樵夫
②審石頭	石の裁判
③鐘淵	鐘ヶ淵
④黒面女	黒面の女
⑤捉鍾馗	鍾馗を捉へる
⑥長面孔	長面怪
⑦小人國	小人國
⑧崑崙山和泰山的談話	崑崙山と泰山の話
⑨猿島王	猿島王
⑩陰陽鐘	陰陽鐘

(3) 調査範囲および調査結果

辛亥革命以前の清朝期においても「童話」に関する書籍・雑誌は出版されていたが、中華民国になると商務印書館などを中心に「童話」に関する書籍・雑誌の刊行数は大きく増加する。中華民国において、定期的に刊行する児童雑誌として最初に発売され、児童雑誌の代表的なものには商務印書館『児童世界』¹⁹がある。よって、本論ではまず『児童世界』を中心に『原文對譯支那童話歌謡研究』に収録された童話の有無を確認する。

さらには、『原文對譯支那童話歌謡研究』が出版された 2 年後の昭和 2 年（1927 年）に、及川恒忠²⁰による『世界童話大系第十五巻支那・臺灣篇』（昭和二年（1927 年）三

¹⁹ 『児童世界』刊行後、ライバル誌として中華書局より『小朋友』が刊行される。

²⁰ 及川恒忠は 1890 年 9 月岩手県に生まれ、1908 年に慶応義塾大学部予科第一学年に入学し、1913 年に慶応義塾大学部政治科を卒業する。1917 年、義塾留学生に選ばれると、中国で 2 年、フランスで 1 年過ごし、1920 年に帰国する。英語、フランス語、中国語を上手く操った。及川は当時の中国の政治制度や社会情勢に明るく、中国の社会主義思想や共産党の活動について、最も詳しい日本人

月、世界童話大系刊行会)²¹が発行されるのだが、その中には「崑崙山と泰山の對話」、
「石裁判」、「黒面の女」、「閻魔と鍾馗」、「驢太子」、「面長鬼」という童話が収録され
ている。これらはそれぞれ、『原文對譯支那童話歌謡研究』中の「崑崙山和泰山的談話」、
「審石頭」、「黒面女」、「捉鍾馗」、「陰陽鐘」、「長面孔」と同一の話である。及川が『原
文對譯支那童話歌謡研究』を目にしたかは定かではないが、『世界童話大系第十五卷支
那・臺灣篇』のはしがきに、「筆者は這の小さな一編を作出すに當つて、あまり多くで
はありませんが、相應の、古い文献を漁りました。併し翻譯に用ひた原本は大部分や
さしく書かれてある新しい書物に態とよつたのです。それは筆者にとつて便利でもあ
りましたし、世界童話大系の一部として出版する為には、却つて適當な材料だと想つ
たからです。商務印書館や中華書局や世界書局やで近年一と日つても民國八九年以來
一盛んに發刊されてゐる「小小説」とか「中國童話大全」とかの類です」と記されて
いる。この記述は米田祐太郎が用いた資料を推察していく上で重要な情報となる。つ
まり、民國8年(1919年)前後に商務印書館、中華書局、世界書局といった出版社に
おいては盛んに童話が刊行されており、『小小説』や『中國童話大全』と言つた童話集
を日本人である及川恒忠が入手していた事実を物語っている。そうであれば、米田祐
太郎も及川恒忠と同じような支那童話集を入手し、使用したとしても不思議ではない。

よつて本論ではまず『兒童世界』(商務印書館)を調査し、次に商務印書館、中華書
局、世界書局などから刊行された童話集を調査対象とする。

調査結果は次の表にまとめ、示す。

童話名	収録雑誌など
①商神和樵夫	『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊 ²²
②審石頭	『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第一冊
③鐘淵	『兒童世界』第一卷第十三期、商務印書館 中華民國11年4月
④黒面女	『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊
⑤捉鍾馗	『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊
⑥長面孔	『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊
⑦小人國	『兒童世界』第一卷第七期、商務印書館 中華民國11年2月
⑧崑崙山和泰山的談話	『繪圖童話大觀第一種 兒童物語』第一冊

の一人であつた。1959年1月に死去した。

²¹ 本論では、平成元年(1989年)名著普及会による復刻版を参照した。

²² 『繪圖童話大觀第一種 兒童物語』、『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』、『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』、すべて中華民國十年、上海世界書局發行である。

⑨猿島王	(商務印書館『京語童話』「第五編猿島」：未見 ²³)
⑩陰陽鐘	(『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊 ²⁴) (中華書局『小小説』「陰陽鐘」：未見)

以上のように、童話全 10 話中、8 話の出典が明らかとなり、米田祐太郎が中華民國において刊行された童話集・童話雑誌を用いて、その中国語学習テキストである『原文對譯支那童話歌謠研究』を作成したとするのは十分うなずける。

以下に比較のために事例として、『原文對譯支那童話歌謠研究』童話部本文および発見することができた出典と思しき話を数話記す。なお、事例として挙げたもの以外のものは、資料編に収める。

(4) 事例

1) 『兒童世界』が出典であるもの

季穎は『日中兒童文学交流史の研究—日本における中国兒童文学及び日本兒童文学における中国—』において、「童話の部分も「小人国」という話は『鄭振鐸と兒童文学』に収載された鄭振鐸の作品と一致することで、出典が判明した。「鐘淵」というお話は「兒童世界」第 1 卷第 13 期に掲載された作品とタイトルが同じなので、「兒童世界」の現物は未見だが、『(原文對訳) 支那童話歌謠研究』に収録されている作品に「兒童世界」からのものが多いことから、「鐘淵」は「兒童世界」第 13 期に掲載されたものと判断する(季 2010 : 6 頁) と述べている。

季は「現物は未見」であり、『兒童世界』に「鐘淵」、および、「小人國」が収載されているかは不確かである。よって、『兒童世界』の現物を確認する必要がある。そこで、筆者が実際に『兒童世界』現物を調査したところ、季が述べている通り、確かに「鐘淵」と「小人國」は『兒童世界』に収録されていた。以下に比較のための資料として、同一文章・同一語部分に下線を引いた米田『原文對譯支那童話歌謠研究』本文と『兒童世界』の文章について、比較検討を行い、相違点を記載する。

「鐘淵」(本文)

從前有一個村莊，在一個小湖的周圍。這個村莊很富，無論怎樣貧苦的百姓，他們所有的金錢，差不多都要車載斗量的。可是這個村上的人們，金錢一到了手，再不想用出

²³ 商務印書館『京語童話』に「第五編猿島」が存在する。筆者未見。

²⁴ 中華書局『小小説』にも「陰陽鐘」が存在する。筆者未見。『原文對譯支那童話歌謠研究』本文と『繪圖童話大觀』では文章が大きく異なる。よって、『小小説』「陰陽鐘」を米田は参照した可能性がある。

去，那自然就會積蓄起來了。但是無論什麼時候，要是積蓄的錢太多了，也是不好的，村中的人們，就漸々兒學得奢華起來了。一個人造了華麗的房屋，非常自慢，於是大家都模倣他，也造起好看的房屋，還要喝酒，每天從朝晨到晚上，祇是遊蕩着過日子，一些事情也不做，連那到寺廟裏去禱告拜佛的人，也沒有了。

村中有一個寺廟，突出於小湖當中，都是用石頭造成功的，可算是一個極好看的建築物。那些嫌惡參拜的，喜歡奢華的村人，大家商量道，我們難道沒有方法把這個寺廟做得更好看嗎，於是就用黃金來裝飾這個寺廟的外面，便變成光輝燦爛的一個極美麗的寺廟了。於是大家商量道

『現在這個寺廟雖是已經美麗了，但是寺廟裏的鐘，還嫌太小，不很好看我，們必須用黃金來造一個大鐘，敲起來使他的聲音響到全村，難到我們沒有方法做到嗎』

那歡喜奢華的村人，看金子是很輕的，所以立刻就贊成造一個黃金的大鐘。

村中的人，請了一個他們國度裏頂內行的打金的工匠，完全用金子來造一個大鐘。造好之後，看起來實在美麗，被太陽光照着的地方，十分輝耀，好像火燒似的，有一天，村中的富翁，駕了花車，把這個鐘運到寺廟裏去，把他掛上鐘樓。村中的人，都來祝賀，大家都準備着，聽這初撞的鐘聲。他們想起來，鐘的聲音，一定要響到全村了。大家都等候着，聽他響出來。

這一天，無論村裏的什麼人，都聚集攏來，大家都到寺廟裏去。寺廟裏的

和尚，便把鐘撞起來，撞木已經振動了，但是鐘聲絲毫沒有響出來，撞了幾撞還是不響，村中的人，大家都呆着了。

村中的人，等了許久，那鐘的聲音，到底沒有響出來，大家都說道，奇怪，奇怪，便相率而歸去了。剩下幾個照料的人，大家商量道『這個鐘一些也不好，明天我們要棄掉他，把他投到湖裏去』

到了明天，村中的人，又大家擁擠着到寺廟裏去了。那一天，大家眼看這鐘的沈沒，大家都唱着有趣味的送鐘沈沒的歌，婦人小兒，哄然相聚，廟的內外，都充滿着人了。

寺廟裏的和尚大家到鐘樓上去，豫備脫下那個鐘，忽然之間，那鐘自己響起來了。而且他的聲音也一刻一刻的高起來了，好像幾百個雷聲一齊響起來好像那鐘已經爆裂似的。村中的人，正在駭怪正在騷動的時候，忽然有旋風吹來，把寺廟啊，人啊，鐘啊，一齊都沉到湖裏去了。

剩下來沒有死的幾個人，從此以後，什麼工作也不想做了，只是遊蕩着過日子，從來也就一人，兩人的慢々の死去了，死得一個也不剩。

那沈沒在湖裏的鐘，還是不絕的響，直到現在夜深的時候，要是有人在湖邊上走着，還可以聽到這可哀的聲音，在湖底裏響。聽到這聲音的人，沒一個不是這樣想。

『奢華是不可以的，懶惰也是不可以的』

(參照)

『兒童世界』（第一卷第十三期より）「鐘淵」

從前有一個村莊，在一個小湖的周圍。這個村莊很富，無論怎樣貧苦的百姓，他們所有的金錢，差不多都要車載斗量的。可是這個村上的人們，金錢一到了手，再不想用出去，那自然就會積蓄起來了。但是無論什麼時候，要是積蓄的錢太多了，也是不好的，村中的人們，就漸漸兒學得奢華起來了。一個人造了華麗的房屋，非常自慢，於是大家都模倣他，也造起好看的房屋；還要喝酒；每天從朝晨到晚上，祇是遊蕩着過日子，一些事情也不做，連那到寺廟裏去禱告拜佛的人。也沒有了。

村中有一個寺廟，突出於小湖當中，都是用石頭造成功的，可算是一個極好看的建築物。那些嫌惡參拜的，喜歡奢華的村人，大家商量道：我們難道沒有方法把這個寺廟做得更好看嗎？於是就用黃金來裝飾這個寺廟的外面，便變成光輝燦爛的一個極美麗的寺廟了。於是大家再商量道：

『現在這個寺廟雖是已經美麗了，但是寺廟裏的鐘，還嫌太小，不很好看，我們必須用黃金來造一個大鐘，敲起來使他的聲音響到全村；難道我們沒有方法做到嗎？』

那歡喜奢華的村人，看金子是很輕的，所以立刻就贊成造一個黃金的大鐘。

村中的人，請了一個他們國度裏頂內行的打金的工匠，完全用金子來造一個大鐘。造好之後，看起來實在美麗，被太陽光照着的地方，十分輝耀，好像火燒似的。有一天，村中的富翁，駕了花車，把這個鐘運到寺廟裏去，把他掛上鐘樓。村中的人，都來祝賀，大家都準備着，聽這初撞的鐘聲。他們想起來，鐘的聲響，一定要響到全村了。大家都等候着，聽他響出來。

這一天，無論村裏的什麼人，都聚集攏來，大家都到寺廟裏去。寺廟裏的和尚，便把鐘撞起來，撞木已經振動了，但是鐘聲絲毫沒有響出來，撞了幾撞，還是不響。村中的人，大家都呆着了。

村中的人，等了許久，那鐘的聲音，到底沒有響出來，大家都說道：奇怪！奇怪！便相率而歸去了。剩下幾個照料的人，大家商量道：『這個鐘一些也不好，明天我們要棄掉他，把他投到湖裏去。』

到了明天，村中的人，又大家擁擠着到寺廟裏去了。那一天，大家眼看這鐘的沈沒，大家都唱着有趣味的送鐘沈沒的歌；婦人小兒，哄然相聚，廟的內外，都充滿着人了。

寺廟裏的和尚，大家到鐘樓上去，豫備脫下那個鐘，忽然之間，那鐘自己響起來了；而且他的聲音也一刻一刻的高起來了，好像幾百個雷聲一齊響起來，好像那鐘已經爆裂似的。村中的人，正在駭怪，正在騷動的時候，忽然有旋風吹來，把寺廟啊，人啊，鐘啊，一齊都沈到湖裏去了。

剩下來沒有死的幾個人，從此以後，什麼工作也不想做了，只是遊蕩着過日子，後來也就一人，兩人的慢慢的死去了，死得一個也不剩。

那沈沒在湖裏的鐘，還是不絕的響，直到現在夜深的時候，要是有人在湖邊上走着，還可以聽到這可哀的聲音，在湖底裏響。聽到這聲音的人，沒一個不是這樣想：

『奢華是不可以的，懶惰也是不可以的。』

(『兒童世界』第一卷第十三期、商務印書館、中華民國 11 年 4 月)

(相違点)

①於是大家再商量道(『兒童世界』)→於是大家商量道、②難道→難到、③一齊都沈到湖裏去了→一齊都沉到湖裏去了

十三 小人國

(本文)

古時，有一個孩子，名字叫做愛兒，年紀剛有十二歲。有一天，他在學堂裏答不出問題來，被先生責打了幾下。他害怕起來，跑到河岸旁邊的一個洞裏，藏在那裏，不敢出來。兩天沒有吃一點東西。那個時候有兩個不到一尺高的小人在洞裏出現，對愛兒說道『跟着我來，我們把你送到快樂之國去』

愛兒跟着他們，經過很長的黑暗的隧道，進到一個豐富美麗的國裏去。但是那個地方，沒有太陽，沒有月亮，也沒有星光，只從奇怪的天空上，射下幾線朦朧的微光。那兩個小人帶愛兒去見他們的國王，叫愛兒伴着他的大兒子玩。快樂之國裏的人都是很小的，但却都是非常美麗。他們有金黃的頭髮，披在兩肩。快樂之國的國王看見愛兒住了很久，非常想家，就允許他從地道裏出去一躺，回家看看母親。愛兒告訴母親許多關於快樂之國的事，並且說，這個國非常富足，器具都是黃金做的。他母親要他帶些寶物回來。

愛兒第二次再進小人國伴國王的兒子遊戲。他偷了太子的金碗，走出地道，望家裏跑去。但是終於被那兩個小人追上了。他們把金碗奪了去回向洞裏去。

愛兒非常後悔，想再到快樂之國，求國王的寬恕。但是洞裏的隧道已經關閉，愛兒再也不能進去了。

(參照)

古時，有一個孩子，名字叫做愛兒，年紀剛有十二歲。有一天，他在學堂裏答不出問題來，被先生責打了幾下。他害怕起來，跑到河岸旁邊的一個洞裏，藏在那裏，不敢出來。兩天沒有吃一點東西。那個時候有兩個不到一尺高的小人在洞裏出現，對愛兒說道：『跟着我來，我們把你送到快樂之國去。』

愛兒跟着他們，經過很長的黑暗的隧道，進到一個豐富美麗的國裏去。但是那個地方，沒有太陽，沒有月亮，也沒有星光。只從奇怪的天空上，射下幾線朦朧的微光。那兩個小人帶愛兒去見他們的國王，國王叫愛兒伴着他的大兒子玩。快樂之國裏的人都是很小的，但卻都是非常美麗。他們有金黃的頭髮，披在兩肩。快樂之國的國王看見愛兒住了很久，非常想家，就允許他從地道裏出去一躺，回家去看看母親。愛兒告訴母親許多關於快樂之國的事，並且說，這個國非常富足，器具都是黃金做的。他母親要他帶些寶物

回來。

愛兒第二次再進小人國伴國王的兒子遊戲。他偷了太子的金碗，走出地道，望家裏跑去。但是終於被那兩個小人追上了。他們把金碗奪了去回向洞裏去。

愛兒非常後悔，想再到快樂之國，求國王的寬恕。但是洞裏的地道已經關閉，愛兒再也不能進去了。

(『兒童世界』第一卷第七期、商務印書館、中華民國 11 年 2 月)

(相違点)

①狠(『兒童世界』)→很、②他們的國王，國王叫愛兒→他們的國王，叫愛兒、③卻→却

以上のように2つの文章を比較すると、米田は『兒童世界』の文章を大きく変更することなく自身のテキストに採用したことが容易に理解できよう。このような点からも、『兒童世界』がその出典である可能性が高いと指摘できる。

2) 『繪圖童話大觀』が出典元らしきもの

「商神和樵夫」、「審石頭」、「黒面女」、「捉鍾馗」、「長面孔」、「崑崙山和泰山的談話」の話は『繪圖童話大觀』がその出典元だと考えられる。これら『繪圖童話大觀』が出典と思しき話についても、米田は『兒童世界』中の「鐘淵」や「小人國」と同じように、ほぼオリジナルのままの形で自身の『原文對譯支那童話歌謡研究』に収めている。しかしながら、「商神和樵夫」、「審石頭」の2つは『繪圖童話大觀』と比較すると本文が多少削られている。

また、「陰陽鐘」は『繪圖童話大觀』には「驢頭太子」というタイトルであるが、内容的には同一の話であることが確認できた。しかし、両話は文章の長さが甚だしく違うなど大きく異なっており、支那童話原文を大きく変えることなく『原文對譯支那童話歌謡研究』に収録するという態度を示した米田が、『繪圖童話大觀』中の「驢頭太子」に対してのみ自身で大きく文章を補足したとは考えにくい。よって、「陰陽鐘」は『繪圖童話大觀』ではないものを参照したと考えられる。なお、筆者は未見だが、中華書局『小小説』内にも「陰陽鐘」が存在する。タイトルだけで判断するのは非常に危険ではあるが、米田は中華書局『小小説』シリーズ「陰陽鐘」を参照した可能性が高いことをここで指摘しておきたい。

以下に比較のための資料として、同一文章・同一語部分に下線を引いた米田『原文對譯支那童話歌謡研究』本文と『繪圖童話大觀』の文章を数話記載する。なお、事例として挙げたもの以外のものは、資料編に収める。

三 審石頭

(本文)

包龍圖做縣官的時候，坐在轎子裏，經過市頭，看見一個小孩坐在路旁，嗚々的哭泣，手中提著一隻空籃，龍圖就停轎問道『小孩子，爾爲什麼在這裡哭泣』

那小孩跪著道『小人是賣油炸燴的，今天賣完了，賺得三百銅錢，放在籃裡要去買米的，因爲脚裏沒有力，把籃放在石頭上，略坐片刻，正要起身，那籃裡的錢忽然不見了』說著又哭起來。包龍圖道『爾的籃既然放在石上，自然是石頭偷的』

忙喝差役把這石頭擡到衙門裡，等候審問。那時滿街百姓都說包青天要審石頭了，快快來看。

龍圖上堂，叫左右把石頭打四十板，那知打了幾下，板就斷了，來觀看的百姓大笑起來。龍圖拍案大怒道『爾們好沒有規矩』

叫公人們把門關住，罰衆人坐牢監三天，衆人都跪下求饒，龍圖道『饒也使得，每人須罰錢二十文，方可出去』

就叫公人擡一缸水來，各人把錢投入缸中，只見第三人投錢入水時，水面忽有油光浮起，便喝住道『狗賊，快々招來』

那人還要抵賴，龍圖叫左右他身邊的錢搜出來，同他所投的合算共計二百，如數還了小孩，把那賊重打了百板，同衆百姓一齊釋放。

(參照)

包龍圖鐵面無私，碰著不論什麼稀奇古怪的案子，他終能審得清楚，照律嚴辦，因此當時百姓都叫他活閻羅。

包龍圖做縣官的時候，坐在轎子裏，經過市頭，看見一個小孩坐在路旁，嗚嗚的哭泣，手中提著一隻空籃，龍圖就停轎問道：「小孩子，你爲什麼在這裡哭泣？」

那小孩跪著道：「小人是賣油炸燴的，今天賣完了，賺得二百銅錢，放在籃裡要去買米的，因爲脚裏沒有力，把籃放在石頭上，略坐片刻，正要起身，那籃裡的錢忽然不見了」，說著又哭起來。包龍圖道：「你的籃既然放在石上，自然是石頭偷的」。

忙喝差役，把這石頭抬到衙門裡，等候審問。那時滿街百姓都說包青天要審石頭了，快快來看。

龍圖上堂，叫左右把石重打四十板，那知打了幾下，板就斷了，來觀看的百姓大笑起來。龍圖拍案大怒道：「你們好沒有規矩」，

叫公人們把門關住，罰衆人坐牢監三天，衆人都跪下求饒，龍圖道：「饒也使得，每人須罰錢二十文，方可出去」。

就叫公人擡一缸水來，各人把錢投入缸中，只見第三人投錢入水時，水面忽有油光浮起，便喝住道：「狗賊，快快招來」，

那人還要抵賴，龍圖叫左右把他身邊的錢搜出來，同他所投的合算，共計二百，如數

還了小孩，把那賊重打百板，同衆百姓一齊釋放・你道這案子審得奇怪不奇怪・

(『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第一冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①包龍圖鐵面無私，碰著不論什麼稀奇古怪的案子，他終能審得清楚，照律嚴辦，因此當時百姓都叫他活閻羅(『童話大觀』)→なし、②你→爾、③二百→三百、④既→旣、④這石頭抬到衙門裡→這石頭擡到衙門裡、⑤把石重打四十板→把石頭打四十板、⑥龍圖叫左右把他→龍圖叫左右他、⑦重打百板→重打了百板

七 黑面女

(本文)

秋英一個人登在觀音廟裏，嘆氣道『天呀，怎麼生我這樣醜呢，既然麻子，又要生瘤』
話還沒有說完，忽然吹起一陣怪風，走來一個披髮黑面的女人，說道『你嫌貌醜麼，
只要我給爾三滴水，就會變成一個美麗的女子了』

秋英嚇得心戰膽驚，既然到了這裏，也無可如何了。就接着說到『你有這樣能力麼，
請爾把三滴水給我罷』

黑面女道『且慢，我還有句話告訴你。三滴水，一滴是擦面的，一滴是擦瘤的，一滴
是吃的』

說罷就給秋英，秋英照黑面女所說的做去，立刻變做嬌艷的美女了。秋英的名，一時
傳遍全國。

這國裏的國王，生起病來了。請來了一位醫生，這醫生看了病勢，說道『這病沒有法
子可以治得，只有拿美女的心肝煎來做湯，纔可全愈』

國王就叫手下四下裏找尋美女，將要尋到秋英家裏了。秋英就在半夜裡，仍舊到觀音
廟去躲避。忽然黑面女進來了，秋英立刻跪下，連叫『救命……救命……快還我原身，
否則，我就要死了』

黑面女道『從前嫌貌醜，如今嫌貌好麼』

見秋英哀求可憐，便拿三滴水，叫他照前法做去。過了一會，秋英立刻化轉原身了。

(参照)

秋英一個人登在觀音廟裏，嘆氣道：「『天呀！怎麼生我這樣醜呢？既然麻子，又要生瘤』

話還沒有說完，忽然吹起一陣怪風，走來一個披髮黑面的女人，說道：「你嫌貌醜麼」？
只要我給你三滴水，就會變成一個美麗的女子了」

秋英嚇得心戰膽驚，既然到了這裏，也無可如何了・就接着說道：「你有這樣能力麼？

請你把三滴水給我罷」！

黑面女道：「且慢！我還有句話告訴你·三滴水；一滴是擦面的，一滴是擦瘡的，一滴是吃的」·

說罷就給秋英，秋英照黑面女所說的做去，立刻變做嬌豔的美女了·秋英的名，一時傳遍全國·

這國裏的國王，生起病來了·請來一位醫生，這醫生看了病勢，說道：「這病沒有法子可以治得，只有拿美女的心肝煎來做湯，纔可全愈」·

國王就叫手下四下裏找尋美女，將要尋到秋英家裏了·秋英就在半夜裡，仍舊到觀音廟去躲避·忽然黑面女進來了，秋英立刻跪下，連叫「救命……救命……快還我原身，否則，我就要死了」！

黑面女道：「從前嫌貌醜，如今嫌貌好麼」？

見秋英哀求可憐，便拿三滴水，叫他照前法做去！過了一會，秋英立刻化轉原身了·
（『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊，中華民國十年，上海世界書局）

（相違点）

①既（『童話大觀』）→既、②你→爾、③說道→說到、④嬌豔→嬌艷、⑤請來一位醫生→請來了一位醫生

九 捉鍾馗

（本文）

鍾馗不知犯了什麼罪，閻王叫牛頭和馬面兩個大將去捉他，並且吩咐他說『倘若捉來，都有火々の獎賞』

牛頭和馬面帶着鐵索去了。

二人走到鍾馗家裡，見鍾馗剛在吃飯，牛頭便開口道『去，去，大王叫你去』

馬面道『走，走，大王叫你走』

鍾馗大怒道『你們兩小鬼，還想捉我麼』

牛頭上前去，捉，被鍾馗的手一揮，已跌在地上了。馬面上前去拉，被他的脚一踢已仰仆了。

二人知勢不敵，就跪在鍾馗面前哀求道『鍾老爺，今天我們捉不到爾，閻王就要把我們活々處死』

鍾馗道『同你們去就是了』

三人立刻就走。

到了閻署，先叫鍾馗住在一間小房子裡，然後牛頭和馬面報告閻王。閻王問道『那個捉的』

牛頭說牛頭捉的，馬面說馬面捉的，爭個不休。閻王道『休爭，既然捉來，兩個都有賞，快帶鍾馗來見我就是了』

鍾馗聽見他兩個在此爭功，立刻變個地藏王。牛頭和馬面走到鍾馗住的房間，並不見他，只有一個地藏王。兩個人很為詫異，不管三七二十一，姑且帶上再說罷。閻王看見不是鍾馗，大發雷霆，罵道『他犯甚麼罪，捉來做甚麼』

這時牛頭說，馬面捉的，馬面說牛頭捉的，喧個不休。閻王道『不管那個捉的都要監禁五個月』

(參照)

鍾馗不知犯了什麼罪，閻王叫牛頭和馬面兩個大將去捉他，並且吩咐他說：「倘若捉來，都有大大的獎賞」。

牛頭和馬面帶着鐵索去了。

二人走到鍾馗家裡，見鍾馗剛在吃飯，牛頭便開口道：「去！去！大王叫你去」。

馬面道：「走！走！大王叫你走」

鍾馗大怒道：「你們兩個小鬼，還想捉我麼」？

牛頭上前去捉；被鍾馗的手一揮，已跌在地上了。馬面上前去拉；被他的脚一踢，已仰仆了。

二人知勢不敵，就跪在鍾馗面前哀求道：「鍾老爺！今天我們捉不到你，閻王就要把我們活活處死」。

鍾馗：「同你們去就是了」。

三人立刻就走。

到了閻署，先叫鍾馗住在一間小房子裡，然後牛頭和馬面報告閻王。閻王問道：「那個捉的」。

牛頭說牛頭捉的，馬面說馬面捉的，爭個不休；閻王道：「休爭！既然捉來，兩個都有賞，快帶鍾馗來見我就是了」

鍾馗聽見他兩個在此爭功，立刻變個地藏王。牛頭和馬面走到鍾馗住的房間，並不見他，只有一個地藏王。兩個人很為詫異，不管三七二十一，姑且帶上再說罷。閻王看見不是鍾馗，大發雷霆，罵道：「他犯什麼罪？捉來做什麼」？

這時牛頭說馬面捉的，馬面說牛頭捉的，喧個不休；閻王道：「不管那個捉的，都要監禁五個月」

(『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①兩個小鬼→兩小鬼、②已→己、③你→爾、④既→旣、⑤什麼→甚麼

(5) 米田祐太郎のテキスト作成方法

以上のように、米田祐太郎は『原文對譯支那童話歌謡研究』を作成する際、『児童世界』のような中華民国で発行された各種童話雑誌等を用いて、その『原文對譯支那童話歌謡研究』を編集したことは信憑性が極めて高い。また、米田の基本的な姿勢としては、出典元である文章に手を加えることなく使用し、そして独自の『原文對譯支那童話歌謡研究』を作り上げた、ということを描きよう。

つまり、米田祐太郎のテキスト作成方法を一つの例とするならば、大正末期の支那語学者は中華民国で出版された同時代の資料をいち早く取り入れながら、オリジナルである出典元の文章を重要視し、ほぼそのままの形で使用しつつ支那語学習童話テキストを作成した、と考えられる。

4. 矢野藤助撰『華語童話読本』

矢野藤助は大正 14 (1925 年) に小林三林堂から『華語童話読本』を出版する。これは先に刊行した『日支對譯支那童話集』を教材に用いようとする人が多数存在したことから、『日支對譯支那童話集』とは全く異なる内容の話を集め、再びテキストとして出版したという。その中には、イソップ寓話と思しきものも見受けられ、すべてが中国の話というわけではない。全 70 課であり、先の『日支對譯支那童話集』と同じように長い話は複数の課に分けられており、総話数は 32 話である。それらは、1) 到底如何、2) 破缸救人、3) 埋蛇免害、4) 産金蛋的鵝、5) 干尼德黑爾斯坦、6) 大饅頭和大包子、7) 舊馬掌、8) 狼與鶴狐、9) 孟母、10) 獅與狐、11) 鴉與狐、12) 輓耳翁、13) 老鼠會議、14) 争子、15) 守財奴、16) 讓産(一)～讓産(三)、17) 牛二拳頭(一)～牛二拳頭(一二)、18) 飛行鞋(一)～飛行鞋(四)、19) 黄金樹(一)～黄金樹(一三)、20) 小八狗(一)～小八狗(二)、21) 兩個弟兄(一)～兩個弟兄(二)、22) 牛郎(一)～牛郎(二)、23) 盒仙(一)～盒仙(二)、24) 孽龍、25) 蛇人(一)～蛇人(二)、26) 寓言四則、27) 種梨、28) 九曲明珠(一)～九曲明珠(三)、29) 三字驢、30) 七步成詩、31) 草船借箭、32) 花果山(一)～花果山(四)、である。

以下に、原話名などが判明したものについての表を載せる。

第 1 課 到底如何	イソップ「乳しぼりの娘と桶」	19 課-30 課 牛二拳頭	商務印書、『家庭童話』シリーズ、未見
第 2 課 破缸救人	「司馬光砸缸」	31 課-34 課 飛行靴	商務印書、『童話叢書』
第 3 課 埋蛇免害	「孫叔敖殺兩頭」	35 課-47 課 黄金	商務印書、『家庭童話』

	蛇」	樹	話』シリーズ、未見
第4課 産金蛋的鵝	イソップ「ガチョウと黄金の卵」	48課-49課 小八狗	不明
第5課 干尼德黑爾斯坦	不明	50課-51課 兩個弟兄	不明
第6課 大饅頭和大包子	不明	52課-53課 牛郎	「牛郎織女」
第7課 舊馬掌	スペイン民話「サクランボウ」	54-55課 盒仙	不明
第8課 狼與鶴	イソップ「キツネとツルのご馳走」	56課 孽龍	不明
第9課 孟母	「孟母断機の戒め」	57-58課 蛇人	『聊齋志異』に存在
第10課 獅與狐	イソップ「年を取ったライオンとキツネ」	59課 寓言四則	「五十歩百歩」「杞憂」「矛盾」「塞翁が馬」
第11課 鴉與狐	イソップ「カラスとキツネ」	60課 種梨	不明
第12課 輓耳翁	イソップ「ロバを売りに行く親子」	61-63課 九曲明珠	不明
13課 老鼠會議	イソップ「ネズミの相談」	64課 三字驢	「諸葛恪得驢」
14課 争子	「ソロモンの知恵」	65課 七歩成詩	成語故事「七歩成詩」
15課 守財奴	不明	66課 草船借箭	「草船借箭」
16課-18課 讓産	不明	67課-70課 花果山	『西遊記』

以下に、比較のための資料として、出典と思われる話が見つかったもの数話について同一文章・同一語部分に下線を引いたテキスト本文と出典元の文章を挙げる。なお、事例としてこの場にて挙げなかった話は資料編に収める。

(1) 事例

第四課 產金蛋的鵝

(本文)

有一個人，養了一隻很奇怪的母鵝，這隻鵝一天下一個金蛋。這個人得了這蛋，到城裏去賣，吃着都不愁了。

這個人天天兒要到城裡賣蛋，覺得有些討厭。有一天忽然起了貪心，自己想着，那個母鵝，每天下一個金蛋，肚子裡一定有黃金，我若殺了他，便可一次得着許多黃金，還要天天兒到城裡沿街叫賣麼。

主意打定，就立刻拏刀來，把這個鵝的肚子，給破開來了。原來是這鵝肚子裏，却是空空的，和平常的鶯絲毫沒有兩樣，不但沒有一點黃金，連一點金的影兒也沒有、白白的殺了一隻寶鶯了。從此以後，一個金蛋也不能得了。唉，貪欲無厭的，必定有這樣結果，真是可怕呀。

(參照)

從前有一個婦人，養了一隻很奇怪的鵝・這隻鵝每天產出一個很大的金蛋，婦人得了這蛋，到城裡去賣；吃着都不愁了・

這個婦人天天要到城裡賣蛋，覺得有些討厭；暗想鵝生金蛋，肚子裡一定有黃金・我若殺了他，便可一次得着許多黃金，還要天天到城裡沿街叫賣麼？

主意打定，便拿刀來把鵝殺死，剖開腹裏看看，和平常的鵝絲毫沒有兩樣・

現在這婦人的家裡，沒有一個蛋藏着，又沒有錢儲蓄，困迫得很哩！小朋友呀！貪欲無厭的，必定有這樣結果，真是可怕呀！

(『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第一冊，中華民國十年，上海世界書局)より。(イソップの「ガチョウと黄金の卵」)

(相違点)

①從前有一個婦人(『童話大觀』)→有一個人、②鵝→母鵝、③每天產出一個很大的金蛋→一天下一個金蛋、④這個人→婦人、⑤裡→裏、⑥這個婦人→這個人、⑦天天→天天兒、⑧暗想鵝生金蛋→有一天忽然起了貪心，自己想着，那個母鵝，每天下一個金蛋、⑨便拿刀來把鵝殺死，剖開腹裏看看→就立刻拏刀來，把這個鵝的肚子，給破開來了。原來是這鵝肚子裏，却是空空的、⑩鵝→鶯、⑪なし→不但沒有一點黃金，連一點金的影兒也沒有、白白的殺了一隻寶鶯了。⑫現在這婦人的家裡，沒有一個蛋藏着，又沒有錢儲蓄，困迫得很哩→從此以後，一個金蛋也不能得了。⑬小朋友呀→唉

第八課 狼與鶴 (狼和鶴的請客)

(本文)

有一天狼生了一個兒子，辦起許多食物，請鶴來吃。鶴見了狼，便說許多道喜恭維的話，然後坐下。狼便拿出一個盆子，中央盛着許多羹，狼和鶴都在盆子裏吃，但是狼全靠着舌的本領，不一會兒被他都吃完了。可憐那隻鶴餓得慌，終沒有一點兒到口，嘴裏雖然不好說，心裏却藏着報仇的意思了。

剛巧今年鶴做三百歲的壽，到了那一天也辦了許多吃的東西，盛在一個高瓶裏頭，請狼來吃。狼見了想吃又是不能，不吃又是可惜。鶴說「吃呀，吃呀，不必客氣。」說着，他自己仍舊把頭攢進瓶裏，吃了一會兒，又說「吃呀，你別客氣。」狼說「我知道了。」轉身便跑，不知跑到那裏去了。

(參照)

有一天狼生了一個兒子，辦起許多食物，請鶴來吃。鶴見了狼，便說許多道喜恭維的話，然後坐下，停了一會，狼便拿出一隻盆子，中央盛着許多羹，狼和鶴都在盆子裏吃；但是狼全靠着舌的本領，不一會盡被他都吃完了。可憐那隻鶴餓得肚腸轆轤似的，終沒有一些兒到口，嘴裏雖然不好說，心裏却藏著報復的意思了。

剛巧今年鶴做三百歲的壽，到了那一天也辦了許多吃的東西，盛在一只高瓶裏頭，請狼來吃。狼見了想吃又是不能，不吃又是可惜；鶴叫道：「吃呀！吃呀！不必客氣」。他說罷，他自己仍舊把頭攢進瓶裏，吃了一會，又叫道：「吃呀！吃呀！不必客氣」。狼道：「我知道了」。轉身便跑，不知跑到那裏去了。

(『繪圖童話大觀第一種 兒童物語』第一冊物語，中華民國十年，上海世界書局)、(イソップ「狐と鶴のご馳走」)

(相違点)

①停了一會(『童話大觀』)→なし、②一隻盆子→一個盆子、③不一會盡被他吃完了→不一會兒被他都吃完了、④肚腸轆轤似的→慌、⑤一些兒→一點兒、⑥心裏却藏著報復的意思了→心裏却藏着報仇的意思了、⑦一只→一個、⑧叫道→說、⑨他說罷→說着、⑩一會→一會兒、⑪吃呀！吃呀！不別客氣→吃呀，你別客氣、⑫道→說

第三十一課 飛行鞋(一)：『童話』叢書(商務印書館、孫毓修主編)にも存在。オリジナルは茅盾作と思われる。

(本文)

某地方有夫妻倆，家裏窮苦，一連生了五箇兒子，大的不過十二歲，小的只有五歲，都不能幫助做工，只靠他父親賺來的工錢過活，真是艱難得了不得。他們最小的孩子，生下來的時候兒，只有王瓜般大，他的爹娘就叫他小王瓜兒。

他到了五歲，仍舊很是矮小，比不上旁人家二歲的小孩兒，他又是不大說話，又不喜

歡玩耍，却是很聰明的，知道的事情比他哥哥也多。

這一年的夏天，一連有七八天的大風大雨，田稻都被淹倒，鄉下人個個歎氣說「荒了，米貴了，要餓死了。」果然米價立刻貴起來，比平常貴到一半兒。這時候小王瓜兒的家裏已經有好幾天沒有飯吃了，他的父母看兒子活活的餓死，不如放他們到別處去，倘或有人看見收拾了去，能夠養活也未可知。到了天明，他的父母硬着心腸，領了五個孩子，走到市上來，叫他們向前行走，自己却眼淚汪汪的私下回家去了。那五個孩子不見了爹娘，只管亂竄亂嚷，一直到天漸漸兒的黑下來了，還找不到雙親。只是又餓又冷又怕，聚在一棵大松樹下，互相抱着，急得只會哭了，還是小王瓜兒會想法子，爬上松樹，四面一看，見那邊兒有個燈光，好像不遠，連忙下來對哥哥說「有救星了，只要望着燈光走就是了。」

(参照)

某地方有夫妻二人，家境窮苦，一連生了五箇兒子，大的不過十二歲，小的只有五歲，都不能幫助做工，只靠他父親賺來的工錢過活，真是艱難得了不得・

他們最小的孩子，生下來的時候，只有王瓜般大，他的爹娘、就叫他小王瓜兒・小王瓜兒到了五歲，仍舊狠是矮小，比不上旁人家二歲的小孩，他又是不大說話，又不喜歡玩耍，却是很聰明的，知道的事情，比他哥哥也多・這一年的夏天，一連有七八天的大風大雨，田稻都被淹倒，鄉下人箇箇歎氣道：荒了！米貴了！要餓死了！果然米價立刻貴起來，比平常貴到一半・這時候小王瓜兒的家裏已有好幾天沒有飯吃了，他的父母看兒子活活的餓死，不如放他們到別處去，或者有人看見，收拾了去，能夠養活，也未可知・

到了天明，他的父母硬著心腸，領了五箇孩子，走到市上來，叫他們向前行走，自己却眼淚汪汪的私下回家去了・那五箇孩子，不見了爹娘，只管亂竄亂嚷，一直到天漸漸地黑下來了，還找不到雙親・只是又餓又冷又怕，聚在一株大松樹下，互相抱着，急得只會哭了・還是小王瓜兒會想法子，爬上松樹，四面一看，見那邊有箇燈光，好像不遠，連忙下來對哥哥說：「有救星了，只要望着燈光走便是了」・

(『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第三冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①二人(『童話大觀』)→夫妻倆、②家境→家裏、③時候→時候兒、④小王瓜兒→他、⑤狠→很、⑥箇箇→個個、⑦道→說、⑧一半→一半兒、⑨家裡已→家裏已經、⑩或者→倘或、⑪硬著→硬着、⑫漸漸地→漸漸兒的、⑬一株→一棵、⑭那邊→那邊兒、⑮有箇→有個

(2)『華語童話讀本』に見る矢野藤助のテキスト作成方法

このように、矢野藤助もテキストを作成する際、中華民国で発行された各種童話雑誌等を用いて自己のテキストを編集した可能性は極めて高い。また、基本的な姿勢としては矢野も米田と同じように出典元である文章を重視し、内容を十分に生かしながら自己のテキストを作り上げた、と指摘できる。

矢野藤助と米田祐太郎のテキスト作成方法について重要なことは、2人の大正末期の支那語学者は中華民国で出版された同時代の資料をいち早く取り入れ、オリジナルである出典元の文章を重要視し、自己の支那語学習童話テキストを作成した、と考えられる。

5. 矢野藤助、米田祐太郎の童話テキストに見る支那語教育観

矢野藤助が大正13年(1924年)に『日支對譯支那童話集』を刊行したことは、支那語学者によって支那語学習教材として支那童話を「発見」したということの意味するものである。その翌年に、米田祐太郎が『原文對譯支那童話歌謡研究』を著し、矢野藤助も『華語童話読本』を出版する。この一連の動きにより、童話を支那語学習教材とすることは一般化されたと判断できよう。それでは、どうして矢野と米田は支那童話を語学学習教材として用いたのであろうか。

次章で述べるように、当時の中華民国は文学革命から白話文運動が起っており、子どもは学校で白話文を学ぶようになった。そのため、子どものための読み物、つまり、童話も白話文で書かれるようになり、童話を読むことは白話を学ぶための一方法でもあったということが指摘できよう。矢野と米田が参照したであろう『童話大観』の編輯縁起には、「小学校での国語読み物の補助物」「文章は完全に口語文」という記述が見られる。さらに、中華民国15年(1926年)初版発行、商務印書館『兒童世界叢刊童話第一集』巻末広告にある『兒童世界』の広告には「子どもに有益な伴侶というだけでなく、小学校の教員がこれを読めば多くの参考資料を得ることができる」とあり、『兒童畫報』の広告文には「すべて絵で示し、さらにやさしい白話文で説明する」とある。また、『兒童世界叢刊童話第三集』巻末広告には商務印書館が出版している各種の童話集が記載されている。『京語童話』集の紹介文には「面白い様々な物語を北京語で編集して、子どもに読書の喜びを得させ、また国語の練習をさせることもできる」とある。さらに『家庭童話』集の紹介文には、「すべて純粋な国語を用いている」とある。中華民国11年(1922年)発行の中華書局『小朋友』第9期巻末には同書局の『小小説』シリーズ広告文があり、そこには「すでに80以上を出版したが、すべて簡単明瞭な白話文を用いて作成した。今は白話文が流行っている時であり、この小小説を読むとちょっと暇つぶしできるうえに、白話文の要領をつかむことができる」と記されている。

成實朋子は、事例として1923年に出された中華民国の「小学校国語科課程綱要」中

の「辞書を引きながら「児童世界」や「小朋友」程度の新出単語が一割をこえない白話文を読める」等を提示し、「『児童世界』『小朋友』と言った児童雑誌を読むことが「当時の子どもの読解能力を知る上での一つのバロメーターとなっていたことがわかる」（成實 1998：134 頁）と述べている。ここからは、当時の童話が白話文で書かれていたことが理解できる。

当時の中華民国は文学革命が起こり白話文運動が行われていた時期である。商務印書館や中華書局で刊行された童話雑誌や童話集は中華民国の子どもたちが白話文を学ぶための教材でもあったのである。つまり、中華民国で刊行された最新の童話雑誌や童話集は、まさに変革中の中華民国の言語＝白話文で書かれており、日本人が最新の支那語を学習するための教材として適していたのである。矢野藤助と米田祐太郎が支那童話を「発見」し、いち早く中華民国で刊行された支那童話雑誌・童話集を利用してテキストを作成したことは、「白話文を日本の学習者へ伝え、学んでもらいたい」という支那語学者としての思いの現われであり、ここに両者の支那語教育観の存在を指摘できる。

第 3 部 笑話テキスト・童話テキストに見る北京語の特徴

日本の中国語学習は南京官話を学習することにより開始された。それは、明治 4 年（1871 年）のことである。しかし、清朝政府は北京にあり、日清間の政府間交渉を行うときに南京官話を用いることの不便さを感じた明治政府は、南京官話学習から北京官話学習へと切り替えた。それは明治 9 年（1876 年）のことである。

岡本正文、矢野藤助、米田祐太郎は当然のことながら、北京官話を学習したのであるが、果たして彼らの手により作成されたテキストは北京官話の特徴を有し、また北京官話を学ぶためにふさわしい教材であったのかということを確認する必要がある。そこで、太田辰夫氏により示された北京語の 7 特徴論を用いて分析を行い、岡本、矢野、米田が北京語の特徴を持つものであるかを確認し、これらテキストの言語的特徴を解明する。

第 7 章 笑話テキスト・童話テキストと北京語

明治政府は清国政府との外交交渉上必要なことから、明治 4 年（1871 年）に「漢語学所」を開設し、中国語教育を行いはじめた。

この漢語学所では南京官話教育が行われており、その教科書も教育方法も江戸期に

おける唐通事と同じものであった。

その後、明治政府は清国政府との外交交渉において北京官話の通訳者が必要となるのだが、日本では教育は南京官話教育が行われていたために北京官話の通訳者は存在しなかった。そのために北京在住の日本人を北京官話の通訳者として採用したほどであった。このような外交上の必要から北京官話の教育が必要とされ、明治9年（1876年）に日本では南京語教育から北京語教育への転換がはかられた。これ以降、日本で「中国語」と呼ぶものは北京語を指すようになるのである。

このような歴史的経緯を踏まえ、支那笑話・支那童話を用いて作成された支那語学習テキストが、北京官話の特徴を有するのかどうかを、太田辰夫の北京語の7特徴論を用いて分析を行うものである

1. 「北京語」、「北京官話」について

上記のように、日本での中国語学習は、その対象が南京語から北京官話へと転換した。歴史的状況から考えて、当然のことながら、東京外国語学校において岡本正文や矢野藤助、米田祐太郎が学習した中国語は北京官話である。そして、彼らが著した中国語教科書類も北京官話学習のための教科書である。

岡本正文は清代に編まれた各種中国笑話集を北京官話へと「翻訳」し、また、矢野藤助も清代及び中華民国期に出版された笑話集を北京官話へと訳した。そして、岡本正文は『支那笑話集』を矢野藤助は『支那笑話新編』を作り上げた。

矢野藤助、及び、米田祐太郎は、辛亥革命により清朝が倒れ、中華民国になってから後上海で編集発行された各種童話雑誌等を用いて、矢野は『日支對譯支那童話集』、『華語童話読本』を、米田は『原文對譯支那童話歌謡研究』を作成した。

しかしながら、彼らのテキストは北京官話を学習するテキストとして果たしてふさわしいのであろうか。つまり、テキスト中の本文に北京官話の特徴を見出すことができるか否か、ということを確認、その学習効果を確認する必要がある。よって、本章では、岡本、矢野、米田のテキストに北京官話の特徴を見出すことができるかどうかを太田辰夫の「北京語の語法特点」に従い分析する。

「北京官話」と「北京語」は完全に一致するものではないが、太田辰夫は「ここにいる北京語とは、北方語または官話といわれるものよりは狭く北京およびその周辺に行われる言語という意味で、北京官話というのにほぼ等しい」（太田 1988 : 285 頁）、中村雅之は「19世紀末の北京の言語は、「官話」あるいは「京話」と称された。この二つは概念上のニュアンスは異なるが、実態はほとんど変わらない。要するにどちらも「北京語」である。」（中村 2007 : 1 頁）と述べる。また、板垣友子は宮島大八が編纂し、明治37年（1904年）に初版が発行された『官話急就篇』中における北京語についての分析を行い、「北京語の語彙・分法の特徴が多く見られる」（板垣 2013 : 137

頁)と指摘する。岡本正文は宮島大八から中国語を学び、そして、矢野藤助と米田祐太郎は東京外国語学校在学中に岡本から中国語を学んでいる。さらに矢野と米田は在学時に宮島大八の『官話急就篇』を教科書として中国語を学習したことも想像に難くない。このように見てくると、当時は北京官話と北京語を同じものであると認識していたであろうことが理解される。よって、本論においても「北京官話」と「北京語」を同じものであると認識する。そこで、太田辰夫により示された北京語の語法特点を用いて、岡本、矢野、米田のそれぞれの支那笑話及び支那童話による学習テキストが北京語の学習教科書としてふさわしいかを調査するものである。

2. 支那笑話・支那童話に見られる北京語の語法特点

太田辰夫は以下のように北京語の語法特点を要約する(太田 1988 : 286 頁)。

- 1) 一人称代詞の包括形(inclusive)と除外形(exclusive)を“咱們”“我們”で区別する。“俺”“咱”などは用いない。
- 2) 介詞“給”を有する。
- 3) 助詞“来着”を用いる。
- 4) 助詞“哩”を用いず“呢”を用いる。
- 5) 禁止の副詞“別”を有する。
- 6) 程度副詞“很”を状語に用いる。
- 7) “~多了”を形容詞の後におき「ずっと」「はるかに」の意を表わす。

以下に、岡本正文『支那笑話集』、矢野藤助『支那笑話新編』『日支對譯支那童話集』『華語童話読本』、米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謡研究』の各テキストの分析を行う。その結果は次の表の通りである。

	岡本『支那笑話集』	矢野『支那笑話新編』	矢野『支那童話集』	米田『支那童話歌謡研究』	矢野『華語童話読本』
1) “我們” “咱們”	11 例 14 例	7 例 1 例	17 例 6 例	9 例+18 例 1 例+0 例	43 例 4 例
2) “給”	22 例	31 例	17 例	5 例+4 例	43 例
3) “来着”	2 例	0 例	0 例	0 例+0 例	1 例
4) “呢” “哩”	18 例 0 例	23 例 0 例	31 例 0 例	10 例+14 例 0 例+0 例	48 例 4 例
5) “別”	6 例	4 例	5 例	0 例+0 例	13 例

6) “很”	24 例	51 例	51 例	13 例+7 例	80 例
7) “~多了”	1 例	2 例	0 例	0 例+0 例	0 例

(1) 岡本正文『支那笑話集』

1) 我們：(11 例)

一二 謊鼓皮

- 我們本鄉有一隻牛、頭在江南、尾巴在江北、有幾萬筋那麼重、豈不是一件奇事麼。
- 若沒有我們那兒那麼大的牛、怎麼能得這張大皮、去？你那面太鼓呢。

一八 腹內無文

- 我瞧你們作文章怎麼費事、彷彿我們娘兒們養孩子一個樣兒的難。

二五 較歲數兒

- 我們姑娘今年纔一歲、他們的兒子到兩歲了、這不是一倍大麼、若是我們姑娘到了十歲、他的兒子已經是二十了、我怎麼肯給這個老女婿哪。

二八 觀物傷情

- 我今兒是觀物傷情、想起我們老人家去世的那一天、

二九 外科大夫

- 我們外科的治法、算完了事了、這箭頭兒在肉裏頭、那是內科的事、怎麼也叫我外科大夫給治呢。

三二 性急性慢

- 我們舍親是甚麼時候兒走的、

四三 求人搬家

- 我們兩個人要搬家、先告訴您哪、您不是許下要請我們麼、所以特來叨擾、

四八 讀書的狗

- 不瞞您說、因為我們家裏塞苦、我就叫他出外、坐館教書去了。

1) 咱們 (= 僭們)：(14 例)

一四 夥穿靴子

- 哥哥又要叫他攤錢說、僭們兩再買一雙罷、

二五 較歲數兒

- 他媳婦兒就和他說、你算錯了、僭們姑娘今年雖然一歲、等到明年、可就和他的兒子同歲了。

二七 不能及第

- 老爺僭們走罷、如今跟您上那兒去、再不能及第了。

三七 沒有坐位

· 可就嚷着說、主人實在沒錢、*僮們*大家夥兒散了罷、

三九 扛欠戶

· 底下人乏了說、*僮們*找個地方兒歇歇兒、

四一 千金子

· 你既有一千兩金子、你留五百、分我五百、*僮們*兩平等、是一個樣兒的數兒、我又何必奉承你呢、

四二 公道良心

· *僮們*是骨肉弟兄

· *僮們*這麼彼此的較量

· *僮們*倆一遞一年的 /

· *僮們*改種芋頭罷

四七 沒眼的好

· 世界上的人、就是 *僮們*沒有眼睛的最好

· 如何能像 *僮們*清閒、逍遙自在的哪

· 到了兒還是 *僮們*沒有眼睛的倒好

四九 沒有良心

· *僮們*倆素不相識、現在承您這個樣兒的美意、我只有殺身報恩就結了

2) 給:(22例)

一 打個半死

· 我送給你一千兩銀子、我可要把你打死

二 睡法

· 他就叫老爺老爺、拿本書來給我

五 粧啞吧

· 給我再添些、

一〇 不下剪

· 有一個裁縫、給人家裁衣裳、打算着要賺他幾尺布、

二四 我何在

· 和尚就偷偷兒的把鐵鍊子脫下來、套在典史的脖子上、又拿剃頭刀把典史的頭髮、都給剃淨下

二五 較歲數兒

· 就託人說姓張的姑娘給他兒子作媳婦兒

二九 外科大夫

· 有一個當兵的、中了箭了、疼的了不得、就請了一位外科的大夫給他治

· 他就拿了一把大剪子、把外頭露着的箭桿子、齊齊兒的給他鉸了去了

· 箭桿兒雖然鉸了去了、箭頭兒還在肉裏頭哪、怎麼不 給我治出來、就要走呢

三〇 寫真

· 別人就 給他出了一個主意說

三一 活動話

· 父親就教 給他說

三二 性急性慢

· 這個慢性兒的親家、就 給那個急性子的親家、一恭到地說

三三 看上你了

· 這一天把人家的兒子 給治死了

· 問那個人說、 給誰瞧病哪

三九 扛欠戶

· 你們把他 給我扛來、我和他要、他不還、我不放他走

四一 千金子

· 我分 給你一半兒、你該奉承我了罷

· 我可着整數兒把這一千兩、都送 給你、難道你還不該奉承我麼

四四 把他燒了

· 他父親因為他兒子糊塗、恐怕他又忘了、就把這句話、寫在紙上、交 給他、

四七 没眼的好

· 粧知縣的就說、 給我打他們、那些個人、把倆瞎子搵在地下、就用鋤把子打了一頓

四九 没有良心

· 您把您的刀借 給我使使

· 老頭兒就把刀地遞 給他了

· 老頭兒聽這個話很有氣、就嚷起來了、驚動了街坊四隣出來、 給他們說合、竟作情了一半、

3) 來着：(2 例)

二二 嚴密

· 有一個莊稼漢、在莊稼地裏耕地 來着

四九 没有良心

· 有一個老頭兒、慈善好施捨、這天下大雪、見一個窮人、在他街門口兒、房簷兒底下站着避雪 來着

4) 呢：(18 例) → 「哩」：無し

四 十萬之富

· 你的十萬在甚麼地方兒 呢

五 粧啞吧

- 向來我沒有錢、怎麼能說話呢、今天有了兩個錢、自然就會說話了。

六 打嚏噴

- 我在外、怎麼就知道你在家裏想念我呢

一二 謊鼓皮

- 若沒有我們那兒那麼大的牛、怎麼能得這張大皮、去？你那面太鼓呢。

二三 大澡盆

- 這個盆還不算奇、敝處有根竹子、長得上柱天下柱地、長到天上沒有地方兒了、就又灣回來、還是朝着地、那纔算的是奇事呢、
- 若沒我這大竹子、怎麼能箍你那個大澡盆呢。

二八 觀物傷情

- 我今兒在府上、看見這個樣兒的洒盅、我怎麼能不哭呢。

二九 外科大夫

- 那個兵說、箭桿兒雖然鉸了去了、箭頭兒還在肉裏頭哪、怎麼不給我治出來、就要走呢
- 那我不管、我們外科的治法、算完了事了、這箭頭兒在肉裏頭、那是內科的事、怎麼也叫我外科大夫給治呢。

三四 吃夢中醋

- 他女人把他搖醒了說、你夢見甚麼這麼樂呢
- 我不信、你睡中做夢、你自己知道、我那兒能知道呢

四一 千金子

- 我富有千金、你為甚麼不奉承我呢
- 你既有一千兩金子、你留五百、分我五百、僂們倆平等、是一個樣兒的數兒、我又何必奉承你呢

四六 請帖

- 這個字義兒、我都明白了、要一位先生幹甚麼呢

四七 沒眼的好

- 這個瞎子就和那個說、到了兒還是僂們沒有眼睛的倒好、若是有眼睛的、受了知縣的氣、不但挨了一頓打、還要問個發罪呢。

四八 讀書的狗

- 我一時無心中撒了謊、明兒朋友要來、我怎麼回覆他好呢

四九 沒有良心

- 這個窮人說、怎麼是害您呢

五〇 欠戶會說

- 今兒你我一見、任甚麼話都不提、安安靜靜兒的、那不舒服麼、何苦要定打罵、自尋

苦惱呢、

5) 別：(6例)

一一 願脚踢

• 老爺您千萬別動手、拿脚踢我幾下兒罷

一六 願淹死

• 小子、別多給錢了

二七 不能及第

• 你以後別說落地、總說及第

三一 活動話

• 你可記住別忘了

• 快走罷、別站住脚

四二 公道良心

• 你別忙、我聽見人說、今年必要大旱、僭們改種芋頭罷、可是你得記着、去年我說的那個話哪、今年我收底下、你該收上頭的了、這纔叫做公道良心哪。

6) 很：(24例)

六 打嚏噴

• 有夫妻倆很和美

七 粗月

• 這天請客、在家裏喝酒、喝到晚上、不覺的月亮就上來了、客人看見很喜歡說、今兒在您這兒、想不到晚上有這麼樣兒的好月

九 死錯了人

• 先生聽他說錯了、就很很有氣說、我告訴你、這篇祭文是刻在書上的、一個字也不能錯、除非是你們家死錯了人了。

一四 夥穿靴子

• 有親哥兒倆湊錢、夥買了一雙靴子、哥哥白天穿着天天兒出門、不是拜客就是赴席、兄弟心裏很不願意

一五 恍惚

• 有一個人穿錯了靴子、一隻底兒厚、一隻底兒薄、走起道路來、是一脚高一脚低、很不合式

一六 願淹死

• 有一個人很齷齪

一八 腹內無文

• 有一個秀才、因為考試的日子臨近了、日夜憂愁、很有難受的樣子

· 那個秀才就說、還是你們養孩子倒容易得 很

二四 我何在

· 典史酒也醒了、找了和尚可沒有了、不由的又摸了一摸自己的腦袋、居然是個光葫蘆、又看見自己脖子上、帶着鐵鍊子、就 很納悶兒說、和尚可是有、我可是往那兒去了。

二五 較歲數兒

· 姓張的聽見說、就 很有氣說、我們姑娘今年纔一歲、他們的兒子到兩歲了、這不是一倍大麼、若是我們姑娘到了十歲、他的兒子已經是二十了、我怎麼肯給這個老女婿哪

二六 太太屬牛

· 知縣看見 很喜歡說

二七 不能及第

· 他主人聽他說這個話、 很不喜歡、就吩咐他說

二九 外科大夫

· 有一個當兵的、中了箭了、疼的了不得、就請了一位外科的大夫給他治、這位大夫一瞧說、不難、不難 很容易治

三二 性急性慢

· 實在是討愧的 很

三六 拳頭好

· 他父親聽見 很有氣、就罵他說
· 您不知道京裏的那拳頭、打上更好得 很哪。

三七 沒有坐位

· 心裏 很喜歡、可就嚷着說

四〇 瞞歲數兒

· 昨兒個叫耗子偷吃了 很多

四三 求人搬家

· 他聽這話 很喜歡

四四 把他燒了

· 客人聽他這個話、 很詫異說、多嘴沒的

四六 請帖

· 他父親聽他說這個話、心裡 很喜歡、就把先生辭了

四七 沒眼的好

· 有一個莊稼漢、聽他們倆自誇、就 很有氣、暗暗兒的湊了幾個人、假粧着縣太爺走路

四八 讀書的狗

· 他的朋友就 很羨慕說

四九 沒有良心

· 老頭兒聽這個話 很有氣、就嚷起來了

7) 多了：(1 例)

二〇 諱聾啞

· 近來總沒聽見閣下唱了、今兒一聽、比頭裏唱的強多了。

(2) 矢野藤助『支那笑話新編』

1) 「我們」(7 例)

第三六 鬼挑擔

· 我們兩個人是在禮單之內、原來是壽禮、死也不恨、你何苦來、要挑這擔子。

第四一 雨點滿鼻

· 我們臉上有耳朵、眼睛、嘴、鼻子、但是耳朵為甚麼不生一個呢、眼睛也不生一個呢、嘴不生兩個、是甚麼道理、鼻子不朝上生、又是甚麼道理。

第四三 電燈難吹

· 就有一個事、到現在還是不如心、他的臥房裏、夜裏永遠點着燈、直的到大天大亮、這是我們鄉下人不肯做的

第六〇 窮人遇賊

· 我們窮得如此、你還來偷、說着拿所枕的瓦扔去了

第六三 買我一家

· 那麼他要買我們家子去、佷用呢。

第六七 滑頭轎夫

· 甲對乙說、好利害的風呀、我們拆開轎子、自由行走好呀。你拿轎座、轎槓還是我來拿罷。

第七三 喜奉承

· 你這人好不在行、我們老爺最喜歡的是奉承、你若奉承幾句話、謝禮必定不少給

1) 咱們 (= 僭們)：(1 例)

第六〇 窮人遇賊

· 有夫婦倆很窮、吃早起的謀晚上的、媳婦兒說、僭們倆肚裏沒食、身上沒衣、何不賒一就來、雖然不能充餓、也可以搪搪寒

2) 給：(31 例)

第一三 出殯好看

· 你把最有趣兒的故事、講給他聽聽罷

第二二 啞子會講話

· 甲乙兩個要飯的、一塊兒出去求食。甲丐求食不得、就想了一個法子、拿了一張白紙、叫人

第二三 不識字

· 他說、是呀、我看見你來了、要遞 給你看、所以對我是顛倒着的。

第二八 甯死泥塗

· 他在水裏搖着手說、你們不可造次、最好的是 給我看看曆本

第三四 作饌半熟

· 他的男人就 給他買了一本烹飪雜誌來

第三五 何處最像

· 畫匠 給他說

第三六 鬼挑擔

· 他妹妹 給他送壽禮

· 禮單上寫的是一瓶酒、兩個鬼、送 給哥哥隨便做樂

第三八 近視眼

· 近視眼的帽子叫風 給颳去了

· 嘴裏頭就說、敢則我的帽子 給颳到這石頭上了

· 近視眼、還是疑惑他的帽子又叫大風 給颳去了。

第四二 請獸醫生

· 就對桂兒說、桂兒呀、你到大街上 給我請個醫生。

· 醫生問道、給那個牲畜治病

· 桂兒的父親說、給我治病、你為甚麼說是給牲畜治病呢。

· 醫生道、我是獸醫生、僅能 給牲畜治病、不能 給人治病。

第四四 祝壽送鐘

· 他的親戚朋友們都送 給他禮物

第四五 雪深二尺

· 他最恨的是、兒童家裏 給學生混告假

第四七 怎樣吃

· 你到大街上 給我買一斤肥羊肉、包包子吃的。

· 但是 給呆兒說了三四回、呆兒還是不會說、後來 給他寫了一個條子、於是呆兒就拿着紙條買去了。

第四九 魚腮塗粉

· 有個人、這天到市上買魚去、賣魚的指 給他腮、要很貴的價錢

第五〇 懶婦食餅

· 某村兒裏有個懶情農婦、平常的家常飯、都是他丈夫 給他料理

第五一 千金子

· 富戶說、我若分給你一半兒

· 富戶說、那麼我把我的錢、都送給你

第五三 驗糞趣話

· 一個人就分了些、裝在玻璃管子裏頭給醫生驗

第五八 預繳罰費

· 有個鄉下人、到城裏找親戚去、走到半路上、要撒尿、就到胡同牆犄角去撒、叫巡捕給看見了

第六一 也司太多

· 朋友聽着很討厭、這麼着他取底下人的煙嘴子、一連吸幾口、看不見一點兒煙、就把這個還給他笑着說

第六五 養白翎

· 有個老爺很愛他、專雇了一個小廝、叫給養活

· 這天天氣很熱、要給白翎洗澡、就吩咐小廝說

第六八 魔術

· 魔術家說、你能夠變最好了、快點兒變給大家看吧。

· 你究竟是怎麼個變法、先說給我聽一聽。

第七〇 偷酒

· 地下人哭着說、先生走後、小的在館、小心看守、忽然來了一個貓、把火腿給叨了去了

第七二 奉贈棺木

· 大家夥兒用刷馬桶的笤帚、把他纔給趕跑了。

3) 來着：(0 例)

4) 呢：(23 例)

第四 戴帽子用

· 教員說、那麼你的腦袋長着做甚麼用呢

第五 黑色空氣

· 先生說、怎麼是黑的呢

第二六 賣母豬肉

· 問說、這塊肉皮厚、莫非是母豬肉呢

第三〇 人面獸心

· 鄉下人說、怎麼要上他也跟人一個樣呢。

第三二 騙術巧妙

· 父親憂愁就和他說，你依怎麼個法子哄騙人呢

第三四 作饌半熟

- 男人問說、這是甚麼飯呢

第四一 雨點滿鼻

- 甲說。我們臉上有耳朵、眼睛、嘴、鼻子、但是耳朵為甚麼不生一個呢、眼睛也不生一個呢、嘴不生兩個、是甚麼道理、鼻子不朝上生、又是甚麼道理。

第四二 請獸醫生

- 桂兒的父親說、給我治病、你為甚麼說是給牲畜治病呢。
- 很驚訝的說道、怎麼你不會治我這病呢。

第四三 電燈難吹

- 姑娘說、那燈火是在玻璃瓶裏、高高的掛在頂棚上、怎麼能殼吹滅呢。

第四八 有福

- 小孩子也起來向母親說、為甚麼我總睡不着呢

第四九 魚腮塗粉

- 兩腮之間呢、賣魚的閉口無言、答對不出話來了。

第五二 開竅秘法

- 甲詫異說、這箇物品怎麼能治呢

第五六 怎樣死的

- 商人說、那麼你怎麼還不快樂的改業呢、你不怕後來也死在水裏麼
- 水手說、啊、都是死在牀上麼、那麼一到了晚上、你為甚麼還要上牀上去睡覺呢

第五七 只要利錢

- 末後有一個人說、開當舖何必用本錢呢、只要欄櫃一張、當票子幾張就行了麼

第六三 買我一家

- 兒子說、那麼他要買我們家子去、佻用呢。

第六四 糟餅兩個

- 朋友說、是喝熱的啊、還是涼的呢

第六八 魔術

- 魔術家忙喊住他說、你說要變、怎麼倒跳下壇去了呢。
- 魔術家說、你要變應當在壇上變、為甚麼要下壇去呢

第六九 閻王患病

- 手下問說、那是怎麼個理呢

第七〇 偷酒

- 因想着先生所囑的紅白兩瓶、一喝就死、小的先把白砒霜喝完了、總不見效、再把紅砒霜用完了、還是沒能身亡、現在頭暈腦悶、也不死也不活、躺在這裡直掙命呢。

第七一 半魯

- 把兄說、帖上寫明白的半魯侯叙、魚是魯字的一半兒不是、我找着請帖預備席面、你

還要吃甚麼呢、把弟就不願意的樣子走了

「哩」：(0例)

5) 別：(4例)

第一九 我是不去

· 急忙改口說、請你別拉、我不去、我是不去。

第二六 賣母豬肉

· 屠夫出賣母豬肉、偷偷兒的吩咐他的兒子別說、不大的功夫兒買肉的來了

第三七 經手難活

· 樵夫求饒說、我甯可挨腳踢、千萬別動手

第七〇 偷酒

· 屋裏有兩瓶、一瓶是白砒霜、一瓶是紅砒霜、千萬別動、若是喝了胃腸崩裂、一定要死、再三再四的囑咐就走了

6) 很：(51例)

第一一 禿子

· 你父親的髮是很長的了。
· 小孩子說、不長、短的很。

第二一 祇知天文

· 可是脚步兒直往後退、沒理會後頭有溝、竟自掉在溝裏了、偏巧溝水很深

第二三 不識字

· 有一個鄉下人到城裏的親戚家去、看見大家都拿了新聞紙在手裏、看得很有趣兒。
· 他本來不認得字、看見大家很斯文的看報、所以也拿了一張報觀看、假作斯文的樣子

第二四 魂作濶

· 有個人愛做濶、然而家裏很窮
· 窮人見媳婦兒來了、很為難

第二六 賣母豬肉

· 父親說、我早吩咐過你、你怎麼反倒先說起來、很有氣

第三二 騙術巧妙

· 兒子說、隨機應變、那個法子很多

第三四 作饌半熟

· 有個女先生、學問很深、人很漂亮
· 女人把那本書念就說、噫、得了、烹飪的法子敢情很容易、並沒有甚麼難的

第三七 經手難活

- 有一個樵夫、背着柴從山上回家去、高唱樵歌、心裏很高興
- 道路上樵夫無故的碰了醫生的身體、醫生很有氣、拿拳頭要打他
- 傍邊兒的人很詫異、問他這個理由

第三八 近視眼

- 正是乍冷的時候、颳很大的風
- 心裡裏很喜歡

第三九 選居旅館

- 他住的客店裏、臭蟲很多
- 近視眼喜歡說、我這就搬到這裏、豈不是很妙麼

第四二 請獸醫生

- 桂兒的父親聽了、很驚訝的說道

第四四 祝壽送鐘

- 有個守財奴很齷齪
- 有一個朋友很戲謔的
- 老頭兒受這個禮物很喜歡

第四五 雪深二尺

- 有一天、下大雪、上學的學生很少

第四八 有福

- 小孩子聽這話、很喜歡的跑出去了

第四九 魚腮塗粉

- 賣魚的指給他腮、要很貴的價錢

第五一 千金子

- 有個富戶很自大

第五三 驗糞趣話

- 大家見了很喜歡

第五四 射雉妙法

- 上海的野雞實在很多
- 一個滿面笑容、樣子很好

第五七 只要利錢

- 有個人聽說開當舖聽錢、心裏很願意開一個

第六〇 窮人遇賊

- 有夫婦倆很窮
- 男人覺着很冷

第六一 也司太多

- 有一天、在茶室裏、和他的朋友說話、一連氣說了很多的也司

· 朋友聽着 *很* 討厭

第六二 喜歡睡覺

- 有一個 *很* 喜歡睡覺的人。
- 自己常常兒的 *很* 得意的說
- 看見朋友正在睡着覺、但是他 *很* 明白噪鬧睡覺的沒有趣兒

第六四 糟餅兩個

· 有個人 *很* 愛喝酒

第六五 養白翎

- 有個老爺 *很* 愛他
- 這天天氣 *很* 熱
- 老爺便假粧喜歡說、拔的倒 *很* 好、比洗澡涼快多了。

第六七 滑頭轎夫

- 有甲乙兩個轎夫。甲是 *很* 聰明伶俐的
- 甲對乙說、這樣大的雨、抬着空轎子、不是 *很* 有妨礙

第六九 閻王患病

- 有一天閻王生病、病得 *很* 利害
- 閻王見了只有一個鬼跟着、心裏想一想、這醫生的醫道精通、一定成春了、*很快* 活的問說

第七〇 偷酒

· 地下人躺在地下、酒氣薰人、雞腿等等都沒了、*很有* 氣

第七二 奉贈棺木

· 心裏 *很* 着急

第七三 喜奉承

· 相士登堂、見富戶 *很* 傲慢的高坐

第七四 呆子述言

- 有個老頭兒、家裏寬綽、跟前有一個兒子、*很* 糊塗、老頭兒是非常的恨他
- 老頭兒瞧見牆上掛的條幅、畫的 *很* 秀雅
- 老頭兒到樓底下、見栓著一匹驢 *很* 好

7) 多了：(2 例)

第四四 祝壽送鐘

· 因為鐘是方便、比壽幛壽聯的虛文好 *多了*、想不到被某人猜破了那個意思

第六五 養白翎

· 老爺便假粧喜歡說、拔的倒 *很* 好、比洗澡涼快 *多了*。

(3) 矢野藤助篇『日支對譯支那童話集』

1) 我們：咱們（僭們）

我們：(17 例)

第四 橘子的故事

- *我們*今天初次相逢，怎麼你就要走了呢、你看，今晚的月色，這麼皎潔，還怕夜深了，不能夠回去麼，請再喝這麼幾杯罷。
- 吳魯、你不用一個人回去了，跟 *我們*走罷
- 因為他以後沒有出來，所以 *我們*現在吃橘子的時候，總覺得有一點兒酸味，這就是他思念家裏的眼淚的呀。

第五 九曲珠

- 這個匣子裏頭，有一顆寶珠，是 *我們*先祖傳下來的這珠的名字叫做九曲珠。

第七 馬頭娘

- 父親母親見了，爲以爲這蠶就是 *我們*的女兒。

第八 狐假虎威

- *我們*老虎，是百獸之王，自古以來，人人都知道，小小的狐狸，身體很微弱，怎麼能做獸王的。

第十 笨賊

- 師父，此刻 *我們*可以去了麼。

第一一 狐仙帽

- *我們*要發財了。

第一二 鮫人之淚

- 鮫人呀，*我們*快要丟開手了，我是就要死的了。

第一三 矮姑娘

- 他父親對母親，我曾看見麵店的麵坯，二隻手一拉，就長了麵條，*我們*的女兒，也照這個法子試試君，你說好麼。
- 姑娘的母親對父親說，燈籠壳向下一壓，不是低下去麼，*我們*的女兒，也可照這個法子試一試麼。

第一五 打冰山（一）

- *我們*爲着不下雨，不知道吃了多少苦，這天也太惡了，我若身體高一點兒，或是生了翼膀，一定要和天廝打。
- *我們*不如到龍王廟去求雨，倘若有効，*我們*情願演戲謝神，就一齊上龍王廟去，禱告求雨。

第一六 打冰山（二）

- 「快點下雨罷，*我們*合村的人，都要乾死了。」

第十九 人生牛角（三）

- 我們原來是街坊，又很相好，你何必道謝呢。

第二〇 人生牛角（四）

- 我們應當送你一程，我也不遠送，我送你出了材兒，也算我盡了點兒心，你不必推辭了。

1) 咱們（=僭們）：(6例)

第一八 人生牛角（二）

- 「那和尚還沒吃飯，僭們家裡只有鄉糧，並沒有好菜，這怎麼待客呢。」
- 「家裡只有一隻鷄，是預備明天過新年吃的，莫若把他宰了待客罷 僭們明天過年，不吃雞也不要緊，你想是不是。」
- 「這兩件事，一定可以應驗，等到今年十二月三十，我還要來，僭們再見罷。」

第十九 人生牛角（三）

- 不錯呀實在奇怪。從前村兒裏，只有僭們一家財主，到如今、也都叫他王財主了。
- 叫財主倒是小節，惟有他發財的法子，僭們可要打聽打聽。
- 你說的很是，你打聽來之後，僭們也可以照樣兒辦哪。

2) 介詞「給」：(17例)

第一 掩耳盜鈴

- 賊賊，你这笨賊，連我的鈴都要偷了，幸虧我的鈴會響，把我驚醒，現在你給我捉住，你還有甚麼話說。
- 不錯，不錯，還有左邊一只耳朵沒有掩住，所以給你聽得了。

第三 枇杷案

- 想了一會兒，給他想出一個法子。

第六 月下的傻孩子

- 秋節的晚上，有一個傻孩子，手裏拿着一匣月餅去送給舅媽。
- 媽媽叫我來把月餅送給你的。

第七 馬頭娘

- 有人能找回女兒的父親，這女兒就嫁給他。

第十 笨賊

- 他把石頭交給師父，滿想他要說聲
- 那家人家的人，都給他堂々の聲響從睡夢中驚醒來了，一齊起來把這個笨賊捉住。

第一一 狐仙帽

- 「我沒有帶着，明天早起給你送去罷」
- 平祥把遇着狐狸的事情給他說了

第一二 鮫人之淚

- 因為得罪海龍王，給他趕上岸來的。

第一三 矮姑娘

- 自拉之後，矮姑娘進出門戶，都要蹲下，這還不論，夜裡睡覺，沒有這樣長的牀和被，可以給他睡，所以姑娘只好在弄堂裡睡睡覺罷了。
- 父親說，好法子，好法子，不知費了多少腦筋，纔給你想出來呢。

第一五 打冰山（一）

- 大漢就從袖子裏取出一個望遠鏡來，交給李覺悟道

第十九 人生牛角（三）

- 那兒有不可以的理呢，可有一層，我說給你聽聽。

第二一 瓦盆告狀

- 老子休悶，今天我到衙門裡沒有一點兒遮蓋，所以冤枉說不出來，請你把衣服借給我，再去見包太守，保你成功了

第二二 孺子可教

- 張良聽了很不遂意，心想我皇帝且不怕，誰理會你這老頭兒，他正要打他後來念頭一轉，又想到看他年紀很老，給旁人見了，一定要說我少年人沒規矩，編派我的不是，姑且替他拾起來罷。

3) 助詞「來着」：(0 例)

4) 助詞「呢」(「哪」「呐」：「哩」)：(31 例)

第二 就是你

- 「小友，你身體好啊，尊嚴到那裏去呢，令堂在家裏麼。」
- 『小友、你身體好哪，尊嚴到那裏去呢，令堂在家麼。』
- 「小友，你的身體好啊，尊嚴到了那裏去呢，令堂在家麼。」

第三 枇杷案

- 「你如何知道牠甜呢，可見樹上少兩個枇杷，定是你偷吃的了。」

第四 橘子的故事

- 「你們二位老先生真是有興極了，怎麼到這兒來喝酒的呢。」
- 「我們今天初次相逢，怎麼你就要走了呢、你看，今晚的月色，這麼皎潔，還怕夜深了，不能夠回去麼，請再喝這麼幾杯罷。」

第五 九曲珠

- 「真難呀，恐怕仙人也想不出呢。」

第六 月下的傻孩子

- 「你這黑人，爲甚麼忍着餓不吃呢。」

- 「那麼月餅呢。」
- 「奇怪，那個黑人是怎樣的呢。」
- 「舅媽，你看，這個人還跟着我呢，就是他，就是他，在這裏呢，他和我並排的站着呢。」
- 「人家說你是個傻孩子，果然一點兒也不錯呢。」

第七 馬頭娘

- 那馬呢，只是等候在廐中，預備和女兒結婚但是人和馬怎好做夫妻呢。

第八 狐假虎威

- 「我若是逃跑，怕是跑不了，若是和他打仗，又怕不是他的對手，這可怎麼辦好呢。」
- 那知他們是怕老虎，不怕狐狸呢。

第一一 狐仙帽

- 「你看見我在那裏呢。」

第一二 鮫人之淚

- 士人家裏原來沒有錢，恐怕把他的房子，田地，家具統統變賣了，也備不了這一萬顆明珠呢。
- 「我不能要哭就哭，現在我見你好了，叫我怎樣哭呢。」

第一三 矮姑娘

- 父親說，好法子，好法子，不知費了多少腦筋，纔給你想出來呢。

第十四 審石頭

- 「你爲甚麼哭得這樣悲傷呢。」

第一八 人生牛角（二）

- 「那和尚還沒吃飯，僭們家裡只有鄉糧，並沒有好菜，這怎麼待客呢。」
- 王三說你問的好奇怪，既是一個雞，怎麼能沒有腿呢」
- 「那隻雞有幾條腿呢。」

第十九 人生牛角（三）

- 「我們原來是街坊，又很相好，你何必道謝呢。
- 這有甚麼不肯呢，但是恐怕那和尚不來。
- 這都是與我毫不相干，何必和我道謝呢。
- 那兒有不可以的理呢，可有一層，我說給你聽聽。

第二〇 人生牛角（四）

- 「那匹牛，有幾個犄角呢。」
- 「唉，他怎麼還不回來呢，他此刻回來，穀多麼好啊。」
- 這可怎麼辦好呢，幸虧你還有一件沒應驗過的，你可別隨便的說了，你就說願欲有無數的金銀，願欲有無數的珠寶罷。

第二三 不要賴罷

- 陳襄道，你爲甚麼進了幕，不去摸鐘，就出來呢，是不是怕他噹々的響起來，這就可

以證明你的罪惡了。

「哪」：(7例)

第二 就是你

·『小友、你身體好哪，尊嚴到那裏去呢，令堂在家麼。』

第五 九曲珠

·因為這顆珠的孔，中間一共有九曲，針綫不能穿過，所以到現在綫還沒有穿着哪，因為沒有人能想出穿珠的法子。

第一一 狐仙帽

·「若是把狐仙帽戴在頭上，誰也看不見，摘了那帽兒，纔纔看見哪。」

第十九 人生牛角（三）

·你說的很是，你打聽來之後，俺們也可以照樣兒辦哪。

第二〇 人生牛角（四）

·「那匹牛是個很寶貴的，和尋常的不同啊，他有四個犄角哪。」

·這都是你這惡婦人的嘴不好，那匹牛明明兒的是兩個犄角，你偏說是四個犄角，你多要兩個犄角做甚麼，你多要兩個犄角，長在你腦袋上哪。

·你還想金銀珠寶，你素日貪如命，不肯作一點兒好事，這是你蓄刻的報應，連累的我長了犄角，你叫我有甚麼臉面見人哪。

「呐」：(0例)

「哩」：(0例)

5) 禁止の副詞「別」：(5例)

第一五 打冰山（一）

·永久不下雨，他也要受累的，別說這樣無禮的話。

第一七 人生牛角（一）

·「你別費話，我沒有閒工夫，不如趁早快走，你別招我生氣，我這裏向來不容留閒人，快走罷。」

第二〇 人生牛角（四）

·你先別哭，四件事情，倒空空的丟了三件。

·這可怎麼辦好呢，幸虧你還有一件沒應驗過的，你可別隨便的說了，你就說願欲有無數的金銀，願欲有無數的珠寶罷。

6) 「很」：(51例)

第三 枇杷案

- 在從前漢朝末了的時候，有一個宰相，名叫曹操，權力很大，黨羽很多，連皇帝都怕他。
- 曹操因為很愛這樹，所以不許旁人亂採。
- 他想要警戒這個偷的人，無奈他的僕人很多，實在不易調查出來。
- 這枇杷甜蜜蜜的很好吃，砍去了，可惜的。

第四 橘子的故事

- 後來到了很晚的時候，白鬍鬚的老人說

第五 九曲珠

- 這珠既有九曲，用針必定不能穿過去，我想可以捉一隻螞蟻，再拿一根長絲錢住牠的後腳，把牠放在珠子一邊的孔裏，因為珠孔很小，牠不能轉身退後，只得望前面跑，便照着珠孔的曲折，跑出外頭，錢也隨牠出來，不是就穿過了麼。

第七 馬頭娘

- 他們在桑樹上，又發現了一個很大的蠶，只見作牠吐絲繭，工作很勤。

第八 狐假虎威

- 我們老虎，是百獸之王，自古以來，人人都知道，小小的狐狸，身體很微弱，怎麼能做獸王的。

第九 田螺精

- 等了一刻，竈旁的水缸裏，忽然豁辣一響，滾出一個大田螺來，旋了一轉，已經變做一個很好看的姑娘，把袖子一捲掣了米和菜向外頭淘洗去了。
- 農人看很清清楚楚，起來把田螺的殼兒藏好了。
- 我的外祖外婆，很喜歡我，常常兒的給果子糕餅我吃，給泥狗泥貓我玩，所以我屢次到外祖的家裏。

第一一 狐仙帽

- 平祥是個很粗莽的人，而且喜歡喝酒，有一天他喝了個大醉，獨自一個人，在野外亂撞。
- 平祥回到家裏，很喜歡的對妻子說
- 他很詫異，便隨手去拿那條線頭兒。

第一二 鮫人之淚

- 誰知那怪物並不驚慌，也不抵抗，只是很柔順的拿兩隻眼睛望住那士人。
- 後來，那士人想和一個很美麗的女子結婚，但是那女子的父母要求他明珠一萬顆，才肯把女兒嫁他。

第一三 矮姑娘

- 夫婿照這樣法念了。說時遲，那時快，妻子早已變成一個很姣豔的女子了。

第十四 審石頭

- 這數人還要抵賴，包龍圖早已叫差役把他身邊的錢搜出來，一看都帶着油漬，同那小

孩子所失的合算，共計二百個，一點兒不錯差役喚小孩子來，如數還他，小孩子謝着包縣官，很得意的去了。

第一五 打冰山（一）

- 內中有一個性情很急，力氣極大的農人，名叫李覺悟大怒道

第一六 打冰山（二）

- 那冰山在望遠鏡裏看看，好像就在目前，其實走起來，是很遠很遠。

第一七 人生牛角（一）

- 他住的房子很大，他種的地畝很多，並且牛馬成羣，金銀滿庫，真算是一家財主了。
- 這張財主雖然很闊，但是愛錢如命，是一件最大的毛病。
- 張財主的家裏，正預備過新年，他這個時候兒很喜欢，殺豬，宰羊，蒸年糕，過年的吃食，預備的樣樣俱全。
- 這張財主本來很苛刻，又非常的勢利。
- 他一看這和尚的窮樣子，心裏很不喜歡，便瞪着兩隻眼睛，對那和尚說

第一八 人生牛角（二）

- 「很好，既長兩條腿，我現在准你說兩件最願欲的事請，將來就照着你心裏所願欲的報償你，你想好不好」

第十九 人生牛角（三）

- 那個時候我想你很窮，所以我教他到你這裏來，這是我的好意，不知道你明白不明白。
- 我們原來是街坊，又很相好，你何必道謝呢。
- 張財主聽了，心裏很喜欢對王三作揖道謝。
- 我謝謝你，因為你保佑我，我這一年之間，身體強健，大運亨通，財產增加了很多。

第二〇 人生牛角（四）

- 張財主聽說和尚來了，心裏很喜欢，連忙跑出來，把和尚請到屋裏坐，立刻預備茶水，又宰了一匹大肥羊，預備最好的酒飯，給和尚吃。
- 那匹牛是個很寶貴的，和尋常的不同啊，他有四個犄角哪。
- 這個時候兒他心裏很着急，打算趕緊的到家，和他婦人商量那最願欲的事情，因此用鞭子打馬，催着馬快走。
- 誰知道這匹馬，走的很慢，越催越不走。
- 張財主拉着很重的車，累的渾身是汗，心裏又是心疼，又是生氣，一聽他婦人說的話，更覺有氣，便對他婦人說

第二一 瓦盆告狀

- 從前包公做定州太守的時候，有一個揚州人，名字叫李浩，家私很大，在定州做買賣。
- 到了黃昏時候，剛巧被賊人丁千丁萬碰着，眼見得李浩身邊銀洋很多，就商定了一條毒計，趁着醉把浩李扛到僻靜地方，奪了他的財物和黃金百兩。

第二二 孺子可教

- 張良聽了很不遂意，心想我皇帝且不怕，誰理會你這老頭兒，他正要打他後來念頭一轉，又想到看他年紀很老，給旁人見了，一定要說我少年人沒規矩，編派我的不是，姑且替他拾起來罷。
- 那知這老人倒很古怪，看見張良替他拾起鞋子，他伸出他的腳來說
- 孩子，你的性兒很好。
- 光陰很快，不知不覺五天過了第六天天剛亮，張良便起身走去。
- 好孩子，今天很早，我沒有旁的東西給你，只有一卷書。

第二三 不要賴罷

- 六百多年前，福建閩侯縣裏，有個很聰敏的人。
- 所以他的父母，很歡喜他，當着親戚朋友面前，總要稱贊他幾句。
- 陳襄聽了他父母的稱贊，也很快樂。
- 時候過得很快，沒有幾年，陳襄長成了一個大人了。
- 政府裏的人知道他十分聰敏，就請他去做浦城縣裏的官，浦城縣裏的人知道他十分聰敏，當他到任的那一天，很熱鬧的去歡迎他。
- 大家以為得到一個聰敏的縣官，全縣的事情，一定可以治理得很清楚明白了。
- 然後領了捉來的十多個人，一齊聚在廟裏，對他們道，幕裏這個鐘，能穀審問盜賊，很靈驗的。
- 今天他一定會很公正的判斷你們的曲直了。
- 最後一個人，從幕裏出來，陳襄照例握住他的手，突然很嚴厲的道，賊在這裏了。
- 那個人很驚惶的道，聰敏的縣官呀，靈驗的鐘沒有響，已經證明我是個誠實的人了。

7) 「～(形容詞) + 多了」: (0 例)

(4) 米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謠研究』

1) 我們 們們

我們: (9 例)

五 鐘淵

- 那些嫌惡參拜的，喜歡奢華的村人，大家商量道，我們難道沒有方法把這個寺廟做得更好看嗎，於是就用黃金來裝飾這個寺廟的外面，便變成光輝燦爛的一個極美麗的寺廟了。
- 『現在這個寺廟雖是已經美麗了，但是寺廟裏的鐘，還嫌太小，不很好看我，們必須用黃金來造一個大鐘，敲起來使他的聲音響到全村，難到我們沒有方法做到嗎』
- 大家商量道『這個鐘一些也不好，明天我們要棄掉他，把他投到湖裏去』

九 捉鍾馗

- 二人知勢不敵，就跪在鍾馗面前哀求道『鍾老爺，今天 *我們* 捉不到獮，閻王就要把 *我們* 活々處死』

十三 小人國

- 『跟着我來， *我們* 把你送到快樂之國去』

十七 猿島王

- 那兩個人說道『啊，你是中國人哪，很好很好，這島上的人除了本地土人之外，全是中國人， *我們* 也是中國人。
- 『張寶罪大惡極，竟敢傷害猿神， *我們* 必要硬緊將張寶殺死以息神怒，要不然必有大災大禍並且太陽永遠不能出來了』

僭們：(1 例)

十七 猿島王

- *僭們* 等着太陽就是了。

2) 介詞「給」：(5 例)

十七 猿島王

- 從此就將這小孩兒當作兒，子養活，真是愛如至寶，因此就 *給* 他起了一個名字叫作張寶。
- *給* 他請了一位老師，教他念書過了幾年。
- 又 *給* 他請了一位有武藝的老師教他練武。
- 很好很好，我把他治伏了也可以 *給* 這島上除一個大害。
- 你 *給* 我找一樣兒輕便的兵刃有沒有』

3) 助詞「來着」

童話部には無し

4) 助詞「呢」(「哪」「吶」：「哩」)

「呢」：(10 例)

七 黑面女

- 秋英一個人登在觀音廟裏，嘆氣道『天呀，怎麼生我這樣醜 *呢*，既然麻子，又要生瘤』

十五 崑崙山和泰山的談話

- 『我比你高了幾倍，爲什麼百姓要祭獮，不來祭我 *呢*』

十七 猿島王

- 張老者心中奇怪，仰起頭來一聽，彷彿是在松樹上 *呢*。
- 這哭的聲音，怎麼在樹 *呢*，真是奇怪

- 張寶撿起來一看，心中大喜，知道這島上一定有人，要不然這鐵鍬是從那裏來的呢。
- 不錯，我是中國人，這島是屬那一國管理呢
- 這祭禱的日子定了沒定呢
- 我且問你，這神仙是甚麼樣兒呢
- 你說這種迷信，豈不可憐可恨呢
- 我今天要不除了他，以後還不定要死多少人呢

「哪」：(1例)

十七 猿島王

- 啊，你是中國人哪，很好很好，這島上的人除了本地土人之外，全是中國人，我們也是中國人。

「呐」：(0例)

「哩」：(0例)

5) 禁止の副詞「別」：(0例)

6) 「很」：(13例)

一 商神和樵夫

- 這樵夫很是爲難，要想拾沒有法子，只好在河邊哭，哭了一會，剛巧管這河的主人走來
- 樵夫很快活的說『是的』

五 鐘淵

- 這個村莊很富，無論怎樣貧苦的百姓，他們所有的金錢，差不多都要車載斗量的。
- 『現在這個寺廟雖是已經美麗了，但是寺廟裏的鐘，還嫌太小，不很好看我，們必須用黃金來造一個大鐘，敲起來使他的聲響到全村，難到我們沒有方法做到嗎』
- 那歡喜奢華的村人，看金子是很輕的，所以立刻就贊成造一個黃金的大鐘。

九 捉鍾馗

- 兩個人很爲詫異，不管三七二十一，姑且帶上再說罷。

十一 長面孔

- 到了半夜的時候，忽然一個面孔很長的闖進來，說道『要吃你』

十三 小人國

- 愛兒跟着他們，經過很長的黑暗的地道，進到一個豐富美麗的國裏去。
- 快樂之國裏的人都是很小的，但却都是非常美麗。

- 他們有金黃的頭髮，披在兩肩。快樂之國的國王看見愛兒住了很久，非常想家，就允許他從地道裏出去一躺，回家看々母親。

十五 崑崙山和泰山的談話

- 崑崙峰見了這種景象，很奇怪的說道『我比你高了幾倍，爲什麼百姓要祭爾，不來祭我呢』

十七 猿島王

- 啊，你是中國人哪，很好很好，這島上的人除了本地土人之外，全是中國人，我們也是中國人。
- 很好很好，我把他治伏了也可以給這島上除一個大害。

7) 「～多了」：(0 例)

第二編 支那歌謠

1) 我們：(18 例)

六、海邊

青々の雲天，罩住綠々の海水，

幾隻白鷗東西飛；無量銀濤相擁擠。

- 我們同到黃沙底岸邊，鷗和波都向我們笑語。

- 來呀！同來遊戲！這是我們的天地。

青々の雲天，罩住綠々の海水。

白鷗們都來這裏；浪花們都來遊戲。

- 我們會蓋沙房給你住，會請貝殼哥々殿着你，

- 來呀！同來遊戲！這是我們的天地。

九 誰殺了知更雀

『誰去蓋他的墓衣？』

- 鷓鴣說：『我去最相宜，我們一夫和一妻。同去蓋他的墓衣』

三十二 太陽下山(俗謠)

太陽下山紅又紅

我勸主家要收工

別人家々吃晚飯

- 我們還在田當中

三十三 散花的舞

天使翻々の舞着呢：

紅的花，白的花，黃的花，紫的花

由他手裏飛舞下來，

佈滿在翠綠的細草氈上

綠草聞着花香，見着一朵美麗的花由天使手裏飛舞下來，
拍着手歡迎道：

『花呀，美麗的花呀！

歡迎，歡迎，

- 我們遊戲，
- 我們在青色的天幕底下遊戲！』

美麗的花答道：

『好呀，親愛的綠草；

在細柔的地氈上，

- 我們遊戲，
- 我們一塊兒遊戲』

美麗的花說着就掉在翠綠的細草氈上。

三十九 我們倆

好淒冷的風雨啊！

- 我們雨緊緊的肩並着肩，
向着前面的不可知，不住的衝走，
- 可憐我們全身都已濕透了，
而且冰也似的冷了，
不冷的只是相並的肩，相攜的手了。

四十三 蠅子

小孩兒，來看小蠅子

蠅子爬上牆，從不跌落地

- 我們沒有六隻腳，不能上牆去
蠅子愛吃糖，也有嘴一張
嘴裏無舌頭，有話也不能講
有時他振起翼來，也祇會嗡嗡作響
蠅子最怕冷，夏天纔出現
如遇落雨時，渾身都發顫
想飛也無力，祇向廚房鑽
也沒有衣裳穿，可憐他朝捱到晚！
左門頭屋角，蜘蛛常把網張開。
蠅子你留心，蜘蛛等你來！
我有一句話，你且聽我道：
蜘蛛待蠅子，心腹很不好！

你如遇著也，性命便休了！
那邊有蜘蛛網兒，離此並不遠，
你快些走罷 明日再相見。

四十四 初春

姊妹兄弟清早起，想到外面去遊戲
好冷呀，初春的天氣 微弱的春風吹面冷，冬眼的蛙蛇未醒。
狗兒縮尾戰瑟，園裏邊烏雀無聲。

- 『這樣冷的天氣，我們做什麼遊戲？』
- 『好光滑的石地，我們何不滑冰遊戲？

跑得又暖和，又有意思』
姊妹兄弟，哈々嬉々，在做滑冰的遊戲，
好玩吹，初春的天氣！

五十 夕陽與薔薇

於是擁護着她的成牆的綠葉
一齊沙々沙々地搖擺鼓噪起來：

- 『哦，皇帝這般眷戀我們的后呀！』

- 咱們（=僭們）：(0 例)

2) 介詞「給」：(4 例)

六、海邊

青々の雲天，罩住綠々の海水，
幾隻白鷗東西飛；無量銀濤相擁擠。
我們同到黃沙底岸邊，鷗和波都向我們笑語。
來呀！同來遊戲！這是我們的天地。

青々の雲天，罩住綠々の海水。
白鷗們都來這裏；浪花們都來遊戲。

- 我們會蓋沙房給你住，會請貝殼哥々殿着你，
來呀！同來遊戲！這是我們的天地。

十二 紹興城外底夜色

深藍色的天上，
月兒高高地挂着，
白雲一塊一塊地堆着。
四圍青的草色，
翠的山色，

和這綠水，茅屋，古城，偎抱在一起！

沈沈地睡着。

好一個秀麗的紹興城外，

- 那完全給月色寵住了的！

四十 風之歌

第三個人(代表西風)唱

我是西風

我四季都存在，

祇秋天是我最快樂的時節，

清明的早晨

涼意微々の侵人

我呀！

祇在黃的桐葉，紅的楓葉中跑着，

趕他們紛々の落地，

也趕了棗子，栗子，零々落々の落地，

- 把他們送給松鼠，做過冬的糧食，

秋之使者呀，

我是！

四十七 疑問

蝴蝶怎麼會飛呢？

我怎麼不能夠呢？

啊！我也要飛啊！

小鳥怎麼會唱歌呢？

姆媽怎麼不教我唱呢？

啊！我也要唱啊！

花兒怎麼鮮豔可愛呢？

我怎麼不和他一樣呢？

啊！我要開得像朵花啊！

仁愛的上帝，

- 你不肯賜給我像賜給他們那些麼？

我正等着那些啊！

望你給我那些罷！

3) 助詞「來着」：(0例)

4) 助詞「呢」(哪·吶)：「哩」

「呢」：(14 例)

二 白

1 白母鷄呀，歸來罷！

你的小鷄在這裏，

• 他要喫奶呢，他要抱々呢，

白母鷄呀，歸來罷！

2 白月季呀，開々罷！

你的姊々在這裏，

• 他要上街呢，他要插戴呢，

白月季呀，開々罷

3 白雲兒呀，下來罷！

你的寶々在這裏，

• 他要騎你呢，他要上天呢。

白雲兒呀，下來罷！

十五 先生和聽差

聽差的手和腳，是先生們的手和腳；

先生們的事，就是聽差的事，

東屋子的先生叫加煤；

西屋子的先生叫淘米，

南屋子的先生叫送信到郵政局；

北屋子的先生又叫掃地，

聽差忙亂了一會兒。

西屋子的先生可不樂意了——，

• 『聽差！淘米呢？鬧的幹麼去了！』

聽差回說：

• 『加着煤呢！一會兒就去』

『加煤是事：淘米不是事？真不是東西！幹不了就去罷！』

有軟々の聲兒說

『兩隻腳！……兩隻手！……不要也只索去！

『去麼——爾去！我有錢買得了鬼挑擔！你去！你去！……』

停了一會兒，只聽見廚裏浙呀浙的米響，

——再沒聽見一些些兒人的聲氣。

三十三 散花的舞

• 天使翻々の舞着呢：

紅的花，白的花，黃的花，紫的花
由他手裏飛舞下來，
佈滿在翠綠的細草氈上
綠草聞着花香，見着一朵美麗的花由天使手裏飛舞下來，
拍着手歡迎道：

『花呀，美麗的花呀！
歡迎，歡迎，
我們遊戲，
我們在青色的天幕底下遊戲！』

美麗的花答道：

『好呀，親愛的綠草；
在細柔的地氈上，
我們遊戲，
我們一塊兒遊戲』

美麗的花說着就掉在翠綠的細草氈上。

四十六 小詩六首

一脚下的小草呵，
你請恕我罷！
你被我蹂躪只一時，
我被人蹂躪是永遠呵！

二七葉樹呵，
• 你穿了紅的衣裳嫁與誰呢？

三停勻的殘雨，
我靜聽着你，
聽到天明罷！

四在不可見之故鄉的母親啊
我叫冷你聽着麼？

五我叫了一聲母親，
我底淚就不招自來了！

六小溪的水呵，
你緩々流罷！
待我再添些眼淚寄向故鄉去呵。

四十七 疑問

• 蝴蝶怎麼會飛呢？
• 我怎麼不能夠呢？

啊！我也要飛啊！

- 小鳥怎麼會唱歌呢？
- 姆媽怎麼不教我唱呢？

啊！我也要唱啊！

- 花兒怎麼鮮艷可愛呢？
- 我怎麼不和他一樣呢？

啊！我要開得像朵花啊！

仁愛的上帝，

你不肯賜給我像賜給他們那些麼？

我正等着那些啊！

望你給我那些罷！

(哪)

二十二 春天的早晨

鷄叫了，天明了，呀！四處的鳥聲，吱々吱々の真好聽呀！

- 多好看哪！淡黃的草，嫩綠的葉，鮮紅的雪白的花，都在那裏等着太陽放光明，太陽呀！你快些出來，照着這美麗的春景！

「訥」：(0 例)

「哩」：(0 例)

5) 禁止「別」：(0 例)

6) 程度副詞「很」：(7 例)

八 雀子說的

我初時住在壳兒裏，

不見天也不見地；

- 後來便破了壳兒，落在巢中很歡喜。

那時候我不能行，更不能到處飛。

我母親拿她的翅膀兒。

蓋著我的身體

而今我長成了，時々飛上樹枝，

對著那青々の樹葉兒，整日唱歌不止。

我愛在雲裏飛行；

我愛在樹林中游戲。

如果你也能夠飛，你便知道我心中的歡喜。

你不能隨著我飛行，我直可憐你！

九 誰殺了知更雀

『誰哭他最傷心？』

• 鴨子說：『我哭他最傷心，我和他很有交情。我要尋他無處尋』

十 不倒翁

莫道翁年老！

• 氣力還很好。

一跌一起來，從不要人抱。

老翁名喚甚麼？老翁名喚『不倒』

二十四、中華民國

中華民國：有最豐富的物產；

有高山和平原，長江和大川

還是未開的鑛，未懇的田

• 是一個很富足的國！

開着生活的花，結成幸福的果

中華民國：有最古的歷史；

有醇樸的風俗，勤勞的民族；

又有舊的文化，新的進步

• 是一個很有為的國！

開着和平的花，結成公道的果

三十六 跟隨者

煩惱是一條長蛇、

我走路時看見了他的尾巴，

割草時看見了他

紅色黑斑的腰部，

當我睡覺時看見他的頭了。

煩惱又是紅線一般無數小蛇，

麻一般的普遍在田野莊村間，

開眼是他，

閉眼也是他了。

啊！

他什麼東西都不是！

他只是恩惠我的跟隨者，

• 他很盡職，

一刻不離的跟着我。

四十三 蠅子

小孩兒，來看小蠅子
蠅子爬上牆，從不跌落地
我們沒有六隻腳，不能上牆去
蠅子愛吃糖，也有嘴一張
嘴裏無舌頭，有話也不能講
有時他振起翼來，也祇會嗡嗡作響
蠅子最怕冷，夏天纔出現
如遇落雨時，渾身都發顫
想飛也無力，祇向廚房鑽
也沒有衣裳穿，可憐他朝捱到晚！
左門頭屋角，蜘蛛常把網張開。
蠅子你留心，蜘蛛等你來！
我有一句話，你且聽我道：
• 蜘蛛待蠅子，心腹很不好！
你如遇著也，性命便休了！
那邊有蜘蛛網兒，離此並不遠，
你快些走罷 明日再相見。

7) 形容詞+「～多了」：(0例)

(5) 矢野藤助『華語童話讀本』

1) 「我們」：(43例)

第十課 獅與狐

• 獅子說「狐先生，我不信你有別的地方要去，*我們*同是老朋友，怎麼到了洞口，還不進來談談。

第十三課 老鼠會議

• 耗子受了貓的害，不知多少日子，因此有一群耗子，聚在一塊兒，商量說，*我們*白天躲着，黑間出來，還是不免受貓的害，必須想出一個好法子，保住永遠不受貓的害，纔可以放心過日子。

• 到了後來，有一隻耗子說「有了，有了，我有好法子來了，*我們*用一個鈴鐺，栓在貓兒的脖子上，倘若他走來，一定有叮噹叮噹的聲音，*我們*聽了這響聲，就可以預先逃

避了，這條計策，豈不是很好麼。」

第十四課 爭子

- 第一個婦人說「*我們*兩個人，各人生了一個兒子同在一間房裏睡的，他在夜裏睡昏了，把他自己的兒子壓死，趁我睡熟的時候，把我的兒子拿去，抱在懷裏，却把他的死兒子，放在我身邊。」

第十七課 讓產〔二〕

- 老大說「父親的遺言，本來應當遵守，但是這三個箱子，分配的實在奇怪，我不能獨占這一箱金銀，*我們*三個人總是平分的纔好。」
- 老二老三說「父親既有遺言，*我們*都應當遵守，不可隨便的更改。這些金銀是長兄應當承受的。」
- 老二老三說「*我們*是親骨肉，是親手足，街坊能管*我們*的家務麼。父親既然分配定了，*我們*就應當照着辦纔好，何必一定分開呢。」

第十八課 讓產(三)

- 老大便對老二老三說「*我們*三個人，大概是說不清了，*我們*求國王判斷去罷，國王若是說應當平分，*你們*可就不准推辭了。」
- 老二老三對老大說，大哥既願意求國王判斷，這是頂好的主意，*我們*就這麼辦罷。

第二十三課 牛二拳頭(五)

- 小鬼說「是*我們*把你捉來的。」

第二十四課 牛二拳頭(六)

- 「啊，你往陽間去麼，很好，很好，我正要回陽間去呢，我不認得道路，*我們*一同走罷。」

第三十課 牛二拳頭(一二)

- 我期望你很深，我也願意你特別的自愛，*我們*後會有期，再見，再見。

第三十二課 飛行鞋（二）

- 五個小孩子齊聲說「好媽媽，救救*我們*罷。」
- 「好媽媽，讓*我們*進來罷，你總可以想法子，倘若*我們*在外邊，一定要給野獸吃了。」

第三十三課 飛行鞋（三）

- 他的媳婦兒連忙止住他說「*我們*有烤羊烤豬沒有吃，早上殺的一隻牛，也沒有動過，這五箇小孩子過幾天再吃罷」

第三十七課 黃金樹（三）

- 「財神爺從天上下來了，*我們*迎接財神爺呀。我們應當給財神爺叩頭哇。」

第四十三課 黃金樹(九)

- 工人說「*我們*是控金子的。」
- 「你跟*我們*一同走做甚麼呀。」
- 「*我們*拿金子去麼，好哇，誰許*我們*拿呀，你要知道，*我們*挖出來的金子全是歸公司，除了工錢之外，一點兒金子也拿不去。」

第四十四課 黃金樹（一〇）

- 我不是說過嗎，這是一座金礦，*我們*全是開礦的工人。
- 那金子是挖出來的，並不是樹上結的，就是*我們*挖出來的也不是鏢子，你要知道，那金子有混在石頭裏的，有混在砂子裏的。
- 照你說樹上結元寶，如果有這樣的樹，*我們*全種樹去了，誰還賣這苦力氣呀。

第四十七課 黃金樹（一三）

- 這纔是真正的黃金樹呢，你看我家父子倆，本來非常的貧窮，我在這裏開設茶館，我兒子在山上作工，*我們*兩個人度日非常儉省，每天總有積蓄，算起來，不過三五年已經有了許多的積蓄，這是真實的憑據，

第五十課 兩個弟兄（一）

- 第二天哥哥對兄弟說「*我們*應該分住了，這先人的產業如何分法呢。」
- 哥哥說「我看*我們*最好的是明兒早起吃粥，誰先吃完誰便得家產，那後吃完的只配得一條狗。」

第五十四課 盒仙（一）

- 那盒仙哭了起來，後來他又喜歡就說「我和你本來有緣，現在你既踏破盒子，斷了我的歸路，*我們*成爲夫婦罷。」漁夫很喜歡。

第五十九課 寓言四則

一 五十步百步

- 於是退五十步的兵丁得意洋洋的笑着說「哼，你們這麼膽小，怎麼好出來打仗呢，*我們*只退五十步，你們爲甚麼要退一百步呢。」

第六十一課 九曲明珠（一）

- 他說「您老先生既肯前往，*我們*就一路同行罷。」
- 孔子說「本來可以一路同行，但是我帶着許多學生，走的很慢，同行彼此不便，你可以騎馬先回去，將來到了貴國之後，*我們*再談罷。」
- 就上了馬，向孔子拱着手說「恕罪恕罪，*我們*到敝國再見再見。」

第六十一課 九曲明珠（二）

- 對孔子說「請看一看，這顆明珠的孔窿，並不是直的，裏頭灣灣曲曲的，有九道灣兒，你們若能用這絲線，把珠子穿上，*我們*長官放你們走罷。」
- 這時學生裏有一個姓端木名賜號叫子貢的對孔子說「我想起一件事來了，*我們*前天在路上遇見那個採桑的女子，他不是說『夫子行陳必絕糧』嗎。
- 這麼看起來，*我們*絕糧挨餓，他在事前已經算定了。
- 後來他又說『九曲明珠穿下過，回來問我採桑娘。』從這兩句話看起來，他必有穿珠的法子，*我們*怎麼不問他去呢。」

第六十五課 七步成詩

- 現在*我們*很不和睦，我怎麼對付他好呢，不答應，他便要罰，答應了，不知要做甚麼

詩。

- 曹丕聽了，心裏想道「他這首詩，明明兒的是把豆此他自己，把豆莫比我，把根比我們父母親哪，

第六十七課 花果山(一)

- 就高聲喊道「那一個有本領，能夠鑽進去尋出源頭，我們拜他爲王。」
- 石猴說「裏頭沒有水，只有一座鐵板橋，橋邊有一所天造地設的石屋，這水從橋底下沖出來，把門戶遮住，橋邊有花有木，石屋裡有石鍋石竈，石盃石盆石牀石凳，真是我們安身的好地方，我們都進去，省得受（熱熱？），豈不是很好麼。」
- 衆猴聽了全都喜歡，都說「請你做引導，帶我們進去。」
- 衆猴鼓掌稱讚都說「善哉善哉，我們明天越嶺登山，廣求仙品，大設筵宴，送大王的行。」

第六十九課 花果山（三）

- 一天和大衆在松樹底下遊玩，大衆都說「悟空已會變化，何不變與我們看看。」

第七十課 花果山（四）

- 悟空一到，有千萬猴子一齊跳出，把猴王圍在當中，叩頭說「大王怎麼一去這樣長久，把我們撇在這裡，現在來了一個妖魔，硬要佔據我們的洞府，我們拚命和他相打，被他捉去許多弟兄，大王若再不來，連洞府都要被他奪去了。」
- 衆猴聽了鼓掌說「大王是老孫，我們都是一孫二孫小孫，一家孫一國孫了。」

1) 「咱们-偈们」：(4 例)

第四十二課 黃金樹(八)

- 「那是一定的，我取回來，偈們還拋着玩好不好。」

第四十三課 黃金樹(九)

- 工人說「我們是控金子的。」「巧極了，偈們一同走罷。」

第四十九課 小八狗(二)

- 有一天他又向小八狗說「小八狗，偈們現在住房夠多破爛，你給我蓋所大瓦房罷。」

第五十二課 牛郎(一)

- 有一天，他的哥哥向他說「我的小兄弟呀，偈們分家罷，你是一個人，我是妻兒老小一大羣，恐怕後來連你那份家私都要吃淨的。」

2) 介詞「給」：(43 例)

第一課 到底如何

- 缸底本來是很小的，給他這樣的一動，就倒在地上打破了。

第四課 產金蛋的鵝

· 主意打定，就立刻拏刀來，把這個鵝的肚子，給破開來了。

第十課 獅與狐

· 他的朋友們，兔啊，山羊啊，鹿啊，狼啊，豹啊陸續到他洞裏去問他的病，都給他趁勢捉住吃了。

· 可是他的詭計，給一隻狐狸知道了，於是故意從獅子的洞前經過。

· 「狐先生，但是甚麼呢，請你說給我聽。」

第十一課 鴉與狐

· 我要求你唱一個給我聽，洗一洗我耳朵裏的俗氣，你千萬別推辭。

第十四課 爭子

· 「我情願把兒子讓給他，不要用刀分了。」

· 「我不要，不要讓給我，情願用刀分。」

· 於是把活兒子判給第一個婦人，把那要分兒子的趕了出去。

第十六課 讓產（一）

· 他的兒子連忙請了醫生來，給老農人診治。

· 我在菜園的東南角上，埋了三個箱子，這三個箱子，就是傳給你們的家產。

第十八課 讓產（三）

· 第一個箱子裏，裝着金銀，那是把家裏所有的金銀錢鈔，全分給他的憑據，

· 第二個箱子裏裝着骨頭，那是把家裏所有的豬馬牛羊，全分給他的憑據，

· 第三個箱子裏裝着零碎木頭和土塊兒，那是把家裏所有的房屋和土地，全分給他的憑據，

第二十課 牛二拳頭（二）

· 噯喲，我兩天沒吃東西啦，眼看着就要餓死了，你老賞給我一文錢，就是積德行好了。

第二十一課 牛二拳頭（三）

· 乞丐說完，便把脖頸上繫着的一個破布口袋摘下來，交給牛二拳頭。

第二十二課 牛二拳頭（四）

· 你送給我這口袋，雖然不是貴重物件，因為是乞丐送的，倒覺着有價值了。

第二十五課 牛二拳頭（七）

· 他被死神扣的，不能出氣，心中非常著急，正在性命呼吸之際，忽然想起乞丐送給他的那個口袋，連忙打開口袋嘴說「收進去。」

第二十六課 牛二拳頭（八）

· 你來的甚好，你送給我的口袋，實在有用處，今天若沒有這件寶物，可就吃了大虧了，幸爾有這寶物，算是把這死神制服了。

第三十課 牛二拳頭（一二）

· 現在因為你慈善正直的緣故，給你增壽八十年，送你還陽，你回到陽間，必須努力行善，將來死的時候，不到極樂世界，也必到天堂去了，大約不能再到這裏來了。

- 但有一層，你要知道，今天給你增壽、並不是怕你的拳頭，也不是怕你的口袋，是因為你慈善正直的緣故，你不要想錯了。

第三十二課 飛行鞋（二）

- 「好媽媽，讓我們進來罷，你總可以想法子，倘若我們在外邊，一定要給野獸吃了。」

第三十七課 黃金樹（三）

- 我們應當給財神爺叩頭哇。
- 把一個阿愚幾乎給樂壞了。

第四十六課 黃金樹（一二）

- 老人又給他斟了一杯茶，然後對他說

第四十八課 小八狗（一）

- 到了水晶宮裏給龍王磕頭。
- 「你的琵琶彈得很好，每天有人告訴我，你可以給我彈一曲嗎。」

第四十九課 小八狗（二）

- 小八狗，你們現在住房夠多破爛，你給我蓋所大瓦房罷。
- 縣官信他靈驗，又向傻子要水龍和火龍給他賊明瞧瞧。

第五十二課 牛郎（一）

- 是了，分就分、房產地業一概歸你，那輛破車和老牛就分給我罷。

第五十三課 牛郎（二）

- 一天他就問牛郎要披衣瞧瞧，花言巧語，把牛郎一陣說得心軟，便取出給他一看，那想他見了披衣，奪去披起乘雲而去。

六十課 種梨

- 傍邊有一個在店家做夥計的，看他們吵得實在利害，便拿出錢來買了一個，送給道士。
- 內中有一個刁鑽刻薄的人，便到左近的店舖裏，要了一盆滾水來給他。
- 道士便伸手到樹上去一個一個的採下來分給大家。
- 他到這個時候，纔知道道士分給大家吃的，就是自己車子裏的東西，又仔細一看，那車子的兩根柄兒，已經不見了一根，好像新鋸斷似的。

第六十一課 九曲明珠（一）

- 便取出國王的信來，遞給孔子。

第六十三課 九曲明珠（三）

- 哦，你是找杜三娘的呀，他沒在家，我這裏有瓜給你吃罷。
- 珠子穿完，交給軍隊，立刻解圍。

第六十四課 三字驢

- 命下人把驢子牽到諸葛子瑜的家裏，就算送給他了。

第六十六課 草船借箭

- 孔明說「子敬（魯肅的號）救我，請你借給我二十隻船，每船要三十個軍士，船上都用

青布做慢，各備束草一千多個，分布兩邊，我別有妙用，可別叫公瑾（周瑜的號）知道。」

- 孔明又叫船回轉，頭東尾西，逼近水寨受箭，等到日高霧散，孔明令收船速回，兩邊草束上已排滿箭枝，回到南岸，收集箭枝，交給周瑜。

第六十八課 花果山（二）

- 猴王連忙說「求你老人家指給我神仙的住處，讓我去找。」

第七十課 花果山（四）

- 悟空聽說大怒道「甚麼地方的妖魔，這樣大膽，我給你們報仇。」

3) 助詞「來着」：(1例)

第二十六課 牛二拳頭(八)

- 牛二拳頭說「甚麼，放你出去，你怎麼扣我咽喉來着，你想要出去，你算是作夢呢。」

4) 助詞「呢」：(48例)

第十一課 鴉與狐

- 烏大哥，你怎麼這麼漂亮呢，眼睛是非常的秀美，翎毛是非常的光潤，容貌是非常的好看，你全身沒有一處不好的，你既然長得這麼漂亮，若是唱出曲兒來，那聲音是一定是極好聽的了。

第十二課 輓耳翁

- 這老頭兒可不疼他兒子，怎麼自各兒騎驢子，叫那兒子跟着走呢、爲甚麼不父子一同騎咧。

第十三課 老鼠會議

- 這個法子倒是很好，但不知那一個拿了響鈴，去拴那貓兒的脖子上呢，請你們拏定主意。

第十五課 守財奴

- 「你爲甚麼哭得這麼悲切呢。」

第十八課 讓產(三)

- 你們想一想，你們父親替你們分的，豈不是很公平麼，何必還要推讓呢。

第二十課 牛二拳頭(二)

- 「你教我積德行好，這本是我願意作的，但是我怎麼積德，怎麼行好呢。」
- 「這老乞丐年邁龍鍾，實在可憐，給他一文錢，那裏夠用的呢，我現在掙的一年的工錢，已經吃了一個酒足飯飽，不如把下賸的錢，全都給他，或者可以救他一條命，也未可定。」

第二十二課 牛二拳頭(四)

- 「啊，這口袋，是一件奇妙的東西，我且問你，他怎樣的奇妙呢。」

第二十三課 牛二拳頭(五)

- 「我記得在一個空廟裏睡覺，其麼時候，跑到這裏來了呢。」
- 「這不是地獄是甚麼呢。」
- 「我怎麼到這裏來了呢。」
- 「我好好的睡覺，你們爲甚麼捉我呢。」

第二十四課 牛二拳頭(六)

- 「甚麼，教我死，我是不會死的，就是不願欲活着的時候，我也是到極樂世界去，誰往這污穢的地獄來呢，你們兩個人，實在是混賬的很，無故的把我帶到地獄來，作甚麼，趕快的把我送回去，如若不然，你們可要小心我這兩個拳頭，你們要知道，我牛二拳頭，可不是好惹的。」
- 「啊，你往陽間去麼，很好，很好，我正要回陽間去呢，我不認得道路，我們一同走罷。」

第二十五課 牛二拳頭(七)

- 「你不要引誘我，我現在還不想死呢。」

第二十六課 牛二拳頭(八)

- 「甚麼，放你出去，你怎麼扣我咽喉來着，你想要出去，你算是作夢呢。」

第二十七課 牛二拳頭(九)

- 世界上的人類，既然有生，必須有死，倘若沒有死神，人就永遠不死了，那如何使得呢。
- 但有一層，我放了他之後，他若是再來引誘我去死，那可怎麼辦呢。

第二十八課 牛二拳頭(一〇)

- 「是那一種要緊的人呢。」
- 怎麼沒有應當死的人呢。
- 你怎麼說沒有應當死的人呢。
- 倘若你能把這些個惡人，引誘去死了，你的功德還算是很大呢。

第三十二課 飛行鞋 (二)

- 「這是我……我丈夫回來了，怎……怎麼好呢，你們快藏起來，藏起來，藏在這床底下罷。」

第三十五課 黃金樹(一)

- 這是甚麼緣故呢。

第三十九課 黃金樹(五)

- 若打算再找從前的快樂，必須先找許多的金銀纜成，但是這許多的金銀從那裏找去呢。

第四十課 黃金樹〔六〕

- 你們叫他從那裏想法去掙錢呢。

·「我雖然想不出法子來，阿巧向來主意甚多，我何不向他請教去呢。」

第四十三課 黃金樹(九)

- 這山爲甚麼叫黃金山呢，因爲這山上有黃金礦。
- 「你挖的金子爲甚麼歸公司，你自己爲甚麼不要呢。」

第四十四課 黃金樹(一〇)

- 我看你一定是財迷，若不然必是瘋子，你簡道的是胡說，那裏來的黃金樹呢，你是聽誰說的呀，你大概是受人的欺騙了罷。

第四十五課 黃金樹(一一)

- 這本是一句取笑的話，誰知你竟誤會了呢。

第四十六課 黃金樹(一二)

- 你要知道，這黃金樹不過是一句比喻的話，那裏真有這樣兒的樹呢。
- 這是甚麼緣故呢，你聽我說，假如你回去，同他拚起命來，你就把他殺了，試問你把他殺了之後，你原有的財產就回來了麼，大概回不來罷，既是回不來，你把他殺了，又有甚麼用處呢，況且兩個人拚起命來，勝負是不能預定的。

第四十七課 黃金樹(一三)

- 這纔是真正的黃金樹呢，

第五十課 兩個弟兄(一)

- 「我們應該分住了，這先人的產業如何分法呢。」
- 兄弟心中想，一家人團聚在一處豈不是好麼，何必要分散呢，既是哥哥如此說，

第五十二課 牛郎(一)

- 「牛兄，你還提媳婦兒哩，我這樣受窮，誰肯把女兒嫁我一文不值的人呢。」

第五十五課 盒仙(二)

- 你想無論甚麼樹，必要二一年纔能長成，三天的工夫，叫漁夫如何辦得到呢。
- 這有甚麼難，也值得如此的憂傷呢，你到山上採點兒小樹枝來。
- 漁夫心想，這事怎麼行呢。

第五十六課 孽龍

- 「想是我昨天的珠子有靈，既然珠子是件寶貝，母親怎麼不放點兒錢在裏頭呢。」

第五十九課 寓言四則

一 五十步百步

- 哼，你們這麼膽小，怎麼好出來打仗呢，我們只退五十步，你們爲甚麼要退一百步呢。

二 杞憂

- 倘或這天一旦倒下來，我的身體放到那裏去呢。
- 天是空氣積成的，世界上沒有一處沒有空氣，你這時也在空氣裏，怎麼會得倒呢。

第六十一課 九曲明珠(一)

- 「是的，你問我作甚麼呢。」

第六十四課 三字驢

- 究竟孫權用甚麼法子去試驗他 *呢*，就是等到大家喝酒正在高興的時候，傳令僕人牽出一匹驢子來，紙條上寫着「諸葛子瑜」
- 諸位試想，究竟他寫些甚麼，能夠使得大家這樣拜倒 *呢*。

第六十七課 花果山(一)

- 你們剛纔說能進得這地的、拜他爲王，現在我尋着洞天，叫你們安享快活，怎麼不拜我爲王 *呢*。

「哪」：(19 例)

第十一課 鴉與狐

- 「這片肉很好吃，能殼到我嘴裏來纔好 *哪*。」
- 人生在世，也得要小心着 *哪*。

第十七課 讓產〔二〕

- 「你們願意我一個人獨得、這是你們愛哥哥的好意，我也是愛你們 *哪*，你們一定不肯平分，豈不是倒叫我難過麼。」

第二十課 牛二拳頭(二)

- 「作小買賣，固然甚好，但是我沒有本錢，也是枉然 *哪*。」

第二十三課 牛二拳頭(五)

- 你說誰討厭 *哪*，你睜開眼睛，看看這是甚麼地方。

第二十六課 牛二拳頭(八)

- 這口袋真是一件寶物，今天若是沒有這口袋，可真危險 *哪*，這麼看起來，那乞丐算是我的救命恩人了。

第三十六課 黃金樹(二)

- 這纔是真正的樂事 *哪*。
- 甚麼叫『拋金撒銀』 *哪*。
- 哈哈，搶的時候纔有趣 *哪*。
- 你擠我，我撞你，奇形怪狀，甚麼樣子都有，啊，那纔好看 *哪*。

第三十九課 黃金樹(五)

- 所有的底下人都都陸續的走了。可歎 *哪*。

第四十一課 黃金樹(七)

- 「你問甚麼地方有錢 *哪*，有錢的地方倒有……。」
- 哼，黃金樹這時候正茂盛呢，哼，結的元寶，有枕頭那麼大，呵，大的很 *哪*。

第四十二課 黃金樹(八)

- 「有黃金樹，多的很 *哪*。」

第四十三課 黃金樹(九)

・「啊，世界上還有結元寶的樹 哪，這可是奇極了，我且問你，這黃金樹在甚麼地方有哇。」

第四十四課 黃金樹（一〇）

・他聽完了工人所說的話，呆想了半天，心裏漸漸兒的醒悟，知道是受了阿巧的欺騙，又往前一想，甚麼『拋金撒銀』 哪，也是他出的壞主意，再一想自己已經成了窮人，全是他害的。

第四十八課 小八狗（一）

・「小八狗，我想酒席吃，你給我豫備 哪。」

第六十三課 九曲明珠（三）

・「瓜是子在裏邊，那杜三娘一定在家 哪，求你替我告訴一聲兒罷。」

第六十五課 七步成詩

・曹丕聽了，心裏想道「他這首詩，明明兒的是把豆此他自己，把豆萁比我，把根比我們父母親 哪，

「呐」：（0 例）

「哩」：（4 例）

第五十二課 牛郎（一）

・「牛兄，你還提媳婦兒 哩，我這樣受窮，誰肯把女兒嫁我一文不值的人呢。」

第五十九課 寓言四則

四 塞翁失馬

- ・塞翁說「有甚麼希罕，這事也許是福氣 哩。」
- ・塞翁說「有甚麼希罕，這事也許是禍患 哩。」
- ・塞翁說「有甚麼希罕，這事也許是福氣 哩。」

5) 禁止の副詞「別」：（13 例）

第八課 狼與鶴

・又說「吃呀，你 別客氣。」

第十課 獅與狐

・獅子說「狐先生，你好嗎，我許久沒有見你的面，請你到洞裏坐一坐， 別要這麼忙罷。」

第十一課 鴉與狐

・我要求你唱一個給我聽，洗一洗我耳朵裏的俗氣，你千萬 別推辭。」

第十六課 讓產（一）

・這是很公道的，你們都要記着，可 別忘了。

第二十一課 牛二拳頭（三）

「・你老 別走，我還有話說呢。」

第二十六課 牛二拳頭(八)

- 嚷道「*別*打了，饒了我罷。」
- 「*ai* (口+哀) 啲，*別*打了，再打，就要打活了。」

第二十九課 牛二拳頭(一一)

- 「你起下的重誓可*別*忘了。」

第四十六課 黃金樹(一二)

- 老人說「你*別*忙，我還有話和你說呢，你暫且坐下，你也消一消氣兒。」

第四十八課 小八狗(一)

- 我先告訴你，彈完了之後，他無論給甚麼，你全都*別*要，就要他跟前睡的那個小八狗，是龍王的女孩兒，將來你向他要甚麼東西，全都會有的。

第六十六課 草船借箭

- 「先生的話正合我意，但是軍中箭不穀用，我要想請先生監造十萬枝箭，您*別*推却。」
- 「子敬(魯肅的號)救我，請你借給我二十隻船，每船要三十個軍士，船上都用青布做幔，各備束草一千多個，分布兩邊，我別有妙用，可*別*叫公瑾(周瑜的號)知道。」

第六十七課 花果山(一)

- 有一天忽然迸裂，產出了一個石卵，見了風化做石猴，五官完備，四肢齊全，行走跳躍，吃果喝水，件件皆能，和猿鶴麋鹿做朋友，夜宿山崖，朝遊峰洞，真是*別*有樂趣。

6) 程度副詞「很」: (80 例)

第一課 到底如何

- 空想先生看見一家賣缸店，生意*很*好，就想開個缸店兒發發財。
- 缸底本來是*很*小的，給他這樣的一動，就倒在地上打破了。

第四課 產金蛋的鵝

- 有一個人，養了一隻*很*奇怪的母鵝，這隻鵝一天下一個金蛋。

第五課 干尼德黑爾斯坦

- 他又出城到海邊兒的口子上，着見好些火輪船，爽板船，有上貨的，有卸貨的，也有用大車和小車子拉的，也有用担子挑的，貨物*很*多。
- 回店心裡*很*憂慮，起憂慮裡恍然醒悟了。

第六課 大饅頭和大包子

- 姓張的小孩子，路上碰着一個姓李的小個子，拉著他道「哦，我昨天吃着一個*很*大的饅頭，

第七課 舊馬掌

- 那兒子瞅見了*很*願意吃，就只不敢要，他父親也總沒給他。

第九課 孟母

- 孟母就是孟夫子的母親，是世上很賢德，很能幹的一個女子。

第十課 獅與狐

- 有一隻獅子，素來非常的懶惰，現在又加上年紀很老，沒有能力去搜尋食物，所以他不能不用狡猾的法子來引誘別的走獸。
- 獅子藏在洞裏，假裝病得很利害。
- 狐狸答說「獅先生，我今天却是很忙，還要到別的地方去啊，沒有工夫到你的洞裏說話了，實在對不起，明天再見罷。」

第十一課 鴉與狐

- 忽然聞見肉的香味，抬頭一看，便看見老鴉叨着肉片，落在樹上，老狐一看，饞的他順口流涎，心裏想道「這片肉很好吃，能殼到我嘴裏來纔好哪。」

第十二課 輓耳翁

- 到了個熱鬧地方，又有很多的人笑他說
- 他聽見這話，心裏很着急，就同他兒子都下來，跟着驢子後頭步攆兒。

第十三課 老鼠會議

- 「有了，有了，我有好法子來了，我們用一個鈴鐺，拴在貓兒的脖子上，倘若他走來，一定有叮噹叮噹的聲音，我們聽了這響聲，就可以預先逃避了，這條計策，豈不是很好麼。」
- 那老耗子答道「這個法子倒是很好，但不知那一個拿了響鈴，去拴那貓兒的脖子上呢，請你們拏定主意。」

第十六課 讓產〔一〕

- 這是很公道的，你們都要記着，可別忘了。

第十七課 讓產〔二〕

- 又把老二的箱開，裏題裝了很多的骨頭。
- 三個人看了，心裏覺着很奇怪。

第十八課 讓產〔三〕

- 弟兄三個推讓了半天，老大心裏想一想，這些金銀，若是不分，實在不公道，聽說國王判斷的很公平，若是國王判斷，他們也就不能推辭了。
- 你們想一想，你們父親替你們分的，豈不是很公平麼，何必還要推讓呢。」

第十九課 牛二拳頭(一)

- 爲甚麼稱他爲牛二拳頭呢。因爲他兩拳的力量很大，每到打架的時候，不用弓，箭，鎗，礮，也不用棍，棒，槍，刀，專仗着兩個拳頭，胡掄亂打，所以人都稱他爲牛二拳頭。

第二十二課 牛二拳頭(四)

- 你老要知道，這口袋，與尋常的口袋不同，雖然破爛不堪，却是一件很奇妙的東西，你老不要把他看輕了。

第二十四課 牛二拳頭(六)

·「啊，你往陽間去麼，很好，很好，我正要回陽間去呢，我不認得道路，我們一同走罷。」

第二十七課 牛二拳頭(九)

·「你肯聽我的話很好，你聽我一件一件的，告訴你，你可要記住了。」

第二十八課 牛二拳頭(一〇)

·倘若你能把這些個惡人，引誘去死了，你的功德還算是很大呢。」

第三十課 牛二拳頭(一二)

·閻王再說「你本是慈善正直的人，就是來到陰曹地府，也是人人兒尊敬，那兩個小鬼和那死神，不知道你是慈善正直的人，得罪了你，我很抱歉。

·我期望你很深，我也願意你特別的自愛，我們後會有期，再見，再見。

第三十一課 飛行鞋（一）

·他到了五歲，仍舊很是矮小，比不上旁人家二歲的小孩兒，他又是不大說話，又不喜歡玩耍，却是很聰明的，知道的事情比他哥哥也多。

第三十二課 飛行鞋（二）

·這女人很可憐他們，放他們進來，纔替他們換了衣服，早聽得蓬蓬的敲門的聲兒。

第三十三課 飛行鞋（三）

·小王瓜兒很喜歡，心中想這時不走，更待何時，便走到四個哥哥睡着的床前，輕輕的把他們叫醒，商量好了，悄悄兒的走到樓下，見巨人靠在桌子上，睡得正濃，可是那桌子正擺在門口兒，不經過他是不能出去的。

·小王瓜兒向桌下一看，立刻得了一個妙法。他偃倒了身體，很小心的從桌子底下鑽了出去。

第三十四課 飛行鞋（四）

·說也奇怪，那鞋能大能小，一到小王瓜兒腳上，就變小了。小王瓜兒很喜歡，拽開脚步便走。

第三十五課 黃金樹(一)

·他即是這樣的闊，和他親近的人自然很多了。

第三十七課 黃金樹（三）

·偏是阿愚聽了他這個壞主意，覺着很有趣味。

第三十八課 黃金樹(四)

·阿巧見阿愚正在喜歡之際，便乘機說「你既然很樂，何妨明天再撒呢。

第四十二課 黃金樹(八)

·阿愚便順着老人的手，向前一看，只見一座高山，山上的樹木很多。

·「既然如此，你應當很闊了，你爲甚麼還住這麼小房子呢。」

第四十五課 黃金樹(一一)

·那老人雖然年老，却很力量。

第四十八課 小八狗(一)

- 龍王問道「你的琵琶彈得很好，每天有人告訴我，你可以給我彈一曲嗎。」
- 龍王很納悶他，便問道「金銀玉物你都不要，究竟要甚麼。」

第四十九課 小八狗(二)

- 少甚麼便向小八狗要甚麼，家裏過的是很豐足的。

第五十一課 兩個弟兄(二)

- 這天又有一個趕豬的經過，也很奇怪說

第五十四課 盒仙(一)

- 有一個漁夫是很窮的，每天打魚爲業。
- 有一天他打魚回來，很是憂愁，因爲這一天得的魚很少，便沒精打采的去到廚房，預備吃晌飯。漁夫家裏，每天不過吃點兒青菜，豆腐，蘿蔔湯，那有甚麼好的。
- 原來鍋裏裝着很白的白米飯，一顆顆好像珍珠似的，又有幾碗菜擺在上面，全是山珍海味漁夫很喜歡。

第五十五課 盒仙(二)

- 誰知道那匹馬很劣，縣官剛剛騎上，那馬便飛也似的跑去。

第五十六課 孽龍

- 有一個小孩子，在山上割草，忽然在草裏看見一顆珠子，心裏很喜歡，連忙拏回家去，放在櫥子裏。

第五十七課 蛇人(一)

- 養蛇的人很愛他，此別的蛇不同。
- 養蛇的人悔恨得要死，到處尋着很急的叫着，總沒有影兒，但是每逢碰着大的樹林長草的地方，常常兒的放他出去，叫他自己快活，趕一會兒自己再回來，因爲這個緣故，望他自己回來，坐着等他，太陽已經出得很高，也沒了指望，悶悶的便走了。
- 走了幾步兒，聽見亂柴堆裏，窸窣（穴+率·穴+率）的有聲兒，停着脚很詫異的回轉去看，便是二青來，他很喜歡，好像得着寶貝似的，把肩膀上的東西停在路傍，蛇也頓然停住，看見他的背後，有小蛇跟着，便喜歡他說「我當你不見了，小朋友可是你薦的嗎。」
- 養蛇的人再餵他，便肯吃了，吃完，跟了二青一塊兒到箱子裏，背了去教他，盤着折着都很有規矩，和二青沒有甚麼分別，便叫他的名字小青。
- 有一天到臨淄地方的東山上，餵了他很好吃的東西，求告着放了他。等到去了，一會兒又來，跑來跑去的在箱子外頭。

第五十八課 蛇人(二)

- 蛇便去了，養蛇的人眼睛送着他去，後來又回轉來，揮他去不去，拿頭碰着箱子，小青在裏頭，也很震動。
- 從此到處留心，總沒有好的，但是小青慢慢的長大了，不可以玩了，後來得一頭，也

很柔順，但是終沒有小青好。

- 養蛇的人很驚惶的跑走，蛇追得急了，回轉頭來看他已經被他追着了，一邊看他的頭，紅點兒很清楚的還在，纔想到是二青，就放下擔兒叫道

課六十課 種梨

- 那梨子又大又甜，因為這個，價錢也很貴。
- 誰知道那鄉下人的脾氣很倔強，別人怎麼說法，他總是不答應。
- 「我是出家人，不知道小器的，我也有很好的梨，拿出來請諸位尝尝罷。
- 他看了心裏很生氣，趕緊的追，轉過牆角，看見那斷的車柄，丟在牆腳底下，纔知道道士斫下來的樹幹兒，就是這個東西做的。

第六十一課 九曲明珠（一）

- 孔子一看，心裏很高兴，就拿這桑樹作題目，打算做一首詩。
- 「這個女子很奇怪，他為甚麼我要絕糧呢，莫非是我要挨餓麼，他又說甚麼九曲明珠，這個話實在叫人難。」
- 「我是楚國的官員，敝國的國王素聞您老先生的大名，非常的佩服，很想要和您老先生見一見，所以寫了一封信，派我送來，聘請您老先生到敝國走一盪，不知道您老先生肯不肯。」
- 「本來可以一路同行，但是我帶着許多學生，走的很慢，同行彼此不便，你可以騎馬先回去，將來到了貴國之後，我們再談罷。」

第六十三課 九曲明珠（三）

- 他本來是很聰明的人，他一看就明白了。
- 他聽了樵夫的話，便順着一帶葦塘繞過去，只見前面有一道小河，那河的對岸有一所很華美的房屋，外面是雪白的粉牆。

第六十四課 三字驢

- 來的賓客也是不少，衣冠濟濟，表示一種很鄭重的樣子。
- 當時赴宴羣臣的裏頭，有一位叫做諸葛子瑜的，狹長的面龐，好像驢子一般，他是孫權手下得意的謀臣，並且還帶着一個不上十歲的小孩子，就是他的兒子，單名一個恪字，生得眉清目秀，機警非常，很會說話，人家有甚麼話問他總能隨機應變的對付。
- 這不是很嚴酷的法子麼。

第六十五課 七步成詩

- 從小的時候很聰明，思想又高，到了十歲的時候，便會做詩文。
- 因此，他父親曹操很愛他，誰知道他的哥哥曹丕十分妒忌，時時想法子去為難他，但是子建總是好好兒的對他。
- 曹丕異想天開，想一個很嚴酷的法子為難他了，
- 兄弟，你的詩是有名的，我也很佩服。
- 現在我們很不和睦，我怎麼對付他好呢，不答應，他便要罰，答應了，不知要做甚麼

詩。

・於是他不慌不忙，用很誠懇的聲音說

・「你這詩是……很……好。」

第六十六課 草船借箭

・有一次周瑜聚集衆將，請孔明議事，孔明很喜歡到來，坐定，

・周瑜很疑惑說

第六十七課 花果山(一)

・睜眼一看，却沒有波浪，只有一座鐵板橋，上橋一望，好像人家住宅一般，看得很覺快樂。「裏頭沒有水，只有一座鐵板橋，橋邊有一所天造地設的石屋，這水從橋底下沖出來，把門戶遮住，橋邊有花有木，石屋裡有石鍋石竈，石盃石盆石牀石凳，真是我們安身的好地方，我們都進去，省得受（熱熱？），豈不是很好麼。」

・次晨美猴王早起，折了許多枯松，編成渡筏，取了一枝竹竿做篙，一個人登了筏，儘力撐開，向大海飄去，連日東南風很緊，把他送到西北岸去了。

第七十課 花果山（四）

・悟空急打一跛早已避開，倒在地上砍了很深的一個洞。

7) 「～多了」: (0 例)

3. 北京官話の特徴を持つ支那笑話・支那童話テキスト

岡本正文『支那笑話集』、矢野藤助『支那笑話新編』『日支對譯支那童話集』『華語童話讀本』、米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謠研究』というこれらのテキスト本文は北京語の文章が記されており、「北京語が学べるのか」という素朴な疑問には本章の結果より答えることができる。総じて言えば、支那語学習笑話・童話テキストは北京語の特徴を持ち、これらのテキストを通して北京語に触れることができるのである。これらのテキストを通して学習者は北京官話を学ぶことができることが確認された。

結論

本論文の問題意識とは、以下のようなものであった。

明治政府と清朝政府との外交上の必要性から開始された日本の中国語教育は、すでに100年以上の歴史を有している。かつての日本は侵略の矛先を中国へむけ、支那語は日本の中国大陸侵略のための道具とされた。戦前の支那語は「実用語学」、「戦争語学」と呼ばれ、ここには英語やドイツ語などのような文化語学としての姿は見ることができなかつたことが六角恒廣と安藤彦太郎により指摘されている。また、六角、安

藤を中心とするこれまで中国語教育史研究では、明治期を中心として語学教育機関やテキスト研究がその中心であった。本論文は中国語教育史の新たな面を切り開きたいと考え、従来省みられなかった資料から明治・大正末期の支那語教育を探求し、従来とはことなる立場から支那語の「停滞」や「実用語学」と言った言説の見直しを意図したものである。

本論文で取り扱った資料はそれまで見られなかった支那笑話、支那童話による支那語学習テキストである。この時代は会話主義による会話テキストが中心的教材であったが、大正末期になると、それまでの支那語教育では存在しなかった支那童話を用いた支那語学習テキストが続けて3冊も編纂された。また、同時期に中国の人々の息吹を伝える支那笑話を用いたテキストも新たに出版されたのである。

これら支那笑話・童話を用いた支那語学習テキストが大正末期に刊行された理由とテキスト作成の方法を探り、そこから作成者の教育観を明らかにした。そして、これらのテキストを適切に中国語教育史に位置付けることによって、これまで明治期の教育機関やテキスト研究を中心として発展してきた日本の中国語教育史研究が決してそれだけでは完結しないことを指摘し、従来言いわれている「停滞」「戦争語学」と言った言説の見直しをせまるものである。また、同時期に起こった「教科書革新運動」は魯迅などの五・四運動期の著名作家の文章を教材としたものだったが、支那笑話・童話を用いた支那語学習テキストは微妙に「教科書革新運動」と異なる立場から誕生したものであった。

第1部では、支那笑話・童話を用いた支那語学習テキストが生まれた理由を当時の時代背景・社会背景から考察し、また中国語教育史からも考察を加えた。

第1章では、現代社会では異文化理解が重要であることを挙げ、そのためにも、外国語を学ぶことの重要性を述べる。それとともに、語学学習教材として笑話や童話を用いることの有効性を指摘する。笑話や童話はその国や地域の人々の思考、習慣、風俗、伝統と言った「フィルター」を通して伝承されてきたものである。つまり、笑話や童話は伝統や文化といったものが反映されているのである。この笑話や童話を語学学習教材とすることは相手の文化や伝統を知る事につながり、異文化理解といった点から非常に有効な方法である。中国語学習でも中国笑話や中国童話を学ぶことは、語学学習の面だけでなく、中国文化理解につながるものであり、極めて効果的な手段である。そこで、中国笑話および中国童話を学習教材としたテキストを一般書店において中国語学習者が入手できるかということのフィールドワークを行った。そして、このようなテキストの起源は支那語時代に編集発行された支那笑話・支那童話による支那語学習テキストであることが判明した。

第2章と第3章では、大正期の日本において支那笑話・支那童話による支那語学習テキストが生まれ、受容された背景を解き明かした。

大正末期に支那笑話と支那童話が支那語学習教材としてテキスト化され、出版された事象を日本社会と中華民国社会の動きと関連付けて読み解き、考察を行った。出版社は利益が見込めるからこそ書物を出版する、という経済活動を行うものであり、決して、支那語学者は好き勝手に出版することはできない。大正末期に出版された書物は、大正末期の日本社会に受容され、ある程度の販売数が見込めるからこそ出版社から刊行されたのである。つまり、大正末期に支那笑話と支那童話が支那語学習テキストとして出版されたことは、当時の日本社会においては笑話と童話を受け入れる状況にあり、また支那笑話と支那童話をも受容できる社会状況であったことを物語っている。

当然のことながら、「子ども」という概念が無ければ童話は存在しない。中国では古くから笑話は伝承されてきているものの、「童話」は明らかに日本より遅く発生し、その後発達した。中華民国になってからの新文化運動の影響を受け、中国で一気に童話が認識された。そして、当時の中華民国において日本人支那語学者が「支那童話」と認めることのできる童話があったことを伝えている。

人間は無意識のうちに、社会・文化・時代の影響を受け、それらを自己の内に内包している。つまり、いくら革新的な発明や文学作品であろうとも社会・文化・時代の制約を受けた作者の手により作成され、これらの制約を受けた出版社により出版され、そして制約を受けている読者が作品を受容するのである。これは、支那語学習テキストであっても当然ながら制約を受けるものであるはずである。

そこで、大正末期という一時期にまとめて刊行された支那語学習笑話テキストと支那語学習童話テキストという存在を、日本社会と中華民国社会の状況に照らすことにより、その刊行背景を探り、支那語教科書も社会・文化・時代の影響を受けて刊行されるものであることを確認し、大正期の日本社会と中華民国期の中国社会状況から支那語学習笑話テキストと支那語学習童話テキストが編集発行されたことを確認した。

第4章では、支那笑話・支那童話による支那語学習テキストが生まれた事象を明治から大正末期までの中国語教育から考察した。

支那語時代の中国語教育の中心であった民間の善隣書院と官立学校の東京外国語学校を取り上げた。また、支那語時代の支那語教育と学習が具体的にどのような形であったかを検証するために、六角恒廣と安藤彦太郎の先行研究を中心とし、さらには板垣友子による一連の宮島大八と『急就篇』に関する研究をベースとして、明治初期から大正末年までの代表的な支那語学習教科書について言及した。「問答体」と言われる、一種の会話形式のテキストがこの時代の代表的なテキストのスタイルであるが、本論文で言及したテキストもすべてが問答体であった。官立学校の東京外国語学校と民間の善隣書院、そして支那語時代に確立されていた代表的テキストを用いた学習順序を指摘することにより、支那語時代の中国語教育の実態が明らかとなった。また、これ

らのテキストは、魯迅などの文章を教材として使用した神谷衡平による「教科書改革」とは微妙に異なる観点から作り出されたものであった。

第2部では、支那笑話・童話を用いた支那語学習テキストの材料とその作成方法について明らかにした。

第5章では、支那語学習笑話テキストについて考察を行い、その誕生のきっかけや、教材として不適格な笑話、テキスト編者の教育観について論述した。

支那語学者岡本正文により、笑話を用いた対訳笑話語学教材が1911年に文求堂から出版されるのである。それが『支那笑話集』である。このテキストには序文などにまったく出典に関する記述がなく、岡本がどのような資料を用いて『支那笑話集』を作成したのかは不明である。しかし、本論文での調査の結果、清代の『笑林広記』『笑倒』『笑得好』のみで、岡本の『支那笑話集』が作成可能だということが明らかとなった。

さらに、支那語学者の矢野藤助が大正12年（1923年）に文求堂から出版した『支那笑話新編』に関する出典調査を行った。書中に「中華民國の人口は4億人」と記載されていることなどから、中華民國において発行された笑話集を使用して矢野がその『支那笑話新編』を著したことは容易に推測できる。そこで“相声”の大家侯宝林が収蔵した民国時代の笑話選集『侯宝林旧藏珍本民国笑话选』（侯鑫編、2008、中華書局）に『支那笑話新編』に収録された複数の笑話を確認することができた。このことから矢野が民国の笑話集を参考にして編んだことが確実となったのである。さらに、岡本が『支那笑話集』序文において提示した『支那笑話集』に収録しない笑話の基準（①奇抜なもの、②同音の言葉をもじったもの、③卑猥なもの）が如何に後の時代においても遵守されていたかを指摘し、支那語学習笑話テキストにタブーとされるものが存在することも発見することができた。それは、矢野の『支那笑話新編』において収録された笑話と佐々木凡禅『曙光の支那』（1926年、偕行社）に附された支那笑話集から明白である。また、岡本と矢野の編集態度から彼らの教育観の一端が明らかとなった。

第6章では、支那語学習支那童話テキストについての調査検討を行った。支那童話を支那語学習教材として認識し、まとまった話数を教材内に取り入れたのは、大正12年（1923年）矢野藤助による『支那笑話新編』中の附録童話部が最初である。そして、翌大正13年（1924年）には、『日支對譯支那童話集』が上記矢野藤助により刊行され、支那童話を中心として編まれた支那語学習テキストが日本で初めて世に出され、支那語学者によって支那童話が教材として「発見」されたのである。この支那童話を支那語学習教材とする流れはこれだけで止まることはなかった。大正14年（1925年）には上述の矢野藤助『支那笑話新編』が改版して再出版されるのだが、その中には再び附録童話部として支那童話が収録されている。また、同年、米田祐太郎が『原文對譯支那童話歌謠研究』を発行し、矢野藤助が『華語童話読本』を上梓している。このよ

うに、大正末期に限られた数年の間に、矢野藤助と米田祐太郎により支那童話を用いた支那語学習テキストが続けて刊行された。

この支那語学習童話テキストの出版という動きを中国語教育史の中で適切に位置付けるために、矢野藤助と米田祐太郎両者のテキスト作成方法の一端を明らかにし、そこから彼らの支那語教育、及び支那語学習に対する姿勢と教育論について考察を行った。支那笑話による学習テキスト作成時と同じように、当時の最新の支那童話集や雑誌を活用したものであると判断し、中華民国において出された各童話雑誌、童話集を探り、その出典元を明らかにする。矢野藤助『日支對譯支那童話集』、米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謡研究』、矢野藤助『華語童話讀本』全てが中華民国において数年以内に刊行された各種童話図書、童話雑誌を用いて支那語学習テキストを作成したことがわかった。これは、白話文で記された童話という中華民国の「最新資料」を支那語学習教材として日本に紹介するという彼らの支那語教育観を示すものでもある。

第3部では、支那笑話・童話を用いた支那語学習テキストが北京語の特徴を有するか確認した。

第6章では、大正期には日本の支那語教育は、南京官話教育から北京官話教育へと変化しているので、支那語学習笑話テキストおよび童話テキストが北京語学習テキストとしてふさわしいものであるかの確認を行った。日本の中国語教育は南京官話教育に始まり、その後、北京官話教育へと変化する。そこで、岡本正文の支那笑話学習テキスト、矢野藤助による各支那笑話と支那童話の支那語学習テキスト、および米田祐太郎によるテキストが北京語学習に適したものであるか否かを、太田辰夫による北京語の7特徴論を用い考察を行った。

中国語教育史研究では、中国の笑話や童話等を教材として作り変えたテキストに対する調査研究が今迄行われてなかった。本論文では、これらのテキストが大正末期に刊行されたという事実を支那語時代の発展・変化の証ととらえ、このテキスト群の存在を中国語教育史において適切に位置付け、中国語教育史研究の空白を埋めるものである。そのために、出典調査を行い、そこから、当時の支那語学者のテキスト作成方法や最新中国文化受容についての考察を加えた。また、当時の日本と中国の「社会」に注目し、この点からも分析を行った。そして、支那語学習笑話テキストと童話テキストについての分析から、当時の支那語学者が中国で出版された最新の資料を用いて、異文化理解につながる支那語学習テキストを編集したことを明らかにし、そこからかれらの教育観の一端を明らかにした。これらの結果から、本論文は、従来ステレオタイプの「支那語教育の停滞」「実用語学」「戦争語学」という言説の一部に反対するものであり、また藤井省三が述べる神谷衡平の「教科書改革運動」とも異なる立場から同時期に支那語学習テキストを作成した動きがあったことを指摘するものである。中国語が支那語と呼ばれた時代の研究がさらに進み、当時の支那語教

育の姿がよりはっきりとするならば、支那語教育が「停滞」していた点と「発展」していた点を詳細に指摘でき、その反省をもとに現在の中国語教育をより豊かに発展させることができよう。

本論は中国語が支那語と呼ばれる時期の笑話・童話学習テキストについて述べたものであり、網羅的に当時のテキストを調査したわけではない。当時はウェード式の発音辞書や、支那語辞典も刊行されるなど、中国語学の観点から重要な資料はまだまだ数多く存在する。今後のさらなる調査研究から、支那語時代の到達点を明らかにすることは残された課題である。

また、支那語学者を支那笑話や支那童話の翻訳者、もしくは「伝播者」としてとらえるなら、日中における児童文学史交流研究の新たな一面を切り開くことができるであろう。

本論文は中華民国の資料調査など不十分な点は否めないが、日本の中国語教育、特に教材開発研究の分野で本研究が一助となれば幸いである。

資料編

岡本正文『支那笑話集』事例

一 打個半死

有一個極寒苦的人、這天遇見個財主、這個財主就和他說、我送給你一千兩銀子、我可能要把你打死、這個窮人想了半天說、您就給我五百兩、打我個半死兒罷。

(極く貧乏な男が、或る日一人の金持に出遇つた。其金持が彼に向かつて「お前に千兩やる代りに、俺は御前を打ち殺すがよいか」と云うへば、此貧乏人暫く思案して云ふには、「貴方私に五百兩ください、そして私を半殺しに、なぐつてください」。)

一 打個半死 半殺し

『笑林広記』 貧吝部 打半死

一人性最貧、富者語之曰：“我白送你一千銀子，你与我打死了罢。”其人沉吟良久，曰：“只打半死，与我五百两何如？”

『笑得好』 打个半死

一人极貧，富者語之曰：“我白送你一千兩銀子，你与我打死了罢？”其人沉吟良久，曰：“只与我五百兩，打个半死如何？”

『笑倒』 舍命貧財

有一人极貧，富者語之曰：“我白与你一千兩，你与我打死了罢？”其人沉吟良久，答之曰：“只打我半死，与我五百如何？”

二 睡法

有一個奶媽子奶孩子、這個孩子愛哭、總不肯睡、奶媽子忽然想起一個主意來了、他就叫老爺老爺、拿本書來給我、老爺說、你要書做甚麼、這個奶媽子說、我常常瞧見、老爺不拿書便罷、若是拿起書來一看、立刻可就睡着了。

(或る乳母が小兒に乳を飲ませてゐたが、連りに泣いて一向睡むらない。乳母はヒョツト一つの方法を想ひ着いて、「旦那様々々々、一寸本を持って来て下さい、」と云つた。旦那が、「お前本を何にするのか」と問ふと、其乳母が言ふには、「私はいつもお見受けもうしますが、旦那様はお持ちにならないと、さうでもございませんが、本を出して御覽になると、直ぐおよるておしまいになりますから…」)

二 睡法 睡眠の方法

『笑得好』 磕睡法(笑懶讀書的)

有一乳母哺養小兒，因兒啼哭不肯安睡，乳母無奈，驀然叫官人快拿本書來。官人問其何用，應曰：“我每常間見官人一看書便睡着了。”

三 失言

有一位縣太爺、謁見上司、談完了公事、和上司說閒話兒、上司就問他說、貴縣那個地方兒出猴兒、不知道都有多大、他回答說、頂大的有大人那麼大、趕到說出來了、自知失言、心裏覺着害怕、連忙站起來說、就是極小的、也有卑職是麼大。

(或る縣知事殿が上官に謁見した。公事を話し終つて、上官と世間話をして居ると、上官が彼に、「君の縣の地方には、猿が出るさうだが、どの位の大きさがありますか」と尋ねた。彼は答へて、「一番大いのは、閣下位の大きさがございます」と云ひさして、自分ながら飛んだ事を云つたと氣が付いた。そこで、心中大いに心配して、慌てて起ち上がつて云ふには、「極く小さいのでも、小官位の大きさがございます。」)

三 失言 失言

『笑林広記』(程版) 問猴

一县官謁見大宪。談畢公事，大宪閑談問曰：“聞得貴县出猴子，不知都有多大？”答曰：“大的有大人那么大。”既而觉其失言，乃惶悚欠身而复言曰：“小的有卑职那么大。”

四 十萬之富

有一個人、他有十萬之富、這天他和一個窮人自誇說、我富有十萬、你知道不知道、那個窮人說、我也有十萬、這算不了甚麼稀罕的事啊、富人說、你的十萬在甚麼地方兒呢、窮人說、您素日有了不肯用、我要用沒得用、那還不是一樣的理麼。

(或る人が十萬の富を持てゐた。或日彼は一人の貧乏人に自慢して、「俺の財産は十萬圓もあるが、お前は知つてゐるか」と云ふと、其貧乏人は、「私だつて十萬圓持つてゐます、そんな事は些つとも珍らしくはありません」と云ふ。「お前の十萬圓は何處に在る」と金持が又云へば、貧乏人の云ふには「貴方はふだん持つてゐても使はない、私は使ひたくとも使ふ事が出来ない、それは矢張り同じ理屈ぢやありませんか」。)

四 十萬之富 十萬の富

『笑府』 不奉富

千金子驕語人曰：“我富甚，汝何得不奉。”其人曰：“汝自有金，于我何与，而奉汝耶！”曰：“儂分半与汝，何如？”答曰：“汝五百，我亦五百，我汝等耳，何奉耶！”又曰：“悉

以相授，难道犹不奉我？”答曰：“汝失千金，而我得之，汝又当奉我矣。”

说得极妙，恨世人不知。又富翁谓贫士曰：“我所蓄近十万矣。”贫士曰：“我亦有十万之蓄，公未知耳。”富翁惊问曰：“汝十万何在？”贫士曰：“公不用，我亦不用，可是一般。”

『笑林広記』 貧窶部 窮十万

窮十万

富翁谓贫人曰：“我家富十万矣。”贫人曰：“我亦有十万之蓄，何足为奇。”富翁惊问曰：“汝之十万何在？”贫者曰：“你平素有了不肯用，我要用没得用，与我何异？”

五 粧啞吧

有一個花子粧啞吧、在街上要錢、常用手指碗、又指口、呀呀的叫、有一天他拿着兩個錢、去買酒喝、喝完了說、給我再添些、賣酒的說、你向來不會說話、今天怎麼說起話來了、花子說、向來我没有錢、怎麼能說話呢、今天有了兩個錢、自然就會說話了。

(一人の乞食が啞者の眞似をして、往來で金を貰ふに、いつも手で碗を指し、又口を指して、アアアアと叫んでゐた。或日此乞食が少し許り錢を持つて、酒を買ひに行つたが、飲み終つてから「もう少しやつてくんえー」と云ふので、酒屋の者は、「お前は今迄口がきけなかつたじやないか、今日はどうして口がきけるのかい」と言ふと、乞食が言ふには「おれは今迄金が無かつたから、どうして口がきけるもんか、今日は些つと持つてゐるから口がきけるのよ。」)

五 粧啞吧 啞の眞似

『笑得好』 啞子说话

有一叫化子，假装啞子，在街市上化钱。常以手指木碗，又指自嘴曰：“啞啞。”一日拿钱二文买酒吃尽曰：“再添些酒与我。”酒家问曰：“你每常来，不会说话，今日因何说起话来了么？”叫化子曰：“向日无钱，叫我如何说得话？今日有了两个钱，自然会说了。”

六 打嚏噴

有夫妻倆很和美、男人要出外、臨走的時候兒、他就問女人說、我在外、怎麼就知道你在家裏想念我呢、女人說、這個倒容易知道、你一打嚏噴、就是我想念你、男人就起身、走到城門口兒、迎面來了一個和尚、打一個嚏噴、他心裏說、不好了、我纔出門、我的媳婦兒就想和尚了。

(非常に仲の好い夫婦があつた。男が旅に出掛けやうとして、出立の時に妻に向つて、

「俺は外にゐて、如何したら、お前が家で俺を念つてゐて呉れるのを知る事が出来やうか」と云ふと、妻は「そりやわけはありません、お前さんが嚏をなしたら、それは妾がお前さんを念つてゐるのです」と答へた。男はそこで出立して、城門まで來ると、向ふから坊主が一人來て、嚏を一ツした。彼は心の中で云ふには、「こりや駄目だ、俺が家を出たばかりなのに、俺の妻はもう坊主を想つてゐる。）」

六 打嚏噴 嚏

『笑林広記』 腐流部 想船家

教书先生解馆归，妻偶谈及“喷嚏鼻子痒，有人背地讲”。夫曰：“我在学堂内，也常常打喷嚏的。”妻曰：“就是我在家想你了。”及开年，仍赴东家馆。别妻登舟，船家被初出太阳搔鼻，连打数嚏。师频足曰：“不好了，我才出得门，这婆娘就在那里看想船家了！”

七 粗月

有一個人、常常兒的和人說話、無論是甚麼、總是用一個粗字兒自謙、這天請客、在家裏喝酒、喝到晚上、不覺的月亮就上來了、客人看見很喜歡說、今兒在您這兒、想不到晚上有這麼樣兒的好月、這個人聽見、連忙着拱着手兒說、不敢當不敢當、這不過是舍下的一個粗月兒。

(いつも人と話をする時に、どんな事にでも、屹度「粗末」と言ふ言葉を使つて自ら謙遜する人があつた。或日客を請じて、家で酒を飲んでゐると、晩になつて圖らず月が上つて來た。客は之を見て大變喜んで、「今日は貴郎の處で、思ひ掛けなく、夜こんな良い月を見ました」と言へば、其人は之を聞いて、連りにお辭儀をして言ふには、「いえ、どう致しまして、これはほんの手前共の粗末な月でございます。）」

七 粗月 粗末な月

『笑得好』 月(笑假謙的)

有一人每与人比论，无不以粗自谦。一日，请客在家饮酒，不觉月上，客喜曰：“今夜如此好月！”其人即拱手曰：“不敢欺，这不过是舍下的一个粗月儿。”

八 近視眼

有一個近視眼的人、迷了路了、看見道路傍邊兒有個石頭樁子、上頭落着個老鵝、他瞧着就疑惑是個人、他就對着他再三的問道兒、忽然間那個老鵝飛起去了、那個近視眼約有了氣了、就和那個石頭樁子說、我問了你半天、你總不答應、你的帽子、被風颳了去了、我也不告訴你。

(或る近眼の男が、路に迷ふた。所が路傍を見ると、立石があつて、其上に鴉が一羽止まつてゐる。彼はそれを人だと思つて、それに向つて、再三道を尋ねて居つた。やがてその鴉が飛んで往つた。近眼先生腹を立てて、立石に向つて云ふには、「俺がこんなに尋ねてゐるのに、お前は一向返事をしないから、お前の帽子が風に吹き飛ばされたか、俺も教えてやらないぞ。）」

八 近視眼 近眼

『笑林広記』 形体部 問路

一近視迷路，見道傍石上栖歇一鴉，疑是人也，遂再三诘之。少顷，鴉飞去，其人曰：“我问你不答应，你的帽子被风吹去了，我也不对你说！”

九 死錯了人

有一個人、他的親家母死了、就托教書的先生作篇祭文、這位先生就找出一本舊文集來、抄了一篇祭親家母的祭文給他、這個人接過來一瞧說、錯了、先生聽他說錯了、就很有氣說、我告訴你、這篇祭文是刻在書上的、一個字也不能錯、除非是你們家死錯了人了。

(或る人が、母親が死んだので、先生に一篇の祭文を作つて呉れるやうに頼んだ。すると先生は舊い文集を探し出して、父親の死を吊ふ文を一篇書き抜いて、彼に與へた。其人は受取つて、一目見て、「是は違つてゐます」と言ふと、先生之を聞いて、非常に怒つて言ふには、「乃公はお前に言つて聞かせるが、此祭文は本に出て居るので、一字も間違つてをるやうな事はない、屹度お前の處で、人が死に違つたに相違ない。）」

九 死錯了人 人の死違ひ

『笑府』作祭文

一人喪妻母，托館師作祭文，乃按古本誤抄祭妻文与之。其人怪問，館師曰：“此文是刊本定的，誰教他死錯了人。”

『笑林広記』 腐流部 抄祭文

東家喪妻母，往祭，托館師撰文。乃按古本誤抄祭妻父者与之，為識者看出，主人怪而責之。館師曰：“此文是古本刊定的，如何得錯？只怕倒是他家錯死了人，這便不关我事。”

『笑得好』 死錯了人

有人親家母死，托館師作祭文，師于旧文集中抄一祭親家翁者与之。其人看曰：“錯了。”師怒曰：“此文乃是刊刻在書上的，一字也不錯。除非是他家錯死了人。”

『笑倒』死

东家丧妻母，往祭，托馆师撰文，乃按古本误抄祭妻文者与之。识者看出，主人大怪馆师，馆师曰：“古本上是刊定的，如何会错？只怕是他家错死了人。”

一〇 不下剪

有一個裁縫、給人家裁衣裳、打算着要賺他幾尺布、拿着這疋布、來回的擺弄、擰眉縲目的、左右的為難、這個工夫兒、可就不小了、總不肯下剪子、徒弟們在傍邊兒瞅着、都着了急了、就問他說、師傅、這是怎麼了這麼為難、裁縫就說、有了我的、沒有他的、若是有了他的、可就沒有我的了。

（或仕立屋が、人の着物を裁つに、どうかして、切れを幾尺か賺けてやらうと思つて、其布を持つて、彼方へやつたり、此方へやつたり、眉を寄せたり、目をしかめたり、ああかかうかと苦心してゐた。時間が長くかかつて、一向剪をいれないので、弟子達は側で見てゐたが、皆氣が氣でない。そこで「親方如何したんです、そんなに困つてゐなされるのは…」と尋ねると、仕立屋が言ふには、「此方のを取ると、先方にがなくなるし、先方のを取らうとすると、乃公の方が無くなるからよ。」）

一〇 不下剪 缺をいれぬ

『笑林広記』 术业部 不下剪

縫匠裁衣，反复量，久不肯下剪。徒弟问其故，答曰：“有了他的，便没有了我的。有了我的，又没有了他的。”

『笑得好』 不肯下剪

有请裁缝工人到家中裁衣者，其人默视多时，不肯下剪。主人问故，其人曰：“这衣服我若下剪，有了我的就没了你的，若有了你的又没了我的，如何是好？”

一一 願脚踢

有個打柴的樵夫、走在半道兒上、無心中拿扁担、把大夫碰了一下兒、大夫就用拳頭要打他、那個樵夫跪在地下哀告說、老爺您千萬別動手、拿脚踢我幾下兒罷、傍邊兒看熱鬧的人都詫異說、這是甚麼緣故、樵夫說、衆位不知道、這位是大夫、他若用脚踢我幾下兒、我未必就死、他納若是一上手、我一定就活不成了。

（焚木採りの樵夫が、道でうっかり天秤棒を醫者にぶつ付けた。醫者が拳固で樵夫をなぐらうとすると、樵夫が地に跪いて、「旦那どうぞ手でなぐることは止して下さい、

足で私を幾つでもお蹴り下さい」と歎願した。側に見て居た人共が、皆不審に思ふて、「それは又如何云ふ譯か」と問ふと、樵夫が言ふには「皆さんは御存じあるまいが、此の方はお醫者です、此の方がもし足で私を蹴られるならば、私はまだ死にもいたしません、若し此の方の手に掛つたなら、私はとてもたすかりませんから…。）」

一一 願脚踢 足で蹴られる方がいい

『笑府』愿脚踢

樵夫担柴，误触医士。医怒，欲挥拳。樵跪曰：“宁受脚踢。”旁人讶之。樵曰：“经他手，定是难活。”

『笑林広記』术业部 愿脚踢

樵夫担柴，误触医士。医怒，欲挥拳。樵夫曰：“宁受脚踢，勿动尊手。”傍人误之，樵者曰：“脚踢未必就死，经了他手，定然难活。”

『笑得好』 切莫动手

医家一仆犯事，主人大怒，捏拳欲打。仆哀求曰：“小人服事年久，极知老爹手段，只求脚踢，切莫动手。脚踢还不伤命，若一动了手，我的性命就难保了。”

一二 謊鼓皮

有一個人好說大離話、對一個朋友說、敝處廟裏有一個大鼓、大有幾十圍、若是打一下兒、那個聲音能聽一百多里地、那個朋友說、我們本鄉有一隻牛、頭在江南、尾巴在江北、有幾萬觔那麼重、豈不是一件奇事麼、說大話的人不信、那個朋友就說、若沒有我們那兒那麼大的牛、怎麼能得這張大皮、去？你那面太鼓呢。

(或る一人の大きな話をするのが好きな男があつた。或る友人に「私の國の或る寺には大きな太鼓があつて、大きき幾十抱えもあつて、一つ打たうものなら、其音が百里もの處まで聴こえるよ」と言ふと、其友人は「私の國には牛が一匹居て、頭は江南に在るが、尾は江北に在つて、そして幾萬斤と云ふ目方がある、何と珍らしい事じやないか」と言ふ。法螺吹の男は夫を信じない。そこで、其友人が言ふには「若し私共の處の其大きな牛が居なかつたら、如何して君の云ふそんな大太鼓を張る大きな皮が取れるものかねえ」)

一二 謊鼓皮 太鼓のうその皮

『笑府』说大话

甲云：“家下有鼓一面，每击之，声闻百里。”乙云：“家下有牛一只，江南吃水，头直

靠江北。”甲摇首云：“那有此牛。”乙曰：“不是这一只牛，怎谩得这一面鼓。”

『笑林広記』 谬误部 慌鼓

一说谎者曰：“敝处某寺中有一鼓，大几十围，声闻百里。”傍又一人曰：“敝地有一牛，头在江南，尾在江北，足重有万余斤，岂不是奇事？”众人不信。其人曰：“若没有这只大牛，如何得这张大皮，慢得这面大鼓？”

一三 請客洗澡

有客人前來望看、主人總得沏茶款待、有一天有客來了、主人家一點兒茶葉沒有、就叫小孩子往街坊家借去、去了半天、總沒有回來、這鍋裏的水、是隨開隨添、趕到工夫大了、水也添滿了、可是茶葉還沒有借了來、太太就把他的男人請進來、告訴他說、客人的茶、我看着是喝不成了、莫若你留他、請他洗個澡罷。

(客が訪ねて来た時は、主人は茶を入れて款待すべきものである。或日客が来た時、主人の家には茶が少しも無かつたので、子共に隣家へ借りにやつた。所が行つたぎり、一向歸つて來ない。茶釜の湯は、沸けば注し、沸けば注して、とうとう一ぱいになつたが、それでも尚借りにやつた茶が來ない。そこで細君は旦那を呼んで言ふには、「お客様には、とてもお茶は上げられまいと思ひますから、いつそ貴郎、お客様をお湯に入れてお上げ申さうではございませんか。）」

一三 請客洗澡 　　お客を湯に入れる

『笑府』 借茶叶

有留客饮茶者，向邻家借茶叶，未至。每汤沸，以水益之。釜且满矣，而茶叶终不得。妻乃谓夫曰：“此友是相知的，到留他洗个浴去罢。”

『笑林広記』 贪饕部 留茶

有留客吃茶者，苦无茶叶，往邻家借之。久而不至，汤滚则溢，以冷水加之。既久，釜且满矣，而茶叶终不得。妻谓夫曰：“茶是吃不成了，不如留他洗个浴罢。”

『笑倒』 茶

有留客吃茶者，苦无茶叶，往邻家借之。久而不至，汤滚则加以冷水。加之既久，锅都添满。妻谓夫曰：“茶是吃不成了，留他洗了浴去罢。”

一四 夥穿靴子

有親哥兒倆湊錢、夥買了一雙靴子、哥哥白天穿着天天兒出門、不是拜客就是赴席、兄弟心裏很不願意、他就想了個主意、天天兒夜裏把那個靴子穿上、整夜的在院子裏來回的走、過了這麼幾天、靴子也破了、穿不得了、哥哥又要叫他攤錢說、俗們倆再買一雙罷、兄弟說、您一個人買罷、我不要穿了、我可得睡覺哪。

（兄弟二人が、出し合ひで、靴を一足買った。所が兄の方は晝間それを穿いては、人を訪問するとか、宴會に行くとか、毎日の様に出掛けるので、弟は心中甚だ不平で耐らない。そこで弟は一つ旨い事を想ひ着いて、每晚其靴を穿いて、夜ツびて庭中歩き廻つてをつた。そんなにして幾日か経つ中に、靴も破けて穿けなくなつてしまつた。兄哥は又弟に錢を出させようと思つて、「もう一足買はないか」と言ふと、弟の言ふには、「兄さん一人でお買ひなさい、私は穿かなくてもいいです、それよりか私は少し睡らなくツちやならないから。」）

一四 夥穿靴子 組合の靴

『笑府』着靴

有兄弟共买靴一双。兄日着以拜客赴宴，弟不甘，亦每夜着之，环行室中。俄而靴敝，兄再议合买，弟曰：“我要睡矣。”

『笑林広記』殊稟部 合着靴

有兄弟共买一靴，兄日着以拜客赴宴。弟不甘服，亦每夜穿之，环行室中，直至达旦。俄而靴敝，兄再议合买，弟曰：“我要睡矣。”

『笑得好』兄弟合买靴

兄弟二人合买靴一双，言过合穿。及买归，其弟日日穿走，竟无兄分。兄心不甘，乃穿靴夜行，总不睡觉。不几日靴破，弟谓兄曰：“再合买一双新的。”兄愁眉曰：“不买了，还让我夜间好睡睡觉罢。”

一五 恍惚

有一個人穿錯了靴子、一隻底兒厚、一隻底兒薄、走起道路來、是一脚高一脚低、很不合式、他就自各兒詫異說、今兒我的腿、為甚麼一長一短、想是道兒不平的緣故罷、傍人就告訴他說、閣下準是穿錯了靴子了、他就忙叫家人回家取去、家人去了半天、還是空着手兒回

了、告訴老爺說、不用換了、家裏的那一雙、也是一薄一厚。

（或人が靴を穿き違えて、片方は底が厚く、片方は薄いので、道を歩むと、片足は高く、片足は低く、甚だ具合が悪い。そこで彼は自分ながら不思議に思ふて、「今日は俺

の足は何故斯う跛足なのだらう、道が平らでないからかも知れぬ」と云ふと、側の人
が「貴力は屹度靴を穿き違えてゐるのだらう」と注意したので、忙いで下僕に家へ靴
を取らせに返らせた。暫くして、下僕はやはり空手で戻つて来て、旦那に向つて云ふ
には、「お換えになるには及びません、家にある一足も、やつぱり片方薄く、片方厚う
ございます。）」

一五 恍惚 ぼんやり

『笑林広記』（程版） 恍惚

一人错穿靴子，一只底儿厚，一只底儿薄。走路一脚高，一脚低，甚不合适。其人诧
异曰：“我今日的腿，因何一长一短？想是道路不平之故。”或告之曰：“足下想是穿错了
靴子。”忙令人回家去取。家人去了良久，空手而回，谓主人曰：“不必换了，家里那两
只也是一厚一薄。”

一六 願淹死

有一個人很吝刻、把錢和他自己的命一個樣、這天同他的兒子走道兒、路過一道河、失
脚掉在水裏、他的兒子急了、大聲的嚷着說、快來救人哪、誰來能下水去、把我父親救
上來、我一定重重的謝和他、他父親在水裏、扎掙着抬出頭來喊着說、小子、別多給錢
了、若是三分銀子、就來救我、若是要的多、就是淹死我都願意、不必叫他們來救了。

（金錢と自分の命と、同じに見てをる程の吝嗇な男があつた。或日息子と一緒に道を
歩いて、河を渡る時、脚を滑らして河の中に落込んだ。彼の息子は無中になつて「早
く助に來てくれ、誰でも水へ這入つて、俺のお父ツさんを助けて呉れた者には、屹度
澤山禮をやるから…」と怒鳴つた。すると親爺は水中で、やうやう頭を持上げて、大
きな聲で云ふには、「これ忒や、金は餘計出しちやいかんぞ、銀三分でよけりや、助け
させろ、餘計なら俺は死んでも本望だ、助けさせるには及ばない。）」

一六 願淹死 死んでも本望

『笑府』 溺水

一人溺水，其子呼人急救。父于水中探头曰：“是三分银子，便救，若要多，莫来！”

『笑得好』 溺水

有人溺水，其子呼人急救，许以重酬。父于水中探头高喊曰：“是三分银便救，若要多
的，不必来！”

『笑倒』 溺水

有人溺水，其子呼人急救，许以谢仪。父从水中探头曰：“是三分便救，要多的不必来。”

一七 餅價

有一個鄉下人、到城裏來、走到一個餅舖門前、聽見說、吃餅、吃餅、好熱餅、鄉下人想、他叫吃餅、準是請我吃、就坐下下、吃了三個、吃完了就要走、餅舖和他要錢、他一個錢也沒有、舖子人把他打了六個扁担、鄉下人回家、同村的人知道他進城、和他打聽城裏米麩的價錢、鄉下人說、米麩的價錢可不知道、餅是兩扁担一個。

（或る田舎者が都に来て、とある餅屋の前を通ると、「餅をお上りなすつていらつしやい、出来たての暖い餅は如何です」と云つてゐるので、これは屹度俺に餅を喰はせて呉れるのだな、と思つて、坐り込んで三ツ喰つて、出掛けやうとすると、餅屋で代を呉れと云ふ。所が彼の懐は文無しなので、店の者は、彼を天秤棒で六ツなぐり着けた。田舎者が家へ歸ると、同村の者は、彼が都へ行つて來た事を知つて、彼に「都では米や饅頭の相場はどんなか」と聞くと、彼が云ふには、「米や饅頭は何ンぼするか知らねえ、餅は一ツが天秤棒二ツだ。」）

一七 餅価 餅の直段

『笑府』吃扯面

一人命仆往枫桥打听麦价。仆至桥，闻有呼吃扯面者，以为不要钱也，连进二碗，迳走。卖面者索钱不得，批其颊六下。急归谓主人曰：“麦价不知若何，面价吾已晓矣。”主人问之，答曰：“扯面每碗要三个耳光。”

『笑林広記』殊粟部 访麦价

一人命仆往枫桥打听麦价，仆至桥，闻有呼“吃扯面”者，以为不要钱的，连吃三碗径走。卖面者索钱不得，批其颊九下。急归谓主人曰：“麦价打听不出，面价吾已晓矣。”主问：“如何？”答曰：“扯面每碗要三个耳光。”

一八 腹内無文

有一個秀才、因為考試的日子臨近了、日夜憂愁、很有難受的樣子、他媳婦兒看見他這個樣子、就笑着和他說、我瞧你們作文章怎麼費事、彷彿我們娘兒們養孩子一個樣兒的難、那個秀才就說、還是你們養孩子倒容易得很、他媳婦兒問、怎麼見得、秀才說、你們養孩子、肚子裏有的是現成的、我做文章、肚子裏沒有一點兒文才、怎麼不叫我為難。

（一人の秀才が、試験の日が近づいたので、日夜心配して苦しんでゐた。其様子を細君が見て、笑ひながら、「貴郎方が文章をお作りになるのは、如何してそんなに面倒な

んでせう、まるで妾共がお産をする時の様ですねえ」と云ふと、秀才は「なあにお前達の産をする方が、餘程らくだ」と云ふ。そこで妻は「まあそれはどーしてですか」と問ふと、秀才が云ふには、「そりああお前達のは、腹の中に出來てゐるのを生むのだが、乃公のは腹の中に文才がちつともないのだからねえ。）」

一八 腹内無文 腹の中はからだ

『笑府』産喻

一士屢科不利。其妻素患難産，謂夫曰：“中这一节，与生产一般艰难？”士曰：“你却是有在肚里。”

『笑林広記』腐流部 腹内全無

一秀才將試，日夜优郁不已。妻乃慰之曰：“看你作文，如此之难，好似奴生产一般。”夫曰：“还是你每生子容易。”妻曰：“怎见得？”夫曰：“你是有在肚里的，我是没在肚里的。”

『笑倒』産喻

一士屢科不利，其妻素患難産，謂夫曰：“中这一节与生产一般艰难。”士曰：“你却是有在肚里，我却无在肚里。”

一九 盜牛

有一個扛枷的、朋友遇見他、就和他說、你犯了甚麼罪了、就至於這個樣子、這個人說、我偶然打街上走、看見地下有根草繩兒、想是没甚麼用處、我就撿起來、拿着走了、可就出了包了、朋友說、就是撿起這麼根草繩兒來、何至於犯這麼大罪、這扛枷的說、你們不知道、這根繩兒上、還拴着點兒東西、親友就問他、是甚麼東西呀、他說、還有一隻小小的耕牛

（或人が枷を嵌められてをるのを、友人が見て「お前はどんな悪い事をして、こんな事になつたのか」と云ふと、彼の云ふには、「己が町を通つてゐると、地上に繩か一本落ちてゐたので、要らない物だと思つて、拾つて來たら、とうとうやられちやつたのさ。」友人は「そんな繩を拾つた位で、何だつてこんな大事になつたのか。」と尋ねると、枷を嵌めた者の云ふには、「お前達は知らないが、其の繩にはまだ少し、着いてた物があるんだ」そこで友人が、「そりや何だ」と問ふと、彼が云ふには、「まだその先に小さな小さな牛が一匹…。）」

一九 盜牛 牛盜人

『笑林広記』 殊稟部 盜牛

有盜牛被枷者，亲友問曰：“汝犯何罪至此？”盜牛者曰：“偶在街上走过，見地下有条草绳，以为没用，误拾而归，故连此祸。”遇者曰：“误拾草绳，有何罪犯？”盜牛者曰：“因绳上还有一物。”人问：“何物？”对曰：“是一只小小耕牛。”

二〇 諱聾啞

有一個聾子和一個啞吧、兩個人各自遮掩各自的毛病、有一天聾子遇見啞吧、求他唱個曲兒、那啞吧明明兒的知道、他是個聾子、就用嘴唇兒、一張一合的、還用手拍打着、作出唱曲兒的樣子來、這個聾子也就故意兒的側耳聞聽、見那啞吧的嘴唇兒不住的動彈、就大聲兒嚷着說、好極了、好極了、近來總沒聽見閣下唱了、今兒一聽、比頭裏唱的強多了。

（聾者と啞者とがあつて、てんでに自分等の片輪なことをかくし合つてゐた。或日聾者が啞者に遇つたので、彼に歌を歌つて呉れと求めた。啞者は彼れが聾者である事をチャンと知つてゐるので、口を開けたり閉じたり、又手を拍つたりして、歌ふ様子をして見せる。聾者はわざと耳を側てて聞いてゐたが、啞者の口の止まらずに動くのを見て、大きな聲で云ふには、「うまい、うまい、近頃一向君の歌ふのを聞かなかつたが、今日聞いて見ると、前よりも餘程旨くなつたねえ。」)

二〇 諱聾啞 聾と啞の隱立

『笑府』 諱聾啞

聾啞二人各自諱。聾見啞者息其唱曲。啞者知其聾也，乃以唇开合，而手为按节状。聾者側耳良久，見其唇止，即曰：“久不闻佳音，今番更进。”

英雄欺人，不免有此。莫笑聾啞汉也。

『笑林広記』 形体部 諱聾啞

聾啞二人，各欲自諱。一日，聾見啞者，息其唱曲。啞者知其聾也，乃以嘴唇开合，而手拍板作按节状。聾者側听良久，見其唇住，即大赞曰：“妙绝，妙绝！许久不听佳音，今番一发更进了。”

二一 方蛇

有一個人、這天看見了一條大長蟲、他就說大話、告訴他的朋友說、我看見的這條長蟲、寬有十丈、長有一百丈、這個朋友說、我斷不信、他又說、不到一百丈、也有五十丈了、那個人說、我還是不信、他又減着說、有三十丈罷、二十丈罷、末末了兒減到十丈了、

他自己恍然大悟說、啊、我錯了、我錯了、要照着這麼說、哎呀、這不成了一個四方兒的長蟲了麼。

（或人か或日大きな蛇を見て来て、自分の友達に法螺を吹いて、「僕の見た其蛇は、大きさが十丈もあつて、長さが百丈もあつた」と話すと、朋友は「それは信ぜられない」と云ふ。其人が「百丈までは無くても、五十丈は有つたよ」と云ふと、友人は「はまだ本統とは思へない」と云ふ。そこで其人は「でも三十丈は有つたらうよ…二十丈はたしかにあつたねえ…」ととうとう十丈まで減して来て、自分ながら、ふと氣が付いて、「やあ違つた々々々、そんなにすると四角な蛇に成つちまわー。」）

二一 方蛇 四角な蛇

『笑府』说谎

有惯说谎者，谓众曰：“我昨晚自山间归，见一蛇，长数百丈，高五六尺。”众曰：“此山中安得有数百丈之蛇？”其人曰：“即无数百丈，数十丈也有。”众曰：“即数十丈，亦无之。”其人连减至数丈，众犹未信，乃沉吟曰：“怎么处？将次方了。”

《旧唐书》载：天宝中，有蛇高一丈，长十丈，见北印山下。胡僧曰：“水妖也。”咒以天竺法，蛇自死。此说尚未是谎。

『笑得好』方蛇

有曾遇大蛇的，侈言阔十丈，长百丈。闻者不信。其人遽减二十丈。人犹不信，递减至三十丈、二十丈，遂至十丈。忽自悟其谬曰：“阿呀，蛇竟长方了。”

二二 嚴密

有一個莊稼漢、在莊稼地裏耕地來着、他女人叫他回家吃飯去、他就大聲兒的嚷着說、你等一等、我把鋤藏好了再去、趕他們到了家、他女人就和他說、藏鋤原本是嚴密的事情、你那麼大呼小叫的、豈不是叫人聽見偷了去麼、趕他吃完了飯、就回到地裏一看、罷咧、那把鋤早沒了、他就忙忙的跑回家裏去、湊到他女人耳根子底下、悄不聲兒的說、那把鋤已經叫人偷了去了。

（一人の百姓が野良で仕事をしてゐると、家婦が食事に歸れと呼に來た。其百姓は大きな聲で「一寸待つて呉んな、今鋤を匿して行かうから」と怒鳴つた。家に歸ると、家婦が「お前さん、鋤を匿すのは、内所の事ツぢやないか、それなのに、あんなに大きな聲を出して、人に知れると取られてしまふよ。」と云ふ。飯を食ひ終つて、畑に行つて見ると、これはしたり、鋤は疾つくに無くなつてゐる。彼はそこで急いで、又家に歸つてきて、家婦の耳もとに口を寄せて、小さな聲で「鋤はもう取られちやつたよ。」）

二二 蔽密 秘密

『笑府』藏锄

有兄弟耦耕者，其兄先归作饭。饭熟，声唤弟归，弟遥答云：“待我藏锄田畔，即来也。”饭时，兄谓之曰：“凡藏物须密，如汝高声，人皆听见，岂不被偷？”弟唯唯。及饭毕下田，锄已失矣。因急归，低声附兄耳曰：“锄已被偷去了。”

有于席间述此笑话者，一客停杯问曰：“毕竟此锄是谁人偷去的？”举座大笑。

『笑林広記』殊稟部 藏锄

夫在田中耦耕，妻唤吃饭，夫乃高声应曰：“待我藏好锄头，便来也！”乃归，妻诫夫曰：“藏锄宜密。你既高声，岂不被人偷去？”因促之往看，锄果失矣。因急归，低声附其妻耳云：“锄已被人偷去了。”

『笑倒』失锄

夫田中归，妻问锄放何处，夫大声曰：“田里。”妻曰：“说轻些，被人听见却不取去？”因促之往看，无矣。忙归附妻耳云：“不见了。”

二三 大澡盆

有兩個外路客人、遇在一塊兒了、各人說本地的奇怪事、這個客人說、敝處有個洗澡盆、可容千數多人、在裏頭洗澡、那個客入說、這個盆還不算奇、敝處有根竹子、長得上柱天下柱地、長到天上沒有地方兒了、就又灣回來、還是朝着地、那纔算的是奇事呢、從前那個客人就說、那兒有那麼大竹子、這個客人說、若沒我這大竹子、怎麼能箍你那個大澡盆呢。

(國違いの二人の旅人が、一所に出遇つたので、互に國の珍しい事を話し合つた。此方の人が「私の國には、千人餘りも這入れる風呂桶が有ります」と云ふと、彼方の人は「そんな桶はまだ珍しいとは謂へない、私共の處にある竹は、地から生へ上つて、天まで届いて、其上にはもう伸びる場所がないので、又曲つて來て、地に向ひてみますよ、これこそ本統に珍しい事です」と云ふ。先の人は之を聞いて「何處にそんな大きな竹が有るもんですか」と云へば、其の男が云ふには、「若し私の云ふ此大竹が無かつたなら、どうしてお前さんの云はれた其風呂桶に箍が掛けられませう」)

二三 大澡盆 大きな風呂桶

『笑林広記』谬误部 大浴盆

好说谎者对人曰：“敝处某寺有一脚盆，可使千万人同浴。”闻者不信。傍一人曰：“此是常事，何足为奇？敝地一新闻，说来才觉诧异。”人问：“何事？”曰：“某寺有一竹林，

不及三年，遂长有几百万丈，如今顶着天公长不上去，又从天上长下来。岂不是奇事？”众人皆谓谎言。其人曰：“若没有这等长竹，叫他把甚么箴子，箍他那只大脚盆？”

『笑得好』大澡盆

有外路二客相会，各说本处的奇事。一客曰：“敝处有洗澡盆，可容得千余人在内沐浴。”一客曰：“此盆还不算奇。敝处有一竿竹子，长得上拄天，下拄地，目今天上长不去，反倒转下来弯着朝地长，才为奇事。”客问曰：“那有这等大竹？”客曰：“若没得我这根大竹子，怎得能够箍你的这等大澡盆？”

『笑倒』大浴盆

好说谎者对人曰：“敝处某寺有一脚盆，可使千人同浴。”傍一人曰：“此何足奇，敝地有一新闻，说来始觉诧异。”人问何事，对曰：“某寺种竹一林，不及三年遂长至几百万丈，如今顶住天公长不上去，又从天上长下来，难道不是奇事？”众人不信，此人曰：“没有我这根长竹，叫把甚么箴子箍他那个大脚盆？”

二四 我何在

有一個典史、押解一個犯重罪的和尚、上省候審、在半道兒上、這位典史喝了酒、醉得人事不知、和尚就偷偷兒的把鐵鍊子脫下來、套在典史的脖子上、又拿剃頭刀把典史的頭髮、都給剃淨下、趕緊的跑了、趕到第二天早起、典史酒也醒了、找了和尚可沒有了、不由的又摸了一摸自己的腦袋、居然是個光葫蘆、又看見自己脖子上、帶着鐵鍊子、就很納悶兒說、和尚可是有、我可是往那兒去了。

(或る警官が、一人の重罪犯の坊主を、省城へ裁判に護送する途中、此警官は酒を飲んで、つぶ六に酔ってしまった。坊主はそこで、そつと鎖をはづして、警官の頸へ括り着け、其上剃刀で警官の髪の毛をすつかり剃り落して、急いで逃げてしまった。翌日の朝になつて、警官は酔も醒めて、坊主を探したが居ない。思はず又自分の天窓を撫でて見ると、何時の間にかてらてら瓢箪になつてゐる。又自分の頸に鎖がついてゐるを見て、非常に怪んで云ふには、「坊主はゐたが、併し乃公は一體何處へ往つたのだらう」)

二四 我何在 乃公は何処に居る

『笑府』解俗卒

一卒管解罪僧赴戍。僧固黠，中道醉之以酒，取刀髡其首，脱己索反继之而逸。次早卒寤，求僧不得，自磨其首，居然髡也，而索又在项，乃大诧曰：“僧固在此，我在那里去了？”

有赤贫者，所亲偶寄地平一块，其人恐招盗，每夜必身卧其上。一日，偷儿乘其睡熟，拽之天井中，而取地平以去。及醒，仰面见天，大诧曰：“地平亏我压住在此，屋已被拆去了。”意亦同。

『笑贊』和尚

一和尚犯罪，一人解之。夜宿旅店，和尚酤酒劝其人烂醉，乃削其发而逃。其人酒醒，绕屋寻和尚不得，摩其头则无发矣，乃大叫曰：“和尚倒在，我却何处去了。”

赞曰：世间人大率您您忽忽，忘却自己是谁，这解和尚的就是一个。其饮酒时更不必言矣，乃至头上无发，刚才知是自己却又成了和尚。行尸走肉，绝无本性，当人深可怜悯。

『笑林広記』（程版） 我何在

一二尹管解一罪僧赴省，晚宿旅店，尹嗜酒沉醉，鼾睡不省。僧潜取剃刀削其发，遂脱已缚羈尹项而逃。侵晨尹洒醒，不见僧人。自摸其首，光油油已成不毛之物；视其项，系累累已作阶下之囚。乃抚首大诧曰：“僧故在是，而我何在焉？”

『笑倒』我何在

一里尹管解罪僧赴戍。僧故黠，中道，夜饮里尹，致沉醉鼾睡。已取刀髡其首，遂脱已索，羈继尹项而逸。侵晨，里尹寤，求僧不得，自摩其首髡，索又在项，则大悟曰：“僧故在是，我今何在耶？”

二五 較歲數兒

有一個姓張的、跟前有一個姑娘、纔一歲又有一個姓李的、跟前有一個兩歲的小子、這麼着姓李的、就託人說姓張的姑娘給他兒子作媳婦兒、姓張的聽見說、就很有氣說、我們姑娘今年纔一歲、他們的兒子到兩歲了、這不是一倍大麼、若是我們姑娘到了十歲、他的兒子已經是二十了、我怎麼肯給這個老女婿哪、他媳婦兒就和他說、你算錯了、偕們姑娘今年雖然一歲、等到明年、可就和他的兒子同歲了。

（張と云ふ者に一ツになる娘があつて、又李と云ふ者には二ツになる男の子があつた。それで李の方から人に頼んで、張の娘を自分の子の許嫁にしたいと申込むと、張は大いに腹を立てて、「家の娘は今年やつと一ツだのに、向の息子は二ツだ、つまり倍じやあないか、して見りやあ、家の娘が十になりやあ、向ふは二十だ、乃公の娘に、どうしてそんな年取つた婿があてがはれるものかい」と言ふと、家婦が言ふには、「そりやお前さんの勘定が悪いんだよ、家の子は今一ツだつて、來年になりやあ、向とおない年になるじやないかね。」

二五 較歳数兒 歳の勘定

『笑府』较岁

一人新育女，有以二岁儿来作媒者，其人怒曰：“我女一岁，渠儿二岁，若吾女十岁，渠儿二十岁矣，安得许此老婿？”妻闻之曰：“汝误矣，吾女今年虽一岁，明年便与彼儿同庚，如何不许。”

『笑林広記』殊稟部 较岁

一人新育女，有以两岁儿来议亲者，其人怒曰：“何得欺我！吾女一岁，他子两岁，若吾女十岁，渠儿二十岁矣，安得许此老婿！”妻谓夫曰：“汝算差矣！吾女今年虽一岁，等到明年此时，便与彼儿同庚，如何不许？”

二六 太太屬牛

有一位知縣、這天是他的生日、闔衙門書班皂役、打聽老爺的屬相、是子年生人、屬鼠兒的、大家夥兒、前幾天就湊錢、打了一個赤金的耗子、作為壽禮、知縣看見很喜歡說、你們衆人的心思、實在用的巧妙、可是你們知道啊、太太的好日子也快到了、就剩了幾天兒了、書役們說、不知道、請老爺示下、太太是某年生人、是甚麼屬相、老爺說、太太比我小一歲、他是個屬牛的。

(或る知縣の誕生日に、其役所の書記や下役共が、知縣殿は子の年だと云ふ事を聞いて、皆で釀金して一個の黄金の鼠を造つて、お祝の送物とした。知縣は見て非常に喜んで、言ふには、「君等の考は中々巧い、然し君等は知てるかねえ、我輩の家内の誕生日も、もうぢきで、餘す所僅數日だと云ふ事を…」と云はれて、下役等は「存じません、どうか閣下、奥様は何年のお生れで、何のお年だかおツしやつて下さい」と云ふと、知縣が云ふには、「奥は我輩より一つ下で、牛の年だよ」)

二六 太太属牛 奥は丑の年

『笑府』官府生日

一官府生辰。吏曹闻其属鼠，釀黄金铸一鼠为寿。官喜曰：“汝知奶奶生辰，亦在日下乎？奶奶是属牛的。”

鴛家哄人，惯以做生日为名。这牛奶奶有鴛腔矣。余又闻一酒令，除真盗外，要似盗者。一人曰：“敛钱为首开天窗。”一人曰：“三檐飞船载歹人。”又一人曰：“四人轿儿喝道来。”众哗曰：“此何以似盗？”答曰：“你看如今抬在轿上的，那个不胜似强盗！”

『笑林広記』古艳部 属牛

一官遇生辰，吏典闻其属鼠，乃釀黄金铸一鼠为寿。官甚喜，曰：“汝等可知奶奶生日，

亦在目下乎？”众吏曰：“不知，请问其属？”官曰：“小我一岁，丑年生的。”

『笑得好』夫人属牛(笑为官贪敛的)

一官寿诞，里民闻其属鼠，因而公凑黄金铸一鼠，呈送祝寿。官见而大喜，谓众里民曰：“汝等可知道我夫人生日，只在目下，千万记着夫人是属牛的，更要厚重实惠些，但牛像肚里，切不可铸空的。”

二七 不能及第

有一位秀才、要上京鄉試去、他的底下人挑着行李、在後頭跟着走、趕走到一個曠野的地方兒、忽然颳了一陣大風、把行李上浮擱着的帽子颳在地下了、底下人就大聲嚷着說、帽子落第了、他主人聽他說這個話、很不喜歡、就吩咐他說、你以後別說落地、總說及第、底下人說、喳、以後一定遵着老爺的命、他就把那個帽子結結實實的捆在行李上說、老爺們走罷、如今跟您上那兒去、再不能及第了。

(一人の秀才が、北京へ郷試を受けに出掛けた。彼の下僕が、行李を擔いで、後から附いて行つた。或る野原に來掛つた時に、急に非常な風が吹いて來て、行李の上に輕くのせてあつた帽子を吹き落した。それを見た下僕は大聲に、帽子が落地 (loti 落第) したと叫んだ。之れを聞いて、秀才は、大きに不興顔で、下僕に向つて「貴様是れからは、落地などとは言つてはならぬ、必ず及第 (chi ti) と言へ」、と吩咐けた。下僕は「はい、是れからは屹度且那の仰しやる通りに致します」、と帽子をしつかり行李に細りつけて、云ふには、「さあ且那出掛けませう、もう何處まで行つても、及第する事はありません！))

二七 不能及第 及第が出来ぬ

『笑府』头巾

一仆随主人应试，巾箱偶坠，呼曰：“头巾落地矣。”主人曰：“非佳话，宜呼为及第(地)。”仆领之。既拴好，因复曰：“今后再不及地了。”

『笑林広記』古艳部 及第

一举子往京赴试，仆挑行李随后。行到旷野，忽狂风大作，将担上头巾吹下。仆大叫曰：“落地了！”主人心下不悦，嘱曰：“今后莫说落地，只说及第。”仆领之，将行李拴好，曰：“如今恁你走上天去，再也不会及第了。”

二八 觀物傷情

有一個人好喝大酒、這天到一個齷齪朋友家裏去赴席、看見桌子上的酒盅子太小、他就故意的作出要哭的樣子來、他的朋友看見吃了一驚、就問他是甚麼緣故、這個人說、我今兒是觀物傷情、想起我們老人家去世的那一天、甚麼病都沒有、就是因為有個朋友請了去喝酒、那個酒盅就像府上的一個樣、先父連酒盅兒、都攔在嘴裏了、沒嚥下去、叫他給噎死了、我今兒在府上、看見這個樣兒的酒盅、我怎麼能不哭呢。

(或る酒好の男が、一日けちん坊の友人の家へ宴に招かれて行つたが、食卓の上にある猪口の余り小さいのを見て、彼は故意と泣き出しさうな顔付をして見せた。友人はそれを見て吃驚して、如何いふ譯かと尋ねると、其男が云ふには、「私は今日物を見て悲しくなつたのです、思ひ出すと、私の父の亡くなつた時は、別段何んの病氣もなかつたのですが、矢張り友達に招かれて酒を飲んだのです、所が其猪口がお宅のと同様であつたので、父は猪口まで一緒に口に入れてしまつて、嚥み下すことも出來ず、とうとう喉に支へて死んでしまひました、今日お宅で又た同じ様な猪口を見たものですから、如何して泣かずに居られませう。』

二八 觀物傷情 見ると悲しい

『笑林広記』 貧吝部 吞杯

一人好飲、偶赴席、見桌上杯小、遂作嗚咽之狀。主人驚問其故、曰：“睹物傷情耳。先君去世之日、并无疾病、因友人招飲。亦似府上酒杯一般、誤吞入口、咽死了的。今日復見此杯、焉得不哭？”

二九 外科大夫

有一個當兵的、中了箭了、疼的了不得、就請了一位外科的大夫給他治、這位大夫一瞧說、不難、不難很容易治、他就拿了一把大剪子、把外頭露着的箭桿子、齊齊兒的給他鉸了去了、他就要馬錢要走、那個兵說、箭桿兒雖然鉸了去了、箭頭兒還在肉裏頭哪、怎麼不給我治出來、就要走呢、這個外科大夫搖着頭說、那我不管、我們外科的治法、算完了事了、這箭頭兒在肉裏頭、那是內科的事、怎麼也叫我外科大夫給治呢。

(或る兵士が箭に當つて、痛くて耐らぬので、一人の外科醫を呼んで療治させた。すると醫者は一目見て、「大した事はない、直ぐに治してやろう」と云つて、大きな鋏を持って來て、外に露はれて居る矢竹を、綺麗に鋏み取つてしまつて、治療代を要求し歸らうとした。そこで其兵士が「矢竹は鋏み取れたけれど、鏃がまだ肉の中に這入つて居るのに、何故療治して下さらんで、もうお歸りになるのですか」と言ふと、外科醫は天窓を揺つて云ふには、「それは私の知つた事ぢやない、私共外科の療治はこれで終つたのだ、鏃が肉の中に残つて居るのは、それは内科の仕事ぢや、如何して吾々外科醫が治されやうか」)

二九 外科大夫 外科医

『笑府』箭

一人往观武场，飞箭误穿其耳，迎外科治之。医用小锯锯其外杆，即索谢求去。问内截如何，曰：“这待里科来。”

『笑林広記』术业部 锯箭竿

一人往观武场，飞箭误中其身，迎外科治之。医曰：“易事耳。”遂用小锯截其外竿，即索谢辞去。问：“内截如何？”答曰：“此是内科的事。”

『笑得好』剪箭管（笑有事推诿的，改江盈科語）

有一兵中箭阵回，疼痛不已，因请外科名医治之。医一看连云：“不难不难。”即持大剪将露在外边的箭管剪去，随索谢要去。兵曰：“剪管誰不会去？但簇在膜內的急須医治，何以就去？”医摇头曰：“我外科的事已完，这是内科的事，怎么也叫我医治？”

三〇 寫眞

有一個畫喜容兒的畫匠、在家裏閒着、竟等着人來請他、可總沒有一個買賣、別人就給他出了一個主意說、把你們兩口子的模樣兒、畫成一幅行樂圖、掛在門口兒、就必有人來請你來了、這個畫匠就照這麼辦了、可巧這天他丈人來了、就問他女婿說、門口兒掛着的那個小娘兒是誰、他女婿說、那就是您的令愛呀、您怎麼不認得他、丈人說、既然是我的姑奶奶、怎麼和一個面生的小夥子、挨看坐、這是個甚磨樣子。

（或る肖像畫を畫く畫工が、家につくねんとして、ただ人が頼みに來るのをばかり待つてゐたが、一向好い商賣も無い。そこで、或人が一つの方法を授けて「君達御夫婦二人の並んでゐる繪を書いて、門口に掛けておいたなら、屹度依頼に來る人が有るだらう」と云ふので、彼の畫工は其の通りにした。丁度其處へ、彼れの舅が來て、婿に向いて「門口に掛けてあるあの若い女は誰か」と問ふと、婿が「あれは貴老の御息女です、貴老は如何して、お見覺へがないのですか」といふ。舅がいふには、「あれが俺の娘なら、如何うして知らぬ若い男と並んでゐるのか、あれはどうした事か。」）

三〇 写真 肖像画

『笑林広記』术业部 写真

有写真者，绝无生意。或劝他将自己夫妻画一幅行乐贴出，人见方知。画者乃依计而行。一日，丈人来望，因问：“此女是谁？”答云：“就是令爱。”又问：“他为甚与这面生人同坐？”

三一 活動話

有一個人教導他的兒子說、凡人說話、總要活動、不可把話說死了、他兒子就問他父親、怎麼叫活動話、父親就教給他說、我告訴你、比方街坊和你借東西、要看他是借甚麼了、不可竟說多有、也不可竟說少有、也有家裏有的、也有家裏沒有的、這就叫做活動話、你可記住別忘了、這一天有客來拜、問他兒子說、令尊在家麼、他兒子可就用活動話、回答客人說、您問我父親哪、我也不好說多、也不好說少、也有在家的、也有不在家的。

(或人が息子に教えて云ふには「人と話をするには、言ひ抜けの出来る様に云つて、決して云ひ切つてしまつてはいけぬ」と云ふと、息子は、「どんなのが、言ひ抜けの出来る言葉ですか」と問ふので、父は「それは斯うだ、例へば隣の人が、何か貸して呉れと云つたら、其品によつては、澤山有ると云つてもいけないが、又少しかないと云つてもいけぬ、家に有るものもあるし、又た無いものもある、こんなのを謂ふのだ、お前は好く覚えてゐて、忘れてはいかんぞ」と教へた。或日客が来て、息子に「父上は御在宅ですか」と尋ねると、其息子は、早速例の言葉を應用して、答へて云ふには、「父の事をお尋ねですが、澤山有るとも、少しか無いとも、言へません、家に居ることもあり、又た居ないこともあります。」)

三一 活動話 言ひ抜けの出来る言葉

『笑林広記』殊稟部 活脱話

父戒子曰：“凡人说话，放活脱些，不可一句说煞。”子问：“如何活脱？”时适有邻家来借物件。父指而教之曰：“比如这家来借东西，看人打发，不可竟说多有，不可竟说多无，也有家里有的，也有家里无的，这便活脱了。”子记之。他日，有客到门问：“令尊在家否？”答曰：“我也不好说多，也不好说少，其实也有在家的，也有不在家的。”

『笑得好』答令尊

父教子曰：“凡人说话放活脱些，不可一句说煞。”子问：“如何叫做活脱？”此时适邻家有借几件器物的，父指谓曰：“假如这家来借物件，不可竟说多有，不可竟说多无，只说也有在家的，也有不在家的，这话就活脱了。凡事俱可类推。”子记之。他日有客到门，问：“令尊翁在家么？”子答曰：“也有在家的，也有不在家的。”

三二 性急性慢

有兩位親家、一個性急、一個性慢、這天在道兒上遇見了、這個慢性兒的親家、就給那個急性子的親家、一恭到地說、正月逛燈擾元宵、五月節又賞粽字、八月中秋、又送我

月餅菓子、這麼屢次的叨擾、我還沒有回敬哪、實在是討愧的很、他交代完了這套話、這纔直起腰來、誰知道性急的親家嫌煩、早躲開了、慢性兒的親家一瞧、沒有人了、就問別人說、我們舍親是甚麼時候兒走的、傍人說、就打你們逛燈之後、他就走了、已經走了多半天兒了。

（二人の親戚があつて、一人はせつがちで一人は氣が長い。或日二人が道で出遇つたので、氣の長い方が、せつがちに向つて、丁寧に辭義をして云ふには「正月元宵節にはお祝を頂き、五月の節句には又粽を頂き、八月の中秋には又々お餅や果物を頂戴いたし、此様に度々御心配を掛け、私の方よりはまだ御返禮もいたしませんで、甚だ慚愧の至りに堪へぬ次第でございます」と、挨拶し終つて、腰を伸して見ると、何時の間にかせつちの親戚は、面倒くさがつて、疾うに逃げてしまつて居たので、氣の長い人は傍の人に、「私共の親戚の者は、何時頃行つてしまつたのですか」と聞くと、傍の人が云ふには、「貴下が元宵節と云つて居られた時、もうお出掛けになつたので、早や余程になりますよ！。）」

三二 性急性慢 急勝と氣長

『笑林広記』殊稟部 作揖

兩親家相遇于途，一性急，一性缓。性缓者，长揖至地，口中谢曰：“新年拜节奉扰，元宵观灯又奉扰，端午看龙舟，中秋玩月，重阳赏菊，节节奉扰，未曾报答，愧不可言。”及说毕而起，已半晌矣。性急者苦其太烦，早先避去。性缓者视之不见，问人曰：“敝亲家是几时去的？”人曰：“看灯之后，就不见了，已去大半年矣！”

三三 看上你了

有一個糊塗大夫、成家之後、生了一個小子、一個姑娘、這一天把人家的兒子給治死了、人家不答應、他就把他的兒子、賠還人家了、後來他又治死了別人的一個女孩兒、他沒法子、就又把自已的姑娘、也賠了人家了、家裏竟剩了他一個媳婦兒了、兩口子天天兒淒々涼々、正在難過的時候兒、忽然又有人叫門請大夫來了、他就自己出去、問那個人說、給誰瞧病哪、那個人說就是賤內、大夫進屋裏來、哭着和他媳婦兒說、可不好了、現在是有人又看上你了。

（或る一人の馬鹿な醫者があつて、妻君を貰つて、一人の男の子と、一人の女の子が出来た。或日の事、他人の子供の病氣を治すつもりで、つひに殺してしまつたので、其家では承知しない、とうとう自分の子供を代りにやつて落着した。その後又一人他人の娘を殺したので、其時も亦仕方なしに、自分の娘をやつてしまつた。もう家には妻君一人残つて居る計り、夫婦が毎日淋しく暮らして、朝夕悲しんで居ると、突然又一人ここへ尋ねて来て、病氣の治療を頼んだ。先生自分で出掛けて行つて、誰の病氣

を診察するのかと聞くと、其男は「先生實は私の妻です」と答へた。醫者先生内へ引込んで、哭きながら妻君に云ふには、「いよいよ駄目だ、とうとう他人がおまへに目を付けちやつたわい。）」

三三 看上你了 おまへに目を付けた

『笑府』賠

一医医死人儿，即以己儿赔之。无何，医死人仆，家止一仆，又以赔之。一夜，又有叩门者，云娘娘产里病，烦看。医私谓妻曰：“又看中意你了。”

『笑林広記』术业部 賠

一医医人儿，主家欲举讼，愿以己子赔之。一日，医死人仆，家止一仆，又以赔之。夜间又有叩门者云：“娘娘产里病，烦看。”医私谓其妻曰：“淘气！那家想必又看中意你了。”

『笑得好』看上了你

一庸医娶妻，生男女二人。一日，医死了人的儿子，遂以子赔之。又医死了人的女儿，复以女赔之。只剩一妻在家，凄凉不堪。忽有人敲门请看病，医问看何人，答曰：“敝房。”医对妻哭曰：“不好了，又有人看上你了！”

三四 吃夢中醋

有一個怕媳婦兒的人、這天在夢中、忽然大笑、他女人把他搖醒了說、你夢見甚麼這麼樂呢、男人說、我夢中娶了一個好看的妾、故此我樂極了、女人就氣的了不得、要罵他、男人說、這做夢本是虛假、你如何當成眞事、女人說、別的夢都許你做、像這個樣的夢、後來不准你做、男人說、以後我不做就是了、女人說、我不信、你睡中做夢、你自己知道、我那兒能知道呢、男人就說、我從今兒起、一年三百六十天、夜夜兒醒到天亮、再也不敢睡覺就是了。

（女房に恐入つてゐる一人の男があつた。或日夢を見て、突然大いに笑つたので、女房が彼を揺り起して「お前さん、何の夢を見てそんなに恭悦がつてるんですよ」と言ふと、男は「乃公は別品の妾を一人置いた所を夢に見たので、嬉しくつて耐らないのさ」と云ふ。女房は之を聞いて、非常に角を出して、ガンガン怒鳴るので、亭主が「之は夢で、うその事じや無いか、お前は何だつて、又本氣になるのか」と云へば、女房は「外の夢なら、何を見たつていいけれども、そんな夢は是から見てはいけないよ」と云ふ。亭主は「それではこれからは見やしないよ」と云ふと、女房が「私はほんとにしなないよ、お前さんが寝てゐて夢を見るのは、お前さん自分だけは知つてたつて、私

がどうして知るもんかね」と云ふと、亭主が云ふには「乃公は是から一年三百六十日、毎晩夜明けまで起きてゐて、もう睡る様な事はしないから、いいだらう。）」

三四 吃夢中醋 夢のやきもち

『笑林広記』殊稟部 吃夢中醋

一惧内者、忽于梦中失笑。妻揺醒曰：“汝梦见何事、而得意若此？”夫不能瞞、乃曰：“梦娶一妾。”妻大怒、罰跪床下、起寻家法杖之。夫曰：“梦幻虚情、如何认作实事？”妻曰：“别样梦许你做、这样梦却不许你做的。”夫曰：“以后不做就是了。”妻曰：“你在梦里做、我如何得知？”夫曰：“既然如此、待我夜夜醒到天明、再不敢睡就是了。”

三五 夥娶媳婦

有一個北京人、頭一回上蘇州去、別人就告訴他說、那兒的本地人、鬧慣了空頭、你要去買貨、他若是要二兩、你就還他一兩、就是和人說話、他說兩句、也只好聽他一句、這個京裏人、到了蘇州了、先拿買貨試一試、果然給了一半兒的價錢就賣了、後來遇見個本地人、就問他貴姓、他說姓陸、京裏人心裏想、一定是老三了、又問他府上房子幾間、他說五間、京裏人想、原來是兩間半了、又問府上還有甚麼人、他說就有一個媳婦兒、京裏人又想、這必定是兩人夥娶的罷。

(或北京の人が初めて蘇州へ行くので、人が彼に告げて、「あちらの土地の人は、法螺を吹きつけてゐるから、君が買物をする時、先方が若し二兩と云つたら、一兩値切つてやんなさい、それから人と話をするにしても、先方が二言云つら、一言聞いてをけばよい」と云つた。そこで此北京人は蘇州に来て、先づ買物でためして見ると、果して半値で賣つた。其後一人の人に會つたので、お名前は、と尋ねると、陸(陸六同音)だと云ふので、北京人は腹の内で、こいつ屹度三と云を名だなどと思つて、又お宅は幾間ですかと尋ねると、五ツ間だと云ふので、彼は二間半だなどと思ふた。又御家族はと聞くと、妻が一人ぎりですと答へる。北京人は又た考へて「ははあ其細君は、屹度誰かと組合で貰つたのだな！)」

三五 夥娶媳婦 組合の細君

『笑府』撒半价

客有欲买苏州货者、或教之曰：“苏州人撒半价、视其讨价、半酬之可也。”客信之。至綢緞店、凡讨二两者、只还一两；讨一两五钱者、只还七钱五分。店主恨甚、谓客曰：“若如此说、不消买得、小店竟送两匹与足下罢了。”客拱手曰：“不敢不敢、学生只领一匹。”

又

或問蘇州人曰：“尊姓？”答曰：“姓陸。”曰：“是三老官人了。”又問：“住房屋幾間？”答曰：“五間。”曰：“是兩間一披了。”又問：“宅上更有何人？”答曰：“有拙荆一人。”其人背曰：“是與人合討的。”

『笑林広記』 謬誤部 蘇空头

一人初往蘇州，或教之曰：“吳人慣扯空头，若去买貨，他討二兩，只好還一兩。就是與人講話，他說兩句，也只好聽一句。”其人至蘇，先以買貨之法，行之果驗。後遇一人，問其姓，答曰：“姓陸。”其人曰：“定是三老官了。”又問：“住房幾間？”曰：“五間。”其人曰：“原來是兩間一披。”又問：“宅上還有何人？”曰：“只房下一個。”其人背曰：“原還是與人合的。”

『笑倒』 說兩听一

一人初往蘇州，或教之曰：“蘇人慣扯空头，與人講話，他說兩句，只好聽一句。”其人至蘇，遇一人，問其姓，答曰：“姓陸。”其人想：“是三老官人了。”又問住房幾間，答曰：“五間。”其人想：“是兩間一披了。”又問宅上更有何人，答曰：“只有房下一個。”其人背曰：“原來是與人合的。”

三六 拳頭好

有一個外鄉人、在北京住了幾年、後來回本鄉去了、他無論提起甚麼來、總是誇北京的好、這天晚上、同他父親一塊兒走、傍邊兒有個人、可就說、今兒晚上好月亮啊、這個誇嘴的、聽見就說、這兒的月亮、有甚麼好處、你們不知道京裏的那個月亮、多麼好、他父親聽見很有氣、就罵他說、天下共總就是一個月亮、怎麼獨北京的那個好、說着就照他兒子身上、給了一拳頭、他兒子挨了打、連哭帶喊的和他父親說、您不知道京裏的那拳頭、打上更好得很哪。

（或る田舎の人が、數年北京に住んでみて後、國に歸つたが、彼は何を云ひ出しても、皆北京の物が好いと、京自慢をしてをつた。或晩彼は父と一緒に歩行いてみると、側の人が「今夜は好い月だな！」と云ふのを、此京高慢の男が聞いて、云ふには、「此處の月が、何の好い事が有るものか、お前達は知るまいが、京の月は、そりやあ好いぜ」彼の親爺は聞答めて、腹を立てて叱りつけて云ふには「天下何處でも同じ月だ、どうして北京の月ばかりがそんなに好い筈があるか」と言ひながら、息子の身體を目掛けて、一つ拳固を喰はした。息子は打たれて、泣きながら、親爺に向つて云ふには、「お父さんは知らないだらうが、京の拳固は、毆られても、もつと餘程好いよ」）

三六 拳頭好

拳固がいい

『笑得好』头好得很(笑夸嘴的)

有一人往北京回家，一言一动，无不夸说北京之好。一晚偶于月下与父同行，路有一人曰：“今夜好月。”夸嘴者说：“这月有何好，不知北京的月好得更狠。”其父怒骂曰：“天下总是一个月，何以北京的月独好？”照脸一拳打去。其子被打，带哭声喊曰：“希罕你这拳头，不知那北京的拳头好得更狠！”

三七 没有坐位

有一家兒、要賬的人太多、椅子板凳都坐滿了、還有一個在門礎兒上坐着的、主人就偷偷兒的告訴他說、請閣下明兒個早點兒來、那個要賬的會意兒、這必是明兒早起、主人先還我的賬、心裏很喜歡、可就嚷着說、主人實在沒錢、僂們大家夥兒散了罷、趕到第二天一清早、他就先去了、請主人還錢、那主人見了他說、不是我要還錢、因為閣下昨兒在門礎兒上坐着、我心裏不安、所以請閣下今兒早一點兒來、先占下一張椅子坐着、免得大家都來了、閣下又沒有坐位兒了。

(或一軒の家に、掛取が多くて、椅子も腰掛も皆満員と云ふ有り様で、其上にまだ一人闕に腰掛けてゐる者があつた。主人はそつと其男に、「どうか明朝早やく来て下さい」と云ふと、其掛取の男は、是は屹度主人が、明日の朝、先へ乃公に借を返すつもりだな、と合點して、心中大喜びで「此家にはほんとに金が無いのだから、皆さん歸りませう」と怒鳴つた。翌朝早く、彼は人より先にやつて来て、主人に金を返して呉れと乞ふと、主人が言ふには、「私は金を返すつもりではないのですが、昨日は貴方が敷居に腰を掛けておゐでなさつたので、誠に御氣の毒でしたから、それ故まあ今日は貴方に少し早く来て戴いて、先へ椅子を一つ占領して戴けば、皆さんがお出でになつても、貴方の席が無くなる様な事は無からうと思つたからです。)

三七 没有座位 座る席がない

『笑府』坐椅

一家索债人多，椅俱占满，更有坐槛上者。主人私与坐槛者曰：“汝明日早来。”坐槛者意其先完己事，乃扬言以散众人。次日，黎明即往，叩其相约之意。答曰：“早来可先占把交椅。”

『笑林広記』貧窶部 坐椅子

一家索债人多，椅凳俱坐满，更有坐槛上者。主人私谓坐槛者云：“足下明日来早些。”那人意其先完己事，乃大喜，遂扬言以散众人。次早黎明即往，叩其相约之意。答曰：“昨日有褻坐槛，甚是不安，今日早来，可占把交椅。”

三八 靴價

有一個慢性兒的人、買了一雙新靴子、就遇見一個急性子、問他說、老兄這靴子、是多少銀子買的、那個慢性兒的人、就慢々兒的、伸出一隻腳來、告訴他說、二兩四錢、這個急性子一聽、揪住他的家人就打說、你這個好大膽子的、我叫你買的這雙靴子、為甚麼要四兩八錢、像你這個樣兒的賺錢欺主、實在是可惡極了、慢性兒的人、在傍邊兒解勸說、老兄有話就慢慢兒的說罷、何必動這麼大氣、說完了這個話、他又慢慢兒的、伸出一隻腳來說、老兄、這一隻也是二兩四錢。

(或る氣の長い男が、新しい靴を一足買ったが、一人の氣の短い男に出遇つた時、短氣の男が「君の此靴は幾何で買ったのです」と問ふと、其氣の長い男が、悠々と片足を伸して「二兩四錢です」と答へた。此氣短の男は之を聽くや否や、彼の下男を捉へてなぐりつけて「貴様は太い奴だ、乃公が貴様に買はせた此靴は、如何して四兩八錢だつた、貴様の様に主人の金を足駄穿くなんて、實に怪しからん奴だ」と云へば、氣の長い男は、側から宥めて、「君云ふ事があるなら、ゆつくりお云ひなさい、何もまあそんなに怒らなくても、よいぢやありませんか」と云ひ終つて、又悠々と片足を伸して、云ふには、「君こちらも矢張り二兩四錢です。」)

三八 靴価 靴の直段

『笑林広記』(程版) 問靴价

性缓人买新靴一双，性急人问之曰：“吾兄这靴子多少银子买的？”性缓人伸一只脚示之曰：“二两四钱。”性急者扭家人便打说：“好大胆奴才，你买靴子，因何四两八钱？赚钱欺主，可恶已极！”性缓者劝之曰：“吾兄有话慢慢说，何必动气？”又徐伸了一只脚示之曰：“此只也是二两四钱。”

三九 扛欠戸

有個該錢的人、賬主兒屢次的和他要、他老不還、那個放賬的人、就氣極了、告訴他的底下人說、你在他的門口兒等着、他那一時出來、你們把他給我扛來、我和他要、他不還、我不放他走、底下人聽了主人的吩派、就天天兒去、在他門口兒等着、這一天他剛一出門兒、底下人就把他弄躺下了、扛起來就走、走了半天、底下人乏了說、僭們找個地方兒歇歇兒、那個該錢的在肩膀兒上說、快走罷、別站住腳、若是歇着、又叫別的賬主兒、把我扛了去了、那可不干我的事。

(金を借りてゐる男があつて、債主が度々要求しても、彼は一向返さない。そこで金貸は怒つて、下男に向つて、「お前は彼奴の門口に待つてゐて、彼奴が何時でも出て来たら、彼奴を乃公の所へ擔いで来て呉れ、乃公が彼奴に催促してやる、それでも彼奴

が返さなければ、乃公は彼奴を歸さないから」と言ふと、下男共は、主人の吩咐を聞いて、毎日往つて、彼の門口に待伏をして居て、或日彼が外出しやうとする所を、壓し仆して、擔いで行つた。暫らく歩くと、下男は疲勞れたので、「乃公達は何處かで休まうぢやないか」と云ふと、金を借りてる男は、肩の上で言ふには、「速く行け、足を停めるな、若休んでゐて、又外の貸手に乃公を擔いで行かれても、乃公の知つた事ぢやないぞ」)

三九 扛欠戸 借手を担いで行く

『笑府』扛

有欠債屢索不还者，主人怒，命仆輩潜伺，扛之以归。至中途，仆暂歇，其人谓仆曰：“快走罢，歇在此，又被别家扛去，不关我事。”旧话云：冥王命拘蔡青，鬼卒误以为债精也，拘至案。王知其谬，命放回。债精曰：“此处权借一躲。其实不愿去了。”扛他去者，亦恐不易打发。

『笑林広記』貧窶部 扛欠戸

有欠債屢索不还者，主人怒，命仆輩潜伺其出，扛之以归。至中途，仆暂歇息，其人曰：“快走罢，歇在这里，又被别人扛去，不关我事。”

四〇 瞞歳數兒

有個人、娶了個老媳婦兒、乍一見面、看他臉上縐紋兒太多、可就問他、你有多大年紀、媳婦兒說、我還小哪、還四十五、男人說、怎麼年庚帖兒上、寫着三十八哪、據我看、你還不止於四十五歲、你得說實話、那媳婦說、我實在是五十四了、男人還不信、來回的盤問、再也不肯說了、到了晚上、男人想了個好法子、就和他媳婦兒說、你先睡罷、我得看着鹽缸、昨兒個叫耗子偷吃了許多、他媳婦兒聽這話、不由的哈哈的大笑說、我今年活了六十八了、還沒聽見人說過耗子會偷鹽吃。

(或人が年寄つた妻を娶つた。或日其女の顔に皺が非常に有るのを見て、「お前は幾ツか」と聞くと、妻は「妾はまだ若いのですよ、やつと四十五です」と答へる。夫が「如何うして年齢附には、三十八と書いてあるのか、私が見る所では、お前は四十五やそこいらではないと思ふ、お前本統の事を云はなければいけぬ」と云へば、妻は「妾は本統に五十四なんです」と云ふ。夫は尚信じないで、いろいろと尋ねても、どうしても云はない。晩になつて、夫は好い方法を考へて、妻に向つて「お前は先に寝なさい、俺れは鹽壺を見張つてゐなければならぬ、昨日は鼠に澤山食はれた」と云へば、妻は之を聞いて、思はず笑つて云ふには、「妾はこれまで鼠が鹽を食べるといふのは、まだ聞いた事がない、この六十八の年まで！」)

四〇 瞞歳数兒 歳を隠す

『笑林広記』 閨風部 藏年

一人娶一老妻，坐床时，见面多皱纹，因问曰：“汝有多少年纪？”妇曰：“四十五六。”夫曰：“婚书上写三十八岁，依我看来还不止四十五六，可实对我说。”曰：“实五十四岁矣。”夫再三诘之，只以前言对。上床后更不过，心乃巧生一计，曰：“我要起来盖盐瓮，不然被老鼠吃去矣。”妇曰：“倒好笑，我活了六十八岁，并不闻老鼠会偷盐吃。”

四一 千金子

有一個人手裏有一千兩金子、這天遇見了一個窮人、和他顯弄自己的富貴說、我富有千金、你為甚麼不奉承我呢、那個窮人說、你有千金是你的、與我甚麼相干、我奉承你做甚麼、這個有金子的人說、我分給你一半兒、你該奉承我了罷、窮人更會說、你既有一千兩金子、你留五百、分我五百、僭們倆平等、是一個樣兒的數兒、我又何必奉承你呢、有金子的人說、我可着整數兒把這一千兩、都送給你、難道你還不該奉承我麼、窮人說、你的千金我都得了來了、你應答奉承我纔是、我更不必奉承你了。

(或る人が手に千兩の金を持つて居つたが、或日一人の貧乏人に遇つて、自分の金持を見せびらかして「俺は千金の富を持つて居るに、お前は何故俺を崇めないのだ」と言ふと、貧乏人は「貴方が千金の金を持つて居たつて、それは貴方の物で、私には何の関係もない、私が貴方を崇めて何になります」と言ふ。金持は又た「俺がお前に半分分けてやつたら、お前は俺を崇めるだらう」と云ふと、貧乏人は更にうまいことを言ふ、「貴方に千兩の金があつて、自分に五百兩残して、私に五百兩分けて下さらば、貴方と私とは同等で、同じ金數だ、何も貴方を崇めるには及ばない」金持が又た「それでは俺がいよいよ數の有りつ丈け、此一千兩を皆んなお前に呉れてしまつたら、なんとそれでもお前が俺を崇めない筈はないだらう」と言ふと、貧乏人が言ふには、「貴方の千兩を皆んな私が貰らつてしまつたなら、貴方こそ私を崇めるのが當然で、私は尚更ら貴方を崇めるには及ばないのです」)

四一 千金子 千兩の金

『笑府』 不奉富

千金子骄语人曰：“我富甚，汝何得不奉。”其人曰：“汝自有金，于我何与而奉汝耶！”曰：“侬分半与汝，何如？”答曰：“汝五百，我亦五百，我汝等耳，何奉耶！”又曰：“悉以相授，难道犹不奉我？”答曰：“汝失千金，而我得之，汝又当奉我矣。”

说得极妙，恨世人不知。又富翁谓贫士曰：“我所蓄近十万矣。”贫士曰：“我亦有十万之蓄，公未知耳。”富翁惊问曰：“汝十万何在？”贫士曰：“公不用，我亦不用，可是一

般。”

『笑林広記』 貧窶部 不奉富

千金子骄语人曰：“我富甚，汝何得不奉承？”贫者曰：“汝自多金子，我何与而奉汝耶？”富者曰：“倘分一半与汝何如？”答曰：“汝五百，我五百，我汝等耳，何奉焉？”又曰：“悉以相送，难道犹不奉我？”答曰：“汝失千金，而我得之，汝又当趋奉我矣。”

四二 公道良心

有哥兒倆、夥種田地、到了秋收的時候兒、兄弟要和哥哥分稻子、哥哥可就和兄弟說、僂們是骨肉弟兄、何必這麼樣兒的清楚、僂們這麼彼此的較量、叫人家看着、實在是不好看、莫若今年我收上頭的稻米、你收底下的稻草、趕到明年、我得底下的、你得上頭的、僂們倆一遞一年的、何等公道、兄弟說、就這麼樣罷、到了第二年春天、兄弟就和哥哥說、現在該栽秧兒了、哥哥說、你別忙、我聽見人說、今年必要大旱、僂們改種芋頭罷、可是你得記着、去年我說的那個話哪、今年我收底下、你該收上頭的了、這纔叫做公道良心哪。

(二人の兄弟が共同して田を植ゑたが、収穫の時期になつたので、弟が兄と稲を分けやうとすると、兄は弟に向ひて、「お前と俺は肉親の兄弟だから、何もそんなに勘定高くするにも及ぶまい、お互がそんなに勘定立てをするのを、他人に見られると、實際見つともないじゃないか、いつそ今年は、俺が上の方の米を取つて、お前が下の方の藁を取ることにして、來年になつたら、俺が下を取り、お前が上を取る、さういう風にお前と俺とは一年換りにしたら、なんと怨みつこはないじゃあないか」と言へば、弟は「それではさうませう」と言ふ。翌年の春になつて、弟が兄に向ひて「もう苗を植ゑなければならぬだろう」と言ふと、兄の言ふには「お前さう急ぎなさるな、俺は人から聞いたが、今年は屹度大ひでりだらうと言ふから、お互は芋を作ることに更へやう、然しお前は去年俺の言つたことを憶えてゐなければならんよ、今年は俺か下を取り、お前が上を取る筈だ、さうすりや怨みつこがないと云ふものだ。）」

四二 公道良心 怨みつこがない

『笑府』 合种田

有兄弟合种田者，禾既熟，议分之。兄谓弟曰：“我取上截，你取下截。”弟讶其不平，兄曰：“不难，待明年，你取上，我取下可也。”至次年，弟催兄下谷种，兄曰：“今年种了芋芴罢。”

『笑林広記』 貧吝部 兄弟种田

有兄弟合种田者，禾既熟，议分。兄谓弟曰：“我取上截，你取下截。”弟讶其不平，兄曰：“不难，待明年你取上，我取下可也。”至次年，弟催兄下谷种，兄曰：“我今年意欲种芋头哩。”

『笑得好』兄弟合种田

兄弟二人合种田，至秋收时，弟向兄分稻。兄谓弟曰：“我与你是好兄弟，何必如此琐碎？恐旁人看见说我们较量，彼此有失雅道。不若今年我收得上头的稻谷，你只得下头的稻草；等到明年我得下头，你得上头。一递一年，何等至公！”弟从之。及至来年春间，弟向兄曰：“目今该下秧了。”兄曰：“且住着。我闻得人说今年要旱，竟种芋头。只是记我收下头，你收上头，公平良心，一递一年，不许改换就是了。”

四三 求人搬家

有一個人最愛清靜、他所住的房子、就在一個銅匠和一個鐵匠的房子兩夾間兒、這兩個人每天做活、吵的他不得個安生、他可就常對着這兩個人說、若是你們二位多嚕要搬家、請先告訴我一聲兒、我就要好好兒的預備個東兒請二位、有一天兩個匠人一同過來了說、我們兩個人要搬家、先告訴您哪、您不是許下要請我們麼、所以特來叨擾、他聽這話很喜歡、趕緊的叫了一棹酒席、請那兩個人吃喝、趕到吃喝完了就問說、你們二位要搬到甚麼地方兒去呀、那兩個人就說、他是要搬到我屋裏、我要搬到他屋裏了。

(閑静を好む人があつて、其家は銅鍛冶と鐵鍛冶との間に夾まつてゐるので、二軒で、毎日仕事をする為め、八釜敷ていつも不愉快に思つてゐた。それで常に此兩人に「若し貴下共で、いつでもお移轉の時には、一寸知らせて下さい。御馳走の仕度をして、御招待ませう」と言つて居た。或日のこと二人の鍛冶屋が一緒に來て、「私共は引越しますから、お知らせに參りました、前に御馳走をして下さるとのお約束故、わざわざ參上いたしました譯です」との挨拶。彼は聞いて大喜び、早速酒肴を命じて兩人を欸待した。酒宴馳走が濟んでから、主人が「お二人は何所へお引越になりますか」と尋ねると、兩人の答に「私共二人は、こつちが向ふへ、向がこつちへ引越すのです。）」

四三 求人搬家 転宅の要求

『笑府』好静

一人性好静，而所居介于铜、铁匠之间，朝夕聒耳，甚苦之，常曰：“此两家若有迁居之日，我愿作东款谢。”一日，二匠忽并至，曰：“我等且迁矣，足下素许作东，特来叩领。”问其期，曰：“只在明日。”其人大喜，遂盛款之。酒后问曰：“汝二家迁于何处？”二匠曰：“我迁在他屋里，他迁在我屋里。”

何不自迁，弄得他好？

『笑林広記』殊稟部 浼匠迁居

一人极好静，而所居介于铜、铁两匠之间，朝夕聒耳，甚苦之，常曰：“此两家若有迁居之日，我宁可作东款谢。”一日，二匠并至曰：“我等欲迁矣，足下素许东道，特来叩领。”其人大喜，遂盛款之。席间问之曰：“汝两家迁往何处？”答曰：“他搬在我屋里，我即搬在他屋里。”

四四 把他烧了

有一人要出外、就嘱咐他儿子说、我走之后、若是有人来问你令尊、你可对他说、我的家父出外出了、请进来喝茶、他父亲因为他儿子糊涂、恐怕他又忘了、就把这句话、写在纸上、交给他、他儿子就把这个字儿、装在袖口儿里头了、要用的时候儿、偷偷儿的拿出来再看、过了三天、没人来问、他儿子说、这个字儿没用处了、这天晚上在灯底下就烧了、赶到了第四天、忽然有客人来了、问他说、你的令尊那、他在袖口儿里找了半天、也找不着、就对着客人说、没了、客人听他这个话、很诧异说、多嘴没的、他儿子说、昨儿晚上我把他烧了。

(或人が旅に出るとて、其子に「己が立つた後に、もし人が来て、お父さんはと尋ねたら、家のお父さんは旅に行きましたが、まあお上りなすつて、お茶でもお上りなさいと言へ」と吩咐けた。然し父は子が馬鹿であるから、其言葉を忘れてしまいおせぬかと氣遣つて、紙に書いて渡した。

子は其書附を袖の内に入れておいて、必要の時には出して見やうと思つてゐた。三日経つたが、誰も尋ねに来ないので、「こんな書附は要るものか」と言つて、其晚燈火で焼いてしまった。四日目になつて、突然客がやつて来て、「お父さんは」と尋ねるので、彼は袖の内を探したが、見付からない。そこで客に向つて言ふには「無くなりました」客は之を聞いて、不思議に思つて、「何時にお亡くなりになりましたか」と問ふと、子供の言ふには、「ゆうべ焼いちまいました…」)

四四 把他烧了 烧いてしまった

『笑府』问令尊

一人远出，嘱其子曰：“如有人问你令尊，可对以，‘小事出外，请进拜茶’。”又以其呆，恐忘也，书纸付之。子置袖中，时取看。至第三日，无人来问，以此纸无用，付之灯火。第四日，忽有客至，问“令尊”，觅袖中纸不得，因对曰：“没了。”客惊曰：“几时没的？”对曰：“昨夜烧了。”

『笑林広記』殊稟部 烧令尊

一人远出，嘱其子曰：“有人问你令尊，可对以家父有事出外，请进拜茶。”又以甚呆恐忘也，书纸付之。子置袖中，时时取看。至第三日，无人来问，以纸无用，付之灯火。第四日，忽有客至，问：“令尊呢？”觅袖中纸不得，因对曰：“没了。”客惊曰：“几时没了？”答曰：“昨夜已烧过了。”

『笑倒』问令尊

一人远处，嘱其子曰：“如有人问你令尊，可对以‘小事出外，请进拜茶’。”又以其呆，恐忘也，书纸付之。子置袖中，时取看。至第三日，无人来问，以此纸无用，付之灯火。第四日，忽有客至，问：“令尊呢？”觅袖中纸不得，因对曰：“没了。”客惊曰：“几时没了？”对曰：“昨夜烧了。”

四五 兩羨慕

有一個山東人、聽說蘇州的橋又高又大、他就不怕道路遠、願意去看看、趕走到半道兒上、可巧遇見了一個蘇州人、這個蘇州人原是聽見山東的蘿蔔最大、他就要上山東看看蘿蔔去、兩個人彼此說了一說自己的意思、蘇州人就和山東人說、兄台您不必去了、我現在把那個橋的樣子、告訴您就得了、說、去年六月初一那天、有一個人從橋上掉下去了、直到今年六月初一、還沒落到水面兒上哪、您想這個橋有多高有多大、山東人說、蒙您指教、您不是要看敝處的蘿蔔麼、我想您也不用去了、等到明年這個時侯兒、那個蘿蔔長得自然也就到了你們蘇州了罷。

（或る山東人が、蘇州の橋が非常に大きいと聽いて、道の遠いも厭はず、見物に出掛けた。所が丁度途中で、或る蘇州の人に出遇ふた。この蘇州人は山東の大根が頗る大いと聽いて、山東へ大根見物に行く處であつた。二人が互に自分の目的を話した後で、蘇州人か先づ山東人に向つて云ふには、「君はもう行くには及ぶまい、僕が今其橋の様子を君に云つて聽かさう、去年の六月一日に、或る人が橋の上から落ちたのだが、今年の六月一日になつても、未だ水面へ達しないのだ、君どうだ、これで其橋がどの位大きいか分るだらう、」山東人が云ふには、「なる程、御蔭で分かつた、君は僕の方の大根を見に往くのだらうが、君も往くには及ばないと思ふ、來年の今頃迄待つて居たまへ、其大根か大きくなつて、無論君等の蘇州迄届くだらうから」）

四五 兩羨慕 共々感服

『笑林広記』 謬誤部 兩企慕

山东人慕南方大桥，不辞远道来看。中途遇一苏州人，亦闻山东萝卜最大，前往观之。两人各诉企慕之意。苏人曰：“既如此，弟只消备述与兄听，何必远道跋涉？”因言：“去年六月初三，一人自桥上失足堕河，至今年六月初三，还未曾到水，你说高也不高？”

山东人曰：“多承指教。足下要看敝处萝卜，也不消去得，明年此时，自然长过你们苏州来了。”

四六 請帖

有一個有錢的老頭兒、不認得字、別人勸他請了一位先生、好教訓他兒子、這個學生先學一字兒、就畫了一橫、二字、畫了兩橫、三字、畫了三橫、他就告訴他父親說、這個字義兒、我都明自了、要一位先生幹甚麼呢、他父親聽他說這個話、心裡很喜歡、就把先生辭了、這一天、他父親要請一位姓萬的朋友吃飯、叫他兒子寫個請帖、到晌午、還沒有寫完哪、他父親就到了書房裏問他說、這麼幾個字、也值得這麼費事、他兒子撇着嘴說、這麼姓的朋友您交不得、您偏要交這麼一個姓萬的、您瞧、從早起寫到這個時候兒、纔寫了五百畫、那兒就寫、數了一萬的數兒哪。

(さる金持の老人、自分は文盲であつたが、人に勧められて、一人の先生を聘して、自分の息子を教育して貰つた。此子供は先づ一本棒を引くのが一の字、二本引くのが二の字、三本引くのが三の字であると習つたので、彼は親爺に、「凡そ字のわけあひは、私は皆分つてしまひました、先生を頼んでも何にもなりません」と言ふので、親爺は大喜びで、終に先生を斷はつてしまつた。或日親父さんは、萬と云ふ友達を馳走に招かうと思つて、息子に招待状を書かせた。所が、正午になつても書き終らぬので、書齋へ出掛けて行つて「こればかりの字に、どうしてそんなに手数がかかる事か」と言へば、息子は口を尖らせて言ふには、「お父さん、こんな名字の人と附合つては困りますよ、こんな人と附合ふもんだから、まあご覧なさい、朝から今まで書いてゐて、やつと五百しか書けやしない、どうして一萬なんて数が、書ききれぬもんですか」)

四六 請帖 案内状

『笑府』訓子

一富翁世不识字，人劝以延师训子。师至，始训之执笔临朱，书一画，则训曰“一”字，二画，则训曰“二”字，三画，则训曰“三”字。其子便欣然投笔，告父曰：“儿已都晓字义，何烦师为？”乃谢去之。逾时，父拟招所亲万姓者饮，令子晨起治状。久之不成，父趣之。其子恚曰：“姓亦多矣，奈何偏姓万。自朝至今，才完得五百余画。”

又有问“董”字如何写者，对以“草”字头，次“一”字，次“田”字，又“一”字，又“田”字，又“一”字。其人写“草壹田壹田壹”完，玩之，骂曰：“如何诳我？那有此字，分明是一座宝塔儿。”

『笑林広記』古艳部 训子

富翁子不识字，人劝以延师训之。先学“一”字是一画，次“二”字二画，次“三”

字三画。其子便欣然投笔，告父曰：“儿已都晓字义，何用师为？”父喜之，乃谢去。一日，父欲招万姓者饮，命子晨起治状，至午不见写成。父往询之，子患曰：“姓亦多矣，如何偏姓万。自早至今，才得五百画着哩！”

四七 没眼的好

有兩個瞎子、在一塊兒走着說、世界上的人、就是僂們沒有眼睛的最好、那有眼睛的、天天兒奔忙、到了莊稼漢更利害、如何能像僂們清閒、逍遙自在的哪、有一個莊稼漢、聽他們倆自誇、就很有氣、暗暗兒的湊了幾個人、假粧着縣太爺走路、就吆喝着說、這倆瞎子不懂規矩、為甚麼不迴避、粧知縣的就說、給我打他們、那些個人、把倆瞎子搵在地下、就用鋤把子打了一頓、打完了喝唬說、滾罷、那倆瞎子趴起來就跑了、這個莊稼漢跟在瞎子後頭、偷着聽他們倆還說甚麼、這個瞎子就和那個說、到了兒還是僂們沒有眼睛的倒好、若是有眼睛的、受了知縣的氣、不但挨了一頓打、還要問個發罪呢。

(二人の盲人が、一緒に歩きながら、話して居るのを聴くと、「世の中の人間の内では、お互の様な眼の見えない者が、一番仕合せさ、眼あき共は毎日毎日あくせくしてゐて、其中でも、百姓は尚ほつらいねえ、如何して吾々の様に、呑氣に自由なことは、出来やしないよ」すると、一人の百姓が、彼等二人の自慢を聴いて、大分癪に觸つたので、そつと五六人集めて、殿様のお通りの眞似をして、大聲に「此兩人の盲人共は、御規則を心得居らぬか、何故道を避けて、遠慮をせぬか」と怒鳴りつけ、殿様になつた男が「其者共をなぐれ」と言ふと、多勢の人は盲人を地上に押えつけて、鍬の柄でなぐつた。したたかなぐつて、追つ拂らふと、二人の盲人は匍ひ起きて、逃げ出した。さきの百姓が、盲人の後を附けて、二人がまだ何か言ふかと、そつと聴いて居ると、一人の盲人が、相手の盲人に言ふには、「つまり矢張りお互共眼の見えないの方が仕合せだ、もし眼あきであつて見な、殿様のお怒に觸れて、なぐられるばかりじや濟まない、まだ罪を着なけりやならないさねえ。」

四七 没眼的好 盲が仕合

『笑府』瞽

一瞽者与众人坐，众有所见而笑，瞽者亦笑。众问之曰：“何所见而笑？”瞽者曰：“你们所笑，定然不差。”世人皆谓此瞽可笑，不知凡依样画葫芦、蹈袭旧时文套子及随人脚跟做事者，皆此瞽耳。

又

二瞽者同行，曰：“世上惟瞽者最好，有眼人终日奔忙，农家更甚，怎得如我们心上清闲？”众农夫窃听之，乃假为官人，谓其失于回避，以锄把各打一頓，而呵之去。随复窃听之。一瞽者曰：“毕竟是瞽者好，若是有眼人，打了还要问罪。”

『笑林広記』形体部 被打

二瞽者同行，曰：“世上惟瞽者最好。有眼人终日奔忙，农家更甚，怎如得我们心上清闲。”众农夫窃听之，乃伪为官过，谓其失于回避，以锄把各打一顿而呵之去。随复窃听之，一瞽者曰：“毕竟是瞽者好，若是有眼人，打了还要问罪哩！”

『笑贊』瞽者

二瞽者同行，曰：“世上惟瞽者最好，有眼人终日奔忙，农家更甚，怎得如我们清闲一世。”适众农夫窃听之，乃假为官人，谓其失于回避，以锄把各打一顿，而呵之去。随后复窃听之，一瞽者曰：“毕竟是瞽者好，若是有眼人，打了还要问罪。”

贊曰：“北方瞽者，叫做先生，自有好处。世上欺天害理，行凶作霸，俱是有眼人，无一瞽者。只看这些农夫，扮作假官，擅自打人，如此事瞽者却做不出来，此便胜似有眼人也。”

四八 讀書的狗

有一個人說慣謊話、這一天對他朋友說、舍下有三丈長的一隻牛、一天能走一千里、還有一隻報更鷄、每逢交幾更、他就叫喚幾聲、又有一條狗、專能讀書識字、他的朋友就很羨慕說、府上有這樣兒的活寶貝、明日我必要到府上去瞻仰瞻仰、這個人就回了家、和他媳婦兒商量說、我一時無心中撒了謊、明兒朋友要來、我怎麼回覆他好呢、他媳婦兒說、不要緊、明兒你走你的、我自有法子回覆他、第二天那個朋友果然來了說、主人在家麼、他媳婦兒說、他今兒一早騎牛上雲南去了、過幾天就回來、朋友說、府上還有一隻報更鷄哪、正說着話兒、恰巧是晌午、那個鷄就打起鳴兒來了、他媳婦兒指着這隻鷄說、就是他、不但報時辰、若有生眼兒的人來、他還報哪、朋友又問、讀書那個狗、拉出來賞我看看、他媳婦兒說、不瞞您說、因為我們家裏塞苦、我就叫他出外、坐館教書去了。

（或る一人の偽言をつきつけて居る男が、或日友人に向つて「僕の家には三丈も丈けのある一匹の牛が居るが、一日に千里も歩くよ、それから時を告げる雞が一羽居つて、いつでも時の來た度毎に、其時を數丈て鳴くのだ、それから又本を讀み字を識つて居る一匹の犬も居るよ」と言ふと、其友人は非常に羨ましがつて「お宅にそんな生きた寶がおありなら、明日私は是非拝見に上りませう」と言ふ。そこで偽言つきの男は、家に歸つて、妻に相談して、「俺は何の氣なしに、つい偽言を言つたのだが、明日友人が來ると云ふ、如何返答したものであらう」と言ふと、妻は「そんな事、何んでもありませんわ、明日貴郎は自分の用をなさい、妾にはちやんと返答の仕方がありますから」と言ふ。其翌日友人が果してやつて來て「御主人はお宅ですか」と尋ねると、

妻は「いえ、今朝早く、牛に乗つて、雲南へ出掛けました、四五日したら戻るでせう」と言ふ。友人は又た「お宅にまた時を告げる雞が居るさうですな一」と言つて居る中に、丁度正午になつたので、雞が時を告げたから、妻は其雞を指して「此雞の事ですよ、時を告げるばかりで無く、見慣ぬ方がお出でになると、また知らせます」と言ふ。最後に友人は「本を讀むと言ふ犬を連れて来て、見せて頂きたい」と言ふと、妻が言ふには「貴方に打明けて、お談致しますが、實は私共でも生計が困難なものですから、其犬を遠方へ教師に出して居るのです。」

四八 読書の狗 本を讀む犬

『笑林広記』腐流部 狗坐館

一人惯会说谎，对亲家云：“舍间有三宝：一牛每日能行千里，一鸡每更止啼一声，又一狗善能读书。”亲家骇云：“有此异事，来日必要登堂求看。”其人归与妻述之，“一时说了谎，怎生回护？”妻曰：“不妨，我自自有处。”次日，亲家来访，内云：“早上往北京去了。”问：“几时回？”答曰：“七八日就来的。”又问：“为何能快？”曰：“骑了自家牛去。”问：“宅上还有报更鸡？”适值亭中午鸡啼，即指曰：“只此便是，不但夜里报更，日间生客来也报的。”又问：“读书狗请借一观。”答曰：“不瞒亲家说，只为家寒，出外坐馆去了。”

四九 没有良心

有一個老頭兒、慈善好施捨、這天下大雪、見一個窮人、在他街門口兒、房簷兒底下站着避雪來着、老頭兒見他凍的可憐、就把他讓進屋裏頭來了、給他燙酒趕寒、留他住了一夜、到了第二天、那個雪還是不住、又把他留下了、一連三天、這天天也晴了、這個窮人臨要走的時候兒、可就和老頭兒說、您把您的刀借給我使使、老頭兒就把刀地遞給他了、他把刀接到手、對着老頭兒說、僂們倆素不相識、現在承您這個樣兒的美意、我只有殺身報恩就結了、老頭兒聽他這個話、嚇了一跳、連忙攔住他說、若像這麼樣、你不是報恩、反倒是害我了、這個窮人說、怎麼是害您呢、老頭兒說、在我家裏若這麼死個人、就是一點兒事兒沒有、少說着燒埋銀也得花十二兩、零碎使費那還在外、這個窮人說、承您的厚情、不用算那些個使費、您就把燒埋銀十二兩給我、我就走了、老頭兒聽這個話很有氣、就嚷起來了、驚動了街坊四隣出來、給他們說合、竟作情了一半、給了他六兩、這個窮人剛拿着銀子要走、老頭兒看着、就嘆了口氣說、誰想到遇見這麼樣兒的沒良心的人、這個窮人說、不說你自己沒良心、反倒說我沒良心、老頭兒說、怎麼是我沒良心、這個窮人說、你既是有良心、就不該當這麼折算、我共總住了三夜、你就扣除我二兩銀子一夜、那還算有良心麼。

(慈善で施を好む老人があつた。或日大雪の降つた時、一人の貧乏人が、自分の家の

門口の軒下に佇んで、雪を避けて居たが、老人は其貧乏人の凍えて可哀相なのを見て、家の中へ引き入れて、酒を爛して、寒さを凌がせ、引留めて一晩泊らせた。翌日になつても、雪がまだ歇まぬので、又た彼を引留めてやつた。とうとう三日續いた。四日目の日には、空も晴れて、貧乏人も出掛けやうとしたが、其時老人に向いて、「どうぞ貴方の刀を貸して下さい」と言ふ。そこで老人は刀を出して渡してやると、彼は刀を手を受け取つて、老人に向いて「貴方と私とは平常知り合ひでないのに、今こんなに貴方の御親切を受けたに就いては、私は只だ命を捨てて、御恩返しをするより外はありません」と言ふ。老人は之を聽いて、吃驚仰天して、惶てて止めて「もしそんな事になると、お前は恩返しではない、却つて私に迷惑をかける譯だ」と言ふと、其貧乏人は「如何して、貴方に迷惑を掛けることになりますか」と言ふ。老人は「私の家で、そんな風に人一人死んで見なさい、外に何事も無いにしても、少なく言つても、葬式料が十二兩はかかる、それに細々した費用はまだ其外だ」と言ふ。そこで其貧乏人が言ふには、「色々御厄介になつたから、其細々した費用は、おまけにしますから、葬式料の十二兩丈家を私に下さい、私は歸りますから」老人は此言を聞いて、大いに怒つて、怒鳴り出したので、隣近所の者が、驚いて出て来て、仲裁に這入つて、折合を付けて、其男に六兩丈けやることになつた。其貧乏人が金を取つて出て行かうとする時、老人はそれを見て溜息をついて「やれやれ、こんな悪い奴に出つ來合さうとは思はなんだ」と言ふと、其貧乏人は「お前自身の悪いことを言はんで、あべこべに人を悪いと言つていやがる」と言ふ。老人が「如何して俺が悪いのか」と問ふと、其貧乏人が言ふには「お前に良心があるなら、こんな差引勘定をしない筈ぢや、俺が都合三晩泊つたので、一晩に就いて二兩宛差引なんて、それで良心があると言へるかやい」

四九 没有良心 良心がない

『笑倒』凶人

一翁好施，无大雪，见一人避雪于门，怜而延入，暖酒与敌寒，遂留一宿。次日雪又大下，不可行，有留之。如是三日。天晴，此人将别去，因向翁借刀一用。翁取刀出，持以谓翁曰：“素不相识，承此厚款，无可以答，唯有杀此身以保耳。”遂欲自刃，翁惊止之曰：“如是则害我矣！”其人曰：“何也？”翁曰：“家中死了一个人，零碎吃官司不必说，一些无事，烧埋钱也要十二两。”其人曰：“承翁好意，不好算得许多零碎，竟拿烧埋钱十二两与我去吧。”翁大怒，遂喧嚷惊动邻里，为之劝解，减其半以六两与之。临去，翁叹息曰：“谁想遇此凶人！”其人曰：“不说你凶，倒说我凶。”翁曰：“如何是我凶处？”其人曰：“既不凶，如何留得我三夜，就扣除我二两一夜？”

五〇 欠戸會説

有一個人、該人家的銀子、有許多日子不還、這天可巧在半道兒上、遇見借銀子的主兒了、要定了說、你借我的銀子有多少天了、今兒可該還我了、欠主兒說、遲是遲了、我這兒有個比方、你若是明白了、自然就不和我要了、着比我這個銀子、前日已經還了你了、自然你拿去、也就花完了、難道你還和我要麼、銀子主兒說、你這是蠻話、你若是還了我、我又在別處生利錢去了、欠債的人說你說我這個話不通、還有一說、譬如我出了外了、你也來找我要銀子麼、銀子主兒說、少不得等你回來、我更要的利害、欠主兒又說、我勸你只當我遠處去了、沒有回來、自然你得等多等幾天兒再要、銀子主兒說、你現在在我眼頭裏哪、怎麼說沒有回來、欠主兒說、還有一說、你再三的一定叫我還銀子、我没有銀子還你、自然就得打架、若是你一拳把我打死了、那時你得不着甚麼銀子、反倒要經官受刑、一定破家蕩產、坐監償命、你那後悔不來了、就是我打死你罷、我也得受罪償命、難道你還能殼甦過來、和我要銀子麼、今兒你我一見、任甚麼話都不提、安安靜靜兒的、那不舒服麼、何苦要定打罵、自尋苦惱呢、賬主兒聽完了就氣極了說、任憑你怎麼會說、我就要你還銀子、欠主兒也大嚷着說、我說了多少好話、你都不聽、無論你怎麼和我要、我就不還你銀子。

(人から金を借りて居て、永い間返金しない男があつて、或日丁度途で金を貸して居た人に出會つた。其人が強りに催促して「君は金を借りて、もう幾日になると思ふのだ、今日は是非返して貰はなければならぬ」と言ふと、借手の男は「遅れたことは遅れたが、此處に一つの譬がある、君はもし其譬が分かると、屹度私に返せとは言はれまい、譬へば此金をとつくに君に返したとすると、屹度君は持つて往つて、矢張り使つてしまつたらう、それでもまだ私に返せと言はれますか」と言ふ。貸主はそこで「君の言ふことは屁理屈と言ふものだ、君がもし私に返したとすれば、私は又他所へやつて利を生ませて居るよ」と言ふと、借手は「君は私の言ふことを無理だと言はるるなら、もう一つ言ふことがある、譬へば私が旅に出たとすると、君はそれでも私の處へ来て、金を返せと言ひますか」と言ふ。貸主は「其時は仕方がないから、君が歸つて来てから、一層厳しく催促するさ」と言ふと、借手は又た「君は私が遠方へ行つて、歸つて來ないと思つて居玉へ、さうすれば是非君はまだ何日か待つて居なければ、催促が出來ないだろう」と言ふ。貸主が「君は現在私の目の前に居るじやないか、どうして歸つて來ないなんて思へよう」と言ふと、借手は「まだ一つ言ふことがある、君は再三是非私に返金させやうとする、私には返す金がないとする、さうすれば是非共喧嘩しなければならぬ、もし君が一打で私をなぐり殺したとすると、君は金を手に入れることが出來ないばかりでない、お上の厄介になつて、罰を着なければならぬ、さうなると財産は滅茶々々になり、牢に這入つて命までも差出さねばならぬ、さうなつてから、後悔しても追つ付かないよ、又たよしんば私が君を殺したにしても、こんどは私が矢張り罪を着て、命を取られねばならぬ、其時に君は蘇生つて来て、私に金を催促することが出來ますか、今日君と私と此處で顔を合せても、何事も言ひ出さな

いで、穩かにして居たら、其方が愉快ぢやないか、何も無理催私をしたり、罵つたり、自分で不愉快を覚めるにも及ばぬたらう」と言ふ。貸主はそれを聽いて、非常に怒つて「君が如何んなに甘く言つても、私は君に金を催促する」と力むと、借手が言ふには「私がこんなに種々言つて聽かせるに、君は承知ができんのなら、君が如何んなに催促しても、私は金を返さぬばかりさ。）」

五〇 欠戸会説 借手の言ひ抜け

『笑得好』 回債（笑回債的）

一人欠銀多時、路上遇见銀主、曰：“你欠我的银子已多时，该还我了。”欠人曰：“迟是迟了，我有一譬喻在此，你明白了，自然不向我要银子。譬如这银子日前已经还了你，你自然回去了，难道又来向我要么？”银主曰：“好蛮话！你若还了我，我又在别处生利了。”欠人曰：“此说既然不通，还有一说。譬如我往远处去，你也来寻我要银子么？”银主曰：“少不得俟你来家，更要得狠！”欠人曰：“我又劝你。譬如只当我远处去不曾回来，自然迟些时候要了。”银主曰：“你现在我当面，怎么说不曾回来？”欠人曰：“还有一说。你再三定要我还银子，我没银还你，自然相骂相打。譬如一拳打死了我，那时除银子没得，反要经官受刑，必到破家荡产，坐牢偿命，懊悔不来。若是我打死了你，我是该受罪偿命，你难道又活转来再向我要银子么？今你我安安静静倒不快活，何苦定要打骂自寻晦气？”银主听完发怒曰：“任你会说蛮话，我只是要你还不还银子！”欠人大喊曰：“我说了许多好话，你都不听。任你会要银子，我只是不还你银子！”

矢野藤助『支那笑話新編』事例

以下に、出典が判明したもののみを取り上げ、比較のためにテキスト本文と出典元の文章を事例として記載する。

第一二 四萬萬人

上課的時候兒先生問學生說、中華民國共總有多少人口、一個學生答說、三萬九千九百九十萬九千九百九十九個人、先生說、不對、四萬萬人、學生說、我也知道是四萬萬人、因為我家街坊王三昨兒夜裏死了。

第一二 四億人

授業時間に先生が生徒に「中華民國の人口はどれ程ですか」と問ふと、一人の生徒が「三億九千九百九十萬九千九百九十九人です」先生「ちがひます」學生「四億人あるのは知つて居ますが、私の近所の王さんが昨夜死にましたから。」

『侯宝林』367頁《摩登大笑话》

「死去一人」

某小学校授課時，師問諸生曰：“中華民國的人口，共有多少？”一生答曰：“三萬九千九百九十萬九千九百九十九人。”師曰：“誤矣，是四萬萬人。”生曰：“我家隔壁成衣鋪里阿福，昨天病死，不是少了一個人么？”

第一七 名人讀書

車胤曾囊螢念書，孫康曾映雪念書、他們窮的如此、然而還那麼樣的用功、有一天孫康上車胤那兒去、問他家裏人說、主人在家麼、回答說、他到外邊取火蟲去了、過了兩三天、車胤到孫康家謝步去、問他為甚麼不念書、孫康答說、我看今兒不像要下雪的光景。

第一七 名人の讀書

車胤は曾て螢の光で書を読み、孫康は曾て雪の明りで讀書した。二人共斯の如く貧窮ではあつたが、それにも拘らず勉學に餘念なかつた。或る日の事、孫康が車胤を訪問して主人の在否を訊ねると家人が答へて言ふには「主人は今外へ螢を採集に出かけて留守です」と。それから二三日過ぎて車胤が孫康宅へ訪問の答禮に出向いて孫康に「何故讀書をなさらないのですか」と問ふと、孫康が答へるには「今日は雪が降りそうにないからです」と。」

『程・広記』277頁「名人读书」

車胤囊螢读书，孫康映雪读书，其貧不輟學可知。一日，康往拜胤，不遇，問家人：“主人何在？”答曰：“到外邊捉螢火蟲去了。”已而，胤往拜康。見康立于庭下，問：“何不读书？”答曰：“我看今日这天色，不像要下雪的光景。”

『笑府』卷2 腐流部・52頁「名读书」

車胤囊螢读书，孫康映雪读书。一日，康往拜胤，不遇，問何往，門者曰：“出外捉螢火蟲去了。”已而胤答拜康，見康閑立庭中，問何不读书，康曰：“我看今日这天不像个下雪的。”

第一九 我是不去

有個新孀、他的丈夫死了、他最會假哭、抱着棺材披着頭髮哭、若有人來、更哭的利害、就說、我的夫啊、我的夫啊、我願意跟了你去、你為甚麼不拉了我去，正哭的十分高興、棺材上的釘子、把婦人的頭髮揪着了、婦人嚇了一大跳、急忙改口說、請你別拉、我不去、我是不去。

第一九 私はいきません

亭主が死んで寡婦となつた、ところが此の新寡婦は非常に泣き眞似が上手で、良人の柩を抱き、髪を亂して慟哭した。偶々來客があると益々烈しく泣き乍ら「貴郎や、貴郎や、私は貴郎と一緒に死んで行き度い、貴郎はなぜ私を連れて行かないのですか」と。思ふ存分泣いて居る其の時、棺の釘に寡婦の髪の毛が引掛かつたので非常に吃驚して、大急ぎで言ひ直し、「後生ですから引張らないで下さい、私は行きません、私は死んで行きませんよ。」

『程・広記』285頁「我不去」

世上惟妇人最会哭，杞梁之妻善哭其夫，能变国俗。仰惟妇人最会假哭，其声虽悲，而悲不由衷。圣叹批五才子云：有声有泪谓之哭，无声有泪谓之泣，有声无泪之号。潘氏哭夫，乃假号了一阵，至今留为笑柄。一妇人夫死，哭之甚痛，抱棺披发而哭。见人来更大哭曰：“我的夫呵！我的天呵！我愿意跟了你去，你为何不拉了我去？”正哭的高兴，被棺缝儿把头发挂住，妇人大惊，忙改口曰：“你别拉，我不去，我不去。”

第二〇 自己是牛

有個老頭兒不認得字，可是他極力粧做文人的樣子、人人兒都笑他、這天他的朋友打發底下人、拿了一封信要借一頭牛，那個時候兒老頭兒正和他的兩三個朋友說着話兒哪、老頭兒就把那個信粧作念的樣子、和他的底下人說、我知道了、等一會兒、我自己去罷。

第二〇 自分が牛になる

或る老人無筆であるが學者ぶつて字の讀める振りをするので人は皆彼を笑つた。或る日のこと、友達が使をよこして牛を一頭貸して貰ひ度いと手紙を持つて來た。丁度老人は友達二三人と話をして居た時で、其の手紙を讀んだ振りをして、自分の下男に「よし、わかつた、暫く 經つと己が行く」。

『笑林広記』卷1古艳部・15頁「借牛」

有走東借牛于富翁者，翁方对客，讳不识字，伪后绒视之。对来使曰：“知道了，少刻我自来也。”

『笑府』卷1古艳部・40頁「借牛」

有走東借牛于富翁者。富翁方对客，讳不识字，伪后绒视之，对来使曰：“知道了，少停我自来也。”

虽不识字，却已暗合。

余所识一富翁，向人索债，倒持契书。其人笑之，翁怒曰：“吾持与汝看，岂自看耶？”

又方对客，适邻家致束，翁展视。客知其贸贸，故问之。翁曰：“请我吃酒耳。”使者曰：“非也，乃告借铜锣铜鼓一用。”翁笑曰：“借铜锣铜鼓，难道不请我吃酒。”人更服其机敏。

第二一 祇知天文

這天晚上、有個天文家、一個人出門要看星星、擡着頭直往上瞧、可是脚步兒直往後退、沒理會後頭有溝、竟自掉在溝裏了、偏巧溝水很深、水就浸到耳朵邊兒上、他家裏的老婆看見、遂啞然笑著着說、先生竟知道天文、不明白地理、不然、為甚麼掉在溝裏哪。

第二一 唯天文を知るのみ

或る晩、さる天文家が一人外に出て星を觀測しやうと頭を擡げて頻りに空を視つめて居たが、足元は無暗に後の方へと退がつて行つて、後方に溝のあるのに氣が付かず、とうとう溝の中へ落ち込んでしまった。生憎溝の水が大分深くて耳元の邊まで達した。自分の家の婆やが見つけて吃驚して、笑つて言ふには「先生は天文の事ばかり御存知で、地理の方は御存知ありませんネ、そうでないとしたら溝の中などへ落ちる筈はありませんよ。」

『侯宝林』518頁《新哈哈笑》：“”「」『』

「天文地理」

一天文学家，一日出户观星斗，仰首而望，向后退行，未曾顾及背后有沟，遂致坠落沟中，沟水浸至耳际。

管家见此情状，不禁大笑曰：“先生可谓只知天文，不明地理矣，不然何至坠入沟中耶？”

第二四 魂作濶

有個人愛做濶、然而家裏很窮、客人來了、沒人送茶、他大聲說、倒茶來、屢次叫人也沒應、他的媳婦兒只得把茶來、窮人見媳婦兒來了、很為難、就嚷着說、你男人上那裏去了、答說、他出差去了、為甚麼還不回來、答說、人還不回來、魂可已經回來了、魂在那裏、答說、在那裏坐着、胡吹混嘮粧濶哪。

第二四 靈魂の虚榮

身榮を張る人があつた。然し家庭は甚だ貧乏である。來客があつても誰もお茶を入れて來る人が無い。見榮坊は大聲でお茶を持つて來いと度々呼んで見たが誰も來ない。妻君已むを得ずお茶を持つて出て來た。見榮坊は自分の妻君を見て怒鳴り付けて言ふには「お前の亭主は何處へ出かけたか」「用事があつてでました」「なぜ未だ歸らないのか」「身體は未だ歸りませんが靈魂は疾くに歸りました」「何處に居るのか」「そこに

坐つて大法螺を吹き乍ら虚榮を張つて居ります」。

『笑林広記』卷 10 貪饕部・15 頁「妻掇茶」

客至乏人，大声讨茶，妻无奈，只得自送茶出。夫装馱揸，乃大喝云：“你家男人哪里去了？”

『笑府』卷 8 刺俗部・122 頁「呼茶」

有惧内而好装体面者，对客屡呼茶不至，饰为怒，且骂，自走取茶。妻伏屏后，见夫至，连批其颊。其人忍痛急转，曰：“我专怪你不持茶出来。”

第二六 賣母猪肉

屠夫出賣母猪肉、偷偷兒的吩咐他的兒子別說、不大的功夫兒買肉的來了，兒子就說，我家賣的並不是母猪肉、那個人大悟、不買就走了、父親說、我早吩咐過你、你怎麼反倒先說起來、很有氣、說了他兒子、一會兒又來了買肉的、問說、這塊肉皮厚、莫非是母猪肉呢、兒子在傍邊兒插嘴說、怎麼，難道這句話、也是我先說起來的麼。

第二六 牝豚の肉を賣る

豚肉屋で牝豚の肉を賣り出したので、人に喋つてはならぬと、こつそり倅に吩咐けた。間もなく肉買ひが來たので倅は「私の店で賣つて居るのは決して牝豚の肉ではありませんよ」と言ふと、お客はハハーと悟つて買はずに行つてしまつた。肉屋の親爺が俺は疾くにお前にあれ程吩咐けて置いたのに、なぜお前から先に言ひ出すのだ」と非常に立腹して倅を叱り付けた。暫くすると、又お客がやつて來て、「此の肉は皮が厚いが、よもや牝豚ではあるまいね」と訊いた。倅は側から口を出して「どうです、まさか今の話は私から先に言ひ出したのでがないでせう。」

『笑林広記』卷 5 殊稟部・102 頁「母猪肉」

有卖母猪肉者，嘱其子讳之。已而买肉者至，子即谓曰：“我家并非母猪肉。”其人觉之，不买而去。父曰：“我已吩咐过，如何反先说起！”怒而挞之。少顷，又一买者至，问曰：“此肉皮厚，莫非母猪肉乎？”子曰：“何如！难道这句话，也是我先说起的？”

『笑府』卷 11 谬误部・152 頁「猪婆肉」

有卖猪母肉者，嘱童子讳之。已而买肉者至，童子遽谓曰：“我家并非猪婆肉。”其人觉之，不买而去。店主怒曰：“我分付过，如何反先说起。”乃凿其头两下。少焉，又一买者至，见肉，问曰：“此肉好似猪婆肉。”童子谓主人曰：“你听，这难道也是我说的！”

与旧话“此处无银三十两”同意。

第三五 何處最像

有一個畫喜容兒的畫匠、畫完了寫真、和本人兒說、請問問過路兒的人是誰、主人就照着辯、初見一人、問說、那一邊兒最像、那個人說、方巾最像、次見一人、又問是那一處最像、那個人說、衣裳最像、趕到見第三個人、畫匠給他說、方巾衣服、都有人說過、不必再要提、又問形體怎麼樣、那個人磨蹭半天說、鬍子最像。

第三五 何處が一番似て居るか

肖像を畫く画工が肖像を畫き上げて、本人に言ふには「此は誰の肖像か、通行の人に、どうか訊ねて見て下さい」と。そこで本人は言はれた通りに一番初めの人に「何處がよく似て居ますか」と問ふてみると、その人は「頭巾がよく似て居ります」と。次の人に又何處がよく似て居ますかと訊ねると、その人は「着物がよく似て居ります」と答へた。三番目の人に見せる時に画工は「頭巾と着物は、もう前に人が言ふたから重ねて言ふ必要はないのです、體の恰好はどんなものですか」と訊ねると、問はれた人は、暫く躊躇して居たが「髯がよく似て居ります。」

『笑林広記』卷3 術業部・54～55頁「虎須像」

一画士写真既就、谓主人曰：“请执途人而问之，试看肖否？”主人从之，初见一人问曰：“那一处最像？”其人曰：“方巾最像。”次见一人，又问曰：“那一处最像？”其人曰：“衣服最像。”及见第三人，画士嘱之曰：“方巾、衣服都有人说过，不劳再讲，只问形体何如？”其人踌躇半晌，曰：“胡须最像。”

第三六 鬼挑擔

鍾馗最愛吃鬼肉、到了誕辰的那天、他妹妹給他送壽禮、禮單上寫的是一瓶酒、兩個鬼、送給哥哥隨便做樂、哥哥要嫌禮物少、連挑禮物來的鬼、共總有三個、鍾馗就叫手下把三個鬼一塊兒送到廚房去、厨子快快兒烹調、兩個鬼和挑擔鬼說、我們兩個人是在禮單之內、原來是壽禮、死也不恨、你何苦來、要挑這擔子。

第三六 天秤擔ぎの鬼

鍾馗は鬼の肉が大好きである。誕生の當日になると、妹がお祝の贈物をした。其の書付に酒一瓶と鬼二疋をお贈り申上げますから、兄さん御随意に召し上がつて下さいと認めてある。兄の鍾馗は贈物の少ないのに満足しない。贈物を擔いで来た鬼を加へると、合計三疋になるから、鍾馗は直ぐに部下の者に命じて三疋の鬼を一緒に臺所へ運ばせて、料理番に早速調理せしめる事になつた。二疋の鬼が、擔いで来た鬼に言ふには「俺達二人は目錄にもある通り、元よりお芽出度い贈物だから、死んでも構はない

が、お前こそ此の天秤棒を擔いで來て、飛んだ災難だわい。」

『笑林広記』卷 11 讥刺部・197 頁「担鬼人」

钟馗专好吃鬼，其妹送他寿礼，帖上写云：“酒一坛，鬼两个，送与哥哥做点刹。哥哥若嫌礼物少，连挑担的是三个。”钟馗看毕，命左右将三个鬼俱送庖人烹之。担上鬼谓挑担鬼曰：“我们死是本等，你却何苦来挑这担子？”

第三七 經手難活

有一個樵夫、背着柴從山上回家去、高唱樵歌、心裏很高興、那個時候、有個醫生走到鄉下治病去、急忙非常的樣子、道路上樵夫無故的碰了醫生的身體、醫生很有氣、拿拳頭要打他、樵夫求饒說、我甯可挨腳踢、千萬別動手、傍邊兒的人很詫異、問他這個理由、樵夫說、腳踢不至於死、經了他的手、一定難活的了。

第三七 手にかかると死ぬ

樵夫が山から薪を背負つて歸り途、大聲で歌を唱ひ乍ら上機嫌の體。所へ大急ぎで田舎の病家へ診療に行く醫者が通りかかつて、樵夫は誤つて醫者に突當つた。すると醫者は立腹して、拳骨で樵夫を打たうとしたので、樵夫は連りに誤つて言ふには「踢るなら構ひませんが、手出しだけは眞平です」と。側に居合せた人が不思議に思つてその譯を訊ねると、樵夫は足で踢られる分には死なないが、醫者の手にかかると屹度助からネー」。

『笑林広記』卷 3 术业部・45 頁「愿脚踢」

樵夫担柴，误触医士。医怒，欲挥拳。樵夫曰：“宁受脚踢，勿动尊手。”傍人误之，樵者曰：“脚踢未必就死，经了他手，定然难活。”

『笑府』卷 4 方术部・75 頁「愿脚踢」

樵人担柴，误触医士。医怒，欲挥拳。樵跪曰：“宁受脚踢。”旁人讶之。樵曰：“经他手，定是难活。”

第四三 電燈難吹

有一個鄉下姑娘、這天到了上海、逛了有五六天、纔回去自誇說、他所住的客店怎麼樣的清潔華麗、怎麼樣的應酬周到、總而言之、則無不盡如人意而已、就有一個事、到現在還是不如心、他的臥房裏、夜裏永遠點着燈、直的到大天大亮、這是我們鄉下人不肯

做的、傍邊兒的女人就問說、那麼你怎麼不吹滅了麼、姑娘說、那燈火是在玻璃瓶裏、高高的掛在頂棚上、怎麼能穀吹滅呢。

第四三 電燈は吹き消し難い

田舎娘が或る日上海へ見物に出掛けて、五六日遊んでから、郷里へ歸つて来て自慢話
に「自分の宿泊した旅館は非常に清潔で、立派でありましたし、待遇も實に行届いて
居りました。一口に申しますと、何でも如意の儘でありましたが、只一つ、今になつ
ても未だ合點の行かぬ事があります、と云ふのは、寢室に夜通し燈火が點いて居て、
翌朝まで消えない事、これは私等田舎の人のようやらない事です」と。傍に居る女が
「それなら貴女は何故その燈火を吹き消さなかつたのですか」と訊くと、娘が言ふに
は「その燈火と云ふのは硝子瓶の中に入っていて、高く天井に吊るしてあるから、ど
うして吹き消す事が出来ませう。

『侯宝林』201頁《男女新笑话》

「电灯难吹」

一乡姑娘偶至上海，闲有数日。归而夸耀于人，盛称所居之旅馆，如何清洁华丽，如何
何酬应周备。一言以蔽之，则无不尽如人意而已。惟有一事，于心殊未愜。则彼辈于卧
室中常点夜火，通宵达旦彻夜光明，此我乡间所不肯为他。

邻女问曰：“然则，汝何不吹灭之乎？”乡姑娘曰：“彼以火置玻璃瓶中，高悬空际，
如何可吹呢？”

第四五 雪深二尺

有個女人當幼兒園的教習、性情嚴厲、他最恨的是、兒童家裏給學生混告假、有一天、
下大雪、上學的學生很少、到了到了第二天、都有信來、寫着不能上學的理由、惟獨某
童一個人沒有、他就究問那個緣故、某童說、我明天一定帶來、到了第二天、那個某童
把請假書帶來了、趕到一看、不過有幾個字、說是某某女士鑒、吾兒腿長十四寸、昨日
雪深二尺、某某謹啓、念完了、也沒有法了。

第四五 雪の深さ二尺

或る女が幼稚園の先生になった、所が非常に嚴格な性質で、特に兒童の家庭で無暗に
學校を缺席させるのを一番嫌つた。或る日大雪で、出席の兒童は極めて少なかつた。
缺席の兒童は、翌日になつて、出席することの出来なかつた理由を書いた手紙を持つ
て來たが、唯一人某兒童のだけは無かつた。そこで先生は其理由を訊ねると、その兒
童は、明日必ず持參しますと言ふた。その翌日になると、某兒童は缺席届を持つて來
た。見るとほんの一二行。「拜啓私方の子供の足は一尺四寸に有之候處、一昨日の降雪
は深さ二尺有之候、何々先生様何某より」と。先生讀み終つて又如何ともする事が出

來なかつた。

『侯宝林』524頁《千金一笑录》

「请假书」

某女士，幼稚园教习也，性严厉，最恶学生家属无端为学生请假。

一日，天大雪，学生到堂者寥寥。

次日，各有书至，述不能到之故。惟某童独无之。女士诘其故。童曰：“明日当补来也。”

翌日，童持请假书至。女士读之，寥寥数字，曰：“某某女士鉴，吾儿腿长十四寸，昨日雪深二尺，某某谨启。”

第四九 魚腮塗粉

在上海賣鮮魚的、用洋紅粉、塗在魚的兩腮上、擺在攤子上、以表示那個魚是新鮮的、受這個愚的算不少、有個人、這天到市上買魚去、賣魚的指給他腮、要很貴的價錢、那個人瞧了半天大笑、賣魚的問、是甚麼意思、那個人答說、我笑的是母魚、不是公魚、賣魚的更不明白說、魚是吃的東西、何必問是公是母，那個人又笑了說、若是果然不是母魚、怎麼學這醜婦效顰、厚塗桃紅粉在；兩腮之間呢、賣魚的閉口無言、答對不出話來了。

第四九 魚にお化粧

上海の魚屋では、洋紅を持りて魚の兩腮に塗り着け、店頭に列べて、其魚の新鮮なる事を示す者がある。此の手段に引かかつた人も少なくない。さる人が、或る日市へ魚を買ひにでかけた。魚屋は腮を指して滅法高い事を言ふ。その人は暫らく熟視して居たが吹出した。魚屋がその譯を訊ねたので、その人が答へるには「俺の笑つた、譯は、此の魚は雌で、雄魚ではないからさ」。魚屋は益々了解に苦しんで言ふには「魚は食べる物ですから、雄でも雌でも構はないじやありませんか」と。その人は又笑つて言ふ「屹度雌魚でないと云ふなら、どう云ふ譯で紅を兩腮の間に塗り着けて、厚化粧を施すのか」と。魚屋はギャフンと參つて一言半句も出なかつた。

『侯宝林』524頁《男女新笑话》：“”「」『』

「鱼腮涂粉」

沪上販鮮魚者，輒以洋紅粉涂于魚之兩腮，陳諸攤上，以表示其魚之新鮮。受其愚者，的不乏其人。

一日，有某甲至市購魚。販者示以腮，索重價。

甲視良久，繼而大笑。販者問何故。

甲答曰：“我笑此魚是雌，非雄魚也！”

販者更不解，以为鱼为食品，何必问其雌雄？

甲复笑曰：“若果不是雌鱼，何以也学此丑妇效颦，厚涂桃紅粉于两腮间耶？”

卖鱼者语为之塞。

第五〇 懶婦食餅

某村兒裏有個懶情農婦、平常的家常飯、都是他丈夫給他料理、媳婦兒不過伸手穿衣裳、飯得了就張着嘴吃、有一天、男人要出外去、得五六天纔回來、恐怕媳婦兒懶情挨餓、於是烙一個大餅、套在媳婦兒腦袋上、做這五六天的乾糧纔放心起身了、趕到男人回來、媳婦兒已經餓死了三天了、男人嚇了一大跳、趕到細細兒的一看、看見腦袋上的餅、就把挨着嘴的地方兒、吃了一個月芽兒、剩下的餅還照舊的沒有動。

第五〇 不精の妻と餅

或る村に怠け者の農婦があつて、平生の食事は皆亭主が料理をしてやる。妻は唯手を伸ばして着物を着、飯が出来れば、口を開けて食べると云ふ有様、或る日亭主が旅に出かけるので、五六日経たねば帰宅しないから、妻は怠惰で腹が減るだろうと心配して、大きな餅を焼いて妻の頭の上に載せ、數日分の兵糧を準備した上で、やつと安心して出發した。廳て亭主が旅から帰宅して見ると、妻は三日前既に餓死して居た。亭主は吃驚仰天して、よく調べて見ると、頭の上の餅は、口に近い個所が三ヶ月形になつて居て、残りの部分は矢張元々通りになつて居た。

→（『中國笑話集』楊家駱・世界書局・2014年11月3版より）

『程氏笑林広記』550頁「懶婦」

一婦人極懶，日用飲食，皆丈夫操作，他只知衣來伸手，飯來張口而已。一日，夫將遠行，五日方回，恐其懶作挨餓，乃烙一大餅，套在婦人頂上，為五日之需，乃放心出門而去。及夫歸，已餓死三日矣。夫大駭，進房一看，頂上餅只將面前近口之處吃了一缺，餅依然未動也。

第五一 千金子

有個富戶很自大，他和一個窮人說、我家有千金之富、你怎麼不肯奉承我、窮人說、你雖有千金、與我甚麼相干、我何必奉承你、富戶說、我若分給你一半兒、你總應該奉承我了罷、窮人說、你若是留五百塊錢、給我五百、我和你不一樣麼、又何必奉承你、富戶說、那麼我把我的錢、都送給你、難道你還不肯奉承我麼、窮人說、你失了千金、我得了千金、你就該當奉承我了、我更不必奉承你了。

第五一 金持

或る金持が、大層威張つて、貧乏人に言ふには「俺の家には金が千両もあるのに、お前はなぜ俺を崇めないのか。」貧乏人が「貴方が千両持つて居たとて、私には何の関係もない。私は何も貴方を崇める必要はありません」と言ふ。金持は又「俺が半分お前に分けてやったら、お前は俺を崇めるだろう」と云ふと、貧乏人は「貴方が五百兩残して、私に五百兩呉れると、貴方と私とは同等ではありませんか、何も貴方を崇めるには及ばない」。金持「では、俺の錢を残らずお前に呉れてしまつたら、なんとそれでも俺を崇めない筈はあるまいな」。貧乏人「貴方の千兩を私が皆んな貰つてしまへば、貴方こそ私を崇めるのが當然で、私は尚更貴方を崇めるには及ばない」。

『笑府』卷 13 闲語部・172 頁「不奉富」

千金子驕語人曰：“我富甚，汝何得不奉。”其人曰：“汝自有金，于我何与，而奉汝耶！”曰：“侬分半与汝，何如？”答曰：“汝五百，我亦五百，我汝等耳，何奉耶！”又曰：“悉以相授，难道犹不奉我？”答曰：“汝失千金而我得之，汝又当奉我矣。”

说得极妙，恨世人不知。又富翁谓贫士曰：“我所蓄近十万矣。”贫士曰：“我亦有十万之蓄，公未知耳。”富翁惊问曰：“汝十万何在？”贫士曰：“公不用，我亦不用，可是一般。”

第五三 驗糞趣話

有某學校的運動員們、要到菲列濱遠東運動會去、正要開船的時候、醫生到船上來驗尿、為的是恐怕有傳染病、他們都驚慌着急、一時尿拉不能下、內中只有一個人、拉的如同牛拉的一樣、大家見了很喜歡、一個人就分了些、裝在玻璃管子裏頭給醫生驗、趕醫生驗完了說、你們全都沒有病、只有一個人、他的尿裏有砂子、總得要驗驗他的身體、那個人趕緊的就說、我剛纔裝在管子的時候、是拿棍子塞進去的、尿裏的砂子、就是棍子頭兒上的砂子呀。

第五三 檢便珍談

某學校の選手達がフィリッピンの極東運動會へ行くので、丁度船が出帆しやうとする際、檢醫が汽船に臨檢して、大便を檢查する事になつた。是は傳染病患者の有無を檢查する為めである。選手達は皆大恐慌を來したが、大便はそう俄かに出ない。すると其の中に唯一人、牛の様な大糞を放つた人があるので、皆は大喜びで、一人一人に分配して、玻璃管の中に入れて醫者に見せた。醫者は檢查が終つてから「貴方達は皆無病ですが、只一人便の中に砂の混つて居る人があるから、是非共其の人の身體を檢查しなければならぬ」と言ふと、其人は大急ぎで答へるには「私は今管の中にステツキで入れましたから、便中の砂は、即ちステツキの端に着いて居た砂であります。」

『侯宝林』466頁《摩登笑话一千种》：“”「」『』

「验粪趣谈」

某学校运动员赴菲律宾远东运动会。将启航，医生欲验其粪，恐有疾病传染至外洋也。船将驶，众员惶亟，一时便不能下。有一人独遗一粪，大如牛尿。众大喜瓜分之，装入玻璃管中，交与医生。

医生验毕，皆云无病。独某君粪中有沙粒发现，甚异之。呼之来，欲验其体。

某君曰：“我装入管时以手杖抉入之，粪中之沙粒即杖端之沙也。”

医生大笑，船遂启航。

第五四 射雉妙法

上海的野雞實在很多、到了晚上、野雞就往來拉客、有個人慢々兒的走、一個野雞穿的華麗、長的體面、拉着他的左手、一個滿面笑容、樣子很好、拉着他的右手、左邊兒的野雞說、我家的屋子也好、煙茶也好、請您到我家去、右邊兒的說、我的家裏閒客也少、臭蟲也少、請您到我家罷、那個人慢慢的說、好的好、少的少、真叫我左右做人難了、這麼着、和左邊兒的說、還是我的銀錢好、對着右邊兒的說、無奈我的銀錢少、兩個一聽他的話、就闕然大笑、撩開手又去拉別人去了。

第五四 夜鷹に肘鐵砲

上海には夜鷹が譚山居る。日が暮れると、彼等は彼方此方と歩き廻つて客を引く。或る人がブラブラと歩いて居ると、美形の夜鷹が綺麗に着飾つて、其の人の左の手を引いた。モ一人は頗るスタイルのよいのがニコニコと笑ひ乍ら、右の手を引張つた。左側の女は、「私の家では部屋が好いし、煙草もお茶も好いですから、どうぞ私の家へ入らっしゃいまし」と言ふと、右側の女が「私の家ではお客様も少ないし、南京虫も少ないんですよ、どうぞ私の家へ入らして下さい」と言ふ。其の人が徐ろに言ふには「好いのも好いが、少ないのも少ない。全くどうも、両方からせめられてやりきれない」と。そこで、左側の女に「矢張り俺の錢の方が好い」。右側の女には「何しろ俺の錢が少ない」と。二人の夜鷹は彼の話を聴いて、カラカラと打笑ひ、握つて居た手を開いて他の客を引張りに行つてしまつた。

『侯宝林』336頁《笑话一千种》：“”「」『』

「射雉妙法」

上海野鸡，实在繁多，尤以四马路为极盛之区，一晚电灯辉煌，照彻如昼，雉妓往来拉客之声不绝于耳。

有某甲行而行，一妓衣服华丽，姿态稍好者，拉其左手；一妓满面芙蓉，形如鸪盘茶者，拉其右手。

左者曰：“我家房屋好，烟茶也好，请到我家去。”

右者曰：“我家闲客少，臭虫也少，请到我家去。”

某甲乃徐徐而言曰：“好的好，少的少，真叫我左右为难了。”乃向左者曰曰：“还是我的银钱好。”向右者曰：“无奈我的银钱少。”两妓闻言，皆闲然释手而去。

第五七 只要利錢

有個人聽說開當舖賺錢、心裏很願意開一個、他就和人商量要借本錢、那個人回答說、大的總要幾萬兩銀子、小的也要幾千兩銀子、他聽這個話、嚇了一大跳、有去和別人商量、說、一百兩就穀了、他又不願意辭退了、末後有一個人說、開當舖何必用本錢呢、只要欄櫃一張、當票子幾張就行了麼、他聽這話喜歡的了不得、於是挑了一個好日子便開張、有拏東西來當的、夥計們驗看完了、就填空票子給他、當當的人要銀子、夥計們回答說、等你來贖當的時候、只要給利錢就得了。

第五七 利息だけ取る

或る人が、質屋を始めると大分金が儲かると云ふ話を聞いて、自分も一つ開業して見やうと、人に相談をして資本の借用を乞ふと、其の人が答へるには「大店を開くには、どうしても五六萬圓もかかる、小店でも五六千圓はいる」と言ふ。彼は此話を聞いて吃驚して、他の人の所へ行つて相談したら、百圓あれば十分だと言ふた。彼はそれでもまだ不承知で、其處を、退き取つた。最後に相談をかけた人が言ふには「質屋を開くに、何も元手はいらない、只帳場と質札が少しあれば、それで結構だ」。彼はこの話を聞いて嬉しくてたまらない。そこで、吉日を選んで開業した。質物を持つて入れに來た人があると、番頭は品物を調べてから、質札だけ渡してやる。入質者が錢を催促すると「請け出しに來た時、利息だけ拂つて貰へば宜しいのです。」

『笑府』卷8 刺俗部・114頁「开典」

有慕开典铺者，谋之人曰：“开典用本几何？”曰：“大典万金，小者亦须千许。”其人大惊，辞去。更请一人，曰：“百金开一钱当亦可。”又辞去。最后一人曰：“开典如何要本钱？只须店柜一张、当票数纸足矣。”乃欣然择期开铺。至日，有持物来当者，验收讫，填空票付之。当者索银，答曰：“省得称来称去，费了手脚。待你赎时，只将利银来便了。”

第五九 頃刻既忘

某署有一個衙素健忘、奉命押解犯罪的和尚上省、臨走的時候、恐怕他忘了、細々兒的點了一點、又編成兩句俗語、說是包裹雨傘枷、文書和和尚我、若走到半道兒上、把這兩句、好好兒的牢記着、和尚知道可以欺負他、就先用酒灌醉了他、把他的頭髮剃去了、

拿枷套在他的脖子上、偷々兒的逃跑了、趕衙役醒了說、不要忙、等我查一查、查完了說、包裹雨傘有、摸着脖子上說、枷有、文書有、忽然吃驚喊着說、噯啲、和尚怎麼看不見了、哪、等了一會兒摸着自己的光頭說、和尚還在這裏、就是我一個人看不見了。

第五九 健忘性

或る役所に一人の下役人があつて、生來の健忘性である。命令に依つて、罪を犯した僧を護送して、省城に上る事になつた。出發の際、忘れては困るので、細かに携帶品を調べて、二つの文句に作つた。其句は風呂敷包と傘と枷、公文書類に僧に俺と云ふのである。途中迄行くと、此二句を充分シツカリ記憶してしまつたが、坊主は役人を欺く事を知つて居るから、先づ酒を飲ませ、役人を酔はせてから頭を剃り落し、枷を頸に嵌めて、こつそりと逃亡して了つた。役人は眼が醒めてから言ふには「急くには及ばない、一つ調べて見やう」と調べ終ると「風呂敷包と傘は有る」と頸の邊りを撫で乍ら「枷も有る、書類も有る」と言つたが、忽ち吃驚して怒鳴つて言ふには「アレ！坊主はどうして見えないんだろう」と、暫らくして自分のクリクリ頭を撫で乍ら「坊主は矢張此處に居るが、俺一人見えない」

『笑府』卷6 殊稟部・99頁「解佞卒」

一卒管解罪僧赴戍。僧固黠，中道醉之以酒。取刀髡其首，脱己索反继之而逸。次早卒寤，求僧不得，自摩其首，居然髡也，而索又在项，乃大詫曰：“僧固在此，我在哪里去了？”

有赤貧者，所亲偶寄地平一块，其人恐招盜，每夜必身卧其上。一日，偷儿乘其睡熟，拽之天井中，而取地平以去。及醒，仰面见天，大詫曰：“地平亏我压住在此，屋已被拆去了。”意亦同。

第六〇 窮人遇賊

有夫婦倆很窮、吃早起的謀晚上的、媳婦兒說、偕們倆肚裏沒食、身上沒衣、何不賒一瓶就來、雖然不能充餓、也可以搪搪寒、於是乎丈夫出門、賒了酒回家來了、到了晚上夫婦一塊兒就喝酒、媳婦兒喝了個大醉、家裏只有綿絮一條、媳婦兒扯去自己蓋上、男人覺着很冷、沒法子拿半個破缸來、蓋在身上、枕瓦睡覺、那個時候兒有個賊橈門進來了、窮人說、我們窮得如此、你還來偷、說着拿所枕的瓦扔去了、賊叫喊着就跑了、窮人說、便宜了你、我是拿枕頭打你、若是拏被子打你、早要了你的命了。

第六〇 貧乏人賊に遇ふ

貧乏な夫婦があつて、其の日の暮しにさへ困つた。妻が言ふには「お腹は減るし、着物は無し、酒でも一瓶借りて來ませんか、腹は餓えても、せめて寒さなりと防ぎませう。」そこで亭主が出かけて行つて、酒を借りて戻つた。晩になつて夫婦は一緒に酒を

飲んだ。妻は大分酩酊した。家には唯綿入が一枚しか無い。妻はそれを引張り出して自分で被けた。亭主は寒くなつて來たので、仕方なしに二つに破れて居る缸を持ち出して來て被つた、で、瓦を枕にして寝やうとする時、盜棒が戸をこちあけて這入つて來た。貧乏人は「俺達はこんなに貧乏なのに、何か竊みに來たのか」と言ひ乍ら、枕にして居る瓦を盜棒に投げ付けた。これはたまらんと盜棒は怒鳴り乍ら逃げだした。貧乏人が言ふには「俺は枕を投げ付けたから、まだ軽く濟んだのだ、若し夜着の方を叩き付けたら疾くに貴様は命が無いのだ。」

『程・広記』348頁「穷人遇賊」

兩夫婦甚窮，朝不謀夕，竟至斷炊。婦謂夫曰：“我兩人腹内无食，身上无衣，何不賒壺酒來？虽不能充飢，亦可以御寒。”夫出門賒酒而歸。至晚，夫婦枵腹同飲。婦人大醉，家中只有棉絮一條，婦人扯去自蓋。男人甚冷，不得已拿半个破缸，覆在身上，枕瓦而眠。将要睡着，有賊撬門而入。穷人曰：“我們窮得如此，你還要來偷？”顺手用所枕之瓦打去，賊呼痛而逃。穷人曰：“便宜了你。我是用枕头打你，若用被頭打你，早要你的性命了。”

第六一 也司太多

某洋行裏有個底下人、極蠢笨，英國話就知道也司一句、幸虧作事還勤謹、每逢接待人的時候就說也司、自己以後能說英國話了、他愛穿洋衣裳、戴草帽兒、穿皮鞋、手裏拿司迭克、嘴裏叨着琥珀烟嘴子、好像一個留學生、有一天、在茶室裏、和他的朋友說話、一連氣說了很多的也司、朋友聽着很討厭、這麼着他取底下人的煙嘴子、一連吸幾口、看不見一點兒煙、就把這個還給他笑着說、老兄、這雙嘴子閉塞不通、想必是煙屎（諧音）太多了、請老兄把煙屎除去、纔好算得嘴子了。

第六一 イエスの連發

某商店に下男が一人居る。大の阿呆で、英語は纔かにイエス一語だけしか知らない。それでも忠實に働いて居る。人に逢ふ度イエスを言つて、己は英語が喋れると己惚た。彼は洋服が大好きで、麥藁帽子を被つたり、靴を穿いたりして、手にはステツキを持ち、口には琥珀製のパイプを銜へ、留學生然と構へた。或る日茶の間で自分の友達と雑談して居ると、イエスの連發に友達は嫌氣を催した。そこで友人は下男のパイプを借りて、スパスパと吸ふて見たが煙がチツトモ來ないので、パイプを彼に返して、笑ひ乍ら言ふには「君此パイプは詰つてしまつて通らない、多分脂（イエンシ、諧音にてイエスに通ず）が多過ぎるからだ。君、イエスを除き去つてしまつたら、具合よいパイプ（口調に通ず）になるよ」。

『侯宝林』274頁《哈哈笑》

「YES 太多」

某洋行西崽某甲，性极愚鲁，英语中只知“耶斯”一词。幸做事勤恳，未遭西人之驱逐。然逢人辄道“耶斯”，自以为能说英语者。且喜着西装，头戴草帽，脚穿皮靴，鼻梁托力克，手持司迭克，口衔蜜蜡烟嘴。不知其底蕴者，几疑为留学生矣。

一日，在茶室中与友叙谈，一连说数句“耶斯”。友甚厌之，乃取甲之香烟嘴，连吸几口不见有烟。遂借此讥笑曰：“老兄这只嘴，塞窒不通，谅必烟屎（耶斯）太多了，请老兄把烟屎除去，方好算的嘴咧！”

第六二 喜歡睡覺

有一個很喜歡睡覺的人。自己常常兒的很得意的說，他在隨便甚麼時候、都能睡覺的。他有一個朋友。也是一個著名的睡覺家。有一天，那個朋友找他去、他的底下人說、主人還沒起來、客人說、那麼我在這裏等一下罷、說着就靠着桌子睡着了。不大的工夫、主人起來了、走到客廳裏、看見朋友正在睡着覺、但是他很明白噪鬧睡覺的沒有趣兒、所以他並不叫醒朋友、也就坐下來、一會兒也睡着了。後來客人醒了、看見他的朋友也睡着在旁邊兒、他也不去鬧醒他、仍舊再睡。後來主人又醒了、看見朋友還沒有醒、所以他決定再睡一下。

第六二 寢好き

非常に寢好きの人がありまして、常に得意がつて、自分は何時でも勝手に寝ることが出来ると言ふ。その人に一人の友達があつて矢張り大の睡眠好きでありました。或る日のこと件の友達が彼を訪問しますと、其家の下男が「主人はまだお目覚めになりませんが」客人「それでは此處で待つことにしやう。」と言ひ乍テーブルに靠れて寝て了つた。やがて主人公が起き出して、客間へ行つて見ると友達がグウグウ眠つて居りますが安眠を妨げるのは不粹なことだと思つて、呼び起しもせず腰を下しますと間もなく寢入つて了ひました。それから友達が目覚めると主人公も自分の傍に寢て居りますが、矢張り起さうともしないで再び寢て了ひました。それから主人の方が又目を覺しますと友達はまだ眠りから覺めないからモウ一遍寝ることに決めました。

『程・広記』248頁「好睡」

一好睡主人，偏请了一位好睡客人。客至，见主人未出，乃在座上鼾睡。主人出，见客睡，不忍惊动，对面亦睡。俄而客醒，见主人睡，则又睡。既而主人醒，见客尚睡，乃仍睡。及客又醒，日已暮矣。主人仍未醒，客乃潜出。及主人醒，不复见客矣。客回家，主人入房，又均入黑甜乡矣。

第六三 買我一家

有個開南貨店的、他有箇糊塗的兒子、這一天他出外販貨物去、臨走的時候兒吩咐兒子守舖子、偶然來了一個客人、問說、尊翁在家沒有、兒子說、小店裡只有狀元紅斥八對、都是燭名、決沒有尊翁、客人又說、令堂在家麼、兒子說、只有紅糖白糖、可沒有令堂、客人連罵呆徒就回去了、父親回來、問店裡的生意怎麼樣、兒子說、貨物一概不齊、買賣怎麼能好啊、父親問店裏還短甚麼貨物、兒子說、今兒有客人要買尊翁令堂呆徒、這三樣兒都沒有、父親說、尊翁就是我、令堂就叫你的媽媽、呆徒是你哪、兒子說、那麼他要買我們家子去、佷用呢。

第六三 家中を買ふ

南方の雜貨を商ふ店に、馬鹿息子があつた。或る日父が行商に出かけんとする時、俵に店番を吩咐けた。偶々お客が来て「尊翁（お父さん）は家に居り（有り）ますか」と訊ねると、俵が言ふには「私の店には只狀元紅斥八對等有りますが、皆蠟燭の名前で、尊翁はお生憎様です」。お客が又「令堂（お母さん）は居り（有り）ますか」。「紅糖（赤砂糖）白糖（白砂糖）ばかりで、生憎令堂はありません」と言ふたので、客人は頻りに呆徒（阿呆）と罵つて歸つてしまつた。聽て父が歸宅して、店の商賣はどんな景氣か訊ねると、俵が言ふには、品物がスツカリ揃はないから、商賣はいい筈はありませんよ」と、店には未だ何か足りない品物があるかと問ふと、「今日お客が尊翁と令堂と呆徒を買ひに來ましたが、此の三つの品物は皆ありません」と。父が「尊翁とは即ち俺だ、令堂はお前のお母さんを云ふのだ、呆徒はお前の事だよ」と言ふと、俵が「それじや、あのお客は家中の人を買ひに來たのだナ、何んにする氣だろう」。

『笑府』卷6 殊稟部・95頁「呆子守店」

有呆子者，父出門，令其守店。忽有买货者至，问：“尊翁有么？”曰：“无。”“尊堂有么？”亦曰：“无。”父归知之，谓子曰：“尊翁，我也；尊堂，汝母也。何得言无？”子懊怒曰：“谁知你夫妇两人都是要卖的！”

幸是呆子，不然，连爷娘也卖了。

第六四 糟餅兩個

有個人很愛喝酒、可是家裡窮不能買酒喝、見天啖糟餅兩個、就算喝醉的意思、有一天偶然在街上遇見他的朋友、朋友問說、你喝酒了麼、他說、不是、不過吃了糟餅、回家告訴他的媳婦兒、媳婦兒說、你若說喝了酒、還是粧體面些兒、他就答應、趕到出門遇見個朋友、照舊的問他、他說、喝了酒、朋友說、是喝熱的啊、還是涼的呢、他說、是燻的、朋友笑着說、你不是吃了糟餅了麼、他又回家、媳婦兒知道了、就說、你怎麼說

燻、該說喝熱的、他說現在我知道了、回頭再遇見那個朋友、不待問他自誇說、我這番的酒是熱喝的、朋友問說、你喝了多少、那個人伸着手說兩個。

第六四 酒糟二つ

酒好きの人があつたが、家が貧乏で酒を買って飲む事が出来ないから、毎日酒糟を二つ食べて酔ふた積りにする。或る日偶然街で友達に出逢つた。友が「お前は酒を飲んだのか」と訊ねると、彼は「いや、酒糟を食べたばかりさ」と答へた。帰宅して妻に告げると、妻が言ふには、「貴郎、酒を飲んだと言へば大へん體裁がよいじやありませんか」と。彼は點頭いて外出すると、又友達に出會つた。例の通り訊ねたので、彼は酒を飲んだのだと言ふと、友が言ふには「爛をして飲んだのか、それとも冷で飲んだのか」と。彼は「焼いて」と答へたので、友は笑ひ乍ら「お前は酒糟を食べたのじやないか」と言ふた。彼は又家へ 一つて行くと、妻は話を聞いて言ふには「貴郎はなぜくなどと言ふのですか、爛をして飲んだと言ひなさい」。「今度こそわかつた」と彼は言ふて、其後又再前の友達に出 一つたので、友の問ひを待たないで、自慢して言ふには、「今度の酒は爛をして飲んだ」。友人が「お前はどれ程飲んだのか」と訊ねると、彼は手を伸ばして「二つサ」。

『笑林広記』卷 10 貧窶部・186 頁「吃糟餅」

一人家貧而不善飲，每出啖糟餅二枚便有酣意。适遇友人問曰：“尔晨飲耶？”答曰：“非也，吃糟餅耳。”归以語妻，妻曰：“呆子，便說吃酒，也裝些體面。”夫頷之。及出，仍遇此友，問如前，以吃酒對。友詰之：“酒熱吃乎？冷吃乎？”答曰：“是燻（han）的。”友笑曰：“仍是糟餅。”既歸，而妻知之，答曰：“汝如何說燻，須云熱飲。”夫曰：“我知道了。”再遇此友，不待問即夸云：“我今番的酒，是熱吃的，”友問曰：“你吃几何？”其人伸手曰：“兩個。”

『笑府』卷 6 殊稟部・98 頁「糟餅」

一人家貧而不善飲，每出，只啖糟餅二枚，即有酣狀。适遇友人，問曰：“尔晨飲耶？”曰：“非也，食糟餅耳。”归以語妻，妻曰：“便說飲酒，也裝些門面。”夫頷之。及出，遇此友，問如前，以吃酒對。友詰之曰：“熱吃乎？冷吃乎？”答曰：“是燻的。”友笑曰：“仍是糟餅。”既歸而妻知之，答曰：“酒如何說燻，須云熱飲。”夫曰：“已曉矣。”再遇此友，不待問即夸云：“我今番的酒是熱吃的。”友問曰：“你吃几何？”伸指曰：“兩個。”
一團天趣，反被庸婦人教坏。

第六五 養白翎

白翎是個小鳥兒、各樣兒的雀鳥的聲音沒他不會學的、有個老爺很愛他、專雇了一個小

廝、叫給養活、這天天氣很熱、要給白翎洗澡、就吩咐小廝說、你得小心着些、若是掉一根毛、我要打折了你的腿、吩咐完了、老爺就出去了、這個當向兒太太要叫小廝做事、小廝說、小的不敢離開這兒、萬一白翎掉了毛、老爺一定要打折了小的的腿、元來老爺怕太太、太太一聽這個話、立刻打開鳥籠子、把那個白翎抓出來、拔的連一根毛兒也沒有了、拔完了照舊扔在籠子裡、趕不大的工夫、老爺回來一看、白翎成了光板無毛了、就氣的了不得說、這是誰拔的、小廝不敢言語、太太就說、是我拔的、這麼着、老爺便假粧喜歡說、拔的倒很好、比洗澡涼快多了。

第六五 白翎の飼養

白翎と云ふのは、いろいろの小鳥の啼聲は何一つ眞似の出来ないのは無いと云ふ小鳥である。此の小鳥の大好きな人が、専屬の小者を雇入れて、その鳥を飼養させた。或る日非常に暑いので、白翎に水を浴びさせやうと、小者に命じて言ふには「お前十分注意しろ、若し毛一本でも落せば、お前の足を打折るぞ」と命じ終つて主人は外出した。間もなく妻君が小者を呼んで用事をさせやうとすると、小者は「私は勝手に此處を動けません、若しか白翎が毛を落すと、旦那は屹度私の脛を打折るに相違ありませんから」と言ふた。元より嬖天下と來て居るから、妻君は此の話を聞くや否や、鳥籠を開けて白翎を掴みだし、一本の毛も残さず抜いてしまつてから、元通り籠の中へ投げ入れた。程なく主人が歸つてて見ると、白翎は丸裸で少しも毛が無い、そこで非常に立腹して「これは一體誰が毛を抜いたのだ」と言ふ。小者は無言で居ると、妻君が言出した。「それは私が抜いてしまつたのよ。」そこで主人は瘦我慢に嬉しい振りをして、「毛を抜いてしまつた方が、水を浴びせるよりずっと涼しいわい。」

『程・広記』284頁「養百齡」

百舌鳥北方谓之“百齡”，各祥鳥音，无不会学。一老爷甚爱百齡，专雇一小廝喂养，不时提到街上，谓之：“闯百齡”。这一日天热，与百齡洗澡。属小廝曰：“小心看守，如落一根毛，打折你的腿。”属毕，出门而去。太太要支使小廝作事，小廝说：“小的不敢擅离。万一百齡落了毛，要打折小的腿。”老爷向来俱内，太太一闻此言，打笼内把百齡掏出来，拔的连一根毛儿也没有，仍在笼内。老爷回来一看，百齡成了不毛之鸟，大怒说：“这是哪个拔的？”小廝不敢言语。太太接声曰：“是我拔的，你便怎么样？”老爷回嗔作喜曰：“拔的好！比洗澡凉快。”

第六七 滑頭轎夫

有甲乙兩個轎夫。甲是很聰明伶俐的。說到乙、那是大不及他了。有一天他們兩個人抬了一頂空轎子出門、抬到半路、忽然雷電交作、大雨如注。甲對乙說、這樣大的雨、抬着空轎子、不是很有妨碍、我想還是拆開轎子、你拿轎槓、我拿轎座、你說好麼。乙也

不轉念頭、便滿口應許。那知甲拿了轎座、遮在頭頂、好像撐傘一般、身上一點兒不濕。可憐乙拿了轎槓、濕得滿身淋漓。又有一天、他們仍舊抬著空轎子走。忽然颳起大風來、吹個不住。甲對乙說、好利害的風呀、我們拆開轎子、自由行走好呀。你拿轎座、轎槓還是我來拿罷。乙也贊成甲的說話、便照這個法子做去了。甲拿轎槓的、沒有甚麼阻碍、乙拿轎座、被風吹得東斜西倒。到了家裏、衣服被汗濕透、却和受着大雨一般、手呀、脚呀、也酸痛得緊了。

第六七 狡猾な駕籠昇

甲乙二人の駕籠昇があつた。甲は大層利口であるが乙の方は遙かに甲に及ばない。或る日二人は空駕籠を擔いで家を出たが、途中迄行くと俄かに電光閃き雷が鳴り出して、篠突くばかりの大雨となつた。甲は乙に言ふには「こんな大降りに空駕籠を擔ぐのは難澁ではないか、一層のこと駕籠を取りはづして、お前は柄の方を持つことにし、俺は駕籠の方を持つことにしようと思ふがどうだろう。」乙は深く考へないで、二つ返事で承知した。意外にも甲は駕籠を受取ると、丁度傘をさした様に雨をよけたので、身體が少しも濡れなかつた。可愛そうに、乙は駕籠の柄を持つた為め、すっかりビシヨ濡れとなつた。又或る日のこと二人は例の通り空駕籠を擔いで出かけると、俄かに大風が吹き起こつて中々止みさうもない。甲は乙に向つて「馬鹿にひどい風だナア、駕籠を取り外づして自由に行かうじゃないか、お前駕籠の方を持つて呉れ、柄の方はマア俺が持つて行かう。」と言ふと乙も甲の言ふ通りに賛成して其の通りにした。甲は柄の方を持つた為め少しも難儀をしないが、乙は駕籠を持つた為、風に吹き卷かれて彼方へ傾き此方へ倒れ、家に歸ると着物は汗でビツシヨリ透し、大雨に逢つた時と違はない、手でも足でも、すっかり麻痺れて了つた。

『童話大観』

有甲乙兩個轎夫：甲是很聰明伶俐的，說到乙，那是大不及他了・

一天他二個人抬了一頂空轎子出門，抬到半路，忽然雷電交作，大雨如注；甲對乙說：「這樣大的雨，抬着空轎子，不是很有妨碍麼？我想還是拆開轎子；你拿轎槓，我拿轎座，你說好麼？」乙也不轉念頭，便滿口應許；那知甲拿了轎座，遮在頭頂，好像撐傘一般，身上一些不濕・可憐乙拿了轎槓，濕得滿身淋漓・

又有一天，他們仍舊抬著空轎子走・忽然起了大風，吹個不住；甲對乙道：「好利害的風呀！我們拆開轎子，自由行走好呀！你拿轎座，轎槓還是我來拿罷！」乙也贊成甲的說話，便照這個法子做去了，甲拿轎槓的，沒有什麼阻碍；乙拿轎座，被風吹得東斜西倒；到了家裡，衣服被汗濕透，却和受着大雨一般，手呀，脚呀，也酸痛得緊了・

第六九 閻王患病

有一天閻王生病、病得很利害、請了許多的醫生診治、不但全沒有效驗、而且他的病一天比一天不好、閻王想了一想、就喚手下過來、對那手下說、陰間沒有好醫生、還是到陽世去請罷、只有一件事要留心、總待要揀那醫生背後跟鬼最少的、方可請來、手下問說、那是怎麼個理呢、閻王說、凡是跟着醫生的鬼、都是被他一醫死的、所以鬼跟得少、那醫生必定好了、手下奉了閻王的命、馬上就到陽世去請醫生去了、一連找了三五天、沒有一個醫生不跟着幾百個鬼、有一天剛巧遇着一個醫生、只有一個鬼跟着、就去請來領到閻王面前、閻王見了只有一個鬼跟着、心裏想一想、這醫生的醫道精通、一定成春了、很快活的問說、先生在陽世治好了多少人、醫生說、多蒙獎譽、愧不敢當、小人自從習醫以來、只開來一個方子、閻王笑着說、怪不得、你背後只跟着一個鬼的。

第六九 閻魔様の病氣

或る日閻魔王が病氣に罹かつて、重態なので、幾人も醫者を呼んで、診て貰つたが、一向効能が現はれないばかりか、病氣は反つて日増しに重くなりました。閻魔王は熟考の上、部下の者を呼んで斯う云つた「地獄には良い醫者が無い、矢張娑婆へ行つて呼んで來るより仕方がない。それには一つ注意すべき事がある。それは其醫者の後方に跟いてゐる幽靈の一番少ない者を選んで、其者をつれて來い」。「それは全體どう云ふ譯です」と部下が訊ねると「凡そ醫者に跟いてゐる幽靈は何れも皆其醫者の為めに死んだ者だから幽靈の少ない者は、屹度良い醫者に相違ない」と閻魔王が言ふた。部下は閻魔王の命を奉じ、大急ぎで娑婆へ醫者を呼びに出發した。四五日も續け様に醫者を探して見たが、皆幾百と云ふ幽靈の跟いている者ばかりだつたが、或る日折よくたつた一人の幽靈しか跟いてゐない醫者に出會はせたので、直ぐに其醫者を連れて閻魔王の面前へ案内した。閻魔王はたつた一人の幽靈しか跟いてゐないのを見て、心の中で此醫者は技術に精しいから、屹度治して呉れるに違いないと思つて、嬉しさうに「先生は娑婆に於て、これ迄幾人お治しなさいましたか」と訊くと「お賞めに預つて恐縮ですが、私は醫術を學んでから今までに、たつた一枚しか處方を書いたことがありません」と醫者が答へた。閻魔王は笑ひ乍ら「道理で貴方の後には一人の幽靈しか跟いてゐない。」

『笑林広記』卷3 術業部・42頁「冥王訪名医」

冥王遣鬼卒訪阳间名医，命之曰：“门前无冤鬼者即是。”鬼卒领旨，来到阳世，每过医门，冤鬼毕集。最后至一家，见门首独鬼彷徨，曰：“此可以当名医矣。”问之，乃昨日新竖药牌者。

『笑府』卷4 方術部・73頁「冥王訪名医」

冥王遣冥卒訪阳间名医，命之曰：“门前无冤鬼者即是。”每过医门，冤鬼毕集。最后至一家，见门前独鬼彷徨，曰：“此可当名医矣。”问之，乃昨日新竖药牌者。

第七〇 偷酒

有一個先生好喝酒、家裏雇了一個地下人、誰知道這地下人愛偷酒、有一天先生要出去、留這地下人看館、告訴他說、牆上掛着火腿、院子裏養活着肥雞、你小心着看、屋裏有兩瓶、一瓶是白砒霜、一瓶是紅砒霜、千萬別動、若是喝了胃腸崩裂、一定要死、再三再四的囑咐就走了、趕到先生出了門了、地下人殺雞煮腿、拿兩瓶紅白酒慢々の喝着、喝了個酩酊、趕先生回來推門一看、地下人躺在地下、酒氣薰人、雞腿等等都沒了、很有氣、把地下人踢醒、再三責備、地下人哭着說、先生走後、小的在館、小心看守、忽然來了一個貓、把火腿給叨了去了、又來了一條狗、把雞追到街坊、小的着急、忿不欲生、因想着先生所囑的紅白兩瓶、一喝就死、小的先把白砒霜喝完了、總不見效、再把紅砒霜用完了、還是沒能身亡、現在頭暈腦悶、也不死也不活、躺在這裡直掙命呢。

第七〇 酒を竊む

酒好きの先生が一人の下男を雇入れた。所が以外にも此下男は酒を盗み飲みする癖がある。或る日先生が外出するので、下男に留守番を命じて言ふには「壁にはハムが吊してあるし、庭には雞が飼つてあるから、よく氣を付けて呉れ、座敷に白砒素と赤砒素と入つて居る瓶が二本あるから、動かしてはならんぞ、若し飲むやうな事でもあると、胃腸が破裂して死んでしまうぞ」と呉々も吩咐けて出て行つた。先生が門を出るや否や、下男は雞を殺してハムを調理し、赤白二本の酒瓶を取り出して、徐ろに飲み始めたが、スツカリ酩酊してしまつた。先生が歸つて來て家へ入ると、下男は下に倒れて酒氣粉々たる有様。雞やハム等も丸で無くなつて居る。先生非常に腹を立てて、下男を蹴り起し、再三その罪を責めると、下男は泣き泣き言ふには「先生がお出かけになつてから、私は注意して番をして居りますと、突然一疋の猫がハムを銜へて逃げて行きました。そこへ又狗がやつて來て雞を追かけて近所へ行きました。私は氣が氣でないから、死なうと先生からお話のあつた赤白の二瓶は飲むと直ぐ死ぬと云ふ事ですから、私は先づ白砒素の方を飲んで仕舞ひましたが、薩張効見がないので、今度は赤砒素を飲んでしまひましたが、矢張り死ぬ事が出來ません、私は今眩暈して苦悶し、死ぬには死ねず、此處に倒れて頻りに腕いて居ります」。

『程・広記』239～240頁「養百齡」

一先生好饮酒。馆童爱偷酒，偷的先生不敢用人。自谓必要用一不会吃酒者，方不偷酒；然更要一不认得酒者，乃真不吃，始不偷也。一日，友人荐一仆至。以黄酒问之，仆以陈绍对。先生曰：“连酒之别名都知，岂只会饮。”遂遣之。又荐一仆至。问酒如初，仆以花雕对。先生曰：“连酒佳品竟知，断非不饮之人。”又遣之。后又荐一仆，以黄酒示之，不识；以烧酒示之，亦不识。先生大喜，以为不吃酒无疑矣，遂用之。一日，先生

将出门，留此仆看馆。嘱之曰：“墙挂火腿，院养肥鸡，小心看守。屋内有两瓶，一瓶白砒，一瓶红砒，万万不可动。若吃了肠胃崩裂，一定身亡。”叮嘱再三而去。先生走后，仆杀鸡煮腿，将两瓶红白烧酒，次第饮完，不觉大醉。先生回来，推门一看，见仆人躺卧在地，酒气熏人，又见鸡、腿皆无。大怒，将仆人踢醒，再三究诘。仆人哭诉曰：“主人走后，小的在馆小心看守。忽来一猫，将火腿叼去；又来一犬，将鸡遂至邻家。小的情急，忿不欲生。因思主人所嘱，红白二砒，颇可致命。小的先将白砒吃尽，不见动静；又将红砒用完，未能身亡。现在头晕脑闷，不死不活，躺在这里挣命呢。”

第七一 半魯

有俩把弟兄最愛打哈哈、把兄寫了一封信、請把弟吃酒、寫的是某日某時半魯侯叙、把弟看請帖不懂得、到了定約的日子找把兄去了、看見桌子上只有一盤魚、並沒有別的菜、把弟說、還有別的菜沒有、把兄說、帖上寫明白的半魯侯叙、魚是魯字的一半兒不是、我找着請帖預備席面、你還要吃甚麼呢、把弟就不願意的樣子走了、到了第二天把弟又請把兄、也寫的是半魯侯叙、把兄趕赴這個約會兒、只見院子裏設擺着桌子和椅子、桌子上一個東西也沒有、讓把兄坐下之後、只見日頭當空曬得慌、把兄說、今天您賞我盛說、因何酒菜全都沒有、就是半魯的魚我也是願意吃、把弟說、你昨天用的是上半魯、我今天用的是下半魯、上半魯是魚、下半魯是日、請您自己好好兒曬曬暖兒、也就如同吃飽了。

第七一 半魯

滑稽好きの兄弟分があつて、兄貴の方が手紙を書いて、舍弟を招待する事になつた。その招待状には某日何時に『半魯』で招待したいとあつたが、舍弟には其意味が頓とわからない。約束の日が來たので、舍弟は兄貴を訪問すると、テーブルの上には只一皿の魚があるきりで、他に料理は何も無い、舍弟は「モツト御馳走はないのか」と言ふと「招待状にはハツキリと『半魯』で招待申上げると書いてある。魚は魯の字の半分じゃないか、俺は招待状通りに御馳走を準備したのだ、お前モツト何か欲しいのかい」と兄貴が答へたので、舍弟はプンプンして歸つてしまつた。翌日になると、今度は舍弟が兄貴を招待した。招待状には矢張『半魯』で招待申上げたいとある。臆て兄貴が其席に臨むと、庭前に椅子とテーブルが列べてあるだけで、卓上には物一つ無い。兄貴を通して席に着くと、徒らに太陽がカンカンと照り着けてあるばかり、兄貴が「今日は招待を受けたが、なぜ酒も肴も無いのか。せめて『半魯』の魚だけは俺も御馳走になりたい」と言ふと、舍弟が言ふには「兄貴が昨日使つたのは魯の字の上の半分だが、俺が今日用ゐたのは下の半分だ、魯の字の上半は魚だが、下半は日の字となる。兄貴、どうか充分に日光浴をして行つて呉れ、之が即ち御馳走だ。」

『程・広記』234頁「半魯」

把弟兄善诙谐。把兄具帖请把弟吃酒，上写某日某时半鲁候叙。把弟看帖，不解所谓。至日赴约，桌上只有鱼一盘，至终席别无他菜。把弟曰：“不识尚有别味否？”把兄曰：“帖上写明半鲁候叙。鱼者，鲁之半也。照帖治席，夫复何求。”把弟怫然而去。翌日，把弟请把兄，亦写半鲁候叙。把兄赴约，只见院中设摆桌椅，桌上毫无一物。让坐后但见赤日当空，晒不可当。把兄谓把弟曰：“今日拜领厚赐，因何酒菜俱无？即半鲁之鱼，亦我所欲也”把弟曰：“你昨日用的是上半鲁，我今日用的是下半鲁。上半鲁，鱼也，下半鲁，日也。吾兄自好晒晒日头罢。”

第七三 喜奉承

富戸最喜歡人奉承、然而相士的老手是決不肯奉承人、有一天喜歡奉承的人、恰巧遇見一個不奉承人的相士、叫家裏的人叫那個相士來相、相士登堂、見富戸很傲慢的高坐、相士相了半天說、貴相清奇、並不是凡品、耳朵長腦袋小、眼睛大沒有神、紅線盤睛、唇不包齒、好像一個、往下不敢說了、富戸說、到底像個甚麼、相士說、好像一個兔子、富戸有了氣了、叫手下把相士網上、圈在空房、叫他活活餓死、手下人就把相士網上送到空房、家裏的人在傍邊兒勸他說、你這人好不在行、我們老爺最喜歡的是奉承、你若奉承幾句話、謝禮必定不少給、相士說、求二爺帶我去再相一相、家人來在主人面前回稟說、剛纔相士怕老爺的虎威、一時張皇、相錯了、怎麼不再叫他相一相、富戸說、把他放了、帶來再相、家人把相士放了、帶到主人面前、相士看了又看、相了又相、端詳良久說、二爺、求你老爺、把我再捆起來罷、他還是一個兔子。

第七三 崇められ度い

金持と云ふ者は人に崇められるのが大好きだが、骨相の大家は決して人に阿諛しない。或る日崇められたがる人が偶々阿諛の嫌ひな人相見に出逢つたので、家の者に其人相見を呼び入れさせて、自分の人相を見て貰ふ事になった。人相見は座敷に通ると、金持は頗る鷹揚に構へて、上座に坐して居る、人相見は暫らく人相を見てから言ふには「貴方の人相は珍無類だ、決して平凡ではない、耳は長く、頭は小さい、眼は大きい、がドロンとして赤筋がある、唇の下から齒がむき出て居るから丁度よく似てる、其先は言ひますまい」。金持は「一體何に似て居るのか」。人相見「兎によく似て居る」聽いて金持は腹を立てて、人相見を下男に縛らせて、明き部屋に押込めて了つた。下男は人相見の側へ来て「貴方は商賣氣がありませんネ、家の主人は崇められるのが大好きなのです、貴方が一寸諛へば謝禮は屹度澤山呉れませう」と忠告すると、人相見は、「それでは君、俺を連れて行つて呉れ給へ、モ一度鑑定して見やう」。下男は主人の前に来て申上げるには「先刻人相見は旦那の威光に恐れて、慌てて鑑定し誤りましたそうですから、モ一度呼んで来て觀相させては如何ですか」と言ふと金持が「それでは

赦してやれ、お前連れて来て、モ一度觀相させろ」と言ふ。下男は人相見の繩を解いて、主人の前に連れて来た。人相見はつくづく人相を見て、穴のあく程熟視して居たが「君旦那に願つて俺を又縛つて呉れ、奴は矢張り兎だ」。

『程・広記』312頁「喜奉承」

富贵人最喜人奉承，而善相者绝不肯奉承人。一日，喜奉承之人恰遇一不奉承人之相士，令家人唤其来相。相士登堂，見富贵者巍巍高坐，慢不为礼。相士相了许久，说：“贵相清奇，绝非凡品。耳长头小，眼大无神，紅线盘睛，唇开齿露，好像一个……往下不敢說了。”富贵者说：“到底像个什么？”相士說：“好像一个兔子。”富贵者大怒，命左右：“将相士与我绑了，押在空房，将他活活饿死。”手下人将相士捆送空房，家人在旁劝曰：“你这人好不在行。我们老爷最喜的是奉承，你若奉承几句，谢礼定然从丰。”相士曰：“、求二爷帶我上去，再相一相。”家人来主人面前稟曰：“刚才相士怕老爷的虎威，一时张惶相错了。何不再叫他相一相？”富贵人说：“把他放了，帶來再相。”家人把相士放了，帶至主人面前。相士看了又看，相了又相，端详良久说：“二爷，求你老爷仍然把我绑起来罢。他还是一个兔子。”

矢野藤助編『日支對譯支那童話集』

第一二 鮫人之淚

(本文)

從前中國有一士人在海邊閒行，見有一個妖怪一般的動物，爬上岸來。士人見了，拔劍(古時的讀書人有佩劍的)待要斬去。誰知那怪物並不驚慌，也不抵抗，只是很柔順的拿兩隻眼睛望住那士人。士人見了這個樣子，便把劍收住問道「你是個甚麼東西。」怪物答道「我叫做鮫人。因為得罪海龍王，給他趕上岸來的。我到了岸上，你不殺我，也要死的。」士人聽說，不禁動了惻憐的心，於是把鮫人帶到家裏，放在一個小池內。日日買些魚餵養他。

那鮫人住在士人家裏，一連有好幾個月，相安無事。後來，那士人想和一個很美麗的女子結婚，但是那女子的父母要求他明珠一萬顆，才肯把女兒嫁他。士人家裏原來沒有錢，恐怕把他的房子，田地，家具統統變賣了，也備不了這一萬顆明珠呢。所以那士人日夜憂思，也不吃也不喝，躺在床上，一心待死，連那個鮫人也不去瞧了。鮫人見士人一連數日不去瞧他，不知為着甚麼，於是爬出池子，一直爬到士人臥房裏。士人聽見綽々の聲音，翻身一看，見是鮫人於是對鮫人道「鮫人呀，我們快要丟開手了，我是就要死的了。」鮫人聽說，不禁的一陣傷心，嗚々咽咽的哭起來，呀々真奇怪，那些眼淚，都變成珍珠，一粒粒的落在地上。士人見了，連忙爬起身，一粒粒的拾起來，又喜歡，又奇怪，大聲叫道，「鮫人呀，你可救了我了。」後來他見珍珠還不足數，於是叫鮫人再哭。鮫人

說「我不能要哭就哭，現在我見你好了，叫我怎樣哭呢。」士人把爲難的事告訴鮫人。鮫人聽說，想了一會，對士人道，「這樣罷，把我帶到海邊，我見了舊日居處的地方，說不定要傷心哭起來啦。」

士人駕了一輛車，把鮫人載到海邊。鮫人見了海，想起得罪被逐的事，果然大哭起來。那些眼淚，滴在車子內，盡變成珍珠，差不多有一萬多顆。

鮫人正在哭得起勁的時候，忽聽得海裏叫道，「鮫人，不要哭了。回來罷。大王赦了你了。」於是鮫人和士人告別，一個載着珍珠回去求婚，一個回到海底安身去了。

(參照)

從前中國有一士人在海邊閒行，見有一個妖怪般的動物，爬上岸來。士人見了，拔劍(古時的讀書人有佩劍的)待要斬去。誰知那怪物並不驚慌，也不抵抗，只是很柔順的拿兩隻眼睛望住那士人。士人見了這個樣子，便把劍收住問道：『你是個甚麼東西？』怪物答道：『我叫做鮫人。因為得罪海龍王，給他趕上岸來的。我到了岸上，你不殺我，也要死的！』士人聽說，不禁動了惻憐的心，於是把鮫人帶到家裏，放在一個小池內，日日買些魚餵養他。

那鮫人住在士人家裏，一連有好幾個月，相安無事。後來，那士人想和一個很美麗的女子結婚，但是那女子的父母要求他明珠一萬顆，才肯把女兒嫁他。士人家裏，原非有錢，恐怕把他的房子，田地，家具統統變賣了，也備不了這一萬顆明珠呢。所以那士人日夜憂思，不吃也不喝，躺在床上，一心待死，連那個鮫人也不去瞧了。

鮫人見士人一連數日不去瞧他，不知為着甚麼，於是爬出池子，一直爬到士人臥室內。士人聽見索索的聲音，翻身一看，見是鮫人於是對鮫人道：『鮫人呀，我們快要丟開手了，我是就要死的了！』

鮫人聽說，不禁的一陣傷心，嗚嗚咽咽的哭起來。呀呀！真奇怪！那些眼淚，都變成珍珠，一粒粒的落在地上。

士人見了，連忙爬起身，一粒粒的拾起來。又喜歡，又奇怪，大聲叫道：『鮫人呀，你可救了我了！』後來他見珍珠還不足數，於是叫鮫人再哭。

鮫人說：『我不能要哭就哭。現在我見你好了，叫我怎樣哭呢？』

士人把爲難的事告訴鮫人。鮫人聽說，想了一會，對士人道：『這樣罷：請把我帶到海邊，我見了舊日居處的地方，說不定要傷心哭起來啦。』

士人駕了一輛車，把鮫人載到海邊。鮫人見了海，想起得罪被逐的事，果然大哭起來。那些眼淚，滴在車子內，盡變成珍珠，差不多有一萬多顆。

鮫人正在哭得起勁的時候，忽聽得海裏叫道：『鮫人！不要哭了。回來罷。大王赦了你了。』

於是鮫人和士人告別，一一一個載着珍珠回去求婚，一個回到海底安身去了。

(『兒童世界叢刊 童話第三集』中華民國 15 年初版、兒童世界社選輯、商務印書館)

(相違点)

①般的(『兒童世界叢刊』)→一般的、②餵養→餵養、③原非有錢→原來沒有錢、④憂思→憂思也、⑤臥室內→臥房裏、⑥索索→綽々

本資料の刊行は中華民國 15 年は昭和元年であり、矢野が本資料を参考にすることは不可能である。だが、本文の異同を比較した結果から、本資料刊行以前に同種の資料を矢野が参考にした可能性は高いと思われる。

第一五 打冰山 (一)

(本文)

有一年夏天，天氣晴了好久，沒有一點兒雨，因此田裏乾燥，種的東西，一齊枯死。有許多農人在村長家裏商量救旱的法子。議了好久，總沒辦法。內中有一個性情很急，力氣極大的農人，名叫李覺悟大怒道「我們爲着不下雨，不知道吃了多少苦，這天也太惡了，我若身體高一點兒，或是生了翼膀，一定要和天廝打。」衆人道「我們不如到龍王廟去求雨，倘若有効，我們情願演戲謝神，就一齊上龍王廟去，禱告求雨。」衆人以爲這樣誠心，一定能够下雨了。那知仍舊紅日當空，一點兒浮雲都沒有。過了一天，李覺悟走到村長家裏召集衆人，大聲說道「龍王如此無禮，我一定要去打掉他、不讓他住在這裏。」衆人道「永久不下雨，他也要受累的，別說這樣無禮的話。」覺悟道「這是龍王無禮，不是我無禮。」衆人道「你可有別的下雨法子麼。」覺悟低頭想了一會說道「不必懇求龍王，我另外有下雨的法子。」衆人道「你一定可以下雨麼。」覺悟道「那是自然的，限我三日，各自回家。」李覺悟一面走，一面想「我既然在衆人面前，擔保下雨，除了打龍王，沒有別的法子。」正在亂想的時候，忽然聽得一陣脚步聲，對面現出一個長大的漢子，開口說道「李覺悟，你說的話一點兒不錯，懇求龍王，那裏會得下雨真要下雨，不能不想別的法子。總而言之，他們的眼光望不到遠處，所以在那裡瞎鬧。」覺悟道「你有甚麼法子麼。」大漢道「有是有的，他們胆小力弱，所以我不肯說出來，你胆大力強，大約可以做到。」覺悟道「差不多的事情，大概可以做得到，不知究竟怎樣做法。」大漢就從袖子裏取出一個望遠鏡來，交給李覺悟道「你且看看遠處。」覺悟在望遠鏡裏向遠處一探，看見一座大山，山上白雲環繞，仔細攷察，纔曉得是一座雪山，山上蓋着水晶宮殿。覺悟問道「這是甚麼地方。」大漢指着山道「這是水旱交界的一座冰山，因爲有了這山，所以雨不能過來。」覺悟道「照這樣說來，只要把這山打壞，便能立刻下雨。」大漢道「是的，是的，你依我做去罷」說罷，大漢忽然不見。

這時候李覺悟勇氣百倍，想道「打壞了這山就會下雨，我一定去打壞他」，便連忙回家，預備停當，向母親道「孩兒要往冰山取雨」一面吩咐女兒好好服事，說着動身去了。

(參照)

有一年夏天，天氣晴了好久，沒有一點兒雨，因此田裏乾燥，種的東西，一齊枯死。有許多農人在村長家裏商量救旱的方法，議了好久，總沒辦法。內中有一個性情很急，力氣極大的農人，名叫李覺悟大怒道：「我們爲着不下雨，不知道吃了多少苦，這天也太惡咧！我若身體高一點，或是生了翼膀，一定要和天廝打」。衆人道：「我們不如到龍王廟去求雨，倘若有効，我們情願演戲謝神」，就一齊上龍王廟去，禱告求雨。衆人以爲這樣誠心，一定能够下雨了，那知仍舊紅日當空，浮雲都沒有一點。過了一天，李覺悟走到村長家裏召集衆人，大聲說道：「龍王如此無禮，我一定要去打掉他不讓他住在這裏！衆人道：「永久不下雨，他也要受累的，別說這樣無禮的話」。覺悟道：「這是龍王無禮！不是我無禮！」衆人道：「你可有別的下雨法麼？」覺悟低頭想了一會，說道：「不必懇求龍王，我另外有下雨的法子」。衆人道：「你一定可以下雨麼？」覺悟道：「自然咧！限我三日，各自回家」。李覺悟一頭走一頭想，我既然在衆人面前，擔保下雨，除了打龍王，沒有別的法子。正在亂想的時候，忽聽得一陣腳步聲，對面現出一個長大的漢子，開口說道：「李覺悟，你說的話一點不錯！懇求龍王，那裏會得下雨，真要下雨，不能不想別的法子；總之他們的眼光望不到遠處，所以在那裡瞎鬧」。覺悟道：「你有什麼法子麼？」大漢道：「有是有的；他們胆小力弱，所以我不肯說出來，你胆大力強，大約可以做到」。覺悟道：「差不多的事情，或者可以做得到；不知究竟怎樣做法？」大漢就從袖子裏取出一個望遠鏡來，交給李覺悟道：「你且看看遠處」。覺悟在望遠鏡裏向遠處一探，看見一座大山，山上白雲環繞，仔細攷察，纔曉得是一座雪山，山上蓋着水晶宮殿。覺悟問道：「這是什麼地方？」大漢指着山道：「這是水旱交界的一座冰山；因爲有了這山，所以雨不能過來」。覺悟道：「照這樣說來，只要把這山打壞，便能立刻下雨」！大漢道：「是的，你依我做去罷」！說罷，大漢忽然不見。這時候李覺悟勇氣百倍，想道：「打壞了這山，就會下雨，我一定去打壞他」。便急急回家，預備定當，向母親道：「孩兒要往冰山取雨」。一面吩咐女兒好好服事，說罷動身去了。

(『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第二冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①方法(『童話大觀』)→法子、②太惡咧→太惡了、③一點→一點兒、④或者→或是、⑤浮雲都沒有一點→一點兒浮雲都沒有、⑥下雨法→下雨法子、⑦自然咧→那是自然的、⑧一頭走，一頭想→一面走，一面想、⑨忽→忽然、⑩總之→總而言之、⑪什麼→甚麼、⑫或者→大概、⑬急急→連忙、⑭預備定當→預備停當、⑮說罷→說着

第一六 打冰山 (二)

(本文)

那冰山在望遠鏡裏看看，好像就在目前，其實走起來，是很遠很遠。足足走了兩日兩夜，到第三天早起纔到冰山脚下。原來這山沒有草木，像玻璃造成的一般，爬上去就要滑下來的。覺悟揀了有凹凸的地方，用盡生平力氣，爬到山頂。無如日光濃烈，眼睛不能睜開，只得用兩隻手遮住日光，定神一看，水晶宮殿，已在眼前，殿中央站着一個白衣老人，手裏拿着一枝水晶柺杖。覺悟驚問道「你是甚麼人。」那老人慢慢的走下殿來，說道「我要先問你，到這裏做甚麼。」覺悟道「我來取雨的。」老人道「怎樣取法。」覺悟道「都是冰山亘在中間，不得下雨，我特來打壞他。」老人笑道「這樣胡鬧，怎麼會下雨。」覺悟道「下雨不下雨，都是你管的麼。」老人點頭道「是，是。」覺悟便求他道「快點下雨罷，我們合村的人，都要乾死了。」老人搖頭道「這是不行，我的上面還有天神，他不允許，決不會下雨的。」覺悟道「不管他天神地神，決沒有不顧人類的困苦，強不下雨的道理，你到多講，快點兒下雨罷。」老人道「不要胡鬧，時候一到，自然會下雨的。」覺悟這時候耐不下來了，捏住老人的手，連連催促。老人還是搖頭不肯。覺悟怒罵道「你不肯下，我一定要你下」說時握著右拳，向他頭上拚命打下，不料用力過猛，把他的頭竟從頸上打了下來，滾到山下去了。

這時山上就起了隆隆的聲音，岩間噴出水來，天上也下起雨來。覺悟大喜道「好了好了，還是第三日的下午，期限却沒有過。」急要回去，那知谷裏水已漲滿，像大湖一般，並且漸漸上來，連山都要淹沒了。忽聽見轟的一聲，冰山沒了，覺悟也被水冲到別處去了。只得向天禱告道「够了够了，雨不要下了。」雨那裏肯聽他。一剎時落到世界上都成洪水，把房屋田地，盡行淹沒。因想著老母和女兒，不知道怎樣，盡力游泳，趕回家去，幸虧水勢與他所行的方向相同，不多時已到自己村裏。連忙抱住一株樹，累累休息，趁便看看自己的屋只存屋頂露出，拚命游去，他的母親和女兒蹲在屋頂，大喊救命覺悟急叫道「母親，孩兒來了」就抱了兩人向山上游去。不意一個大浪忽然打來，把他母親打去，覺悟想去追趕，已是不及，又一個大浪打來，幾乎把他父女二人，一齊打去，大喊救命，也沒有人來救助。後來好不容易到了小山上，因為失去母親，不覺大哭，暗想這是我性急暴亂，不肯和平，打去老人腦袋，受天罰的緣故。決計改過，決不再像從前暴亂。他心裏這樣一想，天上就雲消日出，洪水便漸漸退去了。

(參照)

那冰山在望遠鏡裏看看，好像就在目前，其實走起來，是很遠很遠。足足走了兩日兩夜，到第三天早起纔到冰山脚下。原來這山沒有草木，像玻璃造成的一般，爬上去就要滑下來的。覺悟揀了有凹凸的地方，用盡生平力氣，爬到山頂，無如日光濃烈，眼睛不能睜開，只得用兩隻手遮住日光，定神一看，水晶宮殿，已在眼前，殿中央站着一個白衣老人，手裏拿着一枝水晶柺杖。覺悟驚問道：「你是什麼人」！那老人慢慢地走下殿來，說道：「我要先問你，到這裏做什麼」？覺悟道：「我來取雨的」。老人道：「怎樣取法」？覺

悟道：「都是冰山亘在中間，不得下雨，我特來打壞他」·老人笑道：「這樣胡鬧，怎會下雨」·覺悟道：「下雨不下雨，都是你管的麼」？老人點頭道：「是，是」·覺悟便求他道：「快點下雨罷！我們合村的人，都要乾死了」！老人搖頭道：「這是不行，我的上面，還有天神，他不允許，決不會下雨的」·覺悟道：「不管他天神地神，決沒有不顧人類的困苦，強不下雨的道理，你別多講，快點下雨罷」！老人道：「不要胡鬧，時候一到，自然會下雨的」·覺悟這時候耐不下來了，捏住老人的手，連連催促·老人還是搖頭不肯·覺悟怒罵道：「你不肯下，我一定要你下」，說時握著右拳，向他頭上拚命打下，不料用力過猛，把他的頭竟從頸上打了下來，滾到山下去了·這時山上就起了隆隆的聲音，岩間噴出水來！天上也下起雨來！覺悟大喜道：「好了好了！還是第三日的下午，期限却沒有過」！急要回去，那知谷裏水已漲滿，像大湖一般，并且漸漸上來，連山都要淹沒了·忽聽見轟的一聲，冰山沒了，覺悟也被水冲到別處去了！只得向天禱告道：「够了够了！雨不要下了」！雨那裏肯聽他，一剎時落到世界上都成洪水，把房屋田地，盡行淹沒·因想著老母和女兒，不知道怎樣，盡力游泳，趕回家去，幸虧水勢與他所行的方向相同，不多時已到自己村裏·連忙抱住一株樹，累累休息，趁便看看自己的屋只有屋頂露出，拚命游去，他的母親和女兒蹲在屋頂，大喊救命！覺悟急叫道：「母親！孩兒來了」，就抱了兩人向山上游去·不意一個大浪忽然打來，把他母親打去，覺悟想去追趕，已是不及，又一個大浪打來，幾乎把他父女二人，一齊打去；大喊救命，也沒有人來救助·後來好不容易到了小山上，因為失去母親，不覺大哭，暗想這是我性急暴亂，不肯和平，打去老人腦袋，受天罰的緣故；決計改過！決不再像從前暴亂！他心裏這樣一想，天上就雲消日出，洪水便漸漸退去了。

（『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第二冊，中華民國十年，上海世界書局）

（相違点）

①著（『童話大觀』）→着、②什麼→甚麼、③慢慢地→慢慢的、④怎→怎麼、⑤你別多講，快點→你別多講，快點兒、⑥并且→並且、⑦已到→已到、⑧只有→只存

第二一 瓦盆告狀

（本文）

從前包公做定州太守的時候，有一個揚州人，名字叫李浩，家私很大，在定州做買賣。有一天在距城十餘里地方，飲酒醉歸，不能行走，躺在路上。到了黃昏時候，剛巧被賊人丁千丁萬碰着，眼見得李浩身邊銀洋很多，就商定了一條毒計，趁着醉把浩李扛到僻靜地方，奪了他的財物和黃金百兩。恐怕他醒後，到官司裡告狀，就把他打死，屍首扛到窰裏燒化，夜來取了灰骨。和了泥土，燒成瓦盆以為可以安然沒事了。

這個盆被定州人王老買去，要想做盛尿的器具。有一天夜裡王老忽要小便，只聽得盆

子叫屈道「我是揚州客人、你怎麼在我身上小便。」王老嚇了一跳，點起燈來問盆子道「你果然冤枉，請明明白白告訴我，我能替你伸冤。」盆子就把他被殺的事情訴說了一回，並且說願意去見包公，親自供狀，若能如願，必然得報。王老聽罷，嚇得呆去。

到了第二天早起，王老就把這盆子帶到府衙去告狀。包公升座審問，王老把夜來瓦盆所說的話說了一遍。包公就喚手下把瓦盆拿進來，問他冤情，瓦盆一句話都答不出來。包公怒道「老頭兒把這等事來戲弄官府，快快趕他出去。」王老沒法子，帶了瓦盆回來，很是怨恨等到夜來，瓦盆依舊大喊道「老子休悶，今天我到衙門裡沒有一點兒遮蓋，所以冤枉說不出來，請你把衣服借給我，再去見包太守，保你成功了。」王老駭然，不得已把瓦盆用衣裳蓋了，再去見包太守，說知情由包公勉強再問，盆子果然大訴冤請，和王老說的一般無二。包公大駭，便差公牌喚了千丁萬去了。

停了一會，二人押到包公細問謀害李浩的事情。二人不肯招認。包公叫押入獄裡，叫差人喚二人的妻子來問起初也不肯承招，包公道「你們丈夫把李浩謀死，奪了百兩黃金，燒骨做灰，和泥作盆，黃金是你們收藏的，丈夫已經明白招認了，你們還敢抵賴，喝聲與我打。」他的妻子心裡害怕，就老實招出來了，並說黃金埋在牆裡。包公就差人監了他的妻子，取了黃金，帶來作證。然後取出丁千丁萬問道「你的妻子已取出黃金百兩，分明是你們謀死，還不招認麼。」二人面面相覷，只得招認包公定了他們的罪，把他們斬首。給王老賞銀二十兩。叫親屬領了瓦盆和原有銀兩，回去安葬。

(參照)

從前包公做定州太守的時候·有一個揚州人，名叫李浩，家私很大，在定州做買賣，有一天在距城十餘里地方，飲酒醉歸，不能行走，躺在路上·到了黃昏時候，剛巧被賊人丁千丁萬碰著，眼見得李浩身邊銀洋很多，就商定了一條毒計，趁着醉把浩李扛到僻靜地方，奪了他的財物和黃金百兩·恐怕他醒後，到官司裡告狀，就把他打死，屍首扛到窰裡燒化，夜來取了灰骨，和了泥土，燒成瓦盆·以為可以安然沒事了·

這個盆被定州人王老買去，要想做盛尿的器具；有一天夜裡王老忽要小便，只聽得盆子叫屈道：「我是揚州客人！你怎麼在我身上小便」！王老嚇了一跳，點起燈來，問盆子道：「你…你果然冤枉，請明…明明白白告訴我，我能夠替你伸…伸冤」·盆子就把他被殺的事情，訴說了一回，並且說願意去見包公，親自供狀，若能如願，必然得報·王老聽罷，嚇得呆去·

到了次日早晨，王老就把這盆子帶到府衙去告狀·包公升座審問，王老把夜來瓦盆所說的話說了一遍·包公就喚手下把瓦盆拿進來，問他冤情，瓦盆一句話都答不出來·包公怒道：「老頭兒把這等事來戲弄官府，快快趕他出去」·王老沒法，帶了瓦盆回來，很是怨恨·等到夜來，瓦盆依舊大喊道：「老子休悶，今天我到衙門裡沒有一點兒遮蓋，所以冤枉說不出來，請你把衣服借給我，再去見包太守，保你成功了」·王老駭然，不得已把瓦盆用衣裳蓋了，再去見包太守，說知情由·包公勉強再問，盆子果然大訴冤請，和

王老說的一般無二・包公大駭，便差公牌喚丁千丁萬去了・

停了一會，二人押到・包公細問謀害李浩的事情・二人不肯招認・包公叫押入獄裡，叫差人喚二人的妻子來問，起初也不肯承招，包公道：「你們丈夫把李浩謀死，奪了百兩黃金，燒骨做灰，和泥作盆，黃金是你們收藏的，丈夫已經明白招認了，你們還敢抵賴，喝聲與我打」・他的妻子心裡害怕，就老實招了出來，並說黃金埋在牆裡・包公就差人監了他的妻子，取了黃金，帶來作證・然後取出丁千丁萬問道：「你的妻子已取出黃金百兩，分明是你們謀死，還不招認麼」・二人面面相覷，只得招認・包公定了他們的罪，把他們斬首・給王老賞銀二十兩・教親屬領了瓦盆和原有銀兩，回去安葬・

(『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第二冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①著(『童話大觀』)→着、②李浩→浩李、③裡→裏、④你…你果然→你果然、⑤替你伸…伸冤→替你伸冤、⑥到了次日早晨→到了第二天早起、⑦没法→没法子、⑧就老實招了出來→就老實招出來了、⑨教→叫

本テキストは中国の故事成語の物語や、民間伝承、笑話、包公逸話などを収め、幅広い内容となっている。筆者は『児童世界』や各種童話集を中心に調査したのだが、収録話が多彩なため全体としてその出典が判明しなかったものが多い。「馬頭娘」や「田螺精」は中国の「民間故事」であり、童話誌よりも中国民俗関係誌が出典元の可能性が指摘できよう。

『童話大観』に収められた童話との比較は数話であるが、そこから矢野藤助のテキスト編纂方針が推測できる。それは、「原文(=出典)に追加情報として情景描写や登場人物の心理描写を加え、より学習者が物語を理解しやすくなるように配慮している」ということである。この点は後述の米田祐太郎とは大きく異なるテキストの編集態度である。

なお、『童話大観』との相違点は「著」→「着」、儿化、「道」→「説」、詳細な描写などが代表的な違いである。

米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謠研究』

一 商神和樵夫

(本文)

話說一個樵夫，有一天手裏拿着一把斧頭，在河邊斫樹。不知怎麼不留心，那斧頭脫手落到河裏去了。

這樵夫很是爲難，要想拾沒有法子，只好在河邊哭，哭了一會，剛巧管這河的主人走

來。問他哭什麼。樵夫就把斧頭脫落的情形告訴他。

商神聽了這話，便攢到水裏拾得一把金的斧頭，問樵夫道『這把斧頭是爾的麼』

樵夫說不是。商神又攢到水裏，拾得一把銀的斧頭。問樵夫道『這把斧頭是爾的』

樵夫又說不是。商神再攢到水裏，把樵夫所失的原斧頭拾來，問樵夫道『這把斧頭是爾的麼』

樵夫很快活的說『是的』

商神以爲這人老實，便把金的和銀的二把斧頭給他。

樵夫回來，告訴他的朋友，得了金斧和銀斧頭的原因。這位朋友也想得這些寶貝，便到這河邊斫樹，故意把斧頭脫落河裏。也坐在河邊哭。

商神也走到他面前，問他哭甚麼，這位朋友就把丟了斧頭的話告訴他。商神急忙攢到水裏，拾得一把金的斧頭。問這朋友道『這把斧頭是爾的麼』

這位朋友說『是，這是我的』

商神便罵道『謊話，不特不給爾，就是爾的原斧頭也不給爾了』

(參照)

話說一個樵夫，有一天手裏拿了一把斧頭，在河邊斫樹；不知怎麼不留心，那斧頭脫手落到河裏去了。

這樵夫很是爲難，要想沒有法子，只好在河邊哭，哭了一會，剛巧管這河的主人走來。問他哭什麼？樵夫就把斧頭脫落的情形告訴他。

商神聽了這話，便攢到水裏拾得一把金的斧頭，問樵夫道：「這把斧頭是你的麼」？

樵夫說不是。商神又攢到水裏，拾得一把銀的斧頭；問樵夫道：「這把斧頭是你的麼」？樵夫又說不是。商神再攢到水裏，把樵夫所失的原斧頭拾來，問樵夫道：「這把斧頭是你的麼」？

樵夫很快活的說：「是的」。

商神以爲這人老實，便把金的和銀的二把斧頭給他。

樵夫回來，告訴他的朋友，得了金斧頭和銀斧頭的原因。這位朋友也想得這些寶貝，便到這河邊斫樹，故意把斧頭脫落河裏；也坐在河邊哭。

商神也走到他面前，問他哭什麼？這位朋友就把丟了斧頭的話告訴他。商神急忙攢到水裏，拾得一把金的斧頭；問這朋友道：「這把斧頭是你的麼」？

這位朋友說：「是！這是我的」。

商神便罵道：「謊話！不特不給你，就是你的原斧頭也不給你了」。

小朋友！做人老實好呢？還是欺騙好？看這段故事，就明白他的結果了。

(『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①拿了(『童話大觀』)→拿着、②要想洽沒有法子→要想拾沒有法子、③『這把斧頭是你的麼』→『這把斧頭爾的麼』、④這位朋友也→這位朋也、⑤小朋友！做人老實好呢？還是欺騙好？看這段故事，就明白他的結果了→なし

十一 長面孔

(本文)

新樓地方有位姓陳單名一個方，他有三個兒子。大的叫做利己，第二叫做害人，第三叫做大勇。不幸陳方今年死了，便把他葬在王大山脚，這山脚是一片幽靜淒涼的地方。

這地方的風俗，每逢長輩死了，子孫必要在他的塚前，編起茅屋住著，是陪伴死人的意思。這回陳死了，第一次的看守，自然利己先去的，到了夜裡，利己也便去看守了。

到了半夜的時候，忽然一個面孔很長的闖進來，說道『要吃你』

嚇得利己不知所措，也不得不想個好法子回答。他停一會，纔答道『你要吃我麼，明夜來給你吃』

長面孔暗想，明夜便明夜，無論如何，總是我吃的。便一溜煙跑去了。

到了第二夜，輪到害人看守。那長面孔記得昨天夜裏，利己應許他今夜吃的，他又到那茅屋去了。對害人說道『今夜總可准我吃了』

害人抬頭一看，看見這樣長的面孔，心裏十分害怕。但是到了這時，沒有法子逃避，也便隨口答他道『明夜給你吃』

長面孔暗想，明夜就明夜，無論如何，總是我吃的，便捨了害人去了。

第三夜是大勇看守，已經暗々地聽見二位哥哥怎麼受危險，他預備了一條稻草的繩子，並且帶着一把刀，去看守了。

大勇到了茅屋他便躲在裏門後，等那長面孔來。差不多半夜的光景，長面孔以為今夜有人可吃，飛也似的跑到茅屋來。

剛要走進門口，大勇使用稻草繩子一揮，那長面孔的頭頸，已被束住。大勇又拿刀來，做出要刺的樣子。長面孔跪下道『放我去罷』

大勇道『如果要放爾，必須有東西交換纔好』長面孔把身上摸了一模，沒有什麼東西，只有一個小鼓，便把小鼓給他。

大勇道『這個東西要他什麼用』

長面孔道『你真不識貨的朋友，要什麼，只要把這小鼓敲了幾下，便有了』

大勇聽了這句話，便放他去了。

大勇拿了回去，試驗試驗，果然應那長面孔的話。他二位哥哥見了，十分羨慕。便照大勇的法子，兩個同去看守了。

長面孔失了這小鼓，非常痛恨，總想報仇，也便預備一把剪刀，當做抵擋的器具，就在這天夜裏去報仇了。利己和害人看見長面孔來。使用繩子一揮，被那長面孔的剪刀一

剪，這繩子就沒有用了。利己和害人竟被他吃下肚裡去了。

(參照)

新樓地方有位姓陳單名一個方，他有三個兒子；大的叫做利己，第二叫做害人，第三叫做大勇。不幸陳方今年死了，便把他葬在王大山脚，這山脚是一片幽靜淒涼的地方。

這地方的風俗，每逢長輩死了，子孫必要在他的坟前，編起茅屋住著，是陪伴死人的意思；這回陳方死了，第一次的看守，自然利己先去的。到了夜裏，利己也便去看守了。

到了半夜的時候，忽然一個面孔很長的闖進來，說道：「要吃你」。

嚇得利己不知所措，也不得不想個好法子回答他。停一會，才答道：「你要吃我麼？明夜來給你吃」！

長面孔暗想，明夜便明夜，無論如何，總是我吃的。便一溜煙跑去了。

到了第二夜，輪到害人看守；那長面孔記得昨天夜裏，利己應許他今夜吃的，他又到那茅屋去了。對害人說道：「今夜總可准我吃了」。

害人抬頭一看，看見這樣長的面孔，心裏十分害怕；但是到了這時，沒有法子逃避，也便隨口答他道：「明夜給你吃」。

長面孔暗想，明夜就明夜，無論如何，總是我吃的，便捨了害人去了。

第三夜是大勇看守，已經暗暗地聽見二位哥哥怎麼受危險，他便預備了一條稻草的繩子，並且帶着一把刀，去看守了。

大勇到了茅屋裏他，他便躲在門後，等那長面孔來。差不多半夜的光景，長面孔以為今夜有人可吃，飛也似的跑到茅屋來。

剛要走進門口，大勇使用稻草繩子一揮，那長面孔的頭頸，已被束住。大勇又拿刀來，做出要刺的樣子。長面孔跪下道：「放我！放我去罷」！

大勇道：「如果要放你，必須有東西交換才好」！長面孔把身上摸了一摸，沒有什麼東西，只有一個小鼓，便把小鼓給他。

大勇道：「這個東西要他什麼用」？

長面孔道：「你真不識貨的朋友！要什麼，只要把這小鼓敲了幾下，便有了」。

大勇聽了這句話，便放他去了。

大勇拿了回去，試驗試驗，果然應那長面孔的話。他二位哥哥見了，十分羨慕；便照大勇的法子，兩個同去看守了。

長面孔失了這小鼓，非常痛恨，總想報仇，也便預備一把剪刀，當做抵擋的器具，就在這天夜裏去報仇了。利己和害人看見長面孔來，使用繩子一揮，被那長面孔的剪刀一剪，這繩子就沒有用了。利己和害人竟被他吃下肚子裡去了。

(『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①他的坟前(『童話大觀』)→他的坂前、②陳方死了→陳死了、③夜裏→夜裡、④才答道→纔答道、⑤他便預備了→他預備了、⑥大勇到了茅屋裏他便躲在門後→大勇到了茅屋他便躲在裏門後、⑦長孔面→長面孔、⑧『放我、放我去罷』→『放我去罷』、⑨你→爾、⑩身上摸了一摸→身上模了一模、⑪小鼓→小鼓、⑫肚子裡去了→肚裡去了

十五 崑崙山和泰山的談話

(本文)

崑崙山裏頭，有一座山峰，他的高不知道幾千幾萬丈的。他以爲登了這樣高位，總沒有別的可以比得上他，便揚揚得意，看輕那一切。有一天，崑崙峰忽然想到『我聽說中國地方有一座山，名叫泰山，這山要算五岳裏頭頂高的。不知道和我比較起來怎樣』

便特地到中國來拜見泰山。

不知泰山原來不高，只有橫嶺綿亘幾千里地方罷了。崑崙峰一見了泰山，便大笑特笑，笑個不休。剛巧這一天嶺下的百姓，大家備了許多祭品，向那岱嶺求雨。

崑崙峰見了這種景象，很奇怪的說道『我比你高了幾倍，爲什麼百姓要祭爾，不來祭我呢』岱嶺答道『這有什麼希奇，因爲我平常和百姓親近。所以有了水災旱災，都要向我祈禱。你位置太高，那百姓看見就害怕起來還有人來祭爾麼』

(參照)

崑崙山裏頭，有一座山峰，他的高不知道幾千幾萬丈的・他以爲登了這樣高位，總沒有別的可以比得上他，便揚揚得意，看輕那一切・有一天，崑崙峰忽然想到：「我聽說中國地方有一座山，名叫泰山，這山要算五岳裏頭頂高的・不知道和我比較起來怎樣」？

便特地到中國來拜見泰山・

不知泰山原來不高，只有橫嶺綿亘幾千里地方罷了・崑崙峰一見了泰山，便大笑特笑，笑個不休・剛巧這一天嶺下的百姓，大家備了許多祭品，向那岱嶺求雨・

崑崙峰見了這種景象，很奇怪的說道：「我比你高了幾倍，爲什麼百姓要祭你，不來祭我呢」？岱嶺答道：「這有什麼希奇？因爲我平常和百姓親近・所以有了水災旱災，都要向我祈禱・你位置太高，那百姓看見就害怕起來，還有人來祭你麼」？

(『繪圖童話大觀第一種 兒童物語』第一冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①你→爾

十九 陰陽鐘 (「驢頭太子」)

(本文)

話說唐朝中宗時代。皇太后武嬰，廢中宗皇帝，爲廬陵王，安置在房州地方，自稱爲則天皇帝，改唐爲周。唐朝功臣之後，興起義師，以圖光復，四方干戈大起。那時，江南六安山有箇鐵板道人，坐在水晶洞口。忽有一陣奇風吹到耳邊。鐵板道人把絲瓜似的頭一伸，綠荳似的眼一睜，將他蒲扇似的手，抓住青菓似的尾一嗅。教聲呵呵。原來，唐室功臣薛仁貴之孫，薛剛在外招兵點將，造起反來，要想中興唐朝天下，現已殺入潼關，去帝京長安不遠。武則天命將將死，進兵兵敗，正在掛榜招賢。我何不打發徒弟驪頭太子前去，使他母子相逢，保全周朝的天下，也好顯我神通。

便起身入洞，叫道，賢弟何在。驪頭太子方渴睡未醒，好夢正酣。猛聽他師父叫喊，睡眼朦朧忙上前道『師父呼喚，有何吩咐』鐵板道人道『賢弟，你可知你身從何來』

驪頭太子道『弟子從小跟隨師父，至今多年，都忘了來歷』鐵板道人道『母親，便是當今武則天皇帝，十六年前，你母產你，見你奇形怪目，故將你拋入金龍池裏。那時，我雲游路過，救你出來。目今薛剛反周，已入潼關，你母在長安，掛榜招賢。我今打發你到長安，揭了皇榜，與你母相逢。

我煉有黑煞石飛刀，在此，付你帶去。倘與薛剛將士交戰，勝得他便罷。若不能勝，發出這箇寶貝，即能取勝，定要立得大功，方許回來。你今速速下山去罷』

驪頭太子道『弟子不知道路，如何到得長安』

鐵板道人道『這也不難，待傳你一箇土遁法，來去如飛，千里可以立至』

說聲看看，道人口中念念有辭，把頭一縮，尾尖一掉，條忽不知去向。驪頭太子，正是詫異，聽得唵的一聲，見他師父，已從空中落下，立在自己前面。當即學了口訣，搖身一試，不覺半身埋入泥中，進也不能，出也不得。忙叫，師父救命。道人捏箇手訣，救他出土，埋怨他道『你這樣性急，險些送了性命』

乃將脫身呪，一併傳授與他。驪頭太子拜別師父，駕起土遁，到了長安。果見皇榜張掛道旁，趕步上前揭取。校尉一見，這驪頭人身的揭榜，大驚喝道『你是人是鬼，敢揭皇榜』驪頭太子道『你們快去，奏明皇上說，十六年前，入金龍池的驪頭太子，蒙仙人救上名山，今日，特來朝見母后，以退薛剛之兵』校尉不敢違拗，火速入宮，將此言一々奏明。則天聞言，駕疑不定，暗想他既蒙仙人救去，或有大法破得薛剛也未可知。即下旨召入。驪頭太子，來至金塔，府伏朝拜。則天看了他的面孔，與驪頭無二，好生難看，叫聲『皇兒起來，當初產你下來，因你不像人形，拋入池中。那知仙人，救你至今十六年，你已長得這般威武。不知仙人是誰。你有多大本領』

太子一一回奏明白。則天聽了大喜，帶驪頭太子退朝入宮，吩咐賜宴。一面下旨，封驪頭太子爲兵馬大元帥，領兵二十萬前去霸林川，勦滅薛剛。驪頭太子領旨。次日召了兵馬，出離長安，至霸林川屯紮。

唐營中，早有偵探報，說武后差中宮太子，前來決戰。薛剛遣將官吳奇，馬贊領兵到周營抵敵。驪頭太子即拿起鐵棍大步出營。吳奇，馬贊一見唬了一跳。休說，眼內不會

見，就是耳邊也不會聞有這樣的人，分明是箇鬼怪。喝道『何來獸頭人身的賊將快快投降』

驃頭太子怒道『你這人面獸心的逆賊，看我鐵棍』說著掄棍打來。吳奇馬贊各舉兵器來，迎戰有五六合。驃頭太子料定敵不住了。便回馬而走。吳奇馬贊，隨後追趕。驃頭太子伸手，把腰邊金筒蓋一揭，叫一聲『寶貝出來』吱吱兩聲響，兩口黑刀飛起半空中，如兩條黑線一般，落將下來。吳奇逃過右邊，左肩已中了一刀。馬贊返身就走，背後也受著一刀。兩個 勉強逃回。

驃頭太子回身追趕，看看二人逃得遠了，把手望空一招收了神刀，直到唐營討戰。吳奇馬贊到營中，下了馬不能言語，仰後便倒人事不省。薛剛忙問從兵，二將在陣上如何情形。軍士遂把交戰被傷情由說了一遍。薛剛驚訝不已，看二人傷處無血，只流黑水，皮肉皆變黑色。急取鎗藥敷治亦無効驗。軍士又報驃頭太子在外罵戰。薛剛大怒，即命他自己兒子薛葵，出營會戰。薛葵年方十四，手提兩柄神鎚，有萬夫不當之勇，曾經百戰總是馬到切成。當下得令出營一見了驃頭太子，大笑道『怪物怪物，你莫非是驃馬，轉世來投人身，如今看你非驃非馬又不像人形，快快投降，我封你做三不像大將軍』驃頭太子聞言，氣得兩隻怪眼突出，鼻內如風响一般，掄起鐵棍便打。薛葵把斗大鎚打著鐵棍。那驃頭太子震得兩臂皆麻，只見兩耳直豎。驃口張開，足有一尺潤，叫聲『呵呀』便走。薛葵緊緊追去。驃頭太子又把金筒蓋一揭叫聲『寶貝出來』吱吱一聲響，只見一口黑刀，起在半空。薛葵擡頭一看見是一條黑線。笑道『這樣東西，二將也受不起，真真沒用。把鎚往上一架，見那刀反上空中。驃頭太子，即便再向箇中發出一刀，只見兩刀前後落下，一刀被薛葵用鎚撥了，一刀正中左臂見骨而止。薛葵大叫一聲，回馬便走。驃頭太子把手一招收了寶刀。因手中震裂，收兵回營。薛葵回至軍中，亦倒翻在地，人事不知。左臂流出黑水。衆將看了箇箇傷心，任你百般醫治總是無効。軍師徐美祖也是束手無策，便對薛剛道『主師且休著急。嘗聞古聖王求禱上天，必有報應，何不虔誠求禱』薛剛依言，沐浴更衣，設立香案，祝告皇天道『薛剛輔廬陵王，起義中興有日，求上天垂念，救全三人性命，降下異人，破彼飛刀，捉拿驃頭太子以報此仇』拜祝畢了，納悶在營。

且說，西南方烏洞山梨山老母，坐在翠雲頭上，忽然心血來潮，駕起雲頭一望，見東方有人禱祝。心中早已明白，便命仙童去，召他徒弟天摩女到來，吩咐速速下去，救助薛剛。天摩女拜別老母，駕起雲頭。不多時來到霸林川，落在唐軍營前。看見兩個守門軍士東張西望，便上前道『聞說貴營三位大將，病在垂危。我卻有藥能醫，可去報來』

軍士入營報道『外面有個道婆聲言，能醫三位將軍』薛剛聞報，知他來歷必異，不敢怠慢。付分大開營門，率衆出迎。天摩女通了名號，入營見禮坐下，吩咐把三位病將擡來，取出三粒金丹，各各分開，將半粒抹入刀傷之處，水化半粒，灌入口中。只見傷口處接連流了許多黑水。三人立刻甦醒，大教驃頭，你好利害呀，一齊起來。看見上邊坐著一箇老道姑，正待要問他。忽見薛剛在那道婆面前跪了叩謝，並求道『天女既賜宏恩，

乞並將驃頭太子除了』天摩女道『我正特來破這驃精，主將起來，趕速預備兵馬』次日，天摩女帶兵來到周營。驃頭太子看見，大喝道『老婆娘，留下名來』天摩女道『梨山老母徒弟天摩女便是我』

驃頭太子那裏曉得天摩女是何等人，竟不在他眼裏大吼一聲舉棍打來。天摩女掄兩口寶劍對敵，戰有五六合。驃頭太子回身便走。天摩女追上前去。驃頭太子，又把他寶貝取出打來。天摩女把兩口寶劍，往來抵擋，只見白光閃爍，全身如粉球一般一點縫也不見。驃頭太子的黑刀只是飛上飛下，卻似兩條黑絲，纏繞一堆白雪，一刀也斬不進。天摩女湊個空兒，把手捏了個訣，往上一指，兩刀落地，再也不見飛上。驃頭太子大驚，拿住金筒，往上一散，七口黑刀，盡行飛入空中。天摩女念念有詞，把手一招一連幾個大霹靂，把七口刀一起打在地上。驃頭太子驚慌失措，把手亂招再也不能收回，氣得回身，舉棍便打。天摩女笑道『你的刀不能傷我，我教你看我的寶貝』遂在手內，拔出一劍，望空一拋。驃頭太子叫聲不好，急借土遁走了。天摩女道『今日他命運未絕』忙收了寶貝，拍馬回營。

那驃頭太子逃到營中。適大元師武三思，奉武則天的命，領兵十萬，前來接應，聞得九口飛刀被破，大驚失色，遂叫太子道『天摩女是梨山老母弟子，能呼風喚雨，騰空駕霧，驅神役鬼，移山倒海之法。須設法除了此人，其餘不足懼了』驃頭太子道『我想天摩女法術甚高，非我師父不能破他，如今將大寨交與千歲看守，待我就去，請我師父前來破他』武三思允諾。驃頭太子急用土遁，奔到六安山，牧住遁光，入洞拜見鐵板道人說『弟子奉命到了長安，相會皇母，封我爲大元師，統兵以拒薛剛。先前放出寶貝，傷了三個大將，不料來了一個甚麼梨山老母的徒弟，甚劍天摩女的一個老婆娘好生利害，我九口飛刀，盡被他破了，反放出寶劍來殺我，幸逃得性命。因此前來拜請師父下山去拿他』鐵板道人聞言大怒，即同驃頭太子出洞，用了遁光，來至霸林川落下。周軍飛報入營，說太子請師父來了。武三思大喜，忙出迎接入帳，禮畢大排筵席款待。

次日一草，鐵板道人仗劍出營，至唐軍營前，大喝守營軍士『去叫天摩女出來會會貧道』軍士報入營中。天摩女聞言，對薛剛道『必是驃頭太子去請他師父烏龜精來了，待我出去拿他』遂仗劍上馬沖出營來，擡頭一看，果見一個潤背駝子前後多穿盔甲。天摩女把手一招道『你去順助逆，天理不容，何苦自來討死，可惜你多年修練，反而誤你性命』鐵板道人聽了大怒，將蒲扇似的手，望天摩女一指，喝聲『老婆娘，你知我的本來面目，我就放下臉皮，與你拚個死活』把劍劈面砍來。天摩女掄起雙劍相迎戰不數合天摩女念動網妖咒，網住鐵板道人。鐵板道人罵道『休念這咒，看我神通』遂在地下，縮頭縮腳，骨落一滾。網縛處處，解脫現出原形，一道黑光護住，伸頸開口，把那煉成毒氣吹來。天摩女叫聲不好，在馬背縱雲飛上半空，往下看時，坐馬被這口毒氣吹得他成飛灰，只剩一堆馬骨在地。鐵板道人擡頭一口毒氣吹上雲霄，天摩女早已踏轉雲頭走了。

鐵板道人道『老婆娘走了也罷』收回了原形，再抵唐營討戰。天摩女至唐營前，落下雲來。薛剛迎入問了明白。天摩女道『如今他必又來討戰，且掛出免戰牌待我，回山去，

借寶貝來降他』鐵板道人前來，看見免戰牌，便回周營而來。但望見周營，人作鳥舞，馬若龍翔，旗槍起處，早是武三思與驃頭太子前來迎接，入營擺酒賀功。鐵板道人說『天摩女今已被我趕走，唐營各將多不足懼，但恐這婆娘還來復仇』武三思道『本師當盡出大兵，乘他不備，前去偷營，定要殺得他七零八落』鐵板道人道『元帥主意雖是，但何必小題大做，待我今夜略施小術，叫他一營上下箇箇頭痛眼突，不消三日都做瞎子，那是整兵前去，不張一弓，不折一矢，可以垂手而定』到了黃昏。鐵板道人披髮仗劍，步出營門，到唐軍營前靜地，念動真言咒語，傳到土地神，在身邊，拿出陰陽兩旗，令土地暗入唐營一插營東，一插營西。到了次日。唐營，上自薛剛衆將，下至步馬小卒，個個頭如刀劈，眼似針鑽到了竿頭日出，不見有人走動。有那力弱的勉強起身，只覺頭暈眼朦，東扶西倒卻如磕頭虫似的。薛剛不得起身，臥在胡牀。忽聞萬人吶喊，四面楚歌，看見周兵一擁而入。薛剛跳下牀來，只覺立足不住。周兵前來，擁倒網縛得不能動彈。不多時，周兵將唐營小將斬首，大將網住，車載馬馱回營。其餘唐兵欲投降者，鐵板道人給他金丹服了便好。有的那裏肯降，只是伏地喊苦。武三思忙忙收兵，要把薛剛衆將，解上長安獻功。

且說，天摩女到了西南烏洞山，拜見梨山老母。老母見了早知來意便道『這烏龜精十分利害，要收住他，必先去鸞鳳山，見了九天玄女娘娘，借他八卦陰陽鐘方可』天摩女拜別師父見得九天玄女，求了陰陽鐘。正在詳溯前情，卻聽玄女說道『薛剛有難在身，你快去施救』天摩女帶了陰陽鐘，來到霸林川，知是陰陽旗作法。按下雲頭，念動真言，本地土神到來。天摩女喝道『好天膽的毛神，薛剛起義，唐王中興，天與人歸，你何敢如此助逆，快快把陰陽旗拔去』土地神那裏敢違，急去拔了二旗。那唐營創夷之餘，只剩八百餘人，正在僵臥待死，忽覺眼明，頭輕如釋千鈞重負，大家起身商議，執兵器出營，追趕周兵。周兵得意回營，料定唐營無，人能來對敵。正是興高采烈一心要去得上賞享安樂。那知追兵到來，陣法大亂，只得反戈轉轍前來迎戰。唐兵遠望前途人馬徧野，正有些膽寒。急見祥雲前降，一看是個道婆，多喜得天摩女重來，大家羅拜求救。天摩女道『衆軍士，須聽我號令，快去救援，遲便無及』那邊周營列陣整隊，卻轉出鐵板道人仗劍而來，正在舞手蹈足，作弄妖法。忽見劈面來了一個道婆，一手揮動七星劍，一手托著一個鉢頭似的黑東西，鐵板道人道『老婆娘，你既知我神通，何必前來送命』天摩女不去分說，揮劍便砍。鐵板道人亦掄相劍相迎，戰了三四合。天摩女念動網妖咒。鐵板道人覺着身子緊縮，好不自在，撲身在地，一滾現出原形張口正要吹氣。天摩女早把八卦陰陽鐘一拋，只見照著烏龜身上撲下蓋於平地，安如覆盂，綫縫都無。驃頭太子見師父失利，拍馬下來，卻被天摩女一面砍翻死在馬下。周軍兵衆皆無鬪志，武三思見事不利，帶兵便走。天摩女一面命將追趕周兵，並速速奪回薛剛薛葵衆將。

自己管住陰陽鐘，令軍士取幾擔烈炭，將鐘四面架烈火焚燒。龜精忍耐不住，用力向上掀鐘覺得重得泰山，一絲不動。忙借土遁，那知此寶所在地土竟變如鋼鐵，再也遁不走。逼得龜精在內哀求。天摩女也不理會，不住的加炭煽火。竟把一個鐵板烏龜，煨成一堆灰

燼，天摩女收了陰陽鐘路雲而去。薛剛等被救回營，重整旗鼓，殺入長安，唐室中興。
當時舉國之人，皆誦梨山老母師徒及陰陽鐘之功不置云。

(参照)

牛頭馬面，你們在看戲的時候，想必看見過了，只有驢頭人身，你們恐怕沒有知道・
這個驢頭人，究竟是誰？是武則天的兒子，因為生下來的時候，奇形怪狀，所以把他
拋入金龍池裏，那時剛有個鐵板道人，雲游路過，救了他去，教他技術，忽忽已經十六
年了・

恰巧唐朝功臣薛仁貴之孫子薛剛反周，幫助廬陵王中興唐室，已經殺入潼關，武則天
難以抵敵，掛榜招賢・鐵板道人心想，我何不打發驢頭太子前去，使他母子相會，保全
周朝天下，就叫他出來，同他講明來歷，賜他九口飛刀，授他土遁的法子，叫他到長安
去揭榜・驢頭太子拜別了師父，駕起土遁，到長安，揭皇榜・校尉進宮通報，則天就下
旨召入，驢頭太子在金階府伏朝拜，則天叫聲皇兒起來，入宮賜宴，封他做兵馬大元帥，
領兵二十萬到霸林川勦滅薛剛・唐營中得報，薛剛差吳奇馬贊領兵抵擋，二人見他這般
形狀，倒嚇了一跳，各舉兵器相迎，戰到五六合，驢頭太子回馬便走，吳贊馬奇追來，
驢頭太子放出兩口飛刀，打中二將，二將逃下，驢頭太子收了神刀，直到唐營討戰・薛
剛見二將不省人事，問明軍士，知道被傷情由，看看傷處無血，只流黑水，敷藥無効，
又報周將罵戰，薛剛大怒，命兒子薛葵會戰，薛葵一鎚打去，打得驢頭太子手上虎口盡
裂，叫聲阿哨撥馬逃走，薛葵追來，驢頭太子放出飛刀，薛葵用鎚擋住，再發一刀，正
中左臂，薛葵回馬便跑，驢頭太子也收刀而回・薛剛見兒子戰敗，急得束手無策，。軍
師徐美祖獻計道：「主師何不虔禱上天，以求解救」・果然感動了梨山老母，便他徒弟天
摩女，到霸林川來，見了薛剛，醫治三將，立刻全愈・

次日天摩女帶兵，來周營和驢頭太子廝打，驢頭太子見道姑利害，放出九口飛刀來傷
他性命，却被摩天女念咒捏訣，把飛刀盡行打落地上，剛要用寶劍結果他，驢頭太子早
借土遁逃走了，也是他命不該絕・天摩女收了寶貝，拍馬回營・

依這樣看來，非驢非馬非人的這種三不像本領，到了緊要關頭，終要失敗的・

(『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊，中華民國十年，上海世界書局)

このように、この話は米田のテキスト本文と『繪圖童話大觀』の文章が大きくこと
なる。これまで見てきたように、米田のテキスト編纂方法は出典を大事にし、文章の
書きかえなどを行わないものであった。従って、この話のみを大きく書き換えたとは
考えにくく、『童話大觀』以外のものを参照したとも推測ができる。すでに述べたよう
に、中華書局『小小説』シリーズ内にも「陰陽鐘」が存在する。筆者は未見だが、米
田は中華書局『小小説』シリーズ「陰陽鐘」を参照した可能性が高いことをここで指
摘しておきたい。

矢野藤助撰『華語童話讀本』

(1) 事例

第一課 到底如何（イソップの「乳しぼりの娘と桶」）

第二課 破缸救人（司馬光の「司馬光砸缸」）

第三課 埋蛇免害（「孫叔敖殺兩頭蛇」の故事か？）

第五課 干尼德黑爾斯坦（不明）

第六課 大饅頭和大包子

（本文）

姓張的小孩子，路上碰着一個姓李的小個子，拉著他道「哦，我昨天吃着一個很大的饅頭，再沒有這樣大了，用了一百斤麵，八十斤肉，二十斤菜，做成一個的，煮好了用八張方桌子，纔可放下，二十幾個人，四面圍着吃，吃了一天一夜，還吃不掉一半，正吃得高興，忽然不見了兩個人，揭開饅頭一看，兩個人鑽在裡面去吃餡了，你說大不大。」

姓李的小孩子說「我昨天吃着大肉包子，那纔算得大了。幾十個人吃，直吃到三天三夜，還沒有吃着餡，再向裡面吃，吃着一塊木牌，牌上寫着還離開餡子三十里路，你說大不大。」姓張的小孩子問道「你的大包子，用甚麼東西煮的。」姓李的小孩子答道「就是用你煮大饅頭的頭號的鍋子煮的。」

（參照）

姓張的小孩子，路上碰著一個姓李的小孩子，拉著他道：「哦！我昨天吃著一個很大的饅頭，再沒有這樣大了・用了一百斤麵，八十斤肉，二十斤菜，做成一個的・煮好了用八張方桌子，才可放下・二十幾個人，四面圍着吃，吃了一天一夜，還吃不掉一半・正吃得高興，忽然不見了兩個人，揭開饅頭一看，兩個人鑽在裡面去吃餡了・你說大不大」？

姓李的小孩子說：「我昨天吃着大肉包子，那才算得大了・幾十個人吃，直吃到三天三夜，還沒有吃着餡；再向裡面吃，吃著一塊木牌・牌上寫著還離開餡子三十里路・你說大不大」？

姓張的小孩子問道：「你的大包子，用什麼東西煮的」？姓李的小孩子答道：「就是用你煮大饅頭的頭號的鍋子煮的」・

（『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第一冊，中華民國十年，上海世界書局）

（相違点）

①小孩子（『童話大觀』）→小個子、②才→纔、③著→着、④什麼→甚麼

第七課 舊馬掌（スペイン民話「サクランボウ」）

第九課 孟母（「孟母断機の戒め」）

第十課 獅與狐（イソップ「年を取ったライオンとキツネ」）

第十一課 鴉與狐（イソップ「カラスとキツネ」）

第十二課 輓耳翁（イソップ「ロバを売りに行く親子」）

（本文）

有個鄉下爺兒倆，同牽一隻驢子，到市鎮上去賣的。這個時候剛巧碰着四五個種地的，笑他說「哈哈，世界上也有這樣胡塗人麼，有了驢子不騎，情願自己走路，不是傻子是甚麼。」老頭兒聽了這話，自己想着，兒子年紀小，腿脚又軟，便叫兒子騎上，自己跟着驢子走。

到了個熱鬧地方，又有很多的人笑他說「這個兒子可真不孝，那裡有老人跑路少年騎驢子的道理啊。」他老子聽見這個話，就叫他兒子下來走，他自各兒騎上。到別處，又有兩三個婦女笑他說「這老頭兒可不疼他兒子，怎麼自各兒騎驢子，叫那兒子跟着走呢、爲甚麼不父子一同騎咧。」老頭兒想了半天，道理也不錯，便叫他兒子一塊兒騎上走。騎了不多時，又聽見人說「兩個人騎一隻驢子，那驢子載不動的。」他聽見這話，心裏很着急，就同他兒子都下來，跟着驢子後頭步攏兒。又聽見人都笑着說「這爺兒倆，放着驢子不騎，可跟着步攏兒。」他聽見這話，用了兩條繩子，把驢子的前脚網起來，又把後脚也網起來，再用一根竹槓，穿過繩子的中間，父子兩個抬去了。

可見世上最愛評論人的人，不必聽人的七言八語，只要自己評的得當就是了。

（參照）

從前有一個老人，和他的兒子同牽一隻驢子，到市鎮上去賣的・

這時剛巧碰着四五個農夫，笑他道：「哈哈！世界上也有這樣笨人麼？有了驢子不騎，情願自己走路，不是笨人是什麼」？老人聽了這話，便叫兒子騎上，自己跟着驢子走・

走了沒有一里路，又有三四個樵夫笑他道：「那里有老人跑路，少年騎驢子的道理」？老人便叫兒子下來，自己騎上・

又有二三個婦女笑他道：「這真不近人情呀！兒子年紀很輕，怎麼跟得上驢子呢」？為什麼不父子一同騎咧！老人想了半晌，道理也不錯，便叫兒子也騎上・

騎了不多時，又有兩個木匠笑他道：「兩個人騎一隻驢子，那驢子載不動的・何不父子倆同擡驢子呢」？

老人便同兒子下來，用了二條繩子，把驢子的前脚縛起來，又把後脚也縛起來；再用一根竹槓，穿過繩子的中間，父子兩個抬去了・

擡到一座橋，驢子用力一掙，那繩子竟被掙斷，驢子就跌倒河裡溺死了・這時老人悔

道：「我的耳朵軟！我的耳朵軟！」

（『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第一冊物語，中華民國十年，上海世界書局）、（イソップ「ろばを売りに行く親子」）

（相違点）

① 從前有一個老人，和他的兒子（『童話大觀』）→有個鄉下爺兒倆、②這時→這個時候、③農夫，笑他道→種地的，笑他說、④笨人→胡塗人、⑤笨人→傻子、⑥什麼→甚麼、⑦老人→老頭兒、⑧ない→自己想着，兒子年紀小，腿脚又軟、⑨走了沒有一里路→到了個熱鬧地方、⑩三四個樵夫笑他→很多的人笑他、⑪ない→這個兒子可真不孝、⑫里→裡、⑬ない→啊、⑭ない→他老子聽見這個話、⑮老人便叫→就叫他、⑯兒子下來→兒子下來走、⑰自己→他自各兒、⑱ない→到別處、⑲二→兩、⑳這真不近人情呀！兒子年紀很輕，怎麼跟得上驢子呢→這老頭兒可不疼他兒子，怎麼自各兒騎驢子，叫那兒子跟着走呢、21)半晌→半天、22)便叫兒子也騎上→便叫他兒子一塊兒騎上走、23)又有兩個木匠笑他道→又聽見人說、24)何不父子倆同擡驢子呢→ない、25)ない→他聽見這話，心裏很着急，就同他兒子都下來，跟着驢子後頭步攆兒。又聽見人都笑着說「這爺兒倆，放着驢子不騎，可跟着步攆兒。」他聽見這話、26)老人便同兒子下來→ない、27)縛→網、28)ない→又把後脚也網起來、29)擡到一座橋，驢子用力一掙，那繩子竟被掙斷，驢子就跌倒河裡溺死了・這時老人悔道：「我的耳朵軟！我的耳朵軟！」→ない、30)ない→可見世上最愛評論人的人，不必聽人的七言八語，只要自己評的得當就是了。

第十三課 老鼠會議（イソップ「ネズミの相談」）

第十四課 爭子（「ソロモンの知恵」）

第十五課 守財奴（不明）

第十六課 讓產（一）～第十八課 讓產（三）（不明）

第十九課 牛二拳頭（一）～第三十課 牛二拳頭（一二）（不明であるが、商務印書館、唐小圃による『家庭童話』シリーズ内にか話名を確認、ただし筆者未見。）

第三十二課 飛行鞋（二）

（本文）

他們向着燈光走去，果然到了一間茅屋的門下，一齊叫門。不大的工夫兒，走出一個女人，他是巨人的媳婦兒，見了五個孩子，又是喜歡，又是害怕。五個小孩子齊聲說「好媽媽，救救我們罷。」那女人聽了這話對他們說「好孩子們，這是甚麼地方，你們知道麼，留不得你們，我的丈夫巨人回來要吃你們的呀。」五個小孩都唬得亂抖，只有小王瓜兒說

「好媽媽，讓我們進來罷，你總可以想法子，倘若我們在外邊，一定要給野獸吃了。」

這女人很可憐他們，放他們進來，纔替他們換了衣服，早聽得蓬蓬的敲門的聲兒。女人慌了，對五個小孩子說「這是我……我丈夫回來了，怎……怎麼好呢，你們快藏起來，藏起來，藏在這床底下罷。」說着把五個小孩子推在床底下，便出去開門了。

巨人一進門，便說餓了。女人搬出一隻烤羊，安在桌子上了。巨人正要吃，忽然說「有孩子氣。」女人說「這是新殺的野獸氣。」巨人不信，立刻起身來，四下裡找，找到床底下，哈哈大笑，伸出一雙大手，把五箇小孩子拖了出來，對着女人說「你想欺騙我麼，若不是你的肉太老，我早已吃你了。」說着取了刀看着小孩子，想揀一個先殺來吃。

(參照)

他們向着燈光走去，果然到了一間茅屋的門下，一齊叫門·不多一刻，走出一箇女人，他是巨人的妻，見了五箇孩子，又是歡喜，又是害怕·五箇小孩齊聲說道：「好媽媽，救救我們罷！」那女人聽了這話對他們道：「好孩子們！這是什麼地方，你們知道麼？」留不得你們！我的丈夫巨人回來要吃你們的呀！五箇小孩都唬得亂抖，只有小王瓜兒說道：「好媽媽，讓我們進來罷！你總可以想箇法子，倘然我們在外邊，一定要給野獸吃了！」

這女人很可憐他們，放他們進來，纔替他們換了衣服，早聽得蓬蓬的敲門聲，女人慌了，對五箇小孩道：「這是我……我丈夫回來了，怎……怎麼好呢？你們快藏起來！藏起來！藏在這床底下罷！」說著把五箇小孩子推在床底下，便出去開門·

巨人一進門，便說餓了·女人搬出一隻烤羊，安在桌上，巨人正要吃了，忽然說：「有孩子氣」·女人說：「這是新殺的野獸氣」！巨人不信，立起身來，四下裡找，找到床下，哈哈大笑，伸出一雙大手，把五箇小孩子拖了出來，對女人說道：「你想騙我麼？不是你的肉太老，我早已吃你了」，說著取了刀看著小孩，想揀一箇先殺來吃·

(『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第三冊，中華民國十年，上海世界書局) か？

(相違点)

①不多一刻(『童話大觀』)→不大的工夫兒、②箇→個、③妻→媳婦兒、④歡喜→喜歡、⑤小孩→小孩子、⑥說道→說、⑦道→說、⑧什麼→甚麼、⑨想箇法子→想法子、⑩倘然→倘若、⑪才→纔、⑫聲→聲兒、⑬小孩道→小孩子說、⑭桌上→桌子上了、⑮吃了→吃、⑯立→立刻、⑰床→床底、⑱對→對着、⑲騙→欺騙、⑳ない→若、21)著→着

第三十三課 飛行鞋 (三)

(本文)

他的媳婦兒連忙止住他說「我們有烤羊烤豬沒有吃，早上殺的一隻牛，也沒有動過，這五箇小孩子過幾天再吃罷」巨人答應，只叫把他們關在樓上。巨人的媳婦兒帶他們到

樓上，教他們不要害怕，慢慢兒的總可想法子救出來的，又給了點兒吃的東西，自下去了。

小王瓜兒是最有心思的，他不肯睡覺，走到扶梯邊，聽樓下的動靜。先聽得巨人喝酒的聲音，後來便聽得打鼾的聲音。原來巨人喝醉睡著了。小王瓜兒很喜歡，心中想這時不走，更待何時，便走到四個哥哥睡着的床前，輕輕的把他們叫醒，商量好了，悄悄兒的走到樓下，見巨人靠在桌子上，睡得正濃，可是那桌子正擺在門口兒，不經過他是不能出去的。小王瓜兒向桌下一看，立刻得了一個妙法。他僵倒了身體，很小心的從桌子底下鑽了出去。四箇哥哥見了大喜，都學他的樣，一齊逃出了虎口，撒開脚步便跑，也不顧迷路，只是亂撞。

(參照)

他的妻連忙止住道：「我們有烤羊烤豬沒有吃，早上殺的一隻牛，也沒有動過，這五箇小孩過幾天再吃罷」·巨人聽了，只叫把他們關在樓上·巨人的妻帶他們到樓上·教他們不要害怕，慢慢兒總可想法救出來的，又給了些吃的東西，自下去了·

小王瓜兒是最有心思的，他不肯睡着，走到扶梯邊，聽樓下的動靜·先聽得巨人喝酒的聲音，後來便聽得打鼾的聲音·原來巨人喝醉睡著了·小王瓜兒很大喜，心想這時不走，更待何時·便走到四箇哥哥睡的床前，輕輕地把他們叫醒，商量好了，悄悄兒的走到樓下，見巨人靠在桌上，睡得正濃，可是那桌子正擺在門口，不經過他是不能出去的·小王瓜兒向桌下一看，立刻得了一個妙法·他僵倒了身體，很小心的從桌子底下鑽了出去·四箇哥哥見了大喜，都學他的樣，一齊逃出了虎口，撒開脚步便跑，也不顧迷路，只是亂撞·

(『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第三冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①妻(『童話大觀』)→媳婦兒、②道→說、③小孩→小孩子、④聽了→答應、⑤法→法子、⑥些→點兒、⑦睡着→睡覺、⑧樓→樓下、⑨大喜→很喜歡、⑩心→心中、⑪箇→個、⑫睡→睡着、⑬輕輕地→輕輕的、⑭悄悄走到→悄悄兒的走到、⑮桌上→桌子上、⑯門口→門口兒

第三十四課 飛行鞋 (四)

(本文)

這夜裏沒有月亮，他們借着星光，一直的走到天亮，纔認出一條路來，小王瓜兒認得，知道離家不遠了。

巨人一覺醒來，便想吃人，到樓上一看，不見了五箇孩子，真正氣煞了。立刻穿上飛

行鞋，出門找尋，這飛行鞋穿在腳上，一步有十里濶。巨人雖不曉得小孩子的去路，但是有了寶貝，多繞幾箇圈子，不怕撞不着他。繞了幾箇圈子，果然撞到了小王瓜兒去的那條路，但是他沒有看見他們，他們倒先看見他了，一時情急，只好到路旁一箇石洞裏，去躲一躲。巨人跑了好久，也覺得乏了，便在一塊山石上坐下，剛巧是五箇小孩子躲藏的那塊石頭。原來巨人坐下來，把身體一倒，立刻就睡着了，呼呼的鼾聲震得石頭隱隱的亂動。小王瓜兒叫四箇哥哥先走，自己却等了好久，約摸着四箇哥哥已經到家了，便也跑出石洞，悄悄的走到巨人身邊，輕輕的把巨人腳上的一雙飛行鞋，脫下來，連忙套在自己腳上。說也奇怪，那鞋能大能小，一到小王瓜兒腳上，就變小了。小王瓜兒很喜歡，拽開脚步便走。

這時候巨人剛巧醒來，一見小王瓜兒，又喜又怒，他不曉得飛行鞋已經失落，還當是穿在腳上，立起來便跨大步，啊（啞：口＋草冠＋約）的一聲，便跌到山澗裡去，頭撞成一箇大洞死了。

小王瓜兒到了自家門前，連忙脫下鞋，進門見了父母，四箇哥哥也剛纔走到，他的父母又喜又愁。小王瓜兒把前事說了一遍，再拍着那雙飛行鞋說「爺娘不要怕沒錢，我有這件寶貝，好替人家送信賺錢。」從此以後他們沒有凍餓的憂愁了。

（參照）

這夜裏沒有月亮，他們借著星光，一直的走到天亮，纔認出一條路來，小王瓜兒認得，知道離家不遠了。

巨人一覺醒來，便想吃人，到樓上一看，不見了五箇孩子，真正氣煞了。立刻穿上飛行鞋，出門找尋，這飛行鞋穿在腳上，一步有十里濶。巨人雖不曉得小孩的去路，但是有了寶貝，多繞幾箇圈子，不怕撞不着他。繞了幾箇圈子，果然撞到了小王瓜兒去的那條路，但是他沒有看見他們，他們倒先看見他了，一時情急，只好到路旁一箇石洞裏，去躲一躲。巨人跑了好久，也覺得乏了，便在一塊山石上坐下，剛巧是五箇小孩子躲藏的那塊石頭。原來巨人坐下來，把身體一倒，立刻就睡著了，呼呼的鼾聲，震得石頭隱隱的亂動。小王瓜兒叫四箇哥哥先走，自己却等了好久，約摸著四箇哥哥已經到家了，便也跑出石洞，悄悄地走到巨人身邊，輕輕的把巨人腳上的一雙飛行鞋，脫將下來，連忙套在自己腳上。說也奇怪，那鞋能大能小，一到小王瓜兒腳上，就變小了。小王瓜兒大喜，拽開脚步便走。

這時候巨人剛巧醒來，一見小王瓜兒，又喜又怒，他不曉得飛行鞋已經失落，還當是穿在腳上，立起來便跨大步，啊（啞：口＋草冠＋約）一聲，便跌到山澗裡去，頭撞成一箇大洞死了。

小王瓜兒到了自家門前，連忙脫下鞋子，進門見了父母，四箇哥哥也剛纔走到，他的父母又喜又愁。小王瓜兒把前事說了一遍。再拍著那雙飛行鞋道：「爺娘不要怕沒錢，我有這件寶貝，好替人家送信賺錢。」從此以後他們沒有凍餓的憂愁了。

(『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第三冊，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①借著(『童話大觀』)→借着、②一直走到→一直的走到、③小孩→小孩子、④睡著→睡着、⑤約摸著→約摸着、⑥悄悄地→悄悄的、⑦輕輕地→輕輕的、⑧脱將下→脱下、⑨大喜→很喜歡、⑩啊(啞：口+草冠+約)一聲→啊(啞：口+草冠+約)的一聲、⑪鞋子→鞋、⑫拍著→拍着、⑬道→說

第三十五課 黃金樹(一)～第四十七課 黃金樹(一三)(不明であるが、商務印書館、唐小圃による『家庭童話』シリーズ内にか話名を確認、ただし筆者未見。)

第四十八課 小八狗(一)～第四十九課 小八狗(二)(不明)

第五十課 兩個弟兄(一)～第五十一課 兩個弟兄(二)(不明)

第五十二課 牛郎(一)～第五十三課 牛郎(二)(「牛郎織女」)

第五十四課 盒仙(一)～第五十五課 盒仙(二)(不明)

第五十六課 孽龍(不明)

第五十七課 蛇人(一)～第五十八課 蛇人(二)(『聊齋志異』に存在)

第五十九課 寓言四則：一 五十步百步→(『孟子』)・二 杞憂→(『列子』)・三 矛盾→(『韓非子』)・四 塞翁失馬→(『淮南子』『聊齋志異』)

六十課 種梨(不明・中華書局『中華童話』第15種、に同一名の話を確認。筆者未見)

第六十一課 九曲明珠(一)～第六十三課 九曲明珠(三)(不明)

第六十四課 三字驢(「諸葛恪得驢」)

第六十五課 七步成詩(成語故事「七步成詩」)

第六十六課 草船借箭(上記『支那笑話新編』附録童話7)を参照)

第六十七課 花果山(一)

(本文)

東勝神州的海外，有一個傲來國，這國近邊的海裏，有一座大山，名叫花果山，山頂上有一塊仙石，高約三丈六尺五寸，從開闢以來，受天地日月的精華，得了靈性。有一天忽然迸裂，產出了一個石卵，見了風化做石猴，五官完備，四肢齊全，行走跳躍，吃果喝水，件件皆能，和猿鶴麋鹿做朋友，夜宿山崖，朝遊峰洞，真是別有樂趣。天氣炎熱的時候，他和羣猴避暑，在松陰底下玩耍，山溪裡洗澡。衆猴見溪水奔流，不知道究從那裏來的，就高聲喊道「那一個有本領，能夠鑽進去尋出源頭，我們拜他爲王。」連叫三回，忽然跳出一隻石猴大聲說「我進去。」就把身子一躍，跳入瀑布裏。睜眼一看，却沒有波浪，只有一座鐵板橋，上橋一望，好像人家住宅一般，看得很覺快樂。

石猴跳過牆來，只見正中有一塊石碑，碑上刻着花果山福地水簾洞洞天十字，看了更覺歡喜，連忙跳出，高叫說「好運氣，我怎麼能到這裡。」衆猴聽見，急來問說「裏邊到底怎麼好法，水有好多深。」石猴說「裏頭沒有水，只有一座鐵板橋，橋邊有一所天造地設的石屋，這水從橋底下沖出來，把門戶遮住，橋邊有花有木，石屋裡有石鍋石竈，石盃石盆石牀石凳，真是我們安身的好地方，我們都進去，省得受熱，豈不是很好麼。」

衆猴聽了全都喜歡，都說「請你做引導，帶我們進去。」說完了，石猴向裡面一跳，衆猴隨後都跳了進去，跳過橋頭，走到洞裏，一個個搶盆奪盃，佔竈爭床，搬來搬去，沒有一刻安靜，直到力倦神疲，方纔歇下。石猴坐定了，就對衆猴說「你們剛纔說能進得這地的、拜他爲王，現在我尋着洞天，叫你們安享快活，怎麼不拜我爲王呢。」衆猴聽罷，就拱手禮拜，叫聲千歲大王。石猴登了王位，把石字避去，就稱美猴王。

猴王登了王位，把所領的猿猴，做他的臣子，朝遊暮宿，享受天真，安安逸逸的過了二三百年。

有一天猴王和羣猴會宴，忽然想去學仙學佛，就對衆猴說明。衆猴鼓掌稱讚都說「善哉善哉，我們明天越嶺登山，廣求仙品，大設筵宴，送大王的行。」到了次日，衆猴果然去採仙桃，摘異果，割山藥，齊齊整整，擺開石凳石桌，排列仙酒仙肴，請美猴王上坐，一個個輪流奉酒，痛飲了一天。次晨美猴王早起，折了許多枯松，編成渡筏，取了一枝竹竿做篙，一個人登了筏，儘力撐開，向大海飄去，連日東南風很緊，把他送到西北岸去了。這是南瞻部洲地界。棄筏登岸，只見海邊上有人捕魚捉雁，就弄出把戲，變一隻活虎，形狀凶猛，嚇得他們丟籃棄網，四散奔逃，就把跑不動的拿住一個人，剝下他的衣裳，穿在自己身上，人的言語，人的禮貌，通通學會，走來走去，一心訪問仙佛道術，要尋長生不老的良方。

(參照)

東勝神州的海外，有一個傲來國，傲來國附近的海裏，有一座大山，名叫花果山，山頂上有一塊仙石：高約三丈六尺五寸，從開闢以來，受天地日月的精華，得了靈性，有一天忽然迸裂，產出了一個石卵，見了風化做石猴：五官完備，四肢齊全，行走跳躍，吃果喝水，件件皆能，和猿鶴麋鹿做朋友，夜宿山崖，朝遊峰洞，真是別有樂趣。天氣炎熱的時候，他和羣猴避暑，在松陰底下玩耍，山溪裡洗澡。衆猴見溪水奔流，不知道究從那裏來的，就高聲喊道：「那一個有本領，能夠鑽進去尋出源頭，我們拜他爲王」；連叫三回，忽地跳出一隻石猴厲聲道：「我進去」。把身一躍，跳入瀑布裏，睜眼一看，却沒有波浪，只有一座鐵板橋；上橋一望，好像人家住宅一般，看得很覺快樂。

跳過牆來，只見正中有一塊石碑，碑上刻著花果山福地水簾洞洞天十字，看了更覺歡喜。連忙跳出，高叫道：「好運氣！好運氣！我怎的能到這裡」！衆猴聽見，急來問道：「裏邊到底怎麼好法，水有好多深」？石猴道：「裏頭沒有水，只有一座鐵板橋，橋邊有一所天造地設的石屋，這水從橋底下沖出來，把門戶遮住；橋邊有花有木，石屋裡有石

鍋石竈石盃石盆石牀石凳，真是我們安身的好地方；我們都進去，省得受熱，豈不很好麼」？

衆猴聽了個個歡喜，都說請你做引導，帶我們進去。說完了，石猴向裡面一跳，衆猴隨後都跳了進去；跳過橋頭，走到洞裏，一個個搶盆奪盃，佔竈爭床，搬來搬去，沒有一刻安靜，直到力倦神疲，方纔歇下。石猴坐定了，就對衆猴道：「你們剛纔說能進得這地的、拜他爲王；如今我尋著洞天，使你們安享快活，怎的不拜我爲王呢」？衆猴聽罷，就拱手禮拜，叫聲千歲大王。石猴登了王位，把石字避去，就稱美猴王。

猴王登了王位，把所領的猿猴，獼猴，馬猴等，派做他的臣子官屬；朝遊暮宿，享受天真，安安逸逸，過了二三百年。有一天猴王和羣猴會宴，忽然想去學仙學佛，就對衆猴說明。衆猴鼓掌稱讚，「都說善哉善哉；我等明天，何不越嶺登山，廣求仙品，大設筵宴，送大王的行呢」？到了次日，衆猴果然去採仙桃，摘異果，割山藥，齊齊整整，擺開石凳石桌，排列仙酒仙肴，請美猴王上坐，一個個輪流奉酒，痛飲了一天。次晨美猴王早起，折了許多枯松，編成渡筏，取了一枝竹竿做篙，一個人登了筏，儘力撐開，向大海飄去，連日東南風很緊，把他送到西北岸去了；這是南瞻部洲地界，棄筏登岸。只見海邊上有人捕魚捉雁，就弄出把戲，變一隻活虎，形狀凶猛，嚇得他們丟籃棄網，四散奔逃，就把跑不動的拿住一個，剝下他的衣裳，穿在自己身上，人的言語，人的禮貌，通通學會，走來走去，一心訪問仙佛道術，要尋長生不老的良方。

（『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第三冊物語，中華民國十年，上海世界書局）

（相違点）

①傲來國附近（『童話大觀』）→這國近邊、②忽地→忽然、③厲聲道→大聲說、④ない→就、⑤身→身子、⑥ない→石猴、⑦刻著→刻着、⑧道→說、⑨好運氣好運氣→好運氣、⑩怎的→怎麼、⑪豈不→豈不是、⑫個個歡喜→全都喜歡、⑬如今→現在、⑭叫→使、⑮做他的臣子→獼猴，馬猴等，派做他的臣子官屬、⑯安安逸逸過了→安安逸逸的過了、⑰我等→我們、⑱明天何不越嶺登山→明天越嶺登山、⑲大王的行呢→大王的行、⑳一個→一個人

第六十八課 花果山（二）

（本文）

過了七八年，他並沒有碰着甚麼仙佛，忽然走到西洋大海，心裡想海外必有神仙，仍舊編起筏來，飄過西洋，直到西牛賀洲地界登岸，訪了多時，忽見一座高山，他也不怕蛇蟲虎豹，直登山頂，正觀看間，忽聽得樹林裏，有人說話，心裏想這一定是神仙了，跳到裏面一看，原來是個樵夫在那裏砍柴。猴王近前鞠躬叫說「老神仙，弟子行禮。」樵夫聽了，慌忙把斧丟掉，轉身答禮說「不敢當，我是拙漢，不是神仙，但是我和神仙做

隣舍。」猴王連忙說「求你老人家指給我神仙的住處，讓我去找。」樵夫說「從這裡去不遠有一座山，叫做靈臺方寸山，山裡有座斜月三星洞，洞裏有個神仙，就是須菩提祖師，跟他修行的弟子，共總有三四十個人，你順着這條小路走去，向南大約走七八里，就是他的家。」猴王聽罷，謝了一聲急忙出樹林子，約摸走了七八里地，果然望見一座洞府，洞門緊閉，靜悄悄的沒有人迹，轉過頭來見崖側立一塊石碑，刻着靈臺方寸山斜月三星洞字樣，心裏正在喜歡，忽聽得呀的一聲，洞門開了，裏面走出一個仙童高叫說「那一個在這裡騷擾。」猴王上前行禮說「我是訪道學仙來的，怎敢騷擾。」仙童說「我家師父正在登壇講道，還沒有說出原因，忽教我出來開門，說道外頭有個修行弟子到了，快去接待，莫非就是你麼。」猴王笑着說「是我是我。」童子說「跟我進來。」猴王整了衣帽，跟他徑到洞府裏，直到壇下，見菩提祖師坐在壇上，兩邊有三十個小仙侍立壇下，氣象很是森嚴。

猴王一見，倒身下拜，磕了許多頭，嘴裏只叫師父，弟子至心朝禮。祖師說「你是甚麼樣兒的人。」猴王說「弟子是東勝神州傲來國花果山水簾洞人。」祖師說「你姓甚麼。」猴王說「弟子沒有性，人罵我，我不惱，打我我不怒。」祖師說「不是這個性，你父母姓甚麼。」「我也沒有父母。」「你難道是樹上生下來的麼」「我是一塊石頭裏生出來的。」祖師暗暗喜歡，心裏想這樣來歷，纔是天地生成的，就對他說「我叫你姓孫名悟空好麼。」猴王說「真好真好。」從今就叫做孫悟空了。猴王得了姓名，百般喜歡，謝了菩提。祖師就命大衆引孫悟空在二門外，學習灑掃應對進退的禮節。悟空拜過師兄們，就在廊廡裏安排臥榻，天天講經論道，習字焚香，掃地鋤園，養花修樹，在洞裏不覺忽忽六七年了。

有一天祖師登壇高坐，開講大道，孫悟空在旁聽着，非常喜歡，忍不住手舞足蹈起來。祖師見了便問他說「你爲甚麼這般顛狂。」悟空答說「弟子誠心聽教，到了極妙的地方，喜不自禁，所以顯出這般樣子，請師父恕罪。」祖師說「你既識得妙處，我且問你，你到這裡有幾年了。」悟空說「弟子不知道，只記得常到山後打柴，見一山好桃樹，我在這裡吃過七回桃子了。」祖師說「這山叫爛桃山，吃桃七次，就是七年，你如今要學習甚麼。」悟空道「任憑師父教誨，若能學得長生不老的法術，是格外歡喜的。」祖師聽了，故意授他別法。悟空都說不要。祖師忽然啐了一口氣，跳下高壇，手持戒尺，向悟空說「你橫不要，豎不要，究竟要甚麼。」走上前來把悟空頭上連打三下，倒背着手，走進裡面，把中門關上，撇却大衆去了。嚇得一搬小仙個個驚慌，都來埋怨。却是悟空一點兒不惱，面露笑容。

(參照)

過了七八年，並沒有碰着什麼仙佛，忽然走到西洋大海；心裡想海外必有神仙，仍舊編起筏來，飄過西洋，直到西牛賀洲地界登岸，訪了多時，忽見一座高山，他也不怕蛇蟲虎豹，直登山頂；正觀看間，忽聽得樹林裏，有人言語，心裡想這一定是神仙了，跳到裡面一看，原來是個樵夫在那裡砍柴。猴王近前鞠躬叫道：「老神仙，弟子行禮。」樵

夫聽說，慌忙把斧丟掉，轉身答禮道：「不敢不敢，我是拙漢，不是神仙，但我却和神仙做隣舍」·猴王慌忙說道：「求你老人家指點神仙的住處，讓我去找」·樵夫道：「從這裡去不多路有座山，叫做靈臺方寸山，山裡有座斜月三星洞，洞裏有個神仙，就是須菩提祖師，從他修行的弟子，共有三四十人，你順著這條小路走去，向南約行七八里遠近，就是他家了」·

猴王聽罷，謝了一聲急忙出林，約摸走了七八里遠、果然望見一座洞府，洞門緊閉，靜悄悄地沒有人迹，轉過頭來見崖側立一塊石碑：刻著靈臺方寸山，斜月三星洞字樣；心裏正在喜歡，忽聽得呀的一聲，洞門開了，裏面走出一個仙童，高叫道：「那一個在這裡騷擾」？猴王上前行禮道：「我是訪道學仙來的，怎敢騷擾」·仙童道：「我家師父正在登壇講道，還沒有說出原因，忽教我出來開門，說道外面有個修行弟子到了，快去接待，莫非就是你麼」？猴王笑道：「是我是我」·童子道：「跟我進來」！猴王整了衣帽，跟他徑到洞府裏，直到壇下，見菩提祖師坐在壇上，兩邊有三十個小仙侍立壇下，氣象很是森嚴·

猴王一見，倒身下拜，磕了許多頭，嘴裏只叫師父師父，弟子至心朝禮·祖師道：「你是什麼樣人」？猴王道：「弟子是東勝神州傲來國花果山水簾洞人」·祖師道：「你姓什麼」？猴王道：「弟子沒有姓，人罵我，我不惱，打我我不怒」·祖師道：「不是這個性；你父母姓什麼」？猴王道：「我也沒有父母」·祖師道：「你難道是樹上生下來的麼」？猴王道：「我是一塊石頭裡生出來的」·祖師暗暗喜歡，心裏想這樣來歷，纔是天地生成的；就對他說：「我叫你姓孫名悟空，好麼」？猴王道：「真好真好」·從今就叫做孫悟空了·猴王得了姓名，百般喜歡，謝了菩提·祖師就命大衆引孫悟空在二門外，學習灑掃應對進退的禮節·悟空拜過師兄們，就在廊廡裏安排臥榻；天天講經論道，習字焚香，掃地鋤園，養花修樹，在洞裏不覺忽忽六七年了·有一天祖師登壇高坐，開講大道·孫悟空在旁聽著，非常喜歡，忍不住手舞足蹈起來·祖師見了便問他道：「你爲什麼這般顛狂」？悟空答道：「弟子誠心聽教，到了極妙的地方，喜不自禁，所以顯出這般樣子，請師父恕罪」·祖師道：「你既識得妙處，我且問你，你到這裡有幾年了」？悟空說：「弟子不知道，只記得常到山後打柴，見一山好桃樹，我在這裡吃過七回桃子了」·祖師道：「這山名叫爛桃山，吃桃七次，就是七年；你如今要學習什麼」？悟空道：「任憑師父教誨，若能學得長生不老的法術，是格外歡喜的」·祖師聽了，故意授他別法·悟空都說不要·祖師忽地啐了一口氣，跳下高壇，手持戒尺，向悟空道：「你橫不要，豎不要，究要什麼」？走上前來把悟空頭上連打三下，倒背著手，走進裡面，把中門關上，撇却大衆去了·嚇得一搬小仙個個驚慌，都來埋怨·却是悟空一點不惱，面露笑容·

（『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第三冊物語，中華民國十年，上海世界書局）

（相違点）

①並沒有碰著什麼（『童話大觀』）→他並沒有碰着甚麼、②言語→說話、③裡→裏、④

道→說、⑤聽說→聽了、⑥不敢不敢→不敢當、⑦但→但是、⑧我却和→我和、⑨慌忙→連忙、⑩說道→說、⑪指點神仙→指給我神仙、⑫不遠→不多路、⑬有座山→有一座山、⑭從他→跟他、⑮共→共總、⑯三四十人→三四十個人、⑰著→着、⑱約行七八里遠近，就是他家了→大約走七八里，就是他的家、⑲出林→出樹林子、⑳七八里遠→七八里地、21)悄悄地→悄悄的、22)外面→外頭、23)笑道→笑着說、24)只叫師父師父→只叫師父、25)什麼樣人→甚麼樣兒的人、26)祖師道→ない、27)猴王→ない、28)歡喜→喜歡、29)山名叫→山叫、30)忽地→忽然、31)一點→一點兒

第六十九課 花果山（三）

（本文）

當時猴王識破個中關鍵，默記在心頭「祖師打他三下，就是教他三更時分留心，倒背着手，走進裡面，把中門關上，就是教他從後門進去，秘密傳道。所以他一到黃昏，就同衆師兄去睡，假合了眼睛，養息精神，將到子時，他就輕輕起身，穿好了衣服，偷開前門，走到後門，側着身子溜進去，直向祖師榻前跑來，快到榻邊，見祖師醒了。悟空拜說「弟子在這裡。」祖師知是悟空，起身披衣，盤坐喝說「你不到前邊去睡，來此做甚麼。」悟空說「昨日師父教弟子三更時分，從後門進來，傳我法道，所以敢到這裡。」祖師聽說，暗想他真是天地生成的，能識個中關鍵，便不再問下去了。

悟空懇求祖師傳長生不老的法術。祖師說「你今有緣，我也喜歡，你近前來，容我傳你道術。」悟空叩頭道謝，洗耳恭聽，祖師說「變化有三十六般，有七十二般，你要學那一種。」悟空說「弟子的意思，越多越好，願學七十二般。」祖師就傳他口訣，附耳低語，不知說點甚麼。這位猴王，靈通百竅，習過口訣，自修自鍊，把七十二般變化，件件學成。

有一天祖師問悟空說「你的功課學成沒有。」悟空說「蒙師父厚恩，弟子已經學完，能夠飛昇天空了。」祖師說「你試與我看。」悟空把身一聳，就離地數丈，踏雲而去，停了一回，落下地面，又手向師父說「這就是騰雲麼。」祖師說「這不是騰雲，騰雲是一日能遊遍四海的。」悟空說「這真是一樁難事了。」祖師說「天下無難事，只怕有心人，依依的翻騰作勢，筋斗雲最合宜。」就面傳口訣。當夜悟空運神鍊法，學會筋斗雲，從此無拘無束，來去自在，一筋斗能翻十萬八千里路了。一天和大衆在松樹底下遊玩，大衆都說「悟空已會變化，何不變與我們看看。」悟空正要獻些本領，就請大衆出個題目。大衆說變松樹，悟空便念動咒語，搖身一變，就變成一棵松樹。

大衆看了，一齊喝采。師父聽得喊聲，踱出山門來大怒說「你們怎敢在此喧擾。」大衆說「不敢瞞師父，方纔孫悟空變法，弟子們揚聲喝采，以致驚動老師，還乞恕罪。」當時祖師叫悟空過來，責備幾句，因說「道法怎可輕易賣弄，你要保全性命，早點回去。」悟空聞言哭告說「老師叫我到那裡去。」祖師說「你從那裡來，就到那裡去。」悟空恍然悟

道「弟子從東勝神州傲來國花果山水簾洞來。」祖師說「快去纔好。」悟空謝過師父，念着口訣，翻一筋斗，已回到東海花果山水簾洞了。

(參照)

當時猴王識破個中關鍵，默記在心頭：「祖師打他三下，就是教他三更時分留心；倒背著手，走進裡面，把中門關上，就是教他從後門進去，秘密傳道。所以他一到黃昏，就同衆師兄去睡，假合了眼睛，養息精神，將到子時，他就輕輕起身，穿好了衣服，偷開前門，走到後門，側著身子溜進去，直向祖師榻前跑來，快到榻邊，見祖師醒了，悟空拜道：「弟子在這裡」，祖師知是悟空，起身披衣，盤坐喝道：「你不到前邊去睡，來此做什麼」？悟空道：「昨日師父教弟子三更時分，從後門進來，傳我法道，所以敢到這裡」。祖師聽說，暗想他真是天地生成的，能識個中關鍵，便不再問下去了。

悟空懇求祖師傳長生不老的法術。祖師道：「你今有緣，我也喜歡；你近前來，容我傳你道術」。悟空叩頭道謝，洗耳恭聽。祖師道：「變化有三十六般，有七十二般，你要學那一種」？悟空道：「弟子的意思，越多越好，願學七十二般」。祖師就傳他口訣，附耳低語，不知說點什麼。這位猴王，靈通百竅，習過口訣，自修自鍊，把七十二般變化，件件學成。有一天祖師問悟空道：「你的功課，學成沒有」？悟空道：「蒙師父厚恩，弟子已經學完，能夠飛昇天空了」。祖師道：「你試與我看」。悟空把身一聳，就離地數丈，踏雲而去，停了一回，落下地面，又手向師父道：「這就是騰雲麼」？祖師道：「這不是騰雲，騰雲是一日能遊遍四海的」。悟空道：「這真是一樁難事了」。祖師道：「天下無難事，只怕有心人，依依的翻騰作勢，筋斗雲最合宜」。就面傳口訣。當夜悟空運神鍊法，學會筋斗雲，從此無拘無束，來去自在，一筋斗能翻十萬八千里路了。一天和大衆在松樹底下遊玩，大衆都說「悟空已會變化，何不變與我等看看」。悟空正要獻些本領，就請大衆出個題目。大衆說變松樹。悟空便念動咒語，搖身一變，就變成一棵松樹。

大衆看了，一齊喝采。師父聽得喊聲，踱出山門來大怒道：「你們怎敢在此喧擾」。大衆道：「不敢瞞師父，方纔孫悟空變法，弟子們揚聲喝采，以致驚動老師，還乞恕罪」。當時祖師叫悟空過來，責備幾句，因說道：「道法怎可輕易賣弄，你要保全性命，早點回去！悟空聞言哭告道：「老師叫我到那裡去」？祖師道：「你從那裡來，就到那裡去」。悟空恍然悟道：「弟子從東勝神州傲來國花果山水簾洞來」。祖師道：「快去纔好」。悟空謝過師父，念着口訣，翻一筋斗，已回到東海花果山水簾洞了。

(『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第三冊物語，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

- ①著(『童話大觀』)→着、②道→說、③什麼→甚麼、④依你→依依、⑤我等→我們、⑥因說道「道法→因說「道法

第七十課 花果山（四）

（本文）

悟空一到，有千萬猴子一齊跳出，把猴王圍在當中，叩頭說「大王怎麼一去這樣長久，把我們撇在這裡，現在來了一個妖魔，硬要佔據我們的洞府，我們拚命和他相打，被他捉去許多弟兄，大王若再不來，連洞府都要被他奪去了。」悟空聽說大怒道「甚麼地方的妖魔，這樣大膽，我給你們報仇。」衆猴說「他自稱混世魔王，住在北海道。」悟空說「從這裡去不曉得有多少路程。」衆猴說「他來去沒有踪迹，不曉得有多少路程。」悟空聞言，並不作聲，把身一縱，跳出洞府，一個筋斗，就到北海道去了。按下雲頭，仔細一看，只見一座高山，十分險峻，正在那裡尋覓，忽聽得有人講話，就下山來，果見一座洞府，門外有幾個小妖跳舞，見了悟空，因問說「你是那一個。」悟空說「我是南方花果山水簾洞主，因為你家的魔王時刻要來欺侮我的兒孫，擾亂我的洞府，今日特來和你魔王見一見高下。」

小妖聽罷，急忙跑入洞裏報說「大王，禍事到了，外面有個猴頭，自稱花果山水簾洞主，說大王欺凌他的兒孫，特來和大王一決勝敗。」魔王笑看說「這是猴精，聽說已去修行，沒非現在回來了，他怎樣打扮，手中拿甚麼兵器。」小妖說「他沒有兵器，光着頭，穿一領紅衣，扣一條黃帶，脚下踏一雙烏靴，不僧不俗，又不像道士，赤手空拳。」魔王聽罷，就穿了盔甲，拿了鋼刀，帶了衆妖出門，高叫說「那個是水簾洞主。」

悟空睜眼一看，只見魔王頭戴烏金盔，身穿皂羅袍，外罩黑鐵甲，脚穿黑皮靴，腰闊十圍，身長三丈，手執一口鋼刀，大喝說「惡魔，你這般大眼，不見老孫麼。」魔王見了笑着說「你身不滿四尺，年不過三十，手裏又沒有兵器，怎敢大膽狂叫，要來和我角手。」悟空罵說「你敢輕看我麼，你不要喊痛，吃我一拳。」身體一縱，跳上去劈臉就打，魔王伸手擋住說「你矮我長，你用拳，我用刀，殺了你，也不算好漢，我放下刀，和你角拳。」魔王丟刀就打，那知悟空身小，鑽來鑽去，很是便當，魔王竟被他打得叫痛不迭，閃過來就拿起鋼刀，向悟空劈頭砍下。悟空急打一跛早已避開，倒在山地上砍了很深的一個洞。

魔王砍了一個空，更加忿恨，拚命的再殺過來。悟空急用身外身法，拔一把毫毛，拋在口裏嚼碎，向空噴去，叫一聲變，就變成二三百個小猴兒，原來悟空從得道後，身上有八萬四千根毫毛，根根會變，把魔王圍住，抱的抱，扯的扯，鑽襠扳脚，拔毛挖眼，弄得魔王不由自主。悟空就把刀奪來，分開小猴，照頂門一刀，分爲兩段，殺進洞府，把一輩妖精，殺得乾乾淨淨，再把毫毛一抖，收上身來，又有被擄的小猴三五十隻，悟空教他們快點兒出洞，一把火把水臟洞燒成一片焦土，對衆猴說「你們跟我回去，大家一齊合眼。」猴王念動咒語，駕陣狂風、雲頭落下，叫聲睜眼，衆猴腳踏實地，認得是自己家鄉，個個奔向洞裏去了。

這時候在洞的衆猴，見猴王和其餘小猴同來，一齊簇擁而來，羅拜猴王，安排酒果，

接風賀喜，因問降魔的事。悟空向衆猴細說一番。衆猴不勝驚喜，都說大王這種本領，從甚麼地方學來的。悟空說「我當年別了你們，飄過東洋大海，到了一洲住過七八年，未曾得到道，再渡西洋大海，又到一洲，訪問多時，幸虧碰着一位老祖傳我長生秘訣，七十二般變化。」衆猴稱賀不迭。悟空說「我現在已有姓氏，你們也有姓了。」衆猴問大王姓甚麼。悟空說「我姓孫，法名悟空。」衆猴聽了鼓掌說「大王是老孫，我們都是一孫二孫小孫，一家孫一國孫了。」

(參照)

悟空一到，有千萬猴子一齊跳出，把猴王圍在當中，叩頭道：「大王怎麼一去這樣長久，把我們撇在這裡；現在來了一個妖魔，硬要佔據我們的洞府，我們拚命和他相打，被他捉去許多弟兄；大王若再不來，連洞府都要被他奪去了。」悟空聽說大怒道：「什麼地方的妖魔？這樣大膽，我給你們報仇。」衆猴說：「他自稱混世魔王，住在北海道。」悟空道：「從這裡去不曉得有多少路程？」衆猴道：「他來去沒有踪跡，不曉得有多少路程。」悟空聞言，並不作聲，把身一縱，跳出洞府，一個筋斗，就到北海道去了。按下雲頭，仔細一看，只見一座高山，十分險峻，正在那裡尋覓，忽聽得有人講話，就下山來，果見一座洞府，門外有幾個小妖跳舞；見了悟空，因問道：「你是那一個？」悟空道：「我是南方花果山水簾洞主，因為你家的魔王時刻要來欺侮我的兒孫，擾亂我的洞府，今日特來和你魔王見一見高下。」

小妖聽罷，急忙跑入洞裡報道：「大王，禍事到了！外面有個猴頭，自稱花果山水簾洞主，說大王欺凌他的兒孫，特來和大王一決勝敗。」魔王笑道：「這是猴精，聽說已去修行，沒非現在回來了；他怎樣打扮，手中拿什麼兵器？」小妖說：「他沒有兵器，光著頭，穿一領紅衣，扣一條黃帶，脚下踏一雙烏靴，不僧不俗，又不像道士，赤手空拳。」魔王聽罷，就穿了盔甲，拿了鋼刀，帶了衆妖出門，高叫道：「那個是水簾洞主？」

悟空睜眼一看，只見魔王頭戴烏金盔，身穿皂羅袍，外罩黑鐵甲，脚穿黑皮靴，腰闊十圍，身長三丈，手執一口鋼刀；大喝道：「惡魔，你這般大眼，不見老孫麼？」魔王見了笑道：「你身不滿四尺，年不過三十，手裡又沒有兵器，怎敢大膽狂叫，要來和我角手。」悟空罵道：「你敢輕看我麼？你不要喊痛，吃我一拳。」身體一縱，跳上去劈臉就打，魔王伸手擋住道：「你矮我長，你用拳，我用刀，殺了你，也不算好漢，我放下刀，和你角拳。」魔王丟刀就打，那知悟空身小，鑽來鑽去，很是便當，魔王竟被他打得叫痛不迭，閃過來就拿起鋼刀，向悟空劈頭砍下，悟空急打一跛早已避開，倒在山地上砍了很深的一個洞。

魔王砍了一個空，更加忿恨，拚命的再殺過來。悟空急用身外身法，拔一把毫毛，拋在口裡嚼碎，向空噴去，叫一聲變，就變成二三百個小猴，原來悟空從得道後，身上有八萬四千根毫毛，根根會變，把魔王圍住：抱的抱，扯的扯，鑽襠扳脚，拔毛挖眼，弄得魔王不由自主，悟空就把刀奪來，分開小猴，照頂門一刀，分爲兩段，殺進洞府，把

一輩妖精，殺得乾乾淨淨；再把毫毛一抖，收上身來；又有被擄的小猴三五十隻，悟空教他們快點出洞，一把火把水臟洞燒成一片焦土，對衆猴道：「你們跟我回去，大家一齊合眼」·猴王念動咒語，駕陣狂風、雲頭落下，叫聲睜眼，衆猴腳踏實地，認得是自己家鄉，個個奔向洞裡去了·

這時候在洞的衆猴，見猴王和其餘小猴同來，一齊簇擁而來，羅拜猴王，安排酒果，接風賀喜，因問降魔的事？悟空向衆猴細說一番·衆猴不勝驚喜，都道大王這種本領，從什麼地方學來的？悟空道：「我當年別了你們，飄過東洋大海，到了一洲，住過七八年，未曾得到道，再渡西洋大海，又到一洲，訪問多時，幸虧碰着一位老祖，傳我長生秘訣，七十二般變化」·衆猴稱賀不迭·悟空道：「我現在已有姓氏，你們也有姓了」·衆猴問大王姓什麼？悟空說：「我姓孫，法名悟空」·衆猴聽了鼓掌道：「大王是老孫，我們都是一孫二孫小孫，一家孫一國孫了」·

(『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第三冊物語，中華民國十年，上海世界書局)

(相違点)

①道(『童話大觀』)→說、②什麼→甚麼、③裡→裏、④道→看說、⑤著→着、⑥小猴→小猴兒、⑦快點→快點兒

引用（参考）文献

- 浅野法子，2007「鄭振鐸主編時期の中国児童雑誌『児童世界』一考察-編集方針と誌面の変遷を中心に-」『児童文学研究を拓く-三宅興子先生退職記念論文集』翰林書房，東京，p. 222,239
- 浅野法子・訳，2008「周作人・趙景深 童話討論（「童話的討論」）趙景深編『童話評論』（新文化社一九三四年）所収」『日中児童文化 2008』
- 安藤彦太郎，1971，『日本人の中国観』勁草書房，東京，pp.138-160
- 安藤彦太郎，1988，『中国語と近代日本』岩波書店，東京，p.37,104-105
- 飯沢匡現代語訳，1986『福沢諭吉の開口笑話』富山房，東京
- 石川薫，2015「岡本正文の笑話テキストについて」『語学教育研究論叢』第32号
- 石崎又蔵，1967『近世日本における支那俗語文学史』清水弘文堂書房，東京
- 池田大作、潘金生、山田留里子，2006『二人の王子様-童話で学ぶ中国語-』駿河台出版社，東京
- 板垣友子，2013「官話急就篇の初版と増訂版との比較」『中国言語文化学研究』第2号，p.137,146
- 板垣友子，2014a「明治期における中国語教育 - 宮島大八の学びを中心に」『外国語学研究』第15号
- 板垣友子，2014b「宮島大八の思想と中国語教育」『中国言語文化学研究』第3号
- 板垣友子，2014c「近代日本における宮島大八の中国語教育」『語学教育研究論叢』第31号
- 内田知行，2002「第一次世界大戦と五・四運動」松丸道雄・池田温・斯波義信・神田信夫・濱下武志編『世界歴史大系 中国史5-清末～現在-』山川出版社，東京，p.146
- 浦和男，2009「明治後期における西洋笑話と英語学習書」『文学部紀要』22
- 遠藤純，2001「宮沢賢治 - 童話の源泉」鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房，京都，
- 及川恒忠・西岡英夫，1989年復刻版『世界童話大系第15巻支那・台湾篇』名著普及会，東京
- 大川完三郎，1995『楽しく学ぶ中国笑話選』日本放送出版協会，東京
- 太田辰夫，1988『中国語史通考[普及版]』白帝社，東京，pp.285-286
- 太田雅夫，「改造・解放思潮のなかの知識人」金原左門編『近代日本の軌跡4 大正デモクラシー』吉川弘文館，東京
- 大西一弘・成實朋子，1998「近代中国における創作童話の研究-葉紹鈞「一粒種子（一粒の種）を中心に」-」『大阪教育大学紀要』第V部門第47巻第1号，p.1

- 小澤俊夫, 1997「昔話とは何か」小澤俊夫編著『昔話入門』ぎょうせい, 東京, p. 28,30
- 小澤俊夫, 2009『小澤俊夫の昔話講座① こんにちは、昔話です』小澤昔ばなし研究所, 神奈川, p. 79,119,121-123
- 河原和枝, 1998『子ども観の近代』中央公論社, 東京,
- 貝塚健, 2014「描かれたチャイナドレス - 中国への憧憬と欲望」『描かれたチャイナドレス - 藤島武二から梅原龍三郎まで』石橋財団ブリジストン美術館, p. 9
- 上條宏之, 「教育創造と民衆文化」金原左門編『近代日本の軌跡 4 大正デモクラシー』吉川弘文館, 東京
- 神谷衡平、清水元助, 1923『標準中華国語教科書・初級篇』文求堂, 東京
- 神谷衡平、清水元助, 1924『標準中華国語教科書・中級篇』文求堂, 東京
- 神谷衡平, 1929『現代中華国語文読本 前篇・後篇』文求堂, 東京
- 河野孝之, 2008「魏壽鏞・周侯予『児童文学概論』(上海商務印書館、1923年2月) 清水董三「支那の児童文学に就いて」(『支那研究』第10号、1926年5月) -中国最初の児童文学研究書と日本最初の中国児童文学論-」『日中児童文化2008』, pp.68-74
- 柄谷行人, 2008『定本日本近代文学の起源』岩波書店, 東京
- 季穎, 2010『日中児童文学交流史の研究 - 日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国 - 』風間書房, 東京, pp. 4-8
- 菊池秀明, 2005『中国の歴史 10 ラストエンペラーと近代中国 清末 中華民国』講談社, 東京
- 北見俊夫, 1986「交通・通信の近代化」『新版 日本生活文化史 第九巻 市民的生活の展開』河出書房新社, 東京
- 久保芳太郎, 1924a「現代支那童話の研究」『童話研究』第3巻第1号, pp.23-24
- 久保芳太郎, 1924b「現代支那童話の研究」『童話研究』第3巻第2号
- 久保芳太郎, 1925「現代支那童話の研究」『童話研究』第4巻第4号, pp.37-38
- 久保田文次, 1995「近代I」山根幸男編『中国史研究入門 下(増補改訂版)』山川出版社, 東京
- 侯鑫編, 2008『侯宝林旧藏珍本民国笑话选』中華書局
- 小島晋治, 1986「帝国主義の侵略と抵抗」小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』岩波書店, 東京
- 興水優・島田亜美, 2009『中国語わかる文法』大修館書店, 東京
- 齋木喜美子, 2001「少年倶楽部の魅力」鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房, 京都,
- 佐々木凡禪, 1925『曙光の支那 附録支那笑話集』偕行社
- 佐藤宗子, 2001「『赤い鳥』の出現」鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネ

- ルヴァ書房, 京都,
- 佐藤裕紀子, 2011『大正期における新中間層主婦の時間意識の形成』風間書房, 東京
- 清水董三, 1926「支那の児童文學に就いて」『支那研究』第10号 p.99
- 白須康子, 2004「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」『人文研究』154
巻, p. 90,95
- 神宮輝夫, 1989『NHK 市民大学 児童文学の主役たち』日本放送出版協会, 東京, p.
87
- 関口安義, 2000『芥川龍之介と児童文学』久山社, 東京, p. 32,35
- 瀬戸口律子, 2003『完全マスター 中国語の文法』語研, 東京
- 千野明日香・衛藤和子編, 1992『日本語訳中国昔話解題目録 (1868年～1990年)』中
国民話の会, 東京
- 人民教育出版社歴史室編著, 小島晋二・大沼正博・川上哲正・白川知多訳, 2004『世
界の教科書シリーズ 11 中国の歴史 - 中国高等学校歴史教科書』明石書店, 東京
- 武田知弘, 2013『戦前の生活-大日本帝国の「リアルな生活誌」』筑摩書房, 東京,
p.147-149
- 武田晴人, 1992『帝国主義と民本主義』集英社, 東京
- 竹村民郎, 2004『大正文化 帝国のユートピア - 世界史の転換期と大衆消費社会の形
成』三元社, 東京,
- 张亚新、程小铭校注, 2012『明清笑话集六种』中州古籍出版社
- 張蕾, 2007『芥川龍之介と中国 - 受容と変容の軌跡 - 』国書刊行会, 東京,
- 陳淑梅, 2011『中国語で読む日本と中国のむかし話』アルク, 東京
- 陳和祥、孫志勁編、陸翔校訂, 1921『繪圖童話大觀 - 兒童物語、兒童神話、兒童故事』,
上海世界書局, 上海
- 鄭振鐸編, 1922『兒童世界』第1巻第7期, 上海商務印書館, 上海
- 鄭振鐸編, 1922『兒童世界』第1巻第13期, 上海商務印書館, 上海
- 鄧恩明・張惠先編著, 2006『CDブック中国笑話・謎語50選 - 笑って学ぶ中国語 - 』
中華書店, 東京
- 鄧恩明・張惠先編著, 2006『CDブック続中国笑話・謎語50選 - 笑って学ぶ中国語 - 』
中華書店, 東京
- 東京外国語大学史編纂委員会, 1999『東京外国語大学史 - 独立百周年 (建学百二十六
年) 記念』, 東京外国語大学, 東京, p.924
- 鳥海靖, 2013『もういちど読む山川日本近代史』山川出版社, 東京,
- 鳥越信, 2001「日本近代児童文学史の起点」鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学
史』ミネルヴァ書房、京都、p. 9
- 中村儀, 1996「辛亥革命」中島嶺雄編『中国現代史 (新版)』有斐閣, 東京, pp.53-54

- 長島平洋, 2000「日本のジョーク：福沢諭吉「開口笑話」と尋常小学校読本」『笑い学
研究』7号
- 中村雅之, 2007「官話と北京語」『KOTONOHA』第54号, p.1
- 中由美子, 2006『中国の児童文学』久山社, 東京, p.12
- 成實朋子, 1998「「児童世界」に見られる近代中国の児童雑誌の特徴」『学大国文』41
号, p.121,124,134,135
- 成實朋子, 2008a「近代中国における「童話」 - 「童話」叢書と『無猫國』をめぐって」
『学大国文』51号
- 成實朋子, 2008b「「童話」の誕生「童話的討論」(一九二二年)をめぐって」『日中児
童文化2008』
- 成實朋子, 2014「近代中国児童文学の黎明期 - 『小孩月報』とその時代 - 」『学大国文』
第57号, p. 47
- 西原大輔, 2003『谷崎潤一郎とオリエンタリズム - 大正日本の中国幻想』中央公論新
社, 東京, p. 24-25,27-28,32,45,144,213
- 任東権著・熊谷治訳, 1995『韓国の民話』雄山閣出版社, 東京, p. 1,3
- 野中正孝, 2008『東京外国語学校史 - 外国語を学んだ人たち』不二出版, 東京
- 芳賀登, 1986「市民文化の育成」『新版 日本生活文化史 第九巻 市民的生活の展開』
河出書房新社, 東京
- 波多野太郎編, 1989『中國文學語學資料集成第4篇第3巻』不二出版, 東京
- 波多野太郎編, 1985『中国語学資料叢刊燕語社会風俗官話翻訳古典小説・精選課本篇
第3巻』不二出版, 東京
- 服部操編, 1922『支那現代文讀本』松雲堂書店, 東京
- 氷野善博, 2010『『官話指南』の多様性 - 中国語教材から国語教材』『東アジア文化交
渉研究』3号, p.237
- 藤井省三, 1992『東京外語支那語部 - 交流と侵略のはざままで』朝日新聞社, 東京,
p.30,35,39,43,50 - 52
- 藤井正夫・藤田正典・小原正治, 1995「近代Ⅱ」山根幸男編『中国史研究入門 下(増
補改訂版)』山川出版社, 東京
- 本庄比佐子, 1996「中国革命への道」中島嶺雄編『中国現代史(新版)』有斐閣, 東京,
p.68
- 鱒澤彰夫, 1988「北京官話教育と『語言自邇集 散語問答明治10年3月川崎近義氏鈔
本』」『中国語学』235号
- 鱒澤彰夫, 1992「一九三〇年代中国語教育への視点 - 新しき路に見えしもの - 」『中国
文学研究』18号
- 鱒澤彰夫, 1997『『官話指南』, そして商務印書館の日中合辦解消』『中国文学研究』23

- 号, p46,72-73
- 松尾尊兌, 2001『大正デモクラシー』岩波書店, 東京, pp. v-ix
- 松枝茂夫・武藤禎夫訳, 1964『東洋文庫 24 中国笑話選—江戸小咄との交わり』平凡社, 東京, pp.357-360
- 松枝茂夫編訳, 1970『中国古典文学大系 59 歴代笑話選』平凡社, 東京
- 丸山松幸, 1986「民国の苦悩」小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』岩波書店, 東京, pp.84-93
- 三宅美穂, 2009「中華民国初期の児童雑誌『小朋友』と海外作品の受容」『東アジア文化交渉研究』2号
- 宮越健太郎, 1929『支那現代短篇小説選』文求堂, 東京
- 守屋宏則, 1995『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東方書店, 東京
- 横山宏章, 1997『中華民国 - 賢人支配の善政主義』中央公論社, 東京, pp.89-109
- 吉田篤志, 2013a「大東文化学院時代の中国旅行記(一)」『大東文化歴史資料館だより 第14号』(2013年5月31日)
- 吉田篤志, 2013b「大東文化学院時代の中国旅行記(二)」『大東文化歴史資料館だより 第15号』(2013年11月30日)
- 游戏主人、程世爵編撰, 2008『笑林广记』重庆出版社
- 米田祐太郎, 1925『原文對譯支那童話歌謡研究』大阪屋號書店, 東京
- 劉建輝, 2000『魔都上海 - 日本知識人の「近代」体験』講談社, 東京
- 劉少英・李成達, 2013『ジョークで学ぶ「大人の中国語」』リフレ出版, 東京
- 六角恒廣・横山宏, 1975『中国語への道』大修館書店, 東京, p.46,70
- 六角恒廣, 1984『近代日本の中国語教育』不二出版, 東京
- 六角恒廣, 1988『中国語教育史の研究』東方書店, 東京, p.221,242
- 六角恒廣, 1989『中国語教育史論考』不二出版, 東京
- 六角恒廣, 1994『中国語書誌』不二出版, 東京, p.163
- 六角恒廣, 2001『中国語関係書書目(増補版)』不二出版, 東京
- 六角恒廣, 2002『中国語教育史稿拾遺』不二出版, 東京
- ロン・スチュアート, 2005「福沢の『開口笑話』における教授法およびステレオタイプ表象」『多元文化』5号
- 和歌森太郎, 1986a「洋風生活の普及」『新版 日本生活文化史 第九巻 市民的生活の展開』河出書房新社, 東京, p.130
- 和歌森太郎, 1986b「大衆娯楽とスポーツ」『新版 日本生活文化史 第九巻 市民的生活の展開』河出書房新社, 東京
- 渡會貞輔, 1918『支那語叢談・下篇』大阪屋號書店, 東京, pp.21-24